埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第 479 集

久　喜　市

栗 橋 宿 西 本 陣 跡 Ⅰ

首都圏氾濫区域堤防強化対策における
埋蔵文化財発掘調査報告
（第３分冊）

２０２３

国土交通省　関東地方整備局
公益財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

目　次

（第１分冊）

巻頭写真
序
例言
凡例
目次

Ⅰ　発掘調査の概要 …… 1
　1　発掘調査に至る経過 …… 1
　2　発掘調査・報告書作成の経過 …… 2
　　（1）発掘調査 …… 2
　　（2）整理・報告書の作成 …… 3
　3　発掘調査・報告書作成の組織 …… 3
Ⅱ　遺跡の立地と環境 …… 6
　1　地理的環境 …… 6
　2　歴史的環境 …… 8
　　（1）中世の栗橋とその周辺 …… 8
　　（2）近世の栗橋とその周辺 …… 12
　　（3）栗橋宿の様子 …… 15
　　（4）幕末から近代の栗橋地区 …… 18
Ⅲ　遺跡の概要 …… 21
Ⅳ　遺構と遺物 …… 39
　1　第一面の遺構と遺物 …… 39
　　（1）建物跡 …… 39
　　（2）基礎状遺構 …… 89
　　（3）胞衣埋納遺構 …… 93
　　（4）埋設桶 …… 94
　　（5）井戸跡 …… 100
　　（6）池跡 …… 108
　　（7）杭列 …… 130
　　（8）溝跡 …… 133
　　（9）柵跡 …… 151
　　(10) 土壙 …… 156
　　(11) ピット …… 333
　　(12) 遺物包含層 …… 333

（第２分冊）

　2　第二面の遺構と遺物 …… 359
　　（1）埋設桶 …… 359
　　（2）井戸跡 …… 370
　　（3）溝跡 …… 376
　　（4）柵跡・区画施設 …… 380
　　（5）焼土遺構 …… 386
　　（6）土壙 …… 389
　　（7）ピット …… 536
　　（8）遺物包含層 …… 537

（第３分冊）

　3　第三面の遺構と遺物 …… 609
　　（1）埋設桶 …… 609
　　（2）井戸跡 …… 609
　　（3）溝跡 …… 624
　　（4）土壙 …… 631
　　（5）樹皮堆積層 …… 798
　　（6）ピット …… 818
　4　文字資料 …… 819
　5　出土遺物一覧と遺構の時期 …… 825
Ⅴ　自然科学分析 …… 851
　1　堆積物微細構造観察 …… 851
　2　砂粒組成分析・粒度分析 …… 855
　3　花粉分析（1） …… 861
　4　珪藻分析（1） …… 869
　5　花粉分析（2） …… 876
　6　珪藻分析（2） …… 881
　7　テフラの検出同定と重軽鉱物分析 …… 891

8　種実同定（1）　……894
9　種実同定（2）　……900
10　樹種同定 ……910
11　放射性炭素年代測定（1）　……914
12　放射性炭素年代測定（2）　……920
Ⅵ　調査のまとめ ……925
（第４分冊）
写真図版

挿図目次

（第３分冊）

第457図　第85号埋設桶 ･････････････････ 609
第458図　第13・17号井戸跡 ･････････････ 610
第459図　第13号井戸跡出土遺物･････････ 611
第460図　第18号井戸跡 ･････････････････ 613
第461図　第18号井戸跡出土遺物（１） ････ 614
第462図　第18号井戸跡出土遺物（２） ････ 615
第463図　第18号井戸跡出土遺物（３） ････ 616
第464図　第20・21号井戸跡 ･････････････ 618
第465図　第20号井戸跡出土遺物（１） ････ 619
第466図　第20号井戸跡出土遺物（２） ････ 620
第467図　第21号井戸跡出土遺物（１） ････ 622
第468図　第21号井戸跡出土遺物（２） ････ 623
第469図　第20～22号溝跡 ･･････････････ 625
第470図　第20号溝跡出土遺物･･････････ 626
第471図　第21号溝跡出土遺物･･････････ 627
第472図　第24・26号溝跡・出土遺物 ･････ 629
第473図　北２丁目陣屋跡・西本陣跡検出溝跡の
　　位置及び遺構検出標高模式図 ････ 630
第474図　第456号土壙（１） ･････････････ 633
第475図　第456号土壙（２） ･････････････ 634
第476図　第456号土壙出土遺物（１） ･････ 635
第477図　第456号土壙出土遺物（２） ･････ 636
第478図　第456号土壙出土遺物（３） ･････ 637
第479図　第456号土壙出土遺物（４） ･････ 639
第480図　第456号土壙出土遺物（５） ･････ 641
第481図　第456号土壙出土遺物（６） ･････ 642
第482図　第456号土壙出土遺物（７） ･････ 643
第483図　第456号土壙出土遺物（８） ･････ 645
第484図　第504号土壙（１） ･････････････ 648
第485図　第504号土壙（２） ･････････････ 649
第486図　第504号土壙（３） ･････････････ 650
第487図　第504号土壙（４） ･････････････ 651
第488図　第504号土壙出土遺物（１） ･････ 652
第489図　第504号土壙出土遺物（２） ･････ 653
第490図　第504号土壙出土遺物（３） ･････ 654
第491図　第504号土壙出土遺物（４） ･････ 655
第492図　第504号土壙出土遺物（５） ･････ 656
第493図　第504号土壙出土遺物（６） ･････ 657
第494図　第504号土壙出土遺物（７） ･････ 658
第495図　第504号土壙出土遺物（８） ･････ 659
第496図　第504号土壙出土遺物（９） ･････ 660
第497図　第504号土壙出土遺物（10） ･････ 661
第498図　第504号土壙出土遺物（11） ･････ 665
第499図　第504号土壙出土遺物（12） ･････ 666
第500図　第504号土壙出土遺物（13） ･････ 667
第501図　第504号土壙出土遺物（14） ･････ 668
第502図　第504号土壙出土遺物（15） ･････ 669
第503図　第504号土壙出土遺物（16） ･････ 672
第504図　第516号土壙（１） ･････････････ 677
第505図　第516号土壙（２） ･････････････ 678
第506図　第516号土壙出土遺物（１） ･････ 679
第507図　第516号土壙出土遺物（２） ･････ 680
第508図　第516号土壙出土遺物（３） ･････ 681
第509図　第516号土壙出土遺物（４） ･････ 682
第510図　第516号土壙出土遺物（５） ･････ 686
第511図　第516号土壙出土遺物（６） ･････ 687
第512図　第516号土壙出土遺物（７） ･････ 688
第513図　第516号土壙出土遺物（８） ･････ 690
第514図　第517号土壙（１） ･････････････ 692
第515図　第517号土壙（２） ･････････････ 693
第516図　第517号土壙出土遺物（１） ･････ 694
第517図　第517号土壙出土遺物（２） ･････ 695
第518図　第517号土壙出土遺物（３） ･････ 696
第519図　第517号土壙出土遺物（４） ･････ 697
第520図　第517号土壙出土遺物（５） ･････ 698
第521図　第517号土壙出土遺物（６） ･････ 699
第522図　第517号土壙出土遺物（７） ･････ 700
第523図　第517号土壙出土遺物（８） ･････ 701
第524図　第517号土壙出土遺物（９） ･････ 702

第525図　第517号土壙出土遺物（10）・・・・・ 703
第526図　第517号土壙出土遺物（11）・・・・・ 704
第527図　第517号土壙出土遺物（12）・・・・・ 705
第528図　第517号土壙出土遺物（13）・・・・・ 706
第529図　第517号土壙出土遺物（14）・・・・・ 707
第530図　第517号土壙出土遺物（15）・・・・・ 708
第531図　第517号土壙出土遺物（16）・・・・・ 709
第532図　第517号土壙出土遺物（17）・・・・・ 710
第533図　第517号土壙出土遺物（18）・・・・・ 711
第534図　第517号土壙出土遺物（19）・・・・・ 720
第535図　第517号土壙出土遺物（20）・・・・・ 722
第536図　第517号土壙出土遺物（21）・・・・・・ 723
第537図　第517号土壙出土遺物（22）・・・・・ 724
第538図　第517号土壙出土遺物（23）・・・・・ 725
第539図　第517号土壙出土遺物（24）・・・・・ 726
第540図　第517号土壙出土遺物（25）・・・・・ 727
第541図　第517号土壙出土遺物（26）・・・・・ 728
第542図　第517号土壙出土遺物（27）・・・・・ 729
第543図　第517号土壙出土遺物（28）・・・・・ 730
第544図　第517号土壙出土遺物（29）・・・・・ 733
第545図　第517号土壙出土遺物（30）・・・・・ 734
第546図　第518号土壙・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 738
第547図　第518号土壙出土遺物（１）・・・・・ 739
第548図　第518号土壙出土遺物（２）・・・・・ 740
第549図　第518号土壙出土遺物（３）・・・・・ 741
第550図　第518号土壙出土遺物（４）・・・・・ 744
第551図　第518号土壙出土遺物（５）・・・・・ 745
第552図　第518号土壙出土遺物（６）・・・・・ 746
第553図　第518号土壙出土遺物（７）・・・・・ 747
第554図　第518号土壙出土遺物（８）・・・・・ 748
第555図　第518号土壙出土遺物（９）・・・・・ 751
第556図　第536号土壙・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 753
第557図　第536号土壙出土遺物（１）・・・・・ 754
第558図　第536号土壙出土遺物（２）・・・・・ 755
第559図　第536号土壙出土遺物（３）・・・・・ 757
第560図　第536号土壙出土遺物（４）・・・・・ 758
第561図　第536号土壙出土遺物（５）・・・・・ 759
第562図　第537号土壙（１）・・・・・・・・・・・・・ 761
第563図　第537号土壙（２）・・・・・・・・・・・・・ 762
第564図　第537号土壙出土遺物（１）・・・・・ 763
第565図　第537号土壙出土遺物（２）・・・・・ 764
第566図　第537号土壙出土遺物（３）・・・・・ 766
第567図　第537号土壙出土遺物（４）・・・・・ 767
第568図　土壙（１）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 769
第569図　土壙（２）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 770
第570図　土壙（３）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 771
第571図　土壙（４）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 772
第572図　土壙（５）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 773
第573図　土壙（６）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 774
第574図　土壙出土遺物（１）・・・・・・・・・・・・・ 775
第575図　土壙出土遺物（２）・・・・・・・・・・・・・ 776
第576図　土壙出土遺物（３）・・・・・・・・・・・・・ 777
第577図　土壙出土遺物（４）・・・・・・・・・・・・・ 778
第578図　土壙出土遺物（５）・・・・・・・・・・・・・ 779
第579図　土壙出土遺物（６）・・・・・・・・・・・・・ 782
第580図　土壙出土遺物（７）・・・・・・・・・・・・・ 783
第581図　土壙出土遺物（８）・・・・・・・・・・・・・ 784
第582図　土壙出土遺物（９）・・・・・・・・・・・・・ 785
第583図　土壙出土遺物（10）・・・・・・・・・・・・・ 786
第584図　土壙出土遺物（11）・・・・・・・・・・・・・ 789
第585図　土壙出土遺物（12）・・・・・・・・・・・・・ 791
第586図　樹皮堆積層（１）・・・・・・・・・・・・・・ 799
第587図　樹皮堆積層（２）・・・・・・・・・・・・・・ 800
第588図　樹皮堆積層（３）・・・・・・・・・・・・・・ 801
第589図　樹皮堆積層（４）・・・・・・・・・・・・・・ 802
第590図　樹皮堆積層（５）・・・・・・・・・・・・・・ 803
第591図　樹皮堆積層（６）・・・・・・・・・・・・・・ 804
第592図　樹皮堆積層（７）・・・・・・・・・・・・・・ 805
第593図　樹皮堆積層（８）・・・・・・・・・・・・・・ 806
第594図　樹皮堆積層遺物出土状況（１）・・ 807
第595図　樹皮堆積層遺物出土状況（２）・・ 808
第596図　樹皮堆積層遺物出土状況（３）・・ 809
第597図　樹皮堆積層遺物出土状況（４）・・ 810
第598図　樹皮堆積層遺物出土状況（５）・・ 811

第599図　樹皮堆積状況（１）・・・・・・・・・・・・・ 812
第600図　樹皮堆積状況（２）・・・・・・・・・・・・・ 813
第601図　樹皮堆積状況（３）・・・・・・・・・・・・・ 814
第602図　樹皮堆積層出土遺物（１）・・・・・・ 815
第603図　樹皮堆積層出土遺物（２）・・・・・・ 816
第604図　樹皮堆積層出土遺物（３）・・・・・・ 817
第605図　ピット・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 818
第606図　試料採取位置・・・・・・・・・・・・・・・・・ 852
第607図　試料写真・Ｘ線写真・・・・・・・・・・・・ 853
第608図　砂粒組成・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 857
第609図　粒径頻度および粒径累積加積曲線
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 858
第610図　砂粒薄片・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 860
第611図　試料№.４採取位置模式図・・・・・・・・ 862
第612図　栗橋宿西本陣跡における花粉
ダイアグラム・・・・・・・・・・・・・・・・・ 864
第613図　栗橋宿西本陣跡の花粉・・・・・・・・・・ 868
第614図　栗橋宿西本陣跡における主要珪藻
ダイアグラム・・・・・・・・・・・・・・・・・ 873
第615図　栗橋宿西本陣跡の珪藻・・・・・・・・・・ 874
第616図　各遺構における試料採取位置・・・・ 877
第617図　花粉化石群集・・・・・・・・・・・・・・・・・ 879
第618図　花粉化石・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 880
第619図　珪藻化石群集・・・・・・・・・・・・・・・・・ 885
第620図　珪藻化石・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 887
第621図　重軽鉱物組成・・・・・・・・・・・・・・・・・ 892
第622図　テフラ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 893
第623図　栗橋宿西本陣跡の種実Ⅰ・・・・・・・・ 897
第624図　栗橋宿西本陣跡の種実Ⅱ・・・・・・・・ 898
第625図　大型植物遺体（１）・・・・・・・・・・・・ 906
第626図　大型植物遺体（２）・・・・・・・・・・・・ 907
第627図　木材（１）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 911
第628図　木材（２）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 912
第629図　年代測定を行った木材と年輪計測結果
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 916
第630図　第１号建物跡の地業構築材（北）の
ウィグルマッチング結果・・・・・・・・ 918
第631図　第３号建物跡の地業構築材（南）の
ウィグルマッチング結果・・・・・・・・ 919
第632図　第６号建物跡の地業構築材（№.23）の
ウィグルマッチング結果・・・・・・・・ 919
第633図　放射性炭素年代測定試料・・・・・・・・ 921
第634図　ウィグルマッチング結果（１）
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 923
第635図　ウィグルマッチング結果（２）
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 923
第636図　較正曲線とモデリング年代・・・・・・ 924
第637図　土地造成・遺構構築面模式図及び
調査区北部遺構分布図・・・・・・・・・・ 927
第638図　火災層・火災処理土壙の層位関係図・
推定延焼範囲図・・・・・・・・・・・・・・・・・ 930
第639図　群馬県西宮遺跡出土の火打金・・・・ 932
第640図　升屋と関連する火打金・・・・・・・・・・ 933

表目次

（第３分冊）

第158表　第三面井戸跡一覧表 …… 610
第159表　第13号井戸跡出土遺物観察表 …… 612
第160表　第18号井戸跡出土遺物観察表（１） …… 614
第161表　第18号井戸跡出土遺物観察表（２） …… 616
第162表　第20号井戸跡出土遺物観察表 …… 620
第163表　第21号井戸跡出土遺物観察表 …… 624
第164表　第三面溝跡一覧表 …… 625
第165表　第20号溝跡出土遺物観察表 …… 626
第166表　第21号溝跡出土遺物観察表 …… 627
第167表　第26号溝跡出土遺物観察表 …… 629
第168表　第三面土壙一覧表 …… 632
第169表　第456号土壙出土遺物観察表（１） …… 638
第170表　第456号土壙出土遺物観察表（２） …… 640
第171表　第456号土壙出土遺物観察表（３） …… 644
第172表　第456号土壙出土遺物観察表（４） …… 646
第173表　第504号土壙出土遺物観察表（１） …… 662
第174表　第504号土壙出土遺物観察表（２） …… 670
第175表　第504号土壙出土遺物観察表（３） …… 673
第176表　第516号土壙出土遺物観察表（１） …… 683
第177表　第516号土壙出土遺物観察表（２） …… 689
第178表　第516号土壙出土遺物観察表（３） …… 690
第179表　第517号土壙出土遺物観察表（１） …… 711
第180表　第517号土壙出土遺物観察表（２） …… 721
第181表　第517号土壙出土遺物観察表（３） …… 731
第182表　第517号土壙出土遺物観察表（４） …… 735
第183表　第518号土壙出土遺物観察表（１） …… 742
第184表　第518号土壙出土遺物観察表（２） …… 749
第185表　第518号土壙出土遺物観察表（３） …… 752
第186表　第536号土壙出土遺物観察表（１） …… 756
第187表　第536号土壙出土遺物観察表（２） …… 759
第188表　第536号土壙出土遺物観察表（３） …… 759
第189表　第537号土壙出土遺物観察表（１） …… 765
第190表　第537号土壙出土遺物観察表（２） …… 766
第191表　第537号土壙出土遺物観察表（３） …… 767
第192表　土壙出土遺物観察表（１） …… 780
第193表　土壙出土遺物観察表（２） …… 787
第194表　土壙出土遺物観察表（３） …… 790
第195表　土壙出土遺物観察表（４） …… 791
第196表　樹皮堆積層出土遺物観察表（１） …… 815
第197表　樹皮堆積層出土遺物観察表（２） …… 817
第198表　第三面ピット一覧表 …… 818

第199表　第一面文字資料釈文 …… 820
第200表　第二面文字資料釈文 …… 822
第201表　第三面文字資料釈文 …… 824
第202表　第一面出土遺物一覧表 …… 826
第203表　第二面出土遺物一覧表 …… 829
第204表　第三面出土遺物一覧表 …… 832
第205表　第一面瓦計測表 …… 834
第206表　第二面瓦計測表 …… 835
第207表　第三面瓦計測表 …… 836
第208表　第一面遺構時期推定一覧表 …… 837
第209表　第二面遺構時期推定一覧表 …… 839
第210表　第三面遺構時期推定一覧表 …… 841
第211表　第一面出土陶磁器組成表 …… 842
第212表　第二面出土陶磁器組成表 …… 845
第213表　第三面出土陶磁器組成表 …… 847
第214表　砂粒組成 …… 857
第215表　粒度分析結果 …… 859
第216表　試料一覧 …… 862
第217表　栗橋宿西本陣跡における花粉分析結果 …… 863
第218表　主要な花粉と珪藻から推定される環境・植生 …… 867
第219表　栗橋宿西本陣跡における珪藻分析結果 …… 871
第220表　花粉分析結果 …… 878
第221表　珪藻分析結果 …… 883
第222表　テフラ分析結果 …… 892
第223表　重軽鉱物組成 …… 892
第224表　栗橋宿西本陣跡における種実同定結果 …… 895
第225表　栗橋宿西本陣跡出土種実の計測値 …… 896
第226表　種実出土状況 …… 902
第227表　主な種実遺体の計測値 …… 904
第228表　樹種同定結果 …… 910
第229表　測定試料および処理 …… 915
第230表　第１号建物跡の地業構築材（北）放射性炭素年代測定、暦年較正、ウィグルマッチングの結果 …… 917
第231表　第３号建物跡の地業構築材（南）放射性炭素年代測定、暦年較正、ウィグルマッチングの結果 …… 917
第232表　第６号建物跡の地業構築材（№23）放射性炭素年代測定、暦年較正、ウィグルマッチングの結果 …… 918
第233表　木材の放射性炭素年代測定、暦年較正およびウィグルマッチングの結果 …… 922
第234表　栗橋宿跡から出土した火打金一覧 …… 934

３　第三面の遺構と遺物

調査区北部の第三面から検出された本書掲載分の遺構は、埋設桶１基、井戸跡５基、溝跡５条、土壙 46 基､樹皮堆積層１箇所､ピット５基である。

遺構は土壙が主体であり、調査区北側では建物跡や区画施設は確認されなかった。

そのため、第 22 図に示した第三面の区画案は、第二面で検出された区画施設の直下に設定した。第三面と第二面の間で、区画が変化している可能性については、留意しておきたい。

（１）埋設桶

埋設桶は、１基検出された。遺構図は第 457 図に示した。

第 85 号埋設桶（第 457 図）

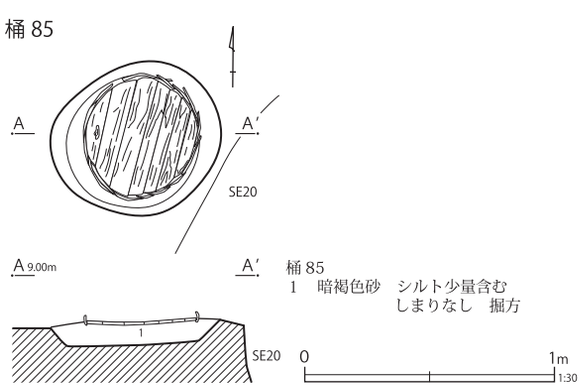
Ｂ５－Ｉ６グリッドの区画１・２に位置し、樹皮堆積層より新しい。

掘り方は径 0.68 ｍで、径 0.48 ｍの箍と径 0.47 ｍの底板のみが、底面から浮いた状態で検出された。残存する掘り方の深さは、0.10 ｍであった。掘り方の覆土は、シルトを含む砂層であった。

遺物の出土がなかったため､時期は不明である。

（２）井戸跡

井戸跡は、５基検出された。区画１～３を中心に、日光道中からやや奥まった場所に分布していた。掘り方の形状は、円筒状と漏斗状の２種がみられた。遺構は深いものが多く、安全上の制約から、すべての底面を確認できなかった。



第 457 図　第 85 号埋設桶

位置・規模等の基本的な情報は第 158 表に、遺構図は第 458・460・464 図に示した。

第 13 号井戸跡（第 458・459 図）

Ｂ５－Ｊ５グリッドに位置する。第 513 号土壙の精査中に、底面から検出された。１段目の井戸側が底面より大きく突出していたことから、第 513 号土壙より新しいものと考えられる。

掘り方は円筒状で、灰色粘土ブロックを多量に含むシルトが充填されていた。井戸側内部の覆土は暗灰色シルトで、掘り方と井戸側内部覆土の色調は、ほとんど差がみられなかった。井戸側内部の下層は、木片が多量に含まれていた。

深い井戸であるため、安全性に配慮し、３段目の井戸側までを検出した。そのため、底面は検出できなかった。

井戸側は３段検出された。２段目の井戸側は、長さ 90 ㎝程度であった。１段目、３段目も同程度の長さであると思われる。１段目の側板は他より厚手であった。２段目の井戸側は､下部に１条、上部に２条の箍がみられた。

遺物は、陶磁器、土器、土製品、木製品、種実類等が出土した｡すべて井戸側内部からの出土で、陶磁器は肥前系磁器の筒形碗が最新である。設置時期は不明だが、18 世紀中葉頃に廃絶したと考えられる。

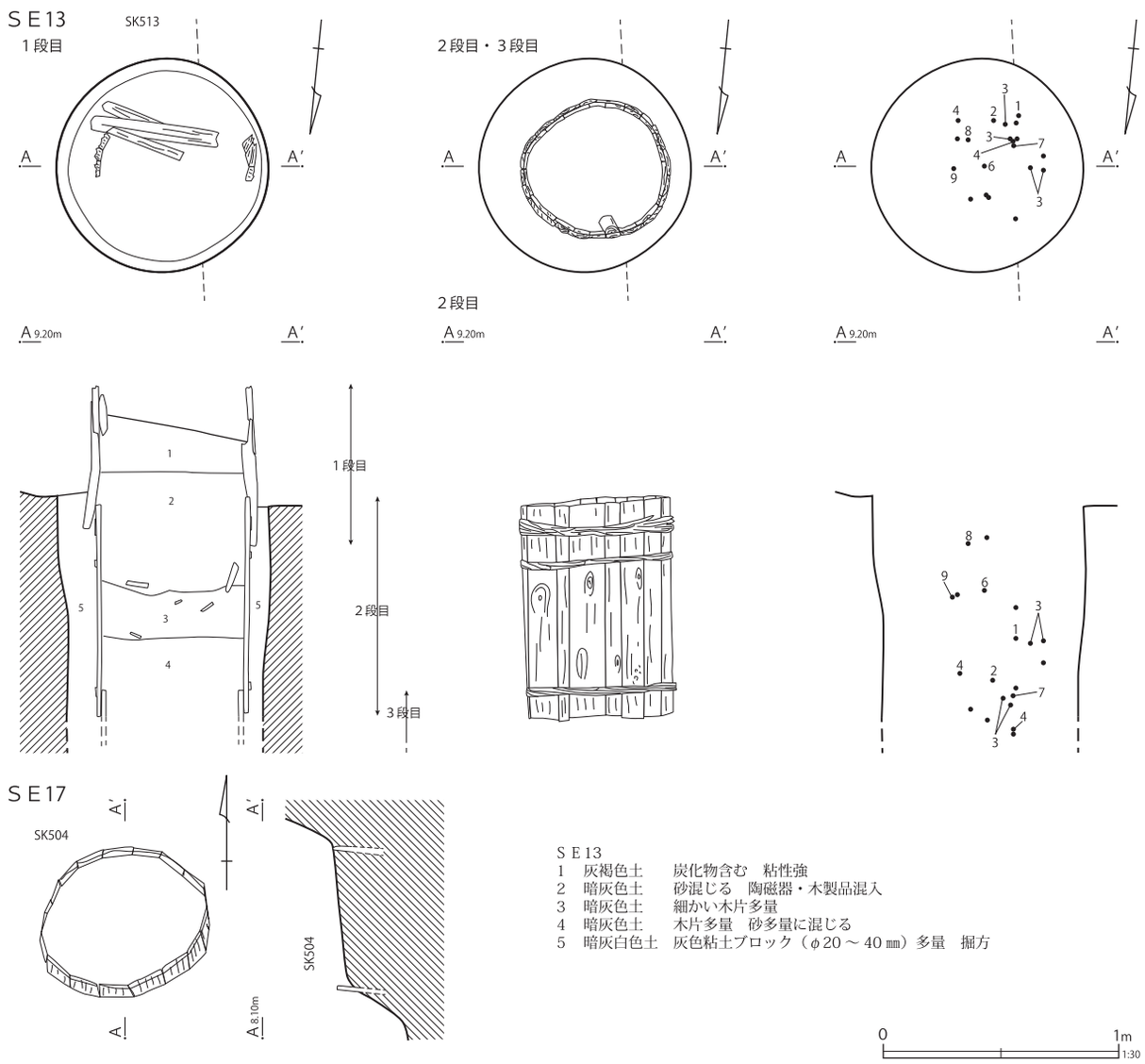
出土した種実類は、種実同定を実施しており、ムクロジの種実 17 点が確認された（Ｖ　自然科学分析８参照）。江戸遺跡では、羽子板と共に羽子（ムクロジ）が出土する例（江戸遺跡研究会 2001）が認められることを留意したい。

第 459 図に出土遺物を示した。１は肥前系磁器の粗製碗で、内底面は蛇の目状釉剥ぎされる。外面に梅樹文が染付される。

２は肥前系磁器の筒形碗で、やや大振りのものである。外面には竹林人物文が、内面の口縁部に

第 158 表　第三面井戸跡一覧表　　単位：m

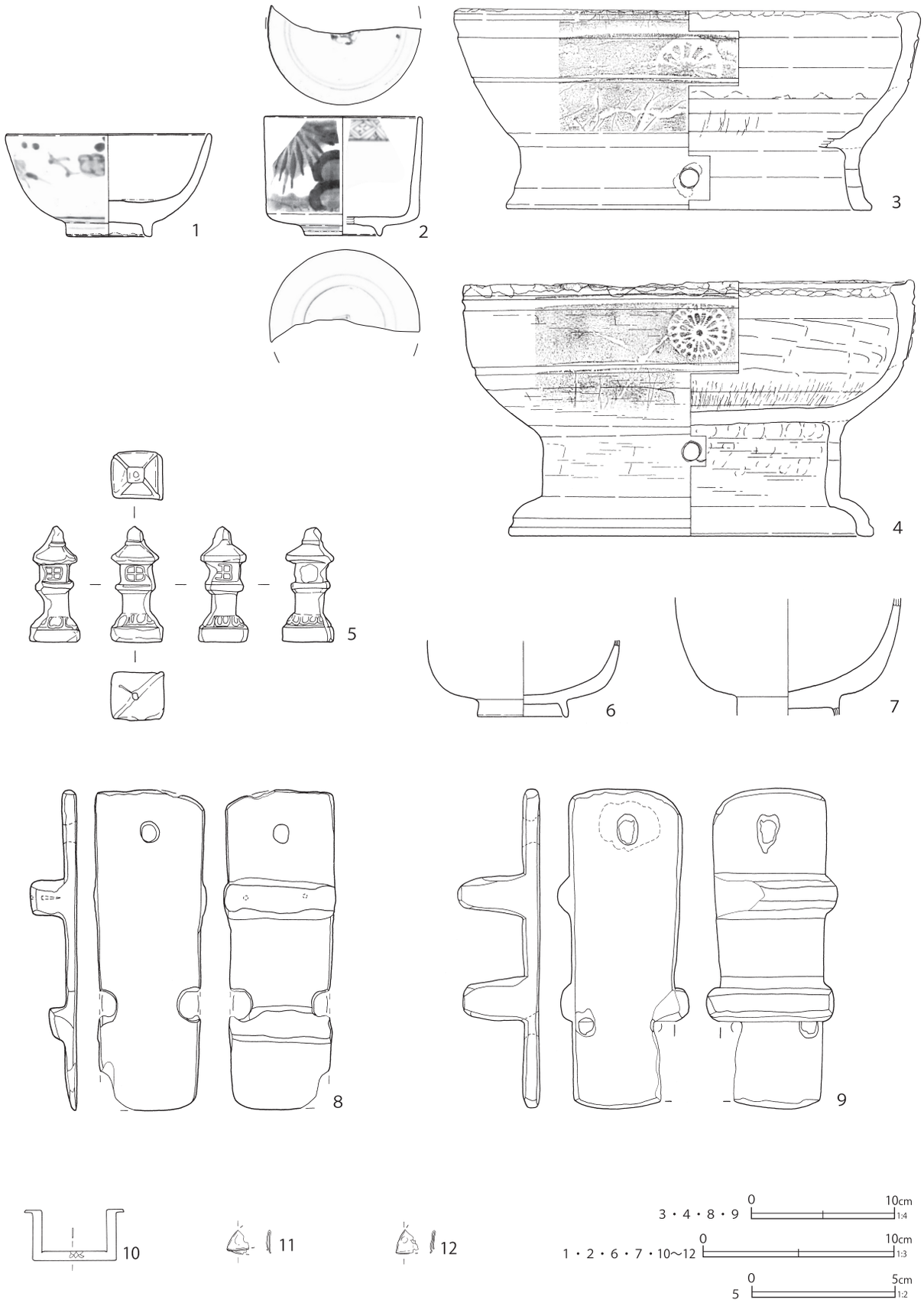
番号	区画	グリッド	外径	高さ	内径	深さ	掘り方径	深さ	備考
13	3	B5-J5	0.70	[1.40]	0.58	[1.40]	0.90	[0.95]	2 段目内径 0.58　3 段目内径 0.52 SK513 より新
17	―	B5-J5	[0.70]	[0.12]	―	―	―	―	SK504 と重複
18	3	B5-J7/8	―	―	―	―	1.81	[0.42]	SK537 より新
20	1･2	B5-I6, J6	―	―	―	―	2.20	[1.15]	SK387 より古 SK496, 樹皮堆積層より新
21	3	B5-J6	―	―	―	―	2.93	[1.70]	SK422 より古



第 458 図　第 13・17 号井戸跡

は四方襷文が染付される。内底面には、二重圏線と五弁花文が染付される。

３・４は瓦質土器の火鉢で、輪高台状の高い脚を有すものである。いずれも、あまり燻されておらず、色調も黄灰色味を帯びる点は共通する。胎土には角閃石を含む。口縁部の内面から外面上位にかけて黒色処理される。また、二次的に敲打される。脚部の孔が、対向する位置からずれて穿孔



第 459 図　第 13 号井戸跡出土遺物

第 159 表　第 13 号井戸跡出土遺物観察表（第 459 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	磁器	碗	10.5	5.4	4.2	―	90	良好	白	肥前系 内外面施釉 外面染付 内底面蛇の目状釉剥ぎ	206-1
2	磁器	碗	(8.0)	6.2	(3.8)	―	30	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付（筒形碗）	
3	瓦質土器	火鉢	(32.0)	[14.5]	25.5	CEIK	45	普通	灰白	外面菊花文スタンプ（半菊文）脚部穿孔２残存 口縁部二次敲打 一部黒色処理 内面火箸状痕若干あり	206-2
4	瓦質土器	火鉢	(31.4)	[17.9]	(25.2)	CEGH	70	普通	灰黄 黄灰	底部シワ状痕 外面菊花文スタンプ（赤彩）脚部穿孔２ 口縁部二次敲打 一部黒色処理 内面火箸状痕多い	206-3
5	土製品	箱庭道具	高さ 4.0 幅 1.8 重さ 7.7			AG	―	普通	浅黄橙	京都系 灯籠 前後合二枚型成形 中実	242-1
6	木製品	漆椀	高さ［3.9］底径 4.8 板目							内外面赤漆 高台縁黒漆	
7	木製品	漆椀	高さ［6.1］横木取り							内面赤漆 外面黒漆	
8	木製品	下駄	長さ 22.3 幅 7.6 高さ 3.3 板目							連歯下駄 前歯鉄釘２	
9	木製品	下駄	長さ 22.4 幅 9.0 高さ 5.8 板目							連歯下駄	
10	銅製品	不明	縦 2.65 横 5.2 厚さ 0.07 重さ 2.1							鍍金あり	286-5
11	銅製品	不明	縦 1.2 横［1.2］厚さ 0.03 重さ 0.2							鍍金あり 一部欠失	
12	銅製品	不明	縦 1.25 横［1.15］厚さ 0.03 重さ 0.3							鍍金あり 一部欠失	

されるのは特徴的である。

４は口縁部が受口状になり、脚は段が付く高いものである。このタイプの火鉢の中では古い様相を示す。３の菊花文スタンプは、半菊形である。４の菊花文スタンプは立体的で、16 花弁に 26 珠文を備える。内面の火箸による傷痕は、３は僅かだが、４は多い。

このほかに、非掲載遺物には焼継痕がみられる肥前系磁器の皿、残存率 70％を越える雪輪草花文碗、瀬戸美濃系陶器のせんじ碗が認められた。

５は土製品の箱庭道具で、灯籠をモチーフとしたものである。対角線を境に、二枚型で成形する中実のもので、胎土の特徴から京都系と考えられる。

６～９までは木製品である。

６・７は腰丸椀で、体部が直立気味に立ち上がるものである。６は薄手で、腰の丸みが強い。高台は低く、端部が丸みを帯びる。内外面に赤漆が塗布され、高台端部は黒漆である。

７は高台が高く、内面に赤漆、外面に黒漆が塗布されている。

８・９は連歯下駄である。８は前歯に鉄釘が２箇所遺存しており、前歯を補修したものと思われる。

10 ～ 12 までは銅製品だが、器種は不詳である。すべて鍍金がみられる。

第 17 号井戸跡（第 458 図）

Ｂ５－Ｊ５グリッドに位置する。第 504 号土壙と重複していたが、新旧関係は不詳であった。

第 504 号土壙の精査中に、遺構底面付近の階段状となるテラスの中段で検出されたものである。

第 504 号土壙が深い土壙であったため、安全性に配慮し、精査は行わず、井戸側の検出状況の平面図のみを記録した。掘り方は確認されなかった。

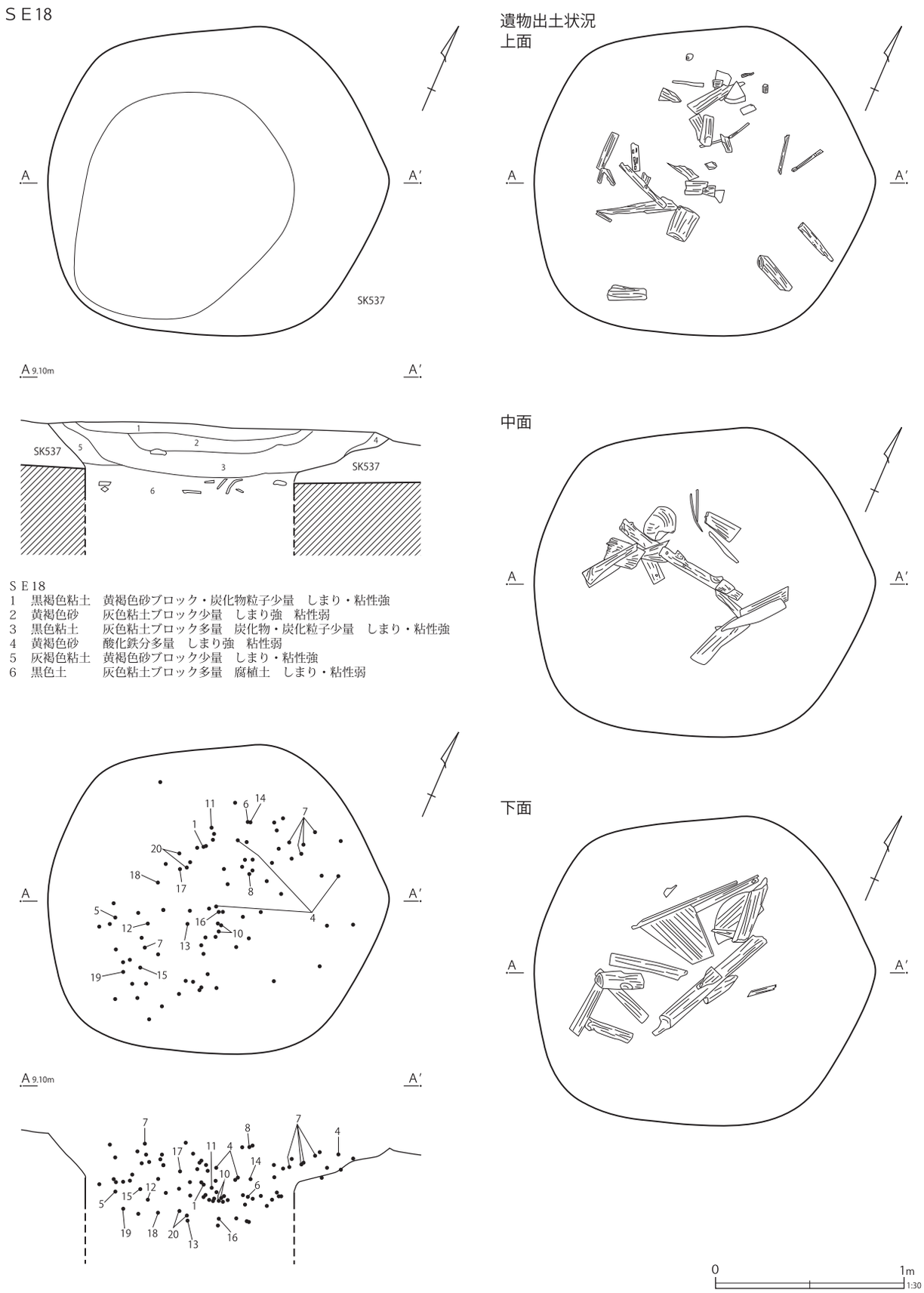
井戸側は、長軸径 0.70 m程度を測り、厚手の側板を組み合わせたものである。遺構精査を行っていないため、出土遺物はなく、時期は不明である。

第 18 号井戸跡（第 460 ～ 463 図）

Ｂ５－Ｊ７・８グリッドに位置し、第 537 号土壙より新しい。

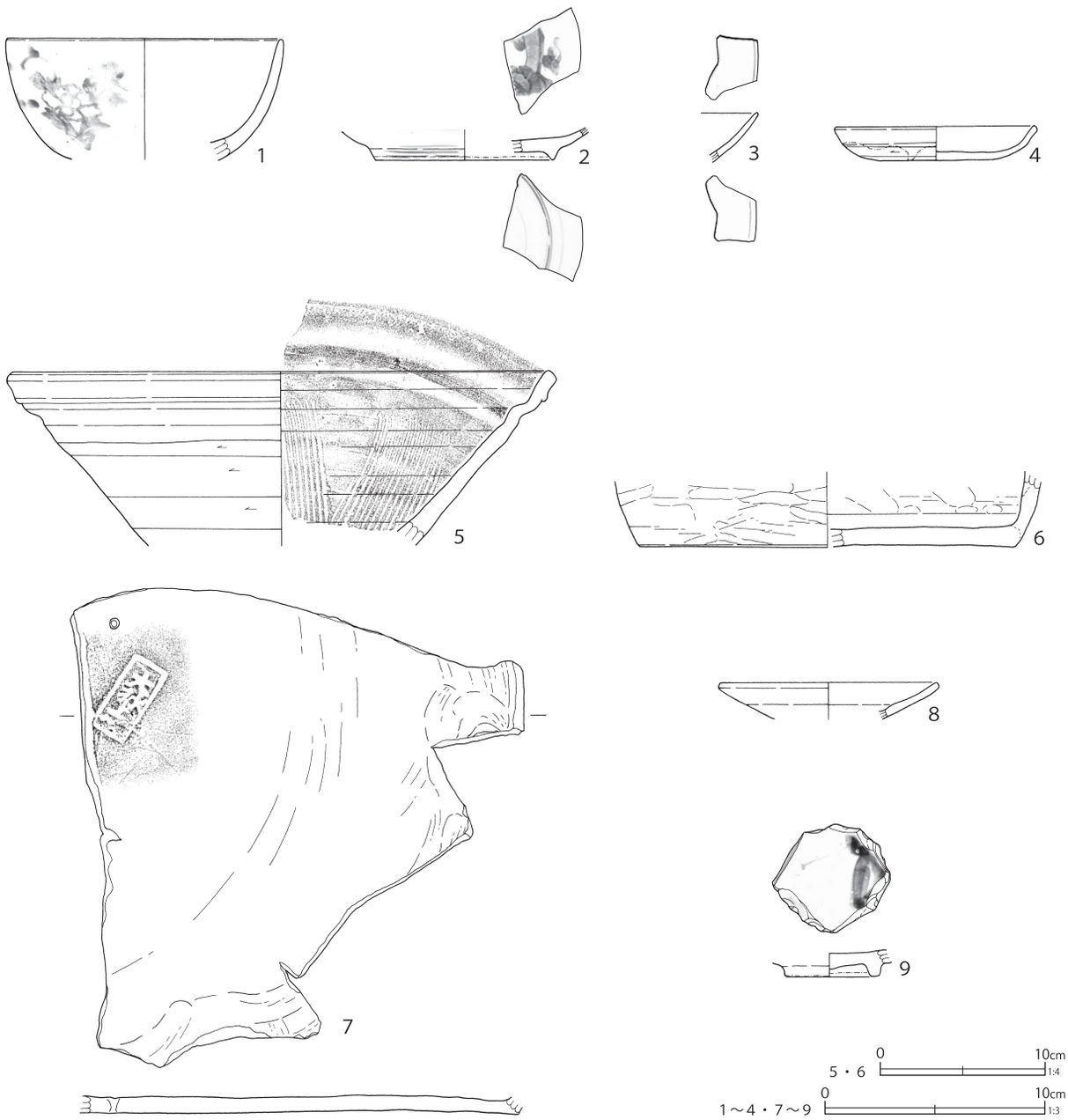
井戸側は検出されず、箍痕の痕跡すら認められなかった。素掘りなのか、井戸側を抜き取った状態であったかは判断し難い。掘り方は漏斗状で、安全上の制約により、第６層より下位は精査できず、底面は検出できなかった。

最下層には、灰色粘土ブロックを多量に含む腐植土がみられ、その上に粘土と砂が交互に堆積し



ＳＥ18
1　黒褐色粘土　黄褐色砂ブロック・炭化物粒子少量　しまり・粘性強
2　黄褐色砂　灰色粘土ブロック少量　しまり強　粘性弱
3　黒色粘土　灰色粘土ブロック多量　炭化物・炭化粒子少量　しまり・粘性強
4　黄褐色砂　酸化鉄分多量　しまり強　粘性弱
5　灰褐色粘土　黄褐色砂ブロック少量　しまり・粘性強
6　黒色土　灰色粘土ブロック多量　腐植土　しまり・粘性弱

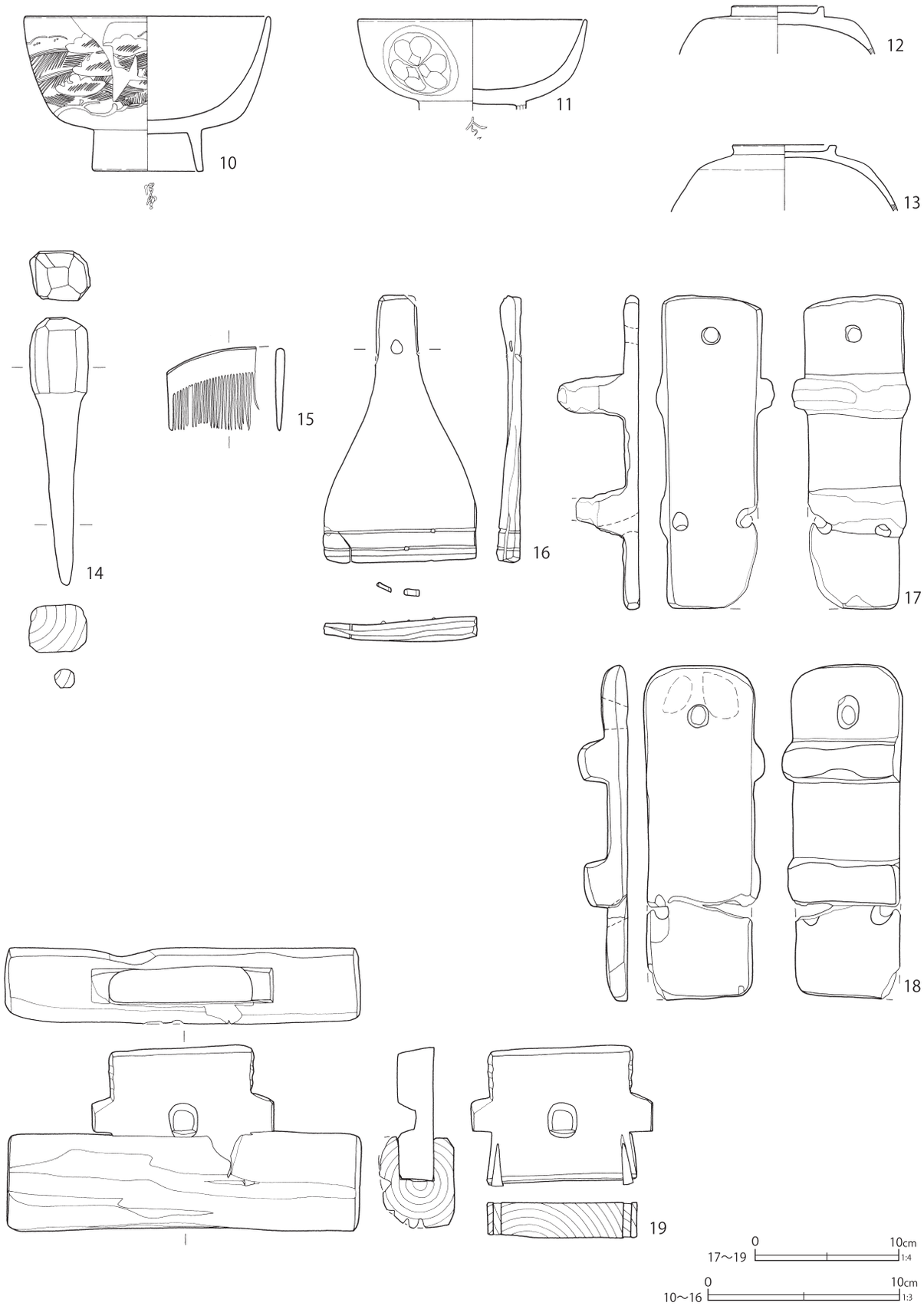
第 460 図　第 18 号井戸跡



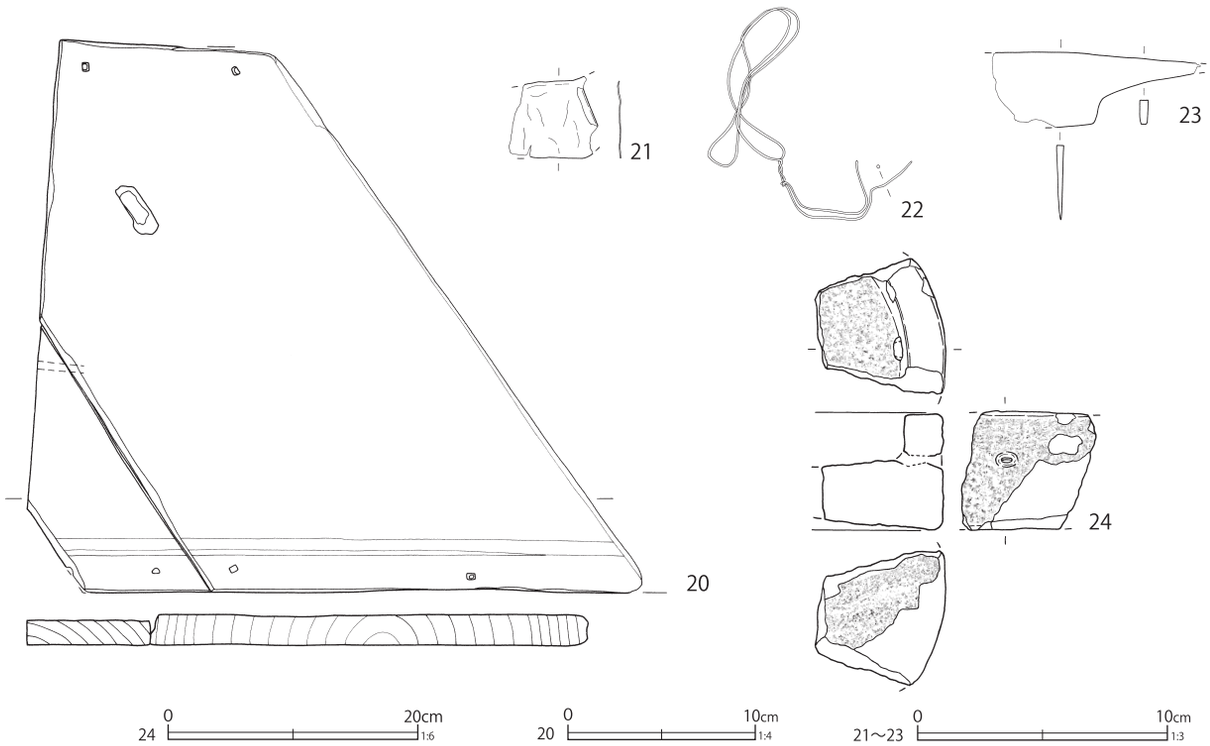
第 461 図　第 18 号井戸跡出土遺物（1）

第 160 表　第 18 号井戸跡出土遺物観察表（1）（第 461 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	磁器	碗	(12.4)	[5.5]	―	―	15	良好	白	肥前系 内外面施釉 外面染付	206-4
2	磁器	皿	―	[1.4]	(8.0)	―	5	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付 3 と同一個体ヵ	206-6
3	磁器	皿	―	[2.2]	―	―	5	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付 2 と同一個体ヵ	
4	陶器	灯明皿	(9.0)	1.5	5.0	I	35	普通	灰白	瀬戸美濃系 内外面柿釉・底部拭き取り	
5	陶器	擂鉢	(32.6)	[10.6]	―	EK	10	普通	灰白	瀬戸美濃系 内外面柿釉 内面擂目	207-1
6	瓦質土器	竈	―	[4.6]	(22.9)	CHK	10	普通	灰黄 黄灰	底部シワ状痕・脚の痕跡あり 外面ヘラミガキ 燻す	
7	瓦質土器	焙烙	―	[0.7]	―	CIK	20	普通	にぶい黄橙 褐灰	底部シワ状痕 内底面刻印「大極上」	206-5
8	かわらけ	小皿	(9.8)	[1.6]	―	ACK	10	普通	浅黄	胎土やや粗い	
9	磁器	皿	―	[1.2]	3.8	―	10	普通	白	肥前系 内外面施釉 内面染付 二次敲打（底部円盤状製品転用）重さ 30.3g	239-1



第 462 図　第 18 号井戸跡出土遺物（2）



第 463 図　第 18 号井戸跡出土遺物（３）

第 161 表　第 18 号井戸跡出土遺物観察表（２）（第 462・463 図）

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	口径 / 径	高さ	底径	木取り	備考	図版
10	木製品	漆椀	―	―	―	(12.6)	8.0	5.7	横木取り	内面赤漆 外面黒漆 外面文様（赤漆） 高台内文字（赤漆）	265-1
11	木製品	漆椀	―	―	―	(11.7)	[4.7]	―	横木取り	内外面赤漆 外面３箇所紋（黒漆） 高台内文字（黒漆）	265-2
12	木製品	漆椀蓋	―	つまみ径 (4.8)		―	[2.4]	―	横木取り	内外面赤漆 被熱	
13	木製品	漆椀蓋	―	つまみ径 5.4		―	[3.4]	―	横木取り	内外面赤漆	
14	木製品	栓	13.8	3.0	2.8	―	―	―	板目		
15	木製品	櫛	[4.6]	4.3	0.4	―	―	―	柾目		265-3
16	木製品	刷毛	13.9	7.9	1.2	―	―	―	柾目	木釘２	265-5
17	木製品	下駄	21.8	8.3	―	―	5.6	―	板目	連歯下駄	
18	木製品	下駄	23.2	8.3	―	―	[3.4]	―	柾目	連歯下駄	
19	木製品	不明	12.7	24.5	5.2	―	―	―	中：板目 外：芯持材	２材結合 板材に楔 ホゾ穴 圧痕（外材：長さ 6.9cm 幅 24.5cm 厚さ 5.2cm，中材：長さ 9.3cm 幅 12.6cm 厚さ 2.4cm）	265-4
20	木製品	不明	29.3	30.2	1.6				板目	鉄釘で２板結合 孔６	265-6
21	銅製品	不明	縦 3.3 横 3.6 厚さ 0.03 重さ 2.7							鍍金あり 一部欠失	
22	銅製品	針金	縦 8.5 横 8.2 厚さ 0.1 重さ 1.5								
23	鉄製品	包丁	長さ [8.4] 刃長 [4.2] 刃幅 3.0 背幅 0.3 重さ 12.3							一部欠失	
24	石製品	石臼	器高 9.5 重さ 1090.2							安山岩 上臼 下面摺目遺存 側面貫通孔１ 外面下位・内底面工具による連続的なタタキ	

ていた。第１・５層の粘土層には黄褐色の砂ブロックが認められた。

遺物は、建築材、箸、下駄、漆椀等の木製品を中心に、陶磁器、瓦、石製品等が出土した。

陶磁器は、瀬戸美濃系陶器の柿釉灯明皿が最新である。出土陶磁器の様相と重複関係から、18 世紀中葉の廃絶と考えられる。

第 461 図は陶磁器・土器である。

１は肥前系磁器の粗製碗で、口径の大きいものである。外面にはコンニャク印判で菊花文が染付

される。また、手描きで蔓状の文様が描き加えられる。

２・３は肥前系磁器の皿で、同一個体の可能性がある。高台は断面三角形で、器壁は薄手である。染付も丁寧で、３は竜文が描かれるものであろうか。外線の中が濃塗りされる。この型式の上手の皿は、栗橋宿跡での出土例は少ない。17 世紀後半のものである。

４は瀬戸美濃系陶器の柿釉灯明皿で、器壁が極めて薄い。柿釉は薄く掛けられ、重ね焼き痕は認められない。

５は瀬戸美濃系陶器の擂鉢で、内面に一単位 14 条の擂目がみられる。内外面とも赤味の強い鉄釉（柿釉）が施される。

６は瓦質土器で、やや大きさは小さいが、竈の底部破片と考えられる。外面はやや幅広くヘラミガキが施される。内底面の周囲に幅広い回転ナデが施され、中心部はヘラナデによって平滑に処理される。底部は外周部に沿ってナデが施されるが、他はシワ状痕が無調整で残る。欠損部には、脚があった痕跡が認められる。

７は瓦質土器の焙烙の底部である。平底のもので、耳が底部に接地していた痕跡がある。内底面は全体に丁寧にナデ調整され、中心部に刻印「大極上」が押される。また、補修孔が認められる。

８は薄手のかわらけである。腰折れ痕がある。広義の江戸在地系かわらけであるが、胎土は粉質では無く、やや粗い。色調も黄色味が強い。

９は、肥前系磁器の皿の底部周囲を打ち欠いて二次加工を施したもので、円盤状製品である。

このほかに、非掲載遺物とした陶磁器・土器類には古墳時代前期の土師器がみられた。ローリングが著しいが、壺・甕類と思われる。

第 462 図 10 ～第 463 図 20 は木製品である。

10・11 は漆椀である。10 は腰部の丸みがやや強く張り気味のもので、一文字腰椀と思われる。高台が高く、端部の断面は角形である。内面に赤漆、外面に黒漆が塗布され、外面に赤漆で文様が描かれる。高台内に赤漆で文字が書かれるが、判読できない。

11 は体部が低い腰丸椀で、内外面に赤漆が塗布される。外面に黒漆で、３箇所に片喰状の紋が描かれる。高台内に黒漆で文字が書かれるが、判読できない。

12・13 は漆椀の蓋である。12 は肩部が角張るもので、一文字腰椀の蓋である。内外面に、赤漆が塗布される。被熱痕が認められる。

13 は肩部がやや張る薄手のもので、腰丸椀ないし一文字腰椀の蓋である。内外面に、赤漆が塗布される。

14 は栓である。15 は櫛である。

16 は刷毛である。17・18 は連歯下駄である。

19・20 は器種不詳のもので、何らかの製品を構成する部材であろう。

このうち 19 は角材状のものに穿たれた長方形の穴に、左右が突出した板が差し込まれている。板状の材には下面の２箇所に楔が差し込まれ、中央に穴が認められる。

20 は台形状の板材で、下部左端に２本の鉄釘で、別の板を結合している。上部に２箇所、下部に３箇所、左側面に１箇所の孔が認められる。

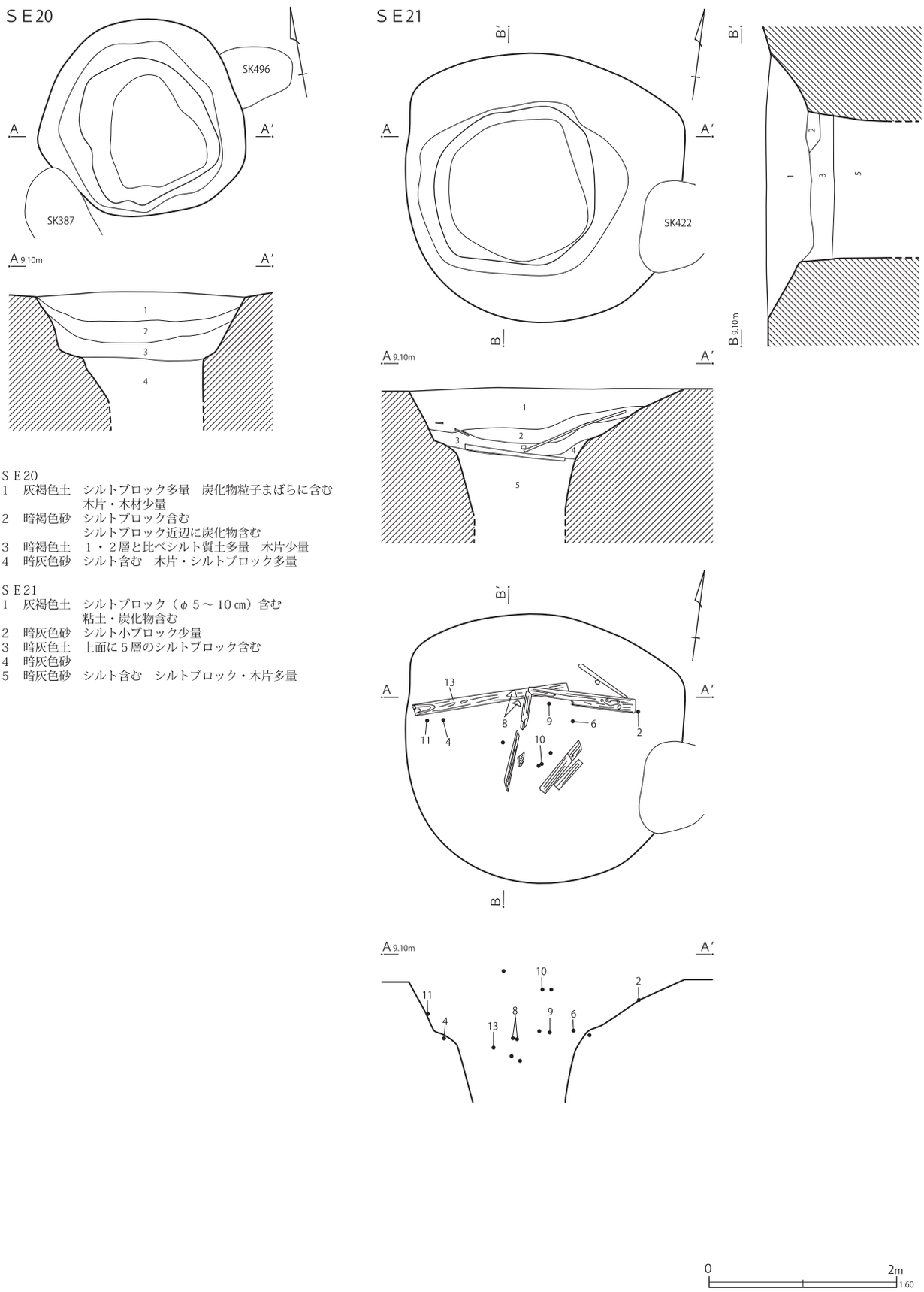
第 463 図 21 ～ 23 は金属製品である。21 は用途不明の銅製品、22 は銅製の針金である。23 は鉄製の包丁である。

第 463 図 24 は安山岩製石臼で、上臼の破片である。下面には摺目が僅かに遺存し、側面には内面下位まで貫通する孔がみられる。外面下位と内底面に、工具による連続的なタタキが認められる。

第 20 号井戸跡（第 464 ～ 466 図）

Ｂ５－Ｉ６・Ｊ６グリッドに位置する。第 387 号土壙より古く、第 496 号土壙・樹皮堆積層より新しい。発掘調査段階では、第 462 号土壙としたが、整理段階で第 20 号井戸跡と振り替えた。

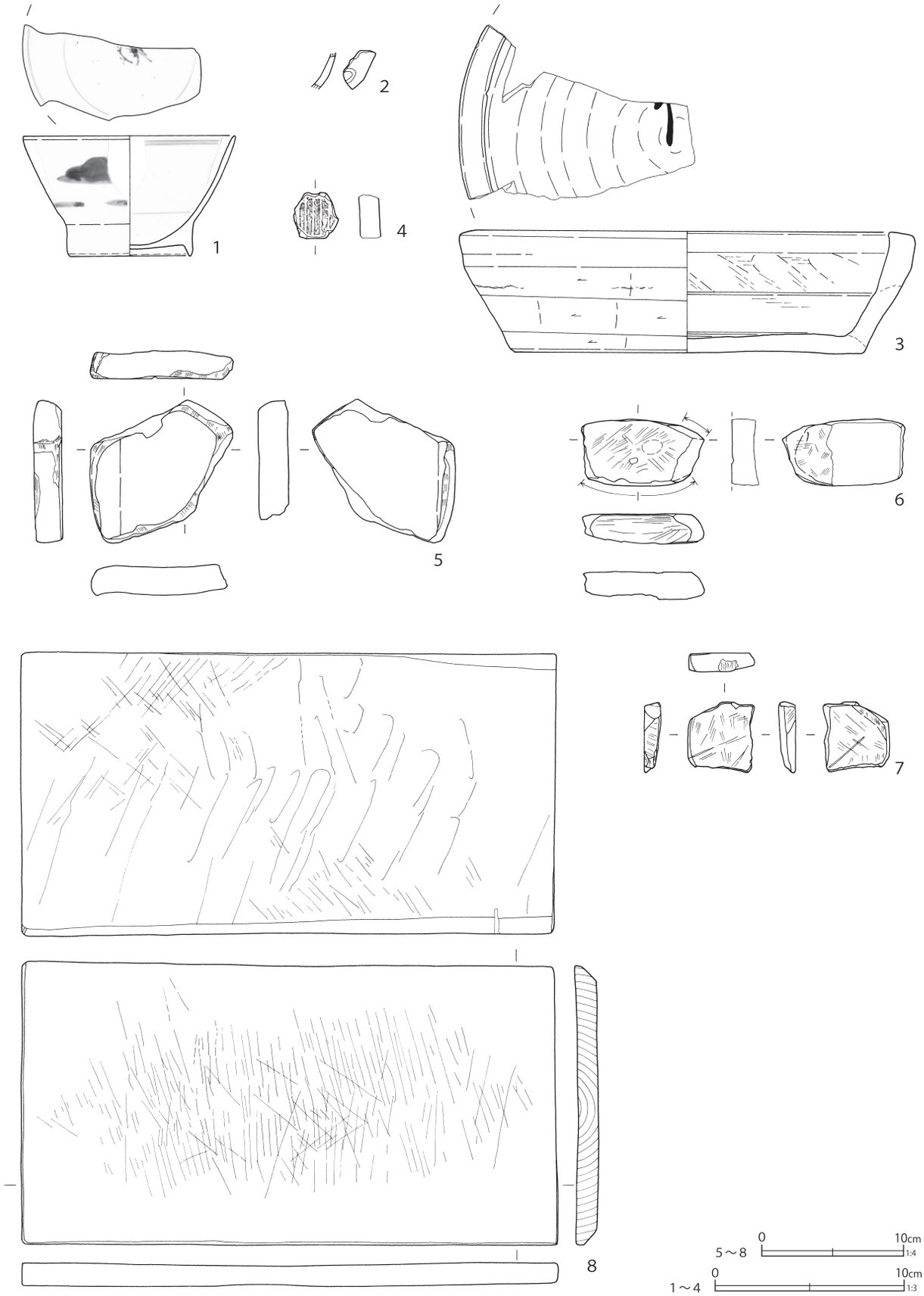
掘り方は漏斗状で、掘り方の中位に段が付くも



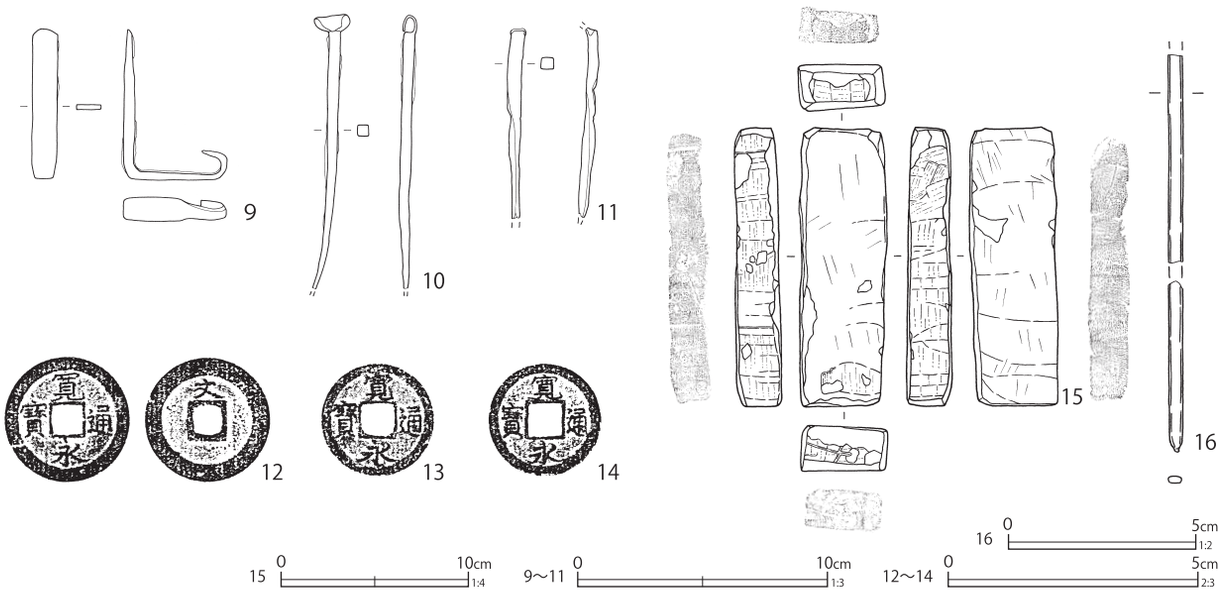
SE20
1　灰褐色土　シルトブロック多量　炭化物粒子まばらに含む
　　木片・木材少量
2　暗褐色砂　シルトブロック含む
　　シルトブロック近辺に炭化物含む
3　暗褐色土　1・2層と比べシルト質土多量　木片少量
4　暗灰色砂　シルト含む　木片・シルトブロック多量

SE21
1　灰褐色土　シルトブロック（φ5～10㎝）含む
　　粘土・炭化物含む
2　暗灰色砂　シルト小ブロック少量
3　暗灰色土　上面に5層のシルトブロック含む
4　暗灰色砂
5　暗灰色砂　シルト含む　シルトブロック・木片多量

第464図　第20・21号井戸跡



第 465 図　第 20 号井戸跡出土遺物（1）



第 466 図　第 20 号井戸跡出土遺物（２）

第 162 表　第 20 号井戸跡出土遺物観察表　（第 465・466 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	磁器	碗	(11.1)	6.3	(6.4)	―	35	普通	白	肥前系 内外面施釉・染付（広東碗）	
2	陶器	坏	―	[1.8]	―	HK	5	普通	灰白	京都信楽系 内外面透明釉 外面上絵付（緑）	
3	瓦質土器	火鉢	(21.3)	6.4	(18.3)	CFIK	20	普通	にぶい黄橙	砂目底 内底面墨書	238-1
4	陶器	擂鉢	縦 [2.4] 横 [2.5]			―	5	良好	にぶい赤褐	堺明石系 内面擂目 二次敲打（底部円盤状製品転用）重さ 7.3g	239-1
5	瓦	桟瓦	長さ 10.1 幅 10.1 厚さ 2.0			ACIK	―	普通	灰白	砥具転用	247-10
6	瓦	平瓦ヵ	長さ 4.7 幅 8.7 厚さ 2.0			AIK	―	普通	灰白	砥具転用 両面に刃ならし痕	247-11
7	瓦	不明	長さ 4.5 幅 4.7 厚さ 1.3			ACIK	―	普通	灰白	砥具転用	248-1
8	木製品	俎	長さ 20.0 幅 37.8 厚さ 1.7 板目							表裏面傷多数 裏面工具痕	265-7
9	鉄製品	額受け金具	縦 6.0 横 3.4 幅 1.0 厚さ 重さ 17.4								
10	鉄製品	釘	長さ [10.9] 幅 0.45 厚さ 0.5 重さ 11.9							一部欠失	
11	鉄製品	釘	長さ [7.6] 幅 0.5 厚さ 0.5 重さ 6.8							一部欠失	
12	銅製品	銭貨	径 25.8 厚さ 1.5 重さ 3.7							寛永通寶（新）背文	288-8
13	銅製品	銭貨	径 22.8 厚さ 1.1 重さ 2.6							寛永通寶（新）	
14	銅製品	銭貨	径 22.7 厚さ 1.1 重さ 2.6							寛永通寶（新）	
15	石製品	砥石	長さ 14.8 幅 4.7 厚さ 2.4 重さ 269.8							流紋岩 表・側面削痕 側面に幅広の刃こぼれした平ノミ状工具痕 砥面 2 端面に線刻 線条痕あり 一部被熱	298-7
16	硝子製品	笄	長さ [5.5] + [4.5] 幅 0.4 厚さ 0.2 重さ 2.6							黄色透明 中実 同一個体	299-1

のであった。井戸側は検出されず、箍の痕跡すら認められなかった。素掘りなのか、井戸側を抜き取った状態であったかは判断し難い。

深い井戸であるため、安全上の制約により深さ 1.15 m で精査を止めた。そのため、底面は検出できなかった。

覆土の下層である第４層は、木片やシルトブロックを含む砂層であった。直上の第２・３層は、類似する砂層だが、第３層は、よりシルト質であった。

陶磁器は、肥前系磁器の広東碗が最新期のもので、18 世紀末頃に廃絶したと考えられる。第 465・466 図に出土遺物を示した。

第 465 図１～４までは陶磁器・土器である。

１は肥前系磁器の広東碗である。器壁は薄手で、底部は特に薄い。外面に山水文、内面の口縁部に二重圏線が染付される。内底面に山水文が染付される。

２は京都信楽系陶器の坏の細片で、外面に緑色の上絵付けがみられる。宝崩し文の一部とみられ、「浅紅」銘を有する紅猪口と考えられる。

３は瓦質土器の火鉢である。底部は細かい砂目底で、本来は三足の脚を有する可能性が高い。ただし、成形・整形・調整の諸特徴は輪高台状の脚を有す火鉢と一致する。外面口縁部はヨコナデで、下位は広く弱いケズリで整形される。内底面は回転ナデで、中心に墨書がみられる。表裏面がにぶい橙色を呈するため酸化炎焼成にみえるが、断面中心は黄灰色で、周囲はにぶい黄橙色を帯びる。胎土に角閃石が含まれる。

４は堺明石系陶器の擂鉢で、体部片を打ち欠いて小形の円盤状製品に整形している。

５～７は瓦の破片を転用したものである。５は桟瓦、６は桟瓦ないし平瓦を素材としている。

７は擦り減りが著しく、元の器種は判断し得なかった。いずれも、明瞭な擦痕が認められ、砥具に転用されたと思われる。

８は木製品で、俎である。両面に使用痕と考えられる傷が多数みられる。裏面には工具による削痕が認められる。

第 466 図９～ 14 までは金属製品である。９は鉄製の額受け金具である。

10・11 は鉄釘である。

12 ～ 14 までは寛永通寶である。そのうち 12 は「文」の背文字がある。

第 466 図 15 は、端面に十字の線刻が施された流紋岩製の砥石で、同様のものが第一面第 53 号土壙（第 207 図 27）、栗橋宿跡第２地点（埼埋文 2019b）で出土している。十字の線刻は、産地を示すものかもしれない。刃こぼれしたノミ状工具で整形され、工具痕内に線条痕が明瞭に認められる。砥面は２面認められるが、出荷時の原形をよく留めている。

16 は硝子製の笄で、接点が無い２片だが同一個体と判断した。中実で、黄色の透明硝子である。

第 21 号井戸跡（第 464・467・468 図）

Ｂ５－Ｊ６グリッドに位置し、第 422 号土壙より古い。掘り方は漏斗状で、中位には、僅かにテラス状の段が付いていた。井戸側は検出されず、箍の痕跡すら認められなかった。素掘りなのか、井戸側を抜き取った状態であったかは判断し難い。

深い井戸で、安全性に配慮し、深さ 1.70 ｍで精査を止めた。

覆土は砂が主体だが、第１・３層はシルトブロックを含む土層であり、互層をなしていた。遺物は中層より陶磁器、木製品が出土した。下層には、木片が多量にみられた。

陶磁器には、被熱しているものが認められるが、多くはない。具体的には、非掲載遺物の肥前系磁器の筒形碗、京都信楽系陶器の端反碗、瓦質土器の竈に被熱痕がみられた。この他に、全体が炭化した鴨居が出土した。

陶磁器は、肥前系磁器の広東碗が最新期である。瀬戸美濃系磁器の燗徳利は、重複遺構からの混入であろう。推定廃絶時期は 18 世紀末頃である。

第 467 図に陶磁器・土器を示した。

１は肥前系磁器の広東碗の底部である。外面に竹林人物文が染付されるものらしい。高台が外傾ぎみだが、小破片からの反転復元のため、器形の歪みがある可能性もある。

２は肥前系磁器の粗製の皿で、内外面に染付、口縁部に口紅がみられる。

３は肥前系磁器の蓋物である。外面に太い花唐草文が染付される。口唇部は露胎である。

４は瀬戸美濃系陶器の灯明皿であり、径はかなり大きい。光沢のある柿釉が、やや薄く掛けられる。内底面に環状の融着物がある。窯道具の可能

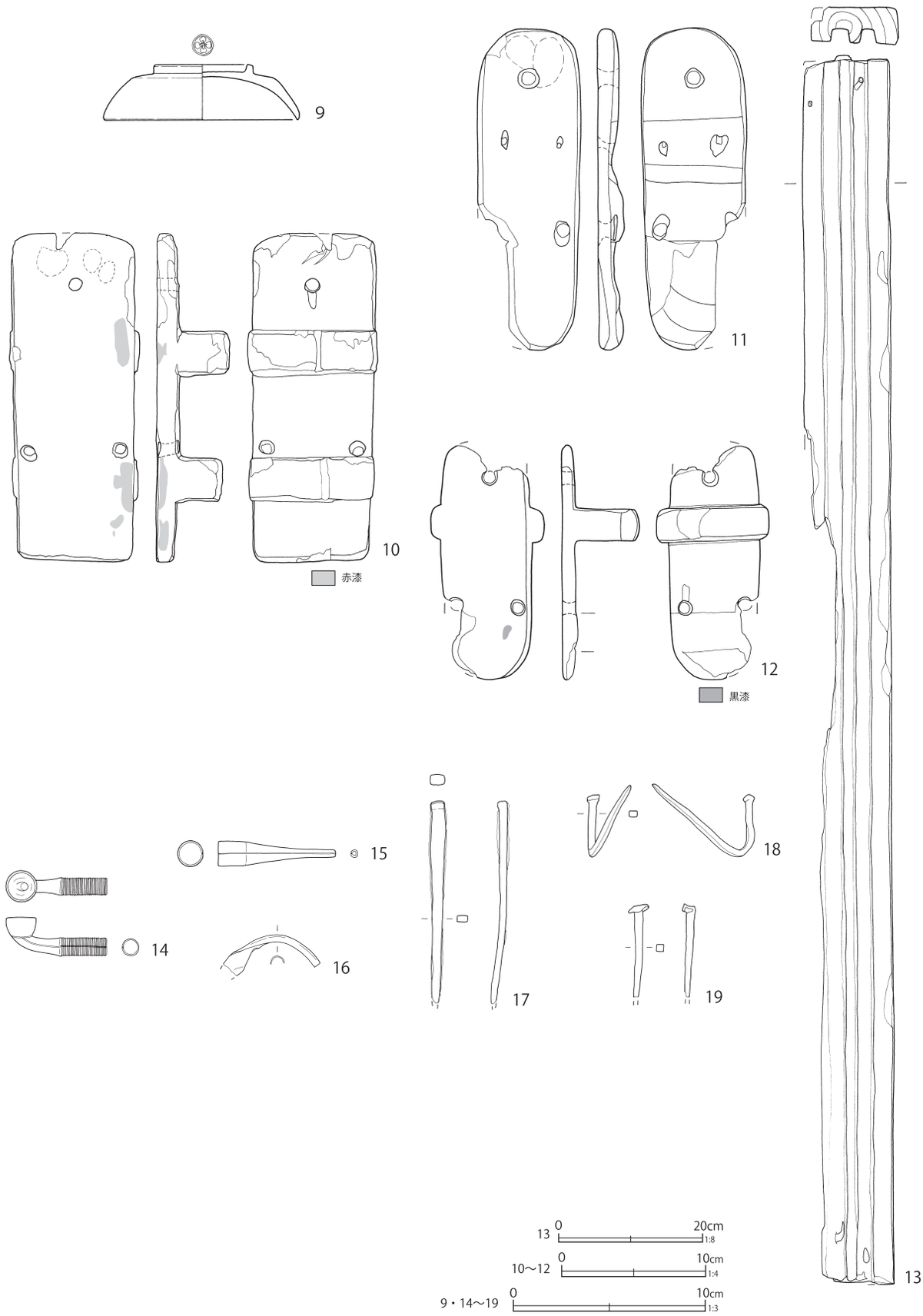
第 467 図　第 21 号井戸跡出土遺物（１）

性もあるが、形状から別の製品の底部と思われる。融着物の中は灰釉である。外面に重ね焼き痕がみられず、受部の上端も施釉後の拭き取りが見られない。胎土は還元して灰色となり、硬質である。

５は瀬戸美濃系陶器の擂鉢で、内面に擂目の一部が残る。

６は瓦質土器の火鉢である。表裏面はにぶい黄橙色で、酸化炎焼成気味だが、断面の中心は黄灰色である。口縁部上端は受口状、外面には施文がみられる。外面下位はケズリで処理される。輪高台状の脚を有す火鉢と考えられる。胎土には角閃石が含まれる。

７は瓦質土器の火鉢で、方形のものである。よく還元炎焼成されており、表・裏面は強く燻され



第 468 図　第 21 号井戸跡出土遺物（2）

第 163 表　第 21 号井戸跡出土遺物観察表（第 467・468 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	磁器	碗	―	[4.1]	(6.8)	―	15	普通	白	肥前系 内外面施釉・染付（広東碗）	
2	磁器	皿	(13.6)	3.9	(7.8)	―	30	普通	白	肥前系 内外面施釉・染付 口紅	
3	磁器	蓋物	(11.4)	[5.1]	―	―	20	普通	白	肥前系 内外面施釉 外面染付	
4	陶器	灯明皿	(11.2)	1.8	5.8	I	40	良好	灰	瀬戸美濃系 内外面柿釉・外面下位拭き取り 内面に別の製品が癒着	207-2
5	陶器	擂鉢	―	[7.8]	―	DIK	10	普通	灰	瀬戸美濃系 内外面柿釉 内面擂目	
6	瓦質土器	火鉢	―	[11.4]	―	CFHIK	10	良好	にぶい黄橙	外面施文 一部赤彩 内面上位煤付着（黒化）	207-3
7	瓦質土器	火鉢	―	[5.0]	―	CEIK	10	普通	灰白	底部ヘラナデ 外面ミガキ 燻す	
8	土師質土器	焙烙	(35.0)	5.5	(36.7)	CFGIK	25	普通	淡黄	底部シワ状痕 外面体部煤付着	
9	木製品	漆椀蓋	つまみ径 5.0 径 10.4 高さ 2.9 横木取り							内外面赤漆 つまみ・口縁端部黒漆 つまみ内紋（黒漆）	265-8
10	木製品	下駄	長さ 22.8 幅 8.6 高さ 5.1 板目							連歯下駄 表・側面赤漆	265-9
11	木製品	下駄	長さ 22.3 幅 7.3 高さ [1.8] 板目							連歯下駄 前歯に釘孔 2	
12	木製品	下駄	長さ [15.6] 幅 6.3 高さ 5.4 板目							連歯下駄 黒漆	266-1
13	木製品	鴨居	長さ 170.4 幅 12.0 厚さ 5.0 芯持材							全面炭化 木釘 1 鉄釘 2	
14	銅製品	煙管	長さ 5.3 火皿径 1.6 小口径 0.9 重さ 8.7							雁首	286-1
15	銅製品	煙管	長さ 6.1 小口径 1.3 口付径 0.4 重さ 6.5							吸口	286-1
16	銅製品	不明	長さ [2.1] 幅 5.0 厚さ 0.03 重さ 1.2							鍍金あり 一部欠失	
17	鉄製品	釘	長さ [10.5] 幅 0.5 厚さ 0.4 重さ 11.8							一部欠失	
18	鉄製品	釘	長さ 3.3 幅 0.4 厚さ 0.3 重さ 5.1								
19	鉄製品	釘	長さ 4.7 幅 0.4 厚さ 0.4 重さ 3.4							一部欠失	

る。外面はヘラナデ後にミガキが施される。

８は土師質土器の焙烙で、丸底のものである。外面の体部下位は、ケズリが施される。内底面はやや弱い回転ナデだが、中心付近は平滑にナデが施される。胎土に角閃石がやや多く含まれる在地の製品である。

第 468 図９～ 13 は木製品である。

９は漆椀の蓋である。肩部が張るもので、一文字腰椀に伴う蓋であろう。内外面に赤漆、つまみ・口縁端部に黒漆が塗布される。つまみ内には黒漆で紋が描かれる。

10 ～ 12 は連歯下駄である。10 は長方形で、表・側面に赤漆が遺存している。

11 は長楕円形のもので、前歯に補修痕と考えられる釘孔が２箇所に認められる。

12 も長楕円形のものだが、11 よりサイズが小さい。黒漆が遺存している。

13 は鴨居である。長さは 1.70 ｍで、２条の溝がみられる。木釘が１箇所、鉄釘が２箇所に遺存している。全面が炭化し、火災で焼けた建物に伴う可能性が高い。井戸跡の構築面が、確認面より上層であること、最新期の陶磁器が広東碗であることを考慮すると、文化期（1804 ～ 1818）の火災に伴うものであろうか。

第 468 図 14 ～ 19 は金属製品である。

14 は銅製の煙管の雁首である。15 は銅製の煙管の吸口である。

16 は器種不詳の銅製品である。17 ～ 19 は鉄釘である。

（３）溝跡

溝跡は５条検出された。明確に区画施設と言えるようなものがなく、溝跡の性格を掴めないものが多い。

また、第三面で検出された洪水層・樹皮堆積層（第 586 ～ 593 図）の直下から、第 24・26 号溝跡が検出された。第三面の遺構確認面より、下層のものであることに留意したい。

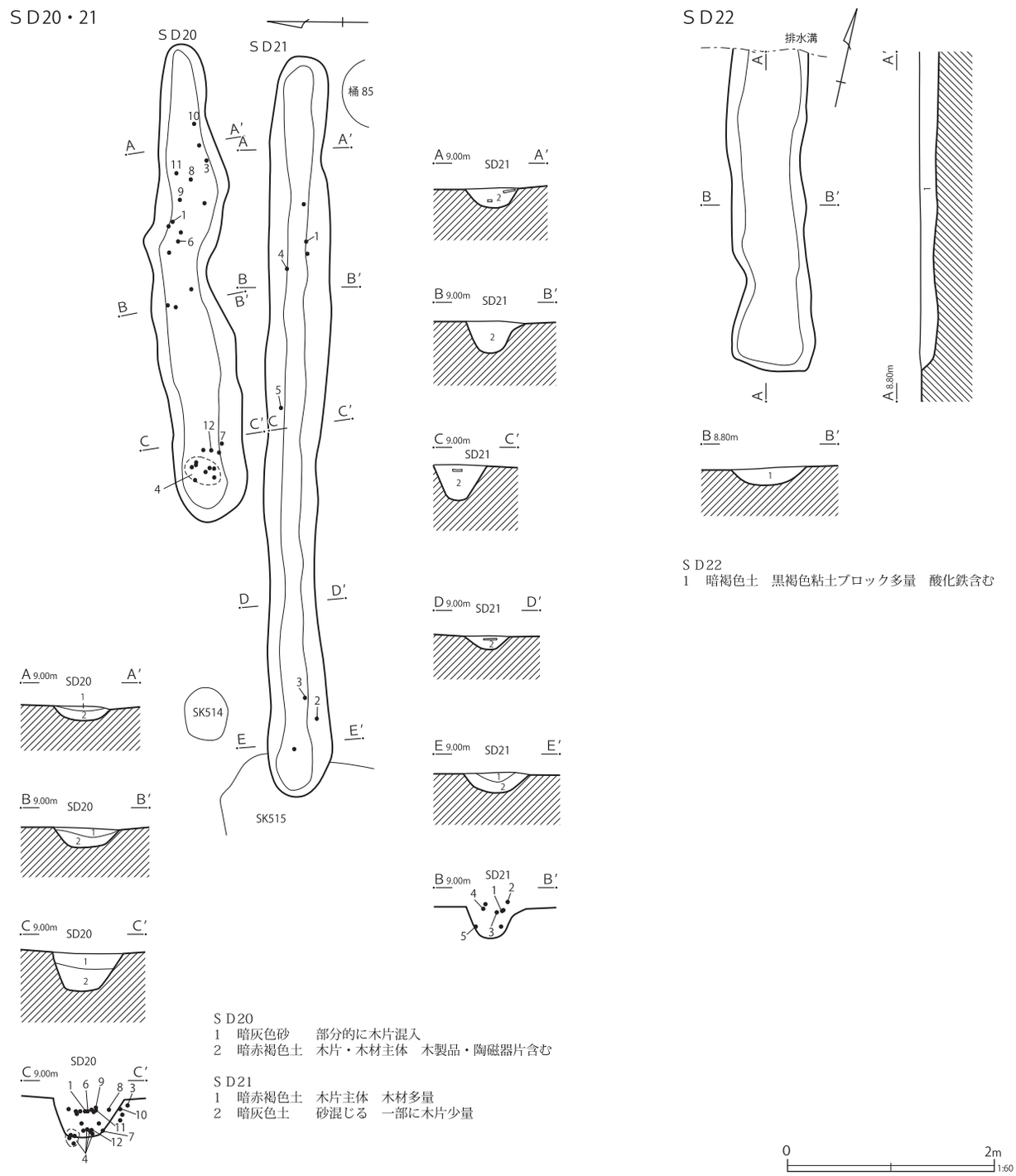
位置・規模等の基本的な情報は第 164 表に、遺構図は第 469・472・473 図に示した。

第 20 号溝跡（第 469・470 図）

Ｂ５－Ｉ６グリッドに位置し、樹皮堆積層より新しい。日光道中と直交するように、東西に短く

第 164 表　第三面溝跡一覧表　　単位：m

番号	区画	グリッド	長さ	幅	深さ	方位	備考
20	1・2	B5-I6	4.65	0.45 ～ 0.76	0.15 ～ 0.37	N-84°　-E	樹皮堆積層より新
21	1・2	B5-I6	7.18	0.44 ～ 0.64	0.13 ～ 0.35	N-90°	SK515, 樹皮堆積層より新
22	―	B5-I5	[3.12]	0.62 ～ 0.82	0.10 ～ 0.18	N-12°　-W	SD24・26, 樹皮堆積層より新
24	1・2	B5-I5,B5-J5	[5.50]	1.55 ～ 2.80	0.18 ～ 0.34	N-10°　-E	SD22, 樹皮堆積層より古
26	―	B5-I4/5	[4.50]	2.80 ～ 4.40	0.25 ～ 0.51	N-10°　-E	SD22, 樹皮堆積層より古

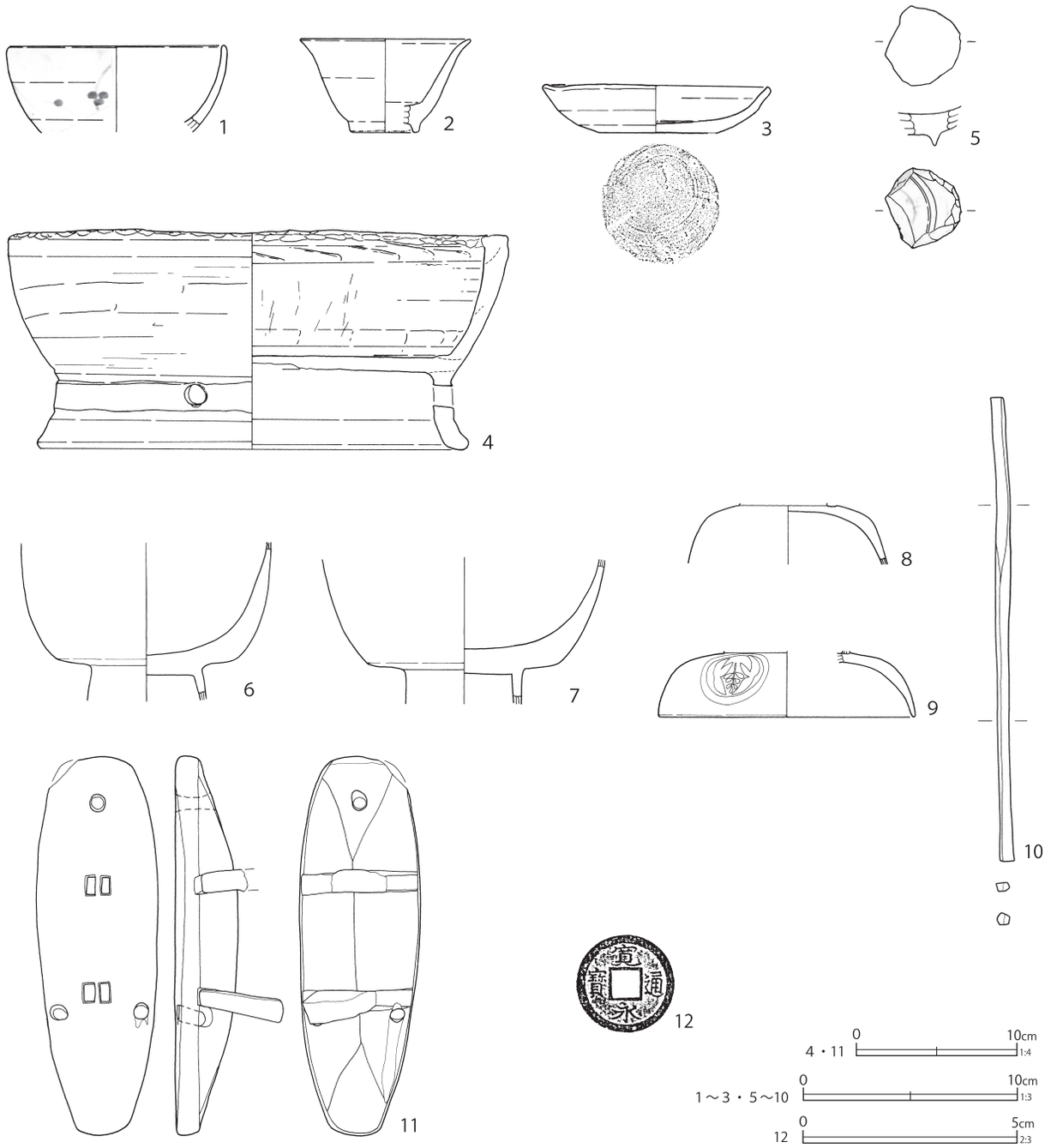


S D22
1　暗褐色土　黒褐色粘土ブロック多量　酸化鉄含む

S D20
1　暗灰色砂　　部分的に木片混入
2　暗赤褐色土　木片・木材主体　木製品・陶磁器片含む

S D21
1　暗赤褐色土　木片主体　木材多量
2　暗灰色土　　砂混じる　一部に木片少量

第 469 図　第 20 ～ 22 号溝跡

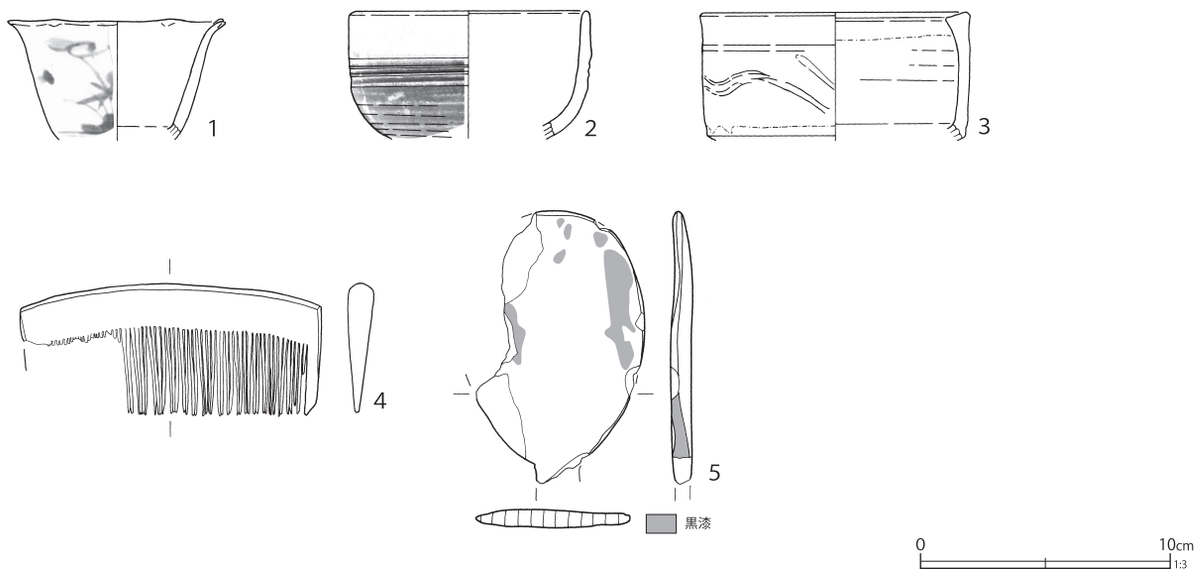


第 470 図　第 20 号溝跡出土遺物

第 165 表　第 20 号溝跡出土遺物観察表（第 470 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	磁器	碗	(9.9)	[3.9]	―	―	15	良好	白	肥前系 内外面施釉 外面染付	
2	磁器	坏	(7.8)	4.3	(3.0)	―	35	良好	白	肥前系 内外面施釉	
3	陶器	灯明皿	10.3	2.2	5.3	I	90	良好	灰	志戸呂系 底部糸切痕（右）内外面鉄釉 重ね焼き痕 煤付着	207-4
4	瓦質土器	火鉢	(31.1)	13.3	(26.4)	CHIK	75	良好	灰白 灰	底部砂目・シワ状痕 脚孔 3 口縁部煤付着・二次敲打痕 内面僅かに火箸状痕	207-5
5	磁器	碗	―	[1.7]	―	―	5	普通	白	肥前系 内外面施釉 外面染付 二次敲打（底部円盤状製品転用）重さ 16.2g	239-1

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
6	木製品	漆椀	高さ［7.3］横木取り							内外面赤漆 内面被熱	
7	木製品	漆椀	高さ［6.7］横木取り							内外面赤漆	
8	木製品	漆椀蓋	高さ［2.8］横木取り							内外面赤漆	
9	木製品	漆椀蓋	口径（11.3）高さ［3.1］横木取り							内面赤漆 外面黒漆 外面紋（色落ち）	
10	木製品	箸	長さ 21.5 幅 0.7 厚さ 0.5 分割棒状								
11	木製品	下駄	長さ 23.6 幅 7.6 高さ［6.7］板目							露卯下駄	266-2
12	銅製品	銭貨	径 23.2 厚さ 1.1 重さ 2.4							寛永通寳（新）	



第 471 図　第 21 号溝跡出土遺物

第 166 表　第 21 号溝跡出土遺物観察表（第 471 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	磁器	坏	(8.6)	［4.8］	―	―	10	良好	白	肥前系 内外面施釉 外面染付 少量煤付着	207-6
2	陶器	碗	(9.2)	［5.1］	―	I	30	良好	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉 外面鉄釉掛け分け（腰錆碗）	
3	陶器	香炉	(10.4)	［5.1］	―	I	20	普通	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉 鎬状施文	208-1
4	木製品	櫛	長さ 12.0 幅 5.2 厚さ 1.0 板目								266-3
5	木製品	杓子	長さ［10.9］幅［6.7］厚さ 0.8 板目							表裏面黒漆	266-4

延びていた。走行方位はN－84°－Eである。

検出された長さは 4.65 m、幅 0.45 ～ 0.76 m、深さ 0.15 ～ 0.37 mで、東から西へ低く傾斜していた。第 21 号溝跡とは隣接し、平行していた。

平面形はやや歪であった。遺物は、下層の木片・木材を主体とする腐植土層中から出土した。上層は砂であった。

出土遺物は少なく、陶磁器、土器、瓦、金属製品、木製品がみられる。陶磁器に肥前系磁器の雪輪草花文碗や、瀬戸美濃系陶器のせんじ碗がみられるため、廃絶時期は 18 世紀中葉頃であろう。

第 470 図に出土遺物を示した。１～５までは陶磁器・土器である。

１は肥前系磁器の丸碗で、粗製のものである。外面に雪輪草花文が染付されるものらしい。

２は肥前系磁器の端反になる坏で、厚手のものである。遺存部分に染付は見られない。

３は志戸呂系陶器の灯明皿（油皿）で、内面には径 4.3 ㎝の環状重ね焼き痕がある。重ね焼き痕の中は暗色で色調が周囲と異なる。外面は底部外周に重ね焼き痕が認められ、径は底径とほぼ同じか、僅かに大きい。底部は右回転の糸切痕の

他に、別の痕跡も認められる（拓本参照）。一見、離し糸切痕のようにもみえるが、何の痕跡であるかはっきりしない。体部にケズリ痕は認められず、ナデ調整で仕上げる。口縁部に煤の付着があり、使用痕とみられる。

４は瓦質土器の火鉢で、輪高台状の脚を有す。胎土は黄色味を帯びた灰白色で、断面中心は暗色（灰色）になる。赤色粒子が多く含まれ、角閃石も含まれる。脚部の穿孔は３箇所で、等間隔である。口縁部は、使用による敲打痕が多い。内面の口縁部直下は明瞭な斜方向のヘラナデ痕が連続する。内面の中位～下位に、火箸痕が少しみられる。内底面は外周の狭い範囲のみ回転ナデ、他は平滑にヘラナデされる。体部外面はヘラナデ後ナデ調整で、明確な文様や沈線はみられない。

５は肥前系磁器の粗製碗である。底部を打ち欠き、円盤状製品に転用している。

６～11までは木製品である。６・７は腰が張り、直立気味に開く漆椀で、７は一文字腰椀である。６も同様のものと思われる。ともに、内外面に赤漆が塗布され、６は内面に被熱の痕跡が認められる。

８・９は漆椀の蓋で、肩部が丸くやや張るものである。８は内外面に赤漆が塗布されている。

９は腰丸椀の蓋と思われ、内面に赤漆、外面に黒漆が塗布される。外面に色落ちした「抱き沢瀉」の紋が描かれる。

10は寸胴箸、11は露卯下駄である。

12は寛永通寶である。

第21号溝跡（第469・471図）

Ｂ５－Ｉ６グリッドに位置し、第515号土壙・樹皮堆積層より新しい。日光道中と直交するように、東西方向に短く延びていた。走行方位はN－90°である。

検出された長さは7.18ｍ、幅0.44～0.64ｍ、深さ0.13～0.35ｍで、東から西へ低く傾斜していた。第20号溝跡とは隣接し、平行していた。

覆土は下層に砂混じりのシルト、上層に木片・木材を主体とした腐植土層がみられた。

遺物は少ないが、上層から陶磁器、木製品、骨類が出土した。陶磁器には、肥前系磁器の粗製碗や瀬戸美濃系陶器のせんじ碗がみられるため、廃絶時期は18世紀中葉頃であろう。

第471図に出土遺物を示した。

１は肥前系磁器の端反になる坏で、外面に草花文が染付される。口縁部の数か所に抉りを入れ、輪花状に整えるものらしい。一部に煤が付着しており、被熱している可能性がある。

２は瀬戸美濃系陶器の腰錆碗である。厚手で丸みの強いのものである。外面の体部下位の鉄釉は光沢が強い。

３は瀬戸美濃系陶器の香炉で、黄色味の強い灰釉が施される。このタイプは半菊文の鎬を陰刻するものが多いが、本例は緩い蛇行沈線を体部中位に廻らしている。

４は木製品の櫛である。歯は細く、密である。

５は木製品の杓子で、黒漆が遺存している。

第22号溝跡（第469図）

Ｂ５－Ｉ５グリッドに位置し、第24・26号溝跡、樹皮堆積層より新しい。南北方向に延び、北部は調査区域外であった。走行方位はN－12°－Wである。

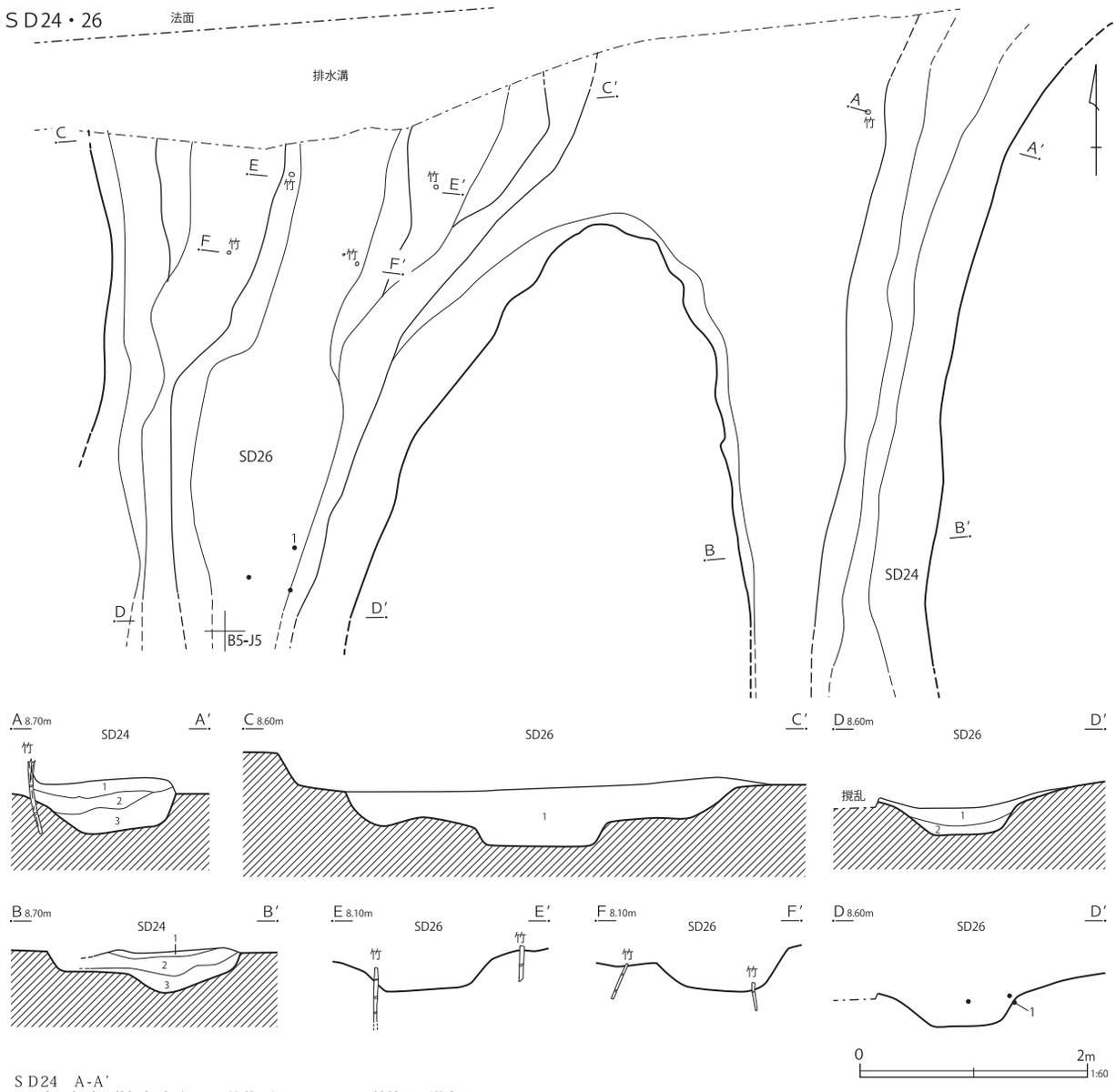
検出された長さは3.12ｍ以上、幅0.62～0.82ｍ、深さ0.1～0.18ｍで、南部から北部へ低く傾斜していた。平面形は長方形を呈し、側縁は部分的に蛇行していた。

覆土は、暗褐色シルトの単層で、黒褐色粘土ブロックが多量に含まれていた。遺構底面には酸化鉄が著しく沈着していた。

出土遺物はないが、重複関係から遺構の時期は18世紀中葉以降である。

第24・26号溝跡（第472図）

Ｂ５－Ｉ４・５、Ｂ５－Ｊ５グリッドに位置する。樹皮堆積層及び洪水層の直下から検出された



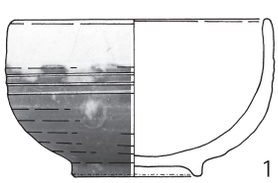
SD24　A-A'
1　青灰色砂　黄褐色砂ブロック筋状に混入　しまり・粘性弱　洪水層
2　青灰色砂　黒色粘土ブロック少量　しまり・粘性弱　洪水層
3　青灰色砂　黒色粘土ブロック多量　しまり・粘性弱　洪水層

SD24　B-B'
1　灰色粘土　炭化物少量　しまり強　粘性弱　洪水層
2　黄褐色砂　しまり強　粘性弱　洪水層
3　青灰色砂　しまり・粘性弱　洪水層

SD26　C-C'
1　青灰色砂　小礫混入　しまり強　粘性弱　水分を含むともろい　洪水層

SD26　D-D'
1　灰色粘土　炭化物少量　しまり・粘性強
2　青灰色砂　灰色シルトブロック少量　しまり強　粘性弱

SD26

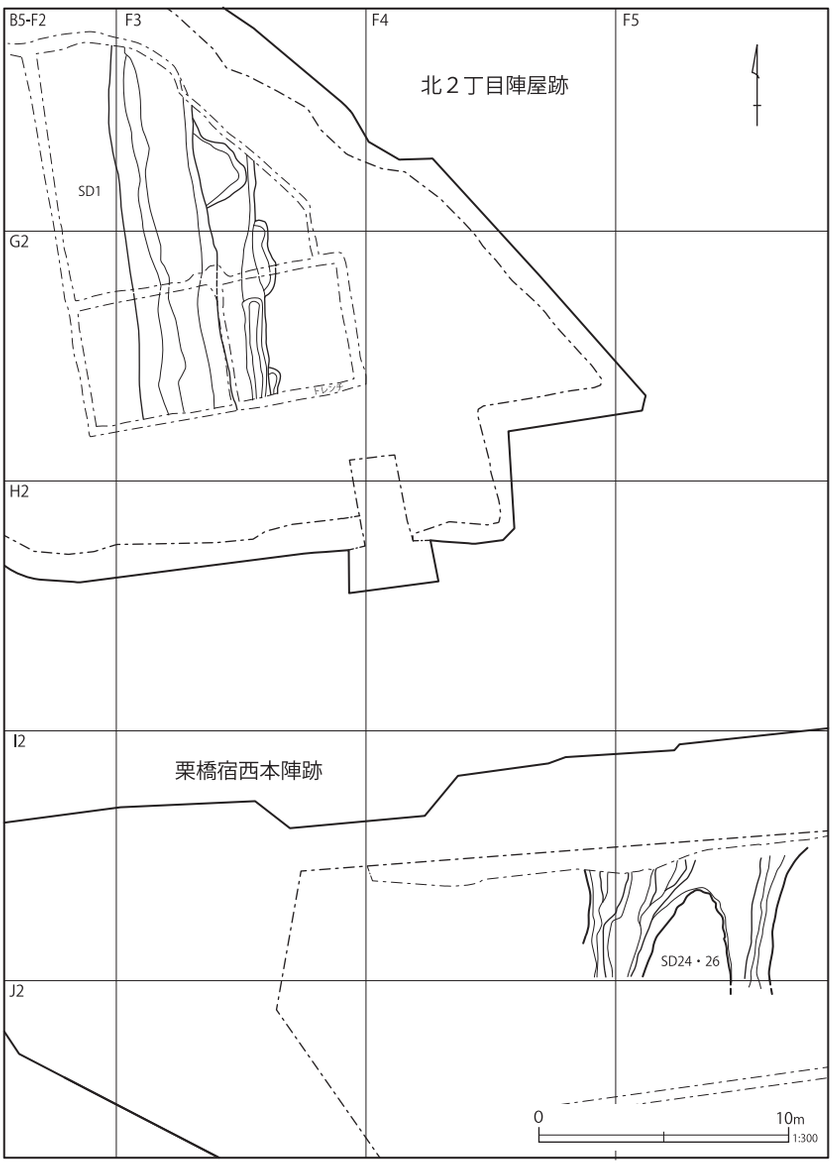


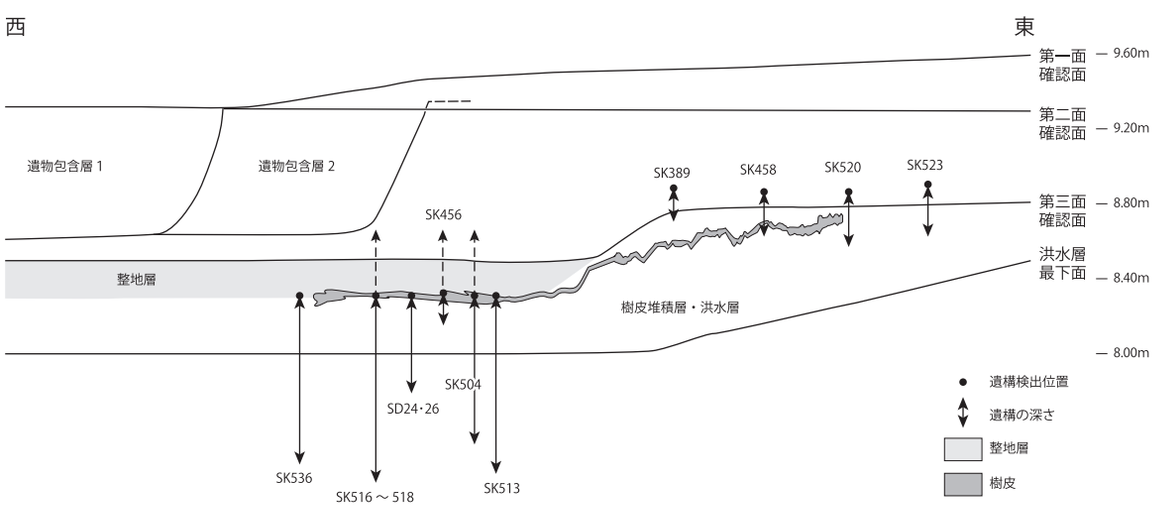
0　10cm　1:3

第472図　第24・26号溝跡・出土遺物

第167表　第26号溝跡出土遺物観察表（第472図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	陶器	碗	10.0	6.3	5.0	IK	90	普通	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉 外面鉄釉掛け分け（腰錆碗）	208-2





第 473 図　北２丁目陣屋跡・西本陣跡検出溝跡の位置及び遺構検出標高模式図

ものである。調査区を南北に横断し、北側は調査区域外へ延びていた。重複する第22号溝跡より古い。走行方位はN－10°－Eである。

検出された規模は、長さ5.50m以上、幅1.55～2.80m、深さ0.18～0.34m（第24号溝跡）、長さ4.50m以上、幅2.80～4.40m、深さ0.25～0.51m（第26号溝跡）である。

第24号溝跡の北部に１本、第26号溝跡の北部に５本の竹がみられ、いずれも地山に垂直に突き刺さっていた。上層の樹皮堆積層にみられた、竹を組んだ構築物に伴うものと考えられる。

覆土は全体が砂層であり、洪水で埋まったものと考えられる。

北部に隣接する北２丁目陣屋跡の第二面では、洪水により形成された自然流路跡が検出されている。流路跡の下層に堆積している砂は、宝暦七年（1757）五月におきた洪水による二次的な堆積と推測されている。また、寛保二年（1742）八月の洪水によって形成された可能性があるとしている（埼埋文2021a）。

本跡は、洪水砂が堆積していること、底面の深さが同等以下であること等、北２丁目陣屋跡で検出された流路跡と類似する。

第473図には、北２丁目陣屋跡で検出された流路跡との位置関係を示した。流路跡とは、直線上には繋がらないが、一度の洪水で複数の「流路」が形成された可能性を鑑みれば、同一時期である可能性は考えられよう。

本跡直上を覆っていた樹皮堆積層は、出土している陶磁器の様相から、18世紀中葉頃の洪水で押し流されたものと考えられる。また、本跡からの遺物の出土は極めて少ないが、後述する腰錆碗１点が認められた。器形から、18世紀前～中葉頃のものであろう。

したがって、本溝跡は寛保二年（1742）の洪水で形成された自然の流路跡である可能性は、十分に考えられる。

第472図１に第26号溝跡から出土した瀬戸美濃系陶器の腰錆碗を示した。遺物はこのほかに、木製品が２点出土したのみである。

（４）土壙

土壙は、46基検出された。第二面と比べて、土壙の重複が少なく、遺構数も少ない。第三面では、第一・二面で検出された遺物包含層（池沼湿地跡の造成土）の下に土壙が広がっていた。

18世紀中～後葉以前には、敷地裏手の奥まった範囲でも土地利用が行われていたと考えられる。第473図には遺物包含層と、第三面で検出された土壙、樹皮堆積層（洪水層）の検出標高を模式図で示した。

樹皮堆積層を掘削した後に、第504・516～518号土壙が検出されているが、第517号土壙の覆土に、天明三年（1783）に降灰した浅間Ａ火山灰が認められる。

そのため、本来の構築面は樹皮堆積層より上位と考えられる。また、周辺の第504・516・518号土壙等はお互いを避けるように、南北に並ぶ配置で構築されており、これらの土壙は第517号土壙と構築面が同一のほぼ同じ時期の遺構である可能性が高い。

位置・規模等の基本的な情報は第168表に示した。遺構図は、第一・二面と同様に、第474・475・484～487・504・505・514・515・546・556・562・563図に抽出した土壙、第568～573図にその他の土壙を一括して示した。

また、抽出した土壙の遺物図は、第476～483・488～503・506～513・516～545・547～555・557～561・564～567図に遺構ごとに掲載し、その他の土壙出土遺物は第574～585図に種別ごとに一括して掲載した。

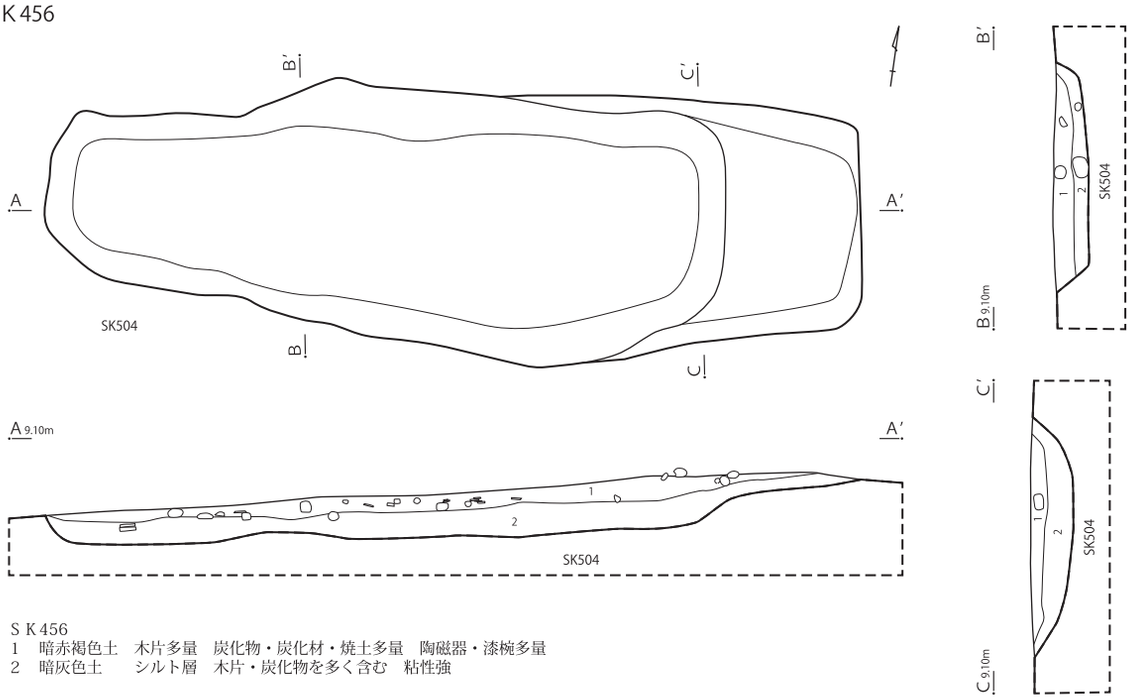
第456号土壙（第474～483図）

Ｂ５－Ｊ５グリッドに位置し、第504号土壙より新しい。平面形は隅丸長方形である。第504号土壙の覆土中に掘り込まれていたが、焼土・炭

第 168 表　第三面土壙一覧表　　単位：m

番号	区画	グリッド	形態	長軸	短軸	深さ	方位	備考
361	3	B5-J7	楕円形	1.40	0.74	0.20	N-75°　-E	SK457･458 より新
383	3	B5-J6	隅丸長方形	2.15	0.90	0.45	N-75°　-E	樹皮堆積層より新
384	3	B5-J7	円形	0.82	0.73	0.25	N-5°　-W	
385	1･2	B5-I6,J6	隅丸長方形	1.29	0.45	0.21	N-15°　-W	樹皮堆積層より新
386	1･2	B5-I6	楕円形	0.47	0.41	0.25	N-34°　-E	樹皮堆積層より新
387	1･2	B5-I6,J6	楕円形	1.17	0.66	0.19	N-9°　-W	SE20, 樹皮堆積層より新
388	3	B5-J6	隅丸長方形	2.00	1.12	0.16	N-85°　-E	
389	3	B5-J6	隅丸長方形	2.18	1.08	0.35	N-90°	
390	3	B5-J6	隅丸長方形	2.40	0.90	0.21	N-5°　-W	
421	3	B5-J6	隅丸長方形	1.17	0.90	0.22	N-8°　-W	
422	3	B5-J6	楕円形	1.00	(0.76)	0.14	N-21°　-E	SE21 より新
423	3	B5-J6	楕円形	(0.76)	0.62	0.24	N-43°　-W	
424	1･2	B5-I6	楕円形	0.54	0.39	0.25	N-2°　-E	樹皮堆積層より新
425	3	B5-J7	楕円形	1.53	0.61	0.11	N-0°	
430	3	B5-J6	楕円形	0.62	0.49	0.08	N-69°　-E	
431	3	B5-J7	隅丸長方形	0.85	0.41	0.11	N-0°	
437	1･2	B5-I5	楕円形	0.70	0.55	0.06	N-56°　-E	樹皮堆積層より新
438	1･2	B5-I5	隅丸方形	0.60	0.55	0.06	N-32°　-W	樹皮堆積層より新
450	3	B5-J6	隅丸長方形	0.72	0.55	0.13	N-75°　-E	
456	1･2	B5-J5	隅丸長方形	6.55	2.11	0.43	N-85°　-E	SK504 より新
457	3	B5-J7	隅丸長方形	1.15	0.50	0.35	N-78°　-E	SK361 より古 SK458 と重複
458	3	B5-J7	円形	1.64	1.52	0.31	N-40°　-E	SK361 より古 SK457 と重複
496	1･2	B5-I6/7	楕円形	0.86	0.55	0.37	N-84°　-E	SE20 より古 樹皮堆積層より新
502	1･2	B5-J6	円形	0.67	0.65	0.17	N-90°	樹皮堆積層より新
504	1･2	B5-I5,J4/5/6	隅丸長方形	13.08	(4.65)	1.10	N-80°　-E	SK456 より古 樹皮堆積層より新 SE17･SK515 と重複
507	3	B5-J7	隅丸方形	1.20	1.15	0.20	N-79°　-W	SK537 より新
508	3	B5-J6	楕円形	1.60	[0.90]	0.17	N-8°　-W	SE11（二面）より古
509	3	B5-J7	楕円形	0.36	0.24	0.13	N-0°	
510	3	B5-J7	楕円形	0.65	0.47	0.20	N-5°　-W	SK525･537 より新
513	3	B5-J5	不整形	4.00	2.25	1.35	N-83°　-E	SE13 より古 SK528 と重複
514	1･2	B5-I6	楕円形	0.55	0.45	0.22	N-84°　-E	樹皮堆積層より新
515	1･2	B5-I5/6,J5/6	隅丸長方形	2.95	1.45	0.85	N-15°　-E	SD21 より古 樹皮堆積層より新 SK504 と重複
516	―	B5-J4/5	隅丸長方形	4.65	3.85	1.08	N-85°　-E	SK518 より古
517	―	B5-J4/5,C5-A4/5	隅丸方形	4.85	4.80	0.92	N-90°	
518	―	B5-J4/5	隅丸長方形	4.67	2.40	0.85	N-82°　-E	SK516 より新
519	3	B5-J7	隅丸長方形	0.90	0.50	0.14	N-78°　-E	
520	3	B5-J7	不整形	2.30	1.25	0.28	N-78°　-E	
521	―	B5-I4	隅丸長方形	1.50	[0.75]	0.35	N-82°　-E	樹皮堆積層より新
522	―	B5-I4	隅丸長方形	1.20	0.90	0.18	N-7°　-W	樹皮堆積層より新
523	3	B5-J7/8	隅丸長方形	2.50	1.10	0.25	N-28°　-W	
525	3	B5-J7	楕円形	1.05	0.90	0.27	N-76°　-E	SK510･537 より古
526	3	B5-J7	円形	0.80	0.77	0.35	N-60°　-E	SK537 より古
528	3	B5-J5/6	不明	[1.77]	[1.00]	0.35	N-14°　-W	SK513 と重複
529	3	B5-J5	長楕円形	[2.45]	0.43	0.20	N-0°	
536	―	B5-J4,C5-A4	不明	[5.43]	[2.37]	0.80	N-0°	
537	3	B5-J7	不明	[5.90]	[4.70]	0.38	N-82°　-E	SE18,SK507･510･524 より古 SK525･526 より新 SK523 と重複

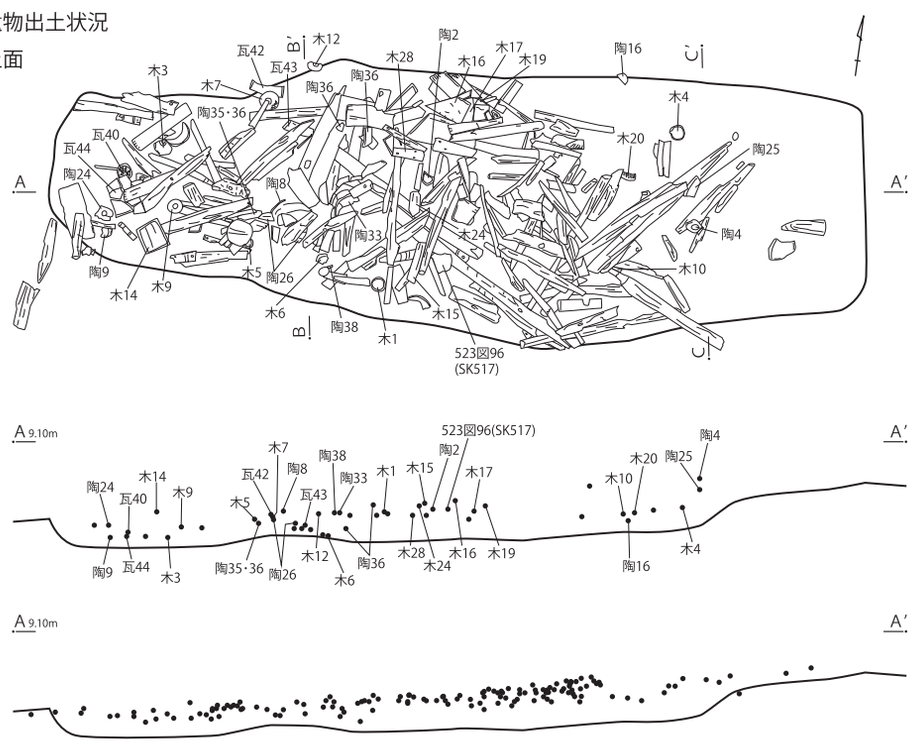
ＳＫ456



ＳＫ456
1　暗赤褐色土　木片多量　炭化物・炭化材・焼土多量　陶磁器・漆椀多量
2　暗灰色土　　シルト層　木片・炭化物を多く含む　粘性強

遺物出土状況

上面

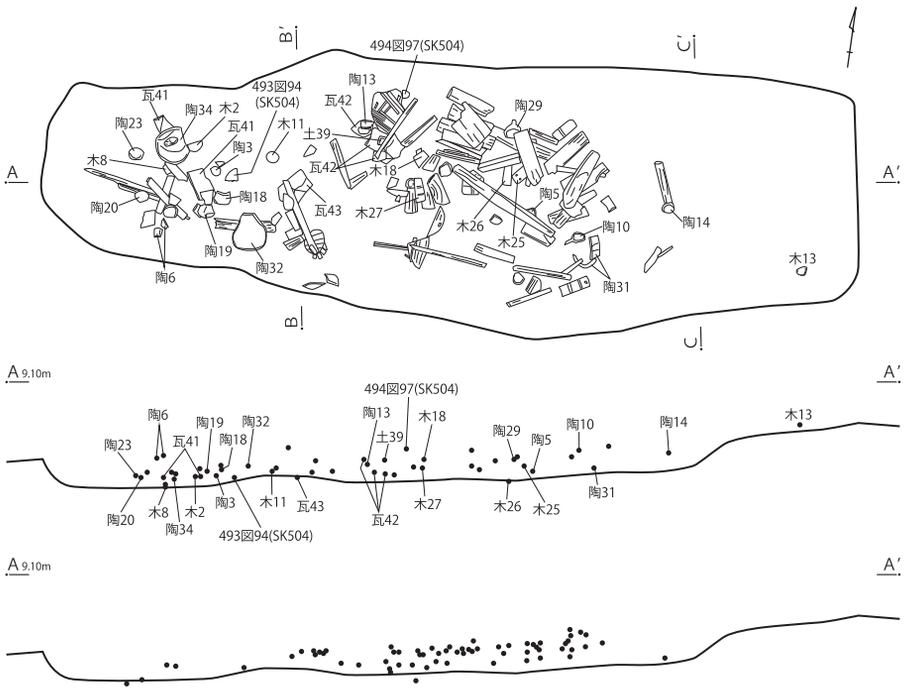


0　2m
1:60

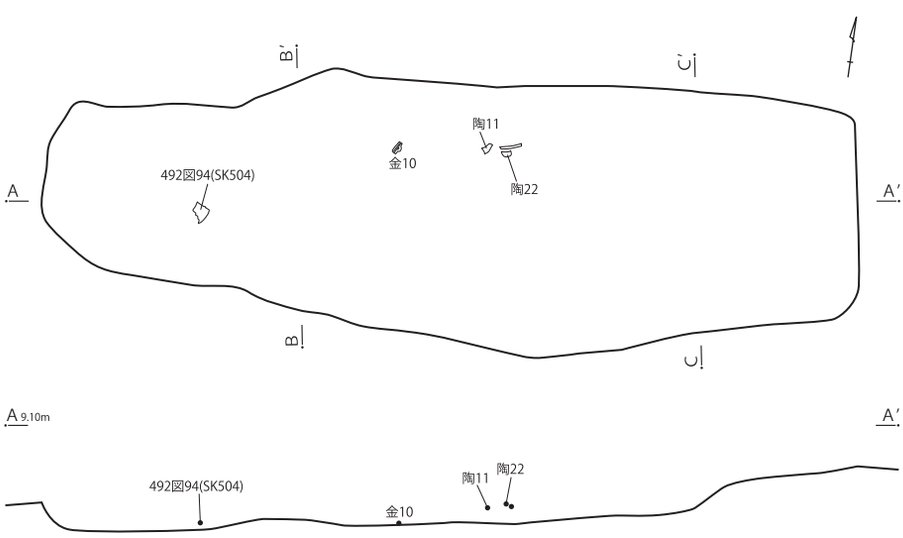
第 474 図　第 456 号土壙（1）

遺物出土状況

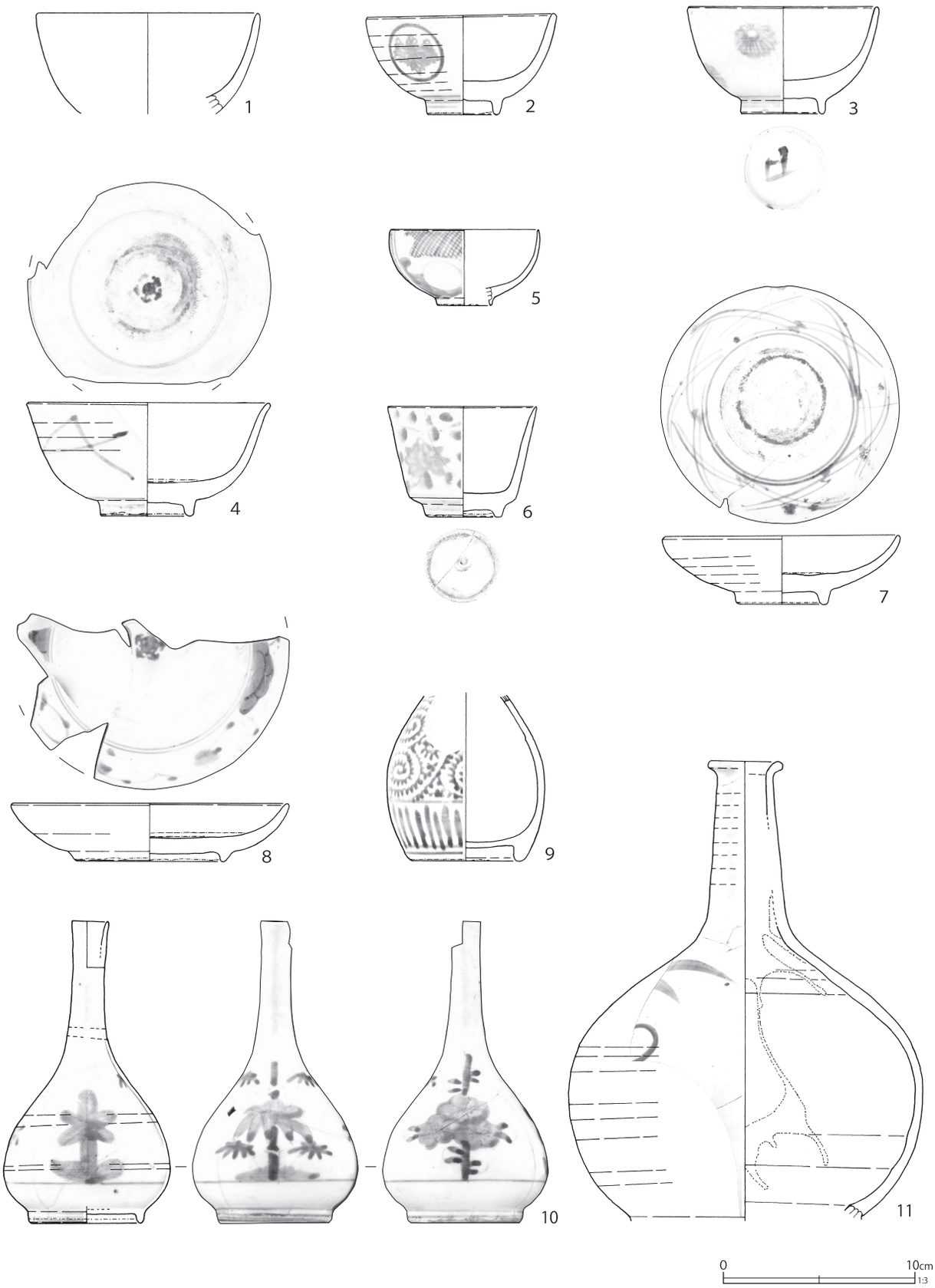
中面



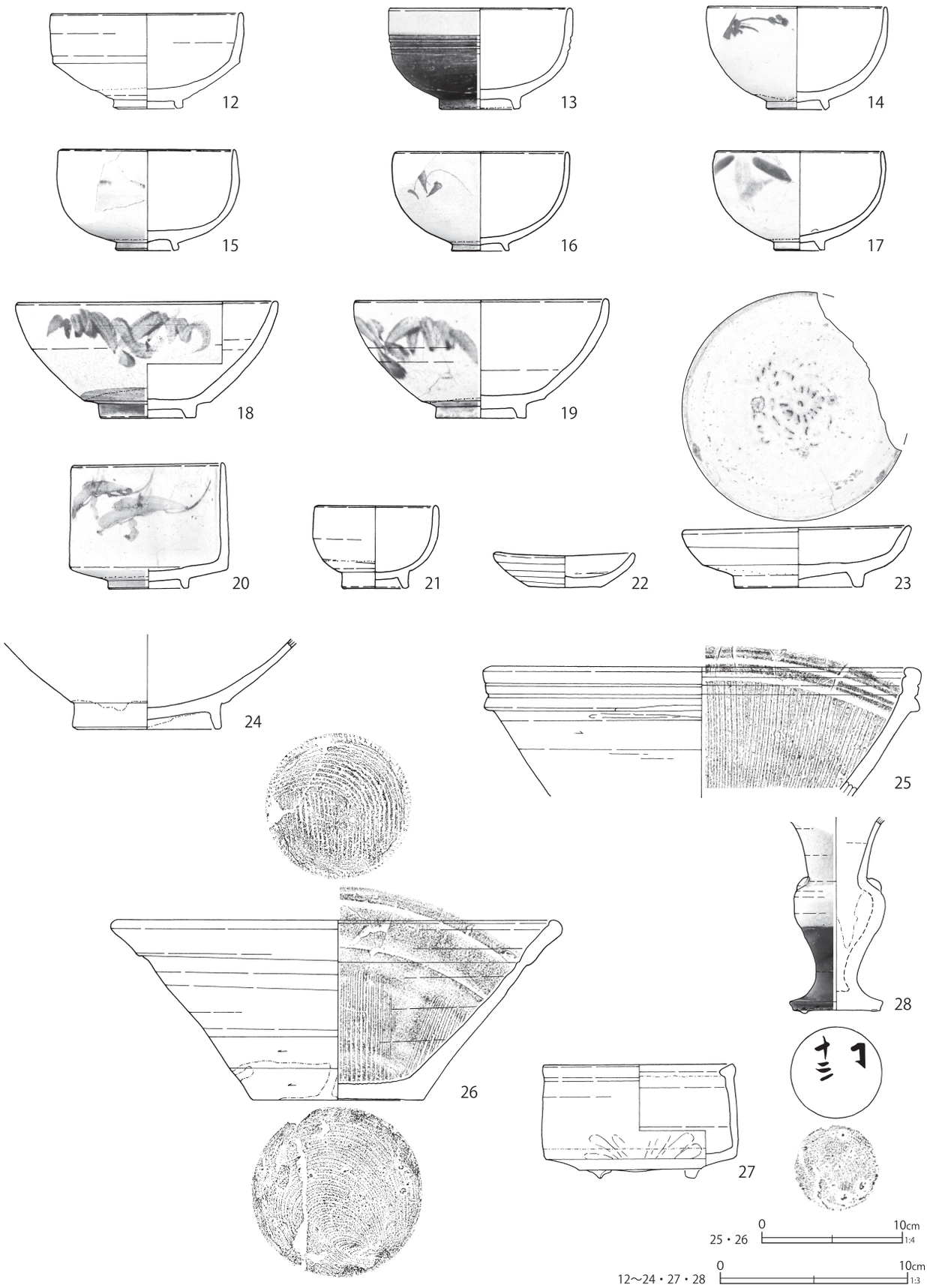
下面



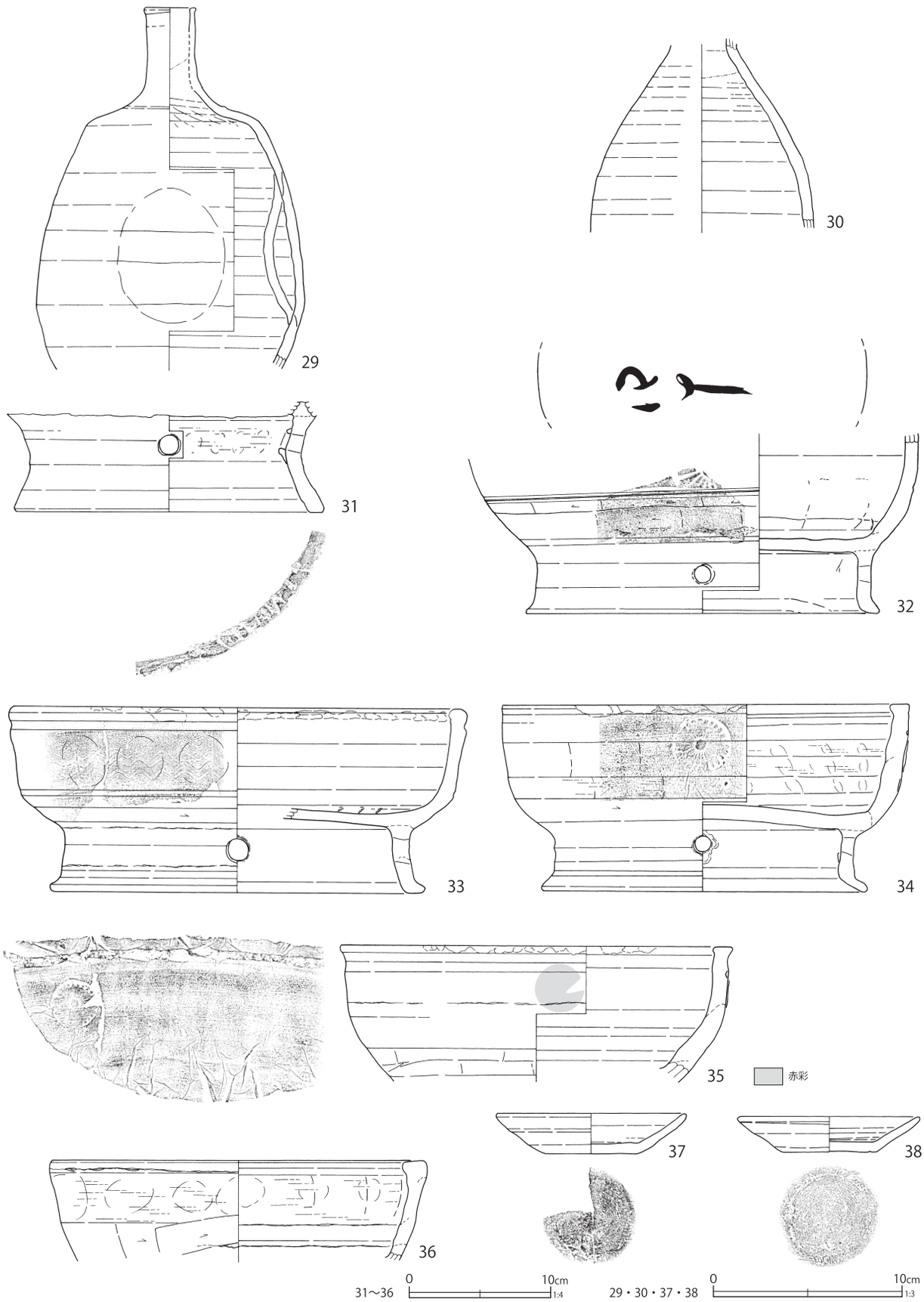
第 475 図　第 456 号土壙（2）



第 476 図　第 456 号土壙出土遺物（1）



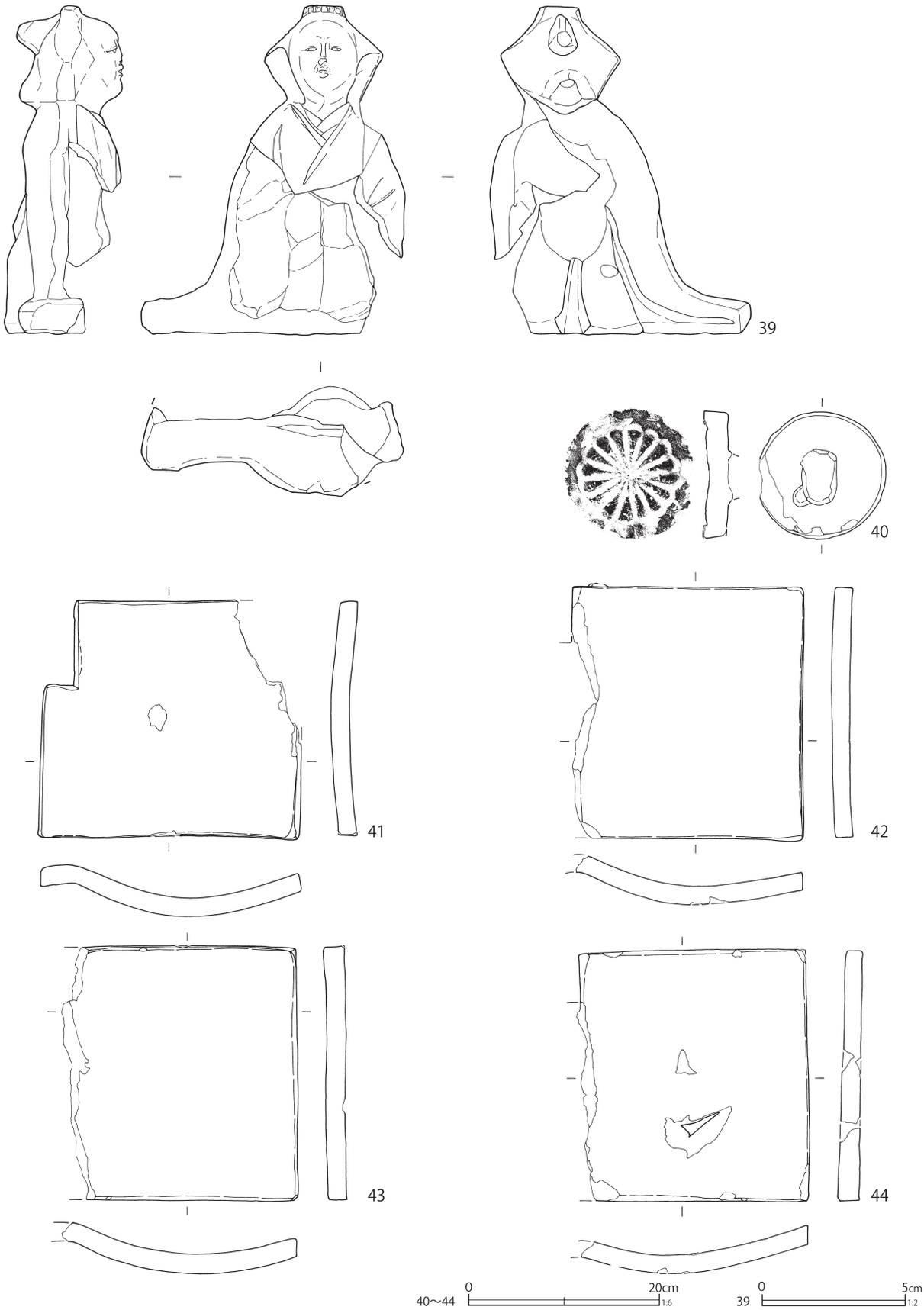
第 477 図　第 456 号土壙出土遺物（2）



第 478 図　第 456 号土壙出土遺物（3）

第 169 表　第 456 号土壙出土遺物観察表（１）（第 476 ～ 478 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	磁器	碗	(11.4)	[5.2]	－	－	10	良好	白	肥前系 内外面青磁釉 僅かに煤付着	
2	磁器	碗	9.7	5.2	3.5	－	75	普通	白	肥前系 内外面施釉 外面染付	209-3
3	磁器	碗	(9.7)	5.5	4.2	－	60	普通	白	肥前系 内外面施釉 外面染付 少量煤付着	
4	磁器	碗	12.4	5.9	4.6	－	80	普通	白	肥前系 内外面施釉 内面蛇の目状釉剥ぎ 煤付着	
5	磁器	碗	(7.6)	[3.9]	(2.8)	－	35	良好	白	肥前系 内外面施釉 外面染付	
6	磁器	猪口	7.5	5.7	3.7	－	85	普通	白	肥前系 内外面施釉 外面染付 高台内砂付着	209-4
7	磁器	皿	12.0	3.6	4.3	－	95	良好	白	肥前系 内外面施釉 内面染付・蛇の目状釉剥ぎ 僅かに煤付着	209-5
8	磁器	皿	(14.2)	3.0	7.5	－	50	良好	白	肥前系 内外面施釉 内面染付・蛇の目状釉剥ぎ	
9	磁器	徳利	－	[8.6]	(5.4)	－	30	良好	白	肥前系 外面施釉 染付	
10	磁器	徳利	1.8	15.7	5.5	－	95	良好	白	肥前系 内外面施釉 外面染付	209-6
11	磁器	徳利	(3.7)	[23.7]	－	－	20	良好	白	肥前系 内面上位～外面施釉 外面染付	
12	陶器	碗	(10.0)	5.0	3.0	IK	30	良好	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉（せんじ碗）	
13	陶器	碗	(9.4)	5.3	4.0	IK	65	良好	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉 外面鉄釉掛け分け（腰錆碗）	209-7
14	陶器	碗	(9.3)	5.4	2.9	IK	55	良好	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉 外面鉄絵	210-1
15	陶器	碗	(9.1)	5.1	2.8	K	60	良好	灰白	京都信楽系 内外面透明釉 外面鉄絵	
16	陶器	碗	(9.0)	5.2	(3.0)	K	50	良好	灰白	京都信楽系 内外面透明釉 外面鉄絵	
17	陶器	碗	(8.7)	5.2	2.6	IK	40	良好	灰白	京都信楽系 内外面透明釉 外面上絵付（緑・赤）	
18	陶器	碗	(13.6)	6.1	5.0	IK	60	良好	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉 外面呉須絵	210-2
19	陶器	碗	(13.3)	6.2	4.7	IK	70	良好	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉 外面呉須絵	
20	陶器	碗	(7.8)	6.5	4.1	HI	85	普通	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉 外面鉄絵（筒形碗）	210-3
21	陶器	坏	(6.2)	4.3	3.3	K	35	良好	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉	
22	陶器	灯明皿	7.2	1.8	3.7	I	100	普通	にぶい黄橙	瀬戸美濃系 内外面柿釉 外面下位拭き取り 内外面直重ね焼き痕	
23	陶器	皿	11.9	3.2	6.7	EIK	85	普通	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉 外面摺絵	210-4
24	陶器	鉢	－	[4.7]	7.5	DK	35	普通	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉 底部被熱・黒化	
25	陶器	擂鉢	(30.0)	[9.2]	－	DEI	15	普通	明赤褐	堺明石系 内面擂目 外面煤付着	
26	陶器	擂鉢	31.0	12.8	12.2	I	80	普通	灰白	瀬戸美濃系 底部糸切痕（右） 内外面柿釉 下位拭き取り 体部中位煤付着	210-5
27	陶器	香炉	(10.0)	6.0	(6.5)	DIK	30	普通	灰白	瀬戸美濃系 口縁部～外面灰釉 外面鎬状施文	
28	陶器	花生	－	[10.4]	4.6	D	80	普通	褐灰	瀬戸美濃系 底部糸切痕（右）・墨書「□／十三」内外面灰釉 外面鉄釉掛け分け	210-6 238-3
29	陶器	徳利	2.4	[19.0]	－	I	45	良好	褐灰	瀬戸美濃系 外面柿釉 体部窪む	
30	陶器	徳利	－	[9.7]	－	IK	25	良好	灰白	瀬戸美濃系 外面鉄釉	210-7
31	瓦質土器	火鉢	－	[7.8]	21.6	CFHI	20	普通	褐灰	脚部 高台畳付二次的な摩耗・削痕あり	211-1
32	瓦質土器	火鉢	－	[12.7]	24.7	CHI	40	普通	灰黄	底部シワ状痕 菊花文スタンプ やや酸化炎焼成 内底面墨書「四十」外面墨痕ヵ	211-2 238-4
33	瓦質土器	火鉢	31.6	12.7	26.0	CFHIK	35	普通	にぶい黄橙	砂目底 外面櫛歯波状文 やや酸化炎焼成 口縁部二次敲打痕・煤付着	
34	瓦質土器	火鉢	28.9	13.2	22.6	CIK	70	普通	浅黄橙	砂目底 外面上位・下位黒色塗布物・菊花文スタンプ（赤彩） やや酸化炎焼成 口縁部二次敲打	211-3
35	瓦質土器	火鉢	(27.1)	[9.2]	－	CHIK	20	普通	浅黄橙	外面菊花文スタンプ（赤彩） やや酸化炎焼成 内面上位煤付着 口縁部二次敲打	
36	瓦質土器	火鉢	(26.1)	[7.0]	－	CHI	20	普通	浅黄橙	やや酸化炎焼成 内面煤付着	
37	かわらけ	小皿	(9.8)	2.1	4.8	ACEHIK	45	普通	橙	江戸在地系 底部糸切痕（左） 被熱 一部黒化	
38	かわらけ	小皿	(9.4)	1.8	4.8	AI	70	普通	にぶい黄橙	江戸在地系 底部糸切痕（左） 胎土粉質 内外面薄く煤付着	



第 479 図　第 456 号土壙出土遺物（4）

第 170 表　第 456 号土壙出土遺物観察表（２）（第 479 図）

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	高さ	径	胎土	焼成	色調	備考	図版
39	土製品	人形	幅 7.8 高さ 11.5 重さ 74.6					AKG	普通	橙	江戸在地系 姉様 前後合二枚型成形 中空	242-2
40	瓦	棟込瓦	―	13.7	2.6	[13.5]	13.7	AIK	普通	灰白	菊丸瓦	248-3
41	瓦	桟瓦	25.4	[27.9]	2.0	5.5	―	ACIK	普通	灰白	煤付着（少）	248-4
42	瓦	桟瓦	26.5	[24.6]	1.9	[5.1]	―	AIK	普通	灰白	凹・側面銀化 煤付着（少）	
43	瓦	桟瓦	27.1	[25.1]	2.2	5.4	―	AIK	普通	灰白	凹・側面銀化 煤付着（少）	
44	瓦	桟瓦	26.5	[24.7]	2.3	5.2	―	AIK	普通	灰白	凹・側面銀化 煤付着（少）	

化物を中心とした覆土で、様相が明確に異なっていた。そのため、第 504 号土壙の覆土の一部ではなく、覆土中に掘り込まれた後世の土壙と判断した。

第２層は、炭化物、木片を多量に含むシルトで、第１層は炭化物や炭化材を多量に含んだ焼土が主体であった。遺物は、ほとんどが上層から出土した。

出土遺物は多く、炭化材や木製品を中心に、陶磁器、瓦、土製品、金属製品、石製品、骨類が出土した。なお、覆土の状況や炭化材が含まれることから火災処理土壙と思われるが、明確な被熱痕跡が認められる遺物は少ない。

陶磁器は、肥前系磁器の粗製碗、瀬戸美濃系陶器のせんじ碗等、18 世紀中葉までのものが主体で、一見すると第 504 号土壙より古い様相である。

最新の陶磁器は、外面青磁釉の厚手の丸碗（非掲載）、瀬戸美濃系陶器の筒形碗（第 477 図 20）である。推定廃絶時期は 18 世紀第Ⅲ四半期と考えられる。下層の第 504 号土壙とは、ほとんど時期差がない。

第 476 ～ 483 図に出土遺物を示した。

第 476 図１～ 11 までは肥前系磁器で、このうち１～５は碗である。

２はやや小形の粗製碗で、外面の３箇所に、コンニャク印判で「（○に）桐文」が染付される。３も粗製碗で、外面にコンニャク印判の菊文が散らすように染付される。

４は内面を蛇の目釉剥ぎする碗で、口縁部は端反になる。内底面にコンニャク印判による五弁花文が染付される。

５は小形の半球形碗で、外面は縦線や斜格子の染付で分割して、文様を展開するものとみられる。内面は無文である。

これらのうち、４には煤の付着がはっきり認められ、他にも僅かに煤が付着して汚れているものが多い。ただし、被熱によるものなのか、炭化物とともに投棄されて汚れただけなのかは、判断がつかない。

６は猪口で、厚手で腰が角張る。外面にコンニャク印判で花文と、そこから派生する手描きの蔓草文が染付される。釉薬が僅かに青味を帯びる。

７・８は粗製の皿で、いずれも内面が蛇の目状釉剥ぎされる。７は高台が小さいもの、８は大きいものである。

９・10 は御神酒徳利である。９は蛸唐草文、10 は外面に松・竹・梅文が染付される。松文はかなり形骸化している。

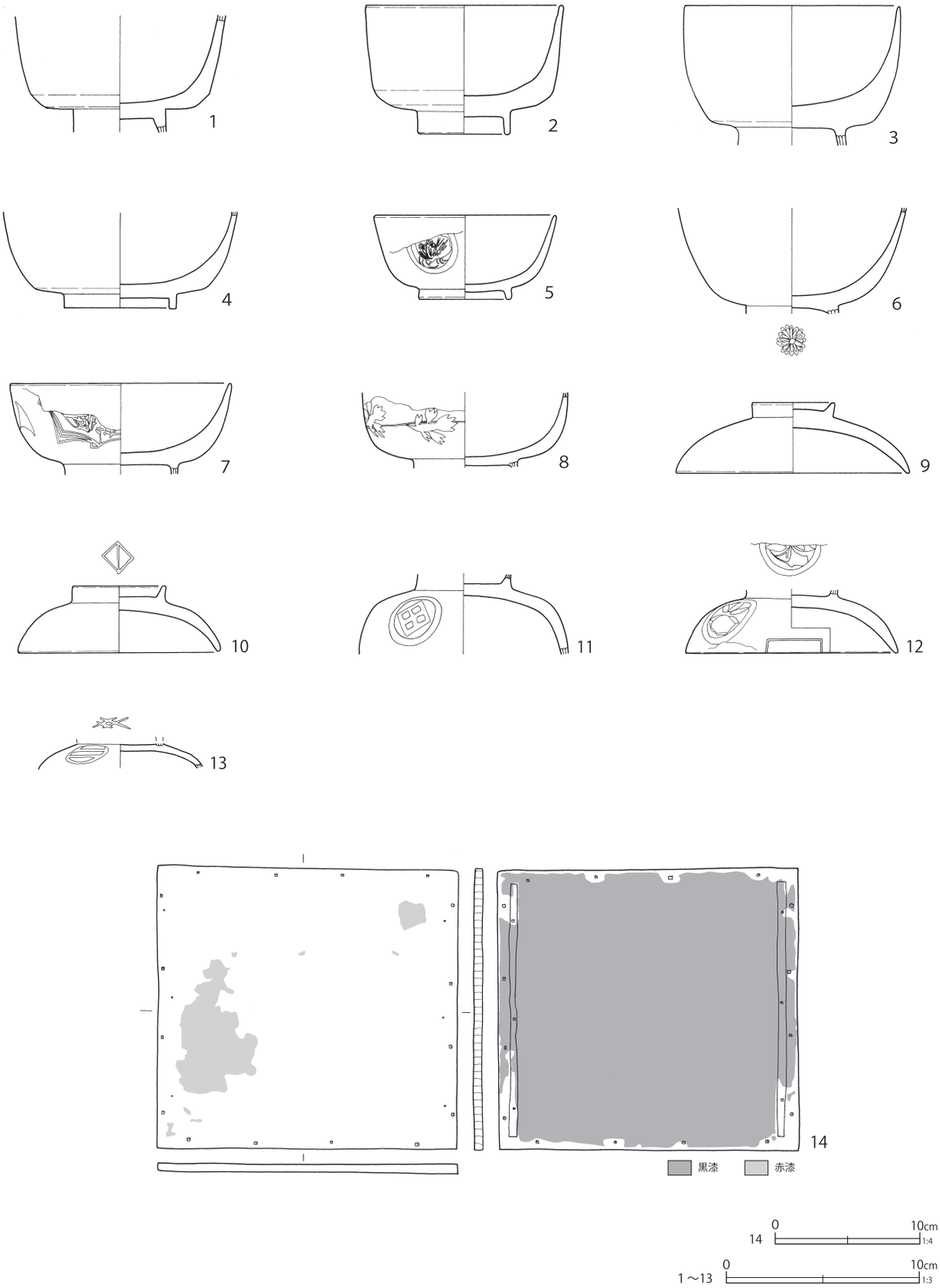
11 は大形の鶴首になる徳利である。口縁・頸部径を基準に反転図化したもので、胴部径に若干の誤差があるかもしれない。外面に太い筆致で染付が施される。

第 477 図 12 は瀬戸美濃系陶器のせんじ碗で、黄色味の強い灰釉が施される。13 は腰錆碗で、内面の灰釉には大きな貫入が目立つ。

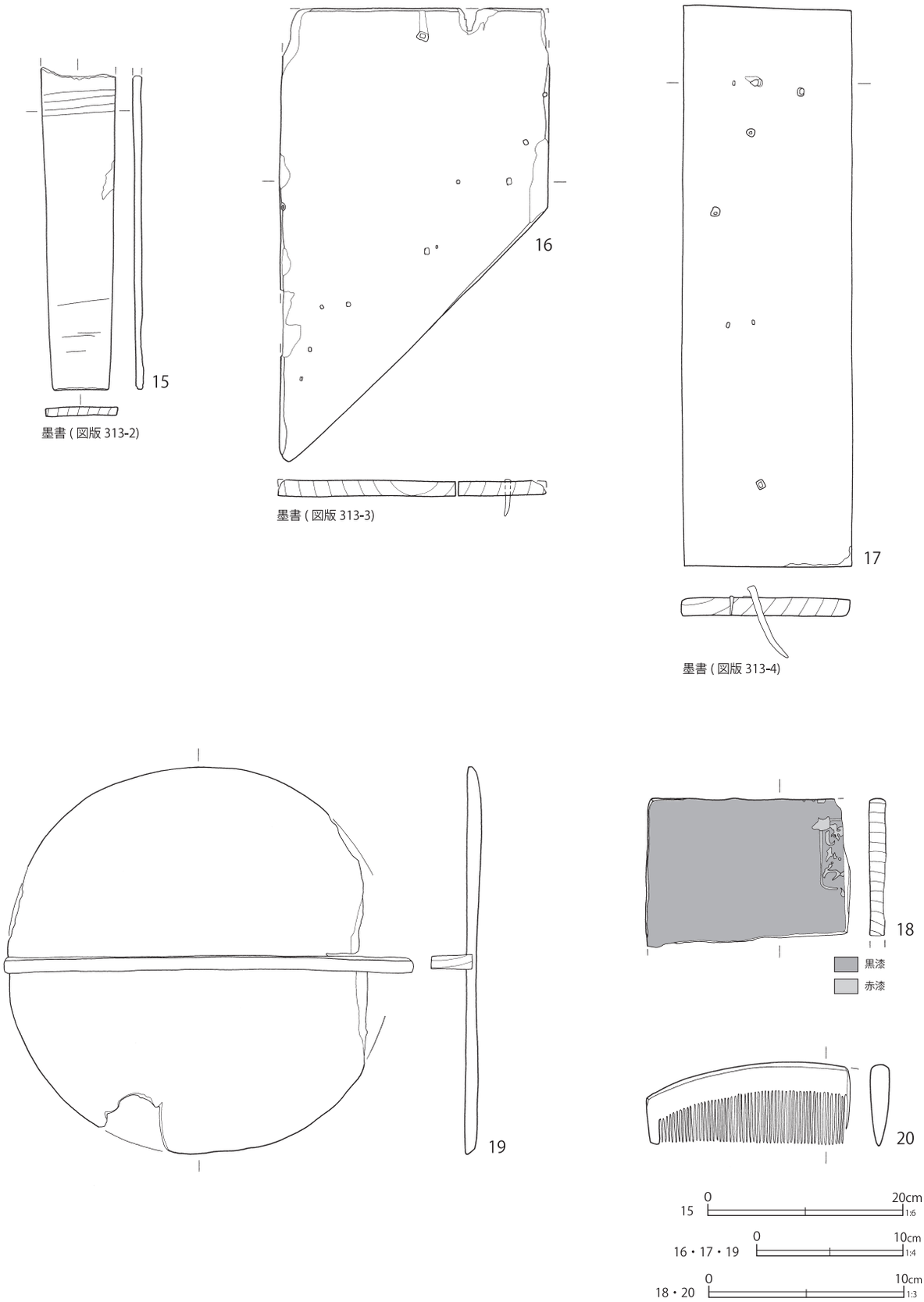
14 ～ 17 までは半球形の丸碗で、14 は瀬戸美濃系、15 ～ 17 は京都信楽系陶器である。

14 はやや厚手で、鉄絵が施される。15 は胎土が硬質で、鉄絵の一部が認められる。

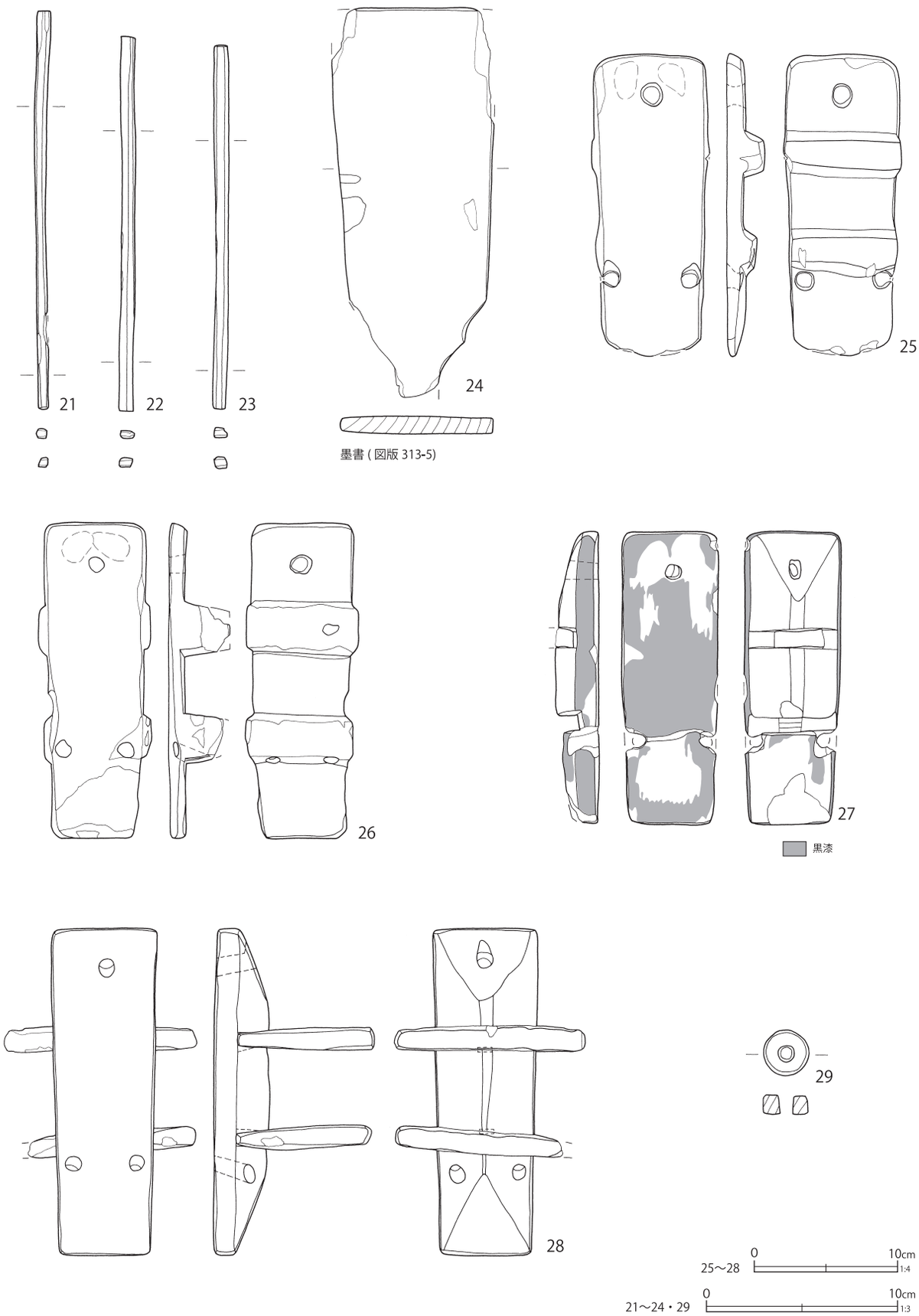
16 は薄手で、黄色味の強い透明釉が施釉され



第 480 図　第 456 号土壙出土遺物（5）



第 481 図　第 456 号土壙出土遺物（6）



第 482 図　第 456 号土壙出土遺物（7）

第 171 表　第 456 号土壙出土遺物観察表（３）（第 480 ～ 482 図）

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	口径 / 径	高さ	底径	木取り	備考	図版
1	木製品	漆椀	－	－	－	－	[6.0]	－	横木取り	内外面赤漆	
2	木製品	漆椀	－	－	－	(10.2)	6.6	4.8	横木取り	内外面赤漆	
3	木製品	漆椀	－	－	－	(11.2)	[7.2]	－	横木取り	内外面赤漆（口縁部漆剥落）	
4	木製品	漆椀	－	－	－	－	[4.9]	(5.8)	横木取り	内外面赤漆	
5	木製品	漆椀	－	－	－	(9.4)	4.3	(4.7)	横木取り	内面赤漆 外面黒漆 外面３箇所紋（金）	267-13
6	木製品	漆椀	－	－	－	－	[5.4]	－	横木取り	内外面赤漆 高台内文様（金）	268-1
7	木製品	漆椀	－	－	－	(11.4)	[4.6]	－	横木取り	内面赤漆 外面・口唇部黒漆 外面文様（赤漆）	267-14
8	木製品	漆椀	－	－	－	－	[3.8]	－	横木取り	内面赤漆 外面黒漆 外面文様（赤漆）	268-2
9	木製品	漆椀蓋	－	つまみ径 (4.0)		12.0	3.6	－	横木取り	内外面赤漆 口縁・つまみ端部黒漆	
10	木製品	漆椀蓋	－	つまみ径 (4.6)		10.6	3.4	－	横木取り	内外面赤漆 口縁・つまみ端部黒漆 つまみ内⊠（黒漆）	
11	木製品	漆椀蓋	－	つまみ径－		－	[4.2]	－	横木取り	内面赤漆 外面黒漆 外面３箇所紋（赤漆）	268-3
12	木製品	漆椀蓋	－	つまみ径－		(11.0)	[3.3]	(5.8)	横木取り	内外面赤漆 外面紋（黒漆） 口縁部補修痕	268-4
13	木製品	漆椀蓋	－	つまみ径－		－	[1.2]	－	横木取り	内外面赤漆 外面紋（黒漆） つまみ内文様（黒漆）	268-5
14	木製品	膳	20.8	19.6	0.7	－	－	－	柾目	表面赤漆 裏面黒漆 裏面脚の痕跡 外周に木釘 16　木釘孔 2	268-6
15	木製品	桶・樽	[33.5]	7.7	1.0	－	－	－	板目	側板 表面墨書（文字資料 116）上部炭化	
16	木製品	箱	31.2	18.3	1.1	－	－	－	板目	鉄釘 3 木釘 2 釘孔 7 表面墨書（文字資料 117）	268-8
17	木製品	箱	38.4	11.6	1.3	－	－	－	板目	鉄釘 2 釘孔 6 表面墨書（文字資料 118）	268-9
18	木製品	箱	[7.1]	[10.5]	0.8	－	－	－	柾目	側板 表面黒漆 裏面赤漆 表面文字（赤漆）	268-7
19	木製品	蓋	－	－	1.0	26.4	－	－	板目	全面炭化	269-1
20	木製品	櫛	[10.4]	4.1	1.0	－	－	－	板目		269-2
21	木製品	箸	20.8	0.6	0.5	－	－	－	分割棒状		
22	木製品	箸	19.6	0.7	0.5	－	－	－	分割棒状		
23	木製品	箸	19.0	0.7	0.6	－	－	－	分割棒状		
24	木製品	羽子板	[20.3]	8.2	0.9	－	－	－	柾目	表面墨書（文字資料 119）	269-3
25	木製品	下駄	21.1	8.2	－	－	2.6	－	板目	連歯下駄	
26	木製品	下駄	22.0	6.7	[4.3]	－	－	－	板目	連歯下駄	
27	木製品	下駄	20.5	6.5	－	－	[2.7]	－	板目	陰卯下駄 下地（赤色塗料）表・側面黒漆	269-5
28	木製品	下駄	22.8	7.4	－	－	3.9	－	板目	陰卯下駄 歯の差込み口側面に方形の窪み 後歯の上端部中央に半円状の加工	269-4
29	木製品	不明	－	－	1.0	2.3	－	－	板目	中心に孔 0.6cm	

る。細かい貫入が全体に入る。外面に鉄絵が施される。17 は薄手のもので、緑を主体に色絵が施される。

18・19 は瀬戸美濃陶器の碗で、体部が逆「ハ」字状に開くものである。黄色味の強い灰釉に、呉須で植物文が描かれる。

20 は瀬戸美濃系陶器の筒形碗で、全体に僅かに緑色味を帯びる灰釉が施釉される。外面には、鉄絵が施される。21 は瀬戸美濃系陶器の坏である。灰釉は僅かに緑色味を帯びる。

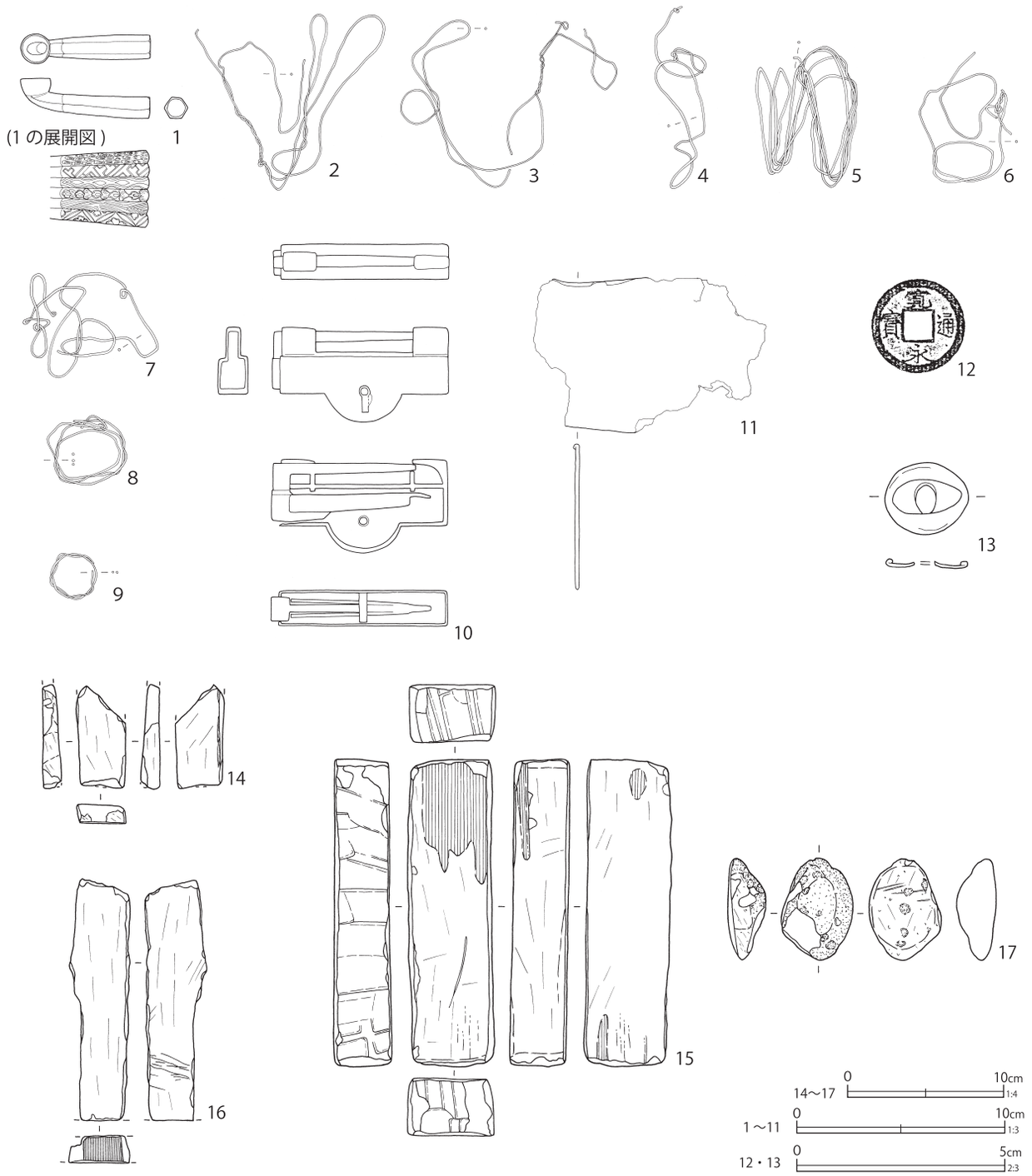
22 は瀬戸美濃系陶器の灯明皿で小形のものである。口縁部が歪んでいる。内面底部には径 4.2 cm程度の環状の重ね焼き痕が認められる。底部にも環状の重ね焼き痕があるが、これは底径とほぼ一致する大きさである。

23 は瀬戸美濃系陶器の摺絵皿である。

24 は瀬戸美濃系陶器の鉢で、全体に灰釉が掛かる。この形態のものは内面が蛇の目状釉剥ぎされるものが多いが、本資料は全面施釉である。高台部から内底面までが、被熱して黒化しているのは、使用によるものであろう。

25 は堺明石系陶器の擂鉢である。口縁部の肥厚は弱く、古い段階のものと思われる。内面の擂目は一単位７条で、口縁部付近は弱くヨコナデで消される。

26 は瀬戸美濃系陶器の擂鉢である。体部に柿釉を施し、下位～底部は拭き取られ、底部はほとんど拭き取られていない。内面の擂目は一単



第 483 図　第 456 号土壙出土遺物（8）

位 12 条である。体部内外面の中位に煤が付着し、使用痕と思われる。

27 は瀬戸美濃系陶器の香炉で、外面に鎬状の半菊文が陰刻されるものである。底部は回転ケズリ痕を無調整で残す。

28 は瀬戸美濃系陶器の花生で、内外面に灰釉、外面は鉄釉が掛け分けられている。底部に右回転の糸切痕と墨書「□ / 十三」がみえる。

第 478 図 29 は瀬戸美濃系陶器のぺこかん徳利である。体部を窪ませ、外面に柿釉が施釉される。

第 172 表　第 456 号土壙出土遺物観察表（４）（第 483 図）

番号	種別	器種	法量	備考	図版
1	金属製品	煙管	長さ 6.2 火皿径 1.4 小口径 1.1 × 1.0 重さ 9.2	材質不明 雁首六角形 模様あり	286-4
2	銅製品	針金	縦 8.4 横 9.1 厚さ 0.08 重さ 2.4		
3	銅製品	針金	縦 8.0 横 10.4 厚さ 0.08 重さ 1.7		
4	銅製品	針金	縦 8.7 横 2.5 厚さ 0.1 重さ 0.9		
5	銅製品	針金	縦 6.8 横 4.9 厚さ 0.1 重さ 4.6		
6	銅製品	針金	縦 6.3 横 4.4 厚さ 0.1 重さ 1.5		
7	銅製品	針金	縦 5.0 横 6.5 厚さ 0.1 重さ 1.9		
8	銅製品	針金	縦 3.35 横 3.8 厚さ 0.1 重さ 1.4		
9	銅製品	針金	縦 2.2 横 2.3 厚さ 0.08 重さ 1.0		
10	鉄製品	錠前	長さ 8.5 幅 3.2 厚さ 1.4 重さ 103.9		288-5
11	鉄製品	不明	長さ［11.1］幅 7.0 厚さ 0.3 重さ 38.4		
12	銅製品	銭貨	径 22.9 厚さ 1.2 重さ 3.0	寛永通寶（新）	
13	銅製品	雁首銭	径 2.0 × 1.7 厚さ 0.2 重さ 1.8	鍍金あり	288-6
14	石製品	砥石	長さ［6.6］幅 3.1 厚さ 1.2 重さ 33.6	流紋岩 砥面 3 被熱（黒色化）	
15	石製品	砥石	長さ 19.7 幅 5.5 厚さ 3.7 重さ 802.0	流紋岩 表・裏・側面ノコギリ痕 側面幅広工具痕 砥面 3 被熱（剥落・黒色化）	298-6
16	石製品	砥石	長さ［15.3］幅［3.9］厚さ 1.7 重さ 139.2	ホルンフェルス 側面ノコギリ痕 砥面 2	
17	石製品	磨石	長さ 6.5 幅 4.6 厚さ 2.5 重さ 18.4	軽石 自然面遺存 使用面 2 刃物傷あり	295-4

30 は瀬戸美濃系陶器の徳利で、外面の鉄釉は光沢があるこげ茶色に発色する。

31 ～ 36 までは瓦質土器の火鉢で、輪高台状の脚がつくものである。

31 は脚部で、内外面に強い筋状のヨコナデが施される。内面上位は指圧痕がナデで消される。焼成前穿孔が２箇所にみられる。胎土に角閃石が多く含まれ、軽石粒も認められる。高台部畳付に、二次的な摩耗と削痕がみられる。

32 は脚部が短く、高台端部が外側に突出する。外面上位に菊花文スタンプが施文される。底部にシワ状痕がみられ、外面の体部下位（沈線の下）はヨコナデとケズリが施される。内底面中央は平滑なナデで、周囲は回転ナデで処理される。内面の体部はヨコナデが施される。内底面に墨書がみられる。

33 は他より一回り大形のもので、やや腰が張る。底部は砂目で、その周囲に回転ナデが施される。外面の体部下位には、幅の広い２段のケズリが施される。上位には大きい指圧痕がみられ、櫛歯波状文が施文される。内底面は平滑なナデで、周囲は回転ナデで処理される。内面の体部は弱いヨコナデが施される。

34 の底部は砂目で、周囲にナデが施される。外面の体部下位は幅の広いヘラケズリで、その直上はごく弱いヘラナデで処理される。ヘラナデは体部中位まで及ぶ。外面上位には、赤彩された菊花文スタンプが施文される。内底面は平滑に処理され、周囲に回転ナデが施される。内面の体部は、ヨコナデが施され、斜方向の指圧痕が残る。脚部の焼成前穿孔は２箇所みられる。外面の口縁部付近と脚部から体部の下位にかけて、黒色の塗布物がみられる。

35 の口唇部は平坦で、端部が外側に強く突出する。外面に赤彩された菊花文スタンプが施文されるが、中の花弁が不明瞭である。外面下位はヘラケズリで、上位はヘラケズリ後に強い筋状のナデで処理される。内面はナデ（一部筋状）が施される。内面上位から口唇部に、煤が付着する。

36 の口唇部は平坦で、端部が内側に強く突出する。外面下位はヘラナデに近いケズリが施され、上位は大きな指圧痕がナデで消される。内面下位はヨコナデ、上位はごく弱いヘラナデで処理される。

37・38はかわらけ小皿で、江戸在地系土器である。ともに、底部に左回転の糸切痕が残る。

37は細粒の雲母と角閃石ないし輝石が含まれ、被熱により一部黒化している。内底面の腰折れ痕は弱い。

38は胎土が粉質で、細粒の雲母が含まれる。内外面に薄く煤が付着する。

第479図39は土製品の人形である。江戸在地系のもので、姉様をモチーフとしている。中空で、前後合わせの二枚型成形である。酸化炎焼成だが、胎土中心部は灰白色で、周囲は橙色である。胎土に細粒の雲母と白色針状物質が含まれる。

第479図40は棟込瓦（菊丸瓦）で、屋根の棟を飾るものである。背面中央に楕円形の突起が付くが、折損している。胎土はやや粉っぽい硬質なもので、黒色粒子が目立つ。栗橋宿跡での出土例は極めて少なく、第一面遺物包含層１（第257図122）、北２丁目陣屋跡の遺物包含層（埼埋文2021a第64図30）で出土している。

41～44までは桟瓦である。いずれも隅切りが左奥だけで、右手前にはみられない。42～44には凹面、側面に銀化光沢がみられる。41は雑な成形で、歪みがある。凹面には、明瞭な筋状のナデがランダムに施される。

第480～482図には、木製品を示した。

第480図１～８までは漆椀である。１・２は壺椀で、腰が面取り状に角張る筒形のものである。ともに、体部はやや開き気味で、内外面に赤漆が塗布されている。１は腰が角張るが、２はやや丸みを持ち、厚手である。

３・４は一文字腰椀である。腰が張り、体部が丸みを持ちながら立ち上がるものである。３は厚手である。内外面に赤漆が塗布されており、３の口縁部は漆が剥がれている。

５～８は腰丸椀である。５は小形の体部が直線的に開くもので、高台が低い。内面に赤漆、外面に黒漆が塗布され、外面の３箇所に金で紋が描かれる。

７は、５と器形的に酷似するもので、一回り大きいサイズである。内面に赤漆、外面と口唇部に黒漆が塗布される。外面に赤漆で銀杏葉等の文様が描かれる。

８は体部が垂直気味に立ち上がる薄手のものである。内面に赤漆、外面に黒漆が塗布され、外面には赤漆で植物の文様が描かれる。

９～13は漆椀の蓋である。９は体部の立ち上がりが緩やかで、扁平な印象を持つものである。平椀の蓋かもしれない。

10・12は腰丸椀の蓋である。10は内外面に赤漆、つまみと口縁端部に黒漆が塗布される。つまみ内に黒漆で「⧄」の文様が描かれる。12は内外面に赤漆が塗布され、つまみ内と体部に黒漆で紋が描かれる。口縁部には長方形の補修痕が認められる。

11は見込みが深く、肩が張るものである。内面に赤漆、外面に黒漆が塗布される。外面に赤漆で３箇所に紋が描かれる。

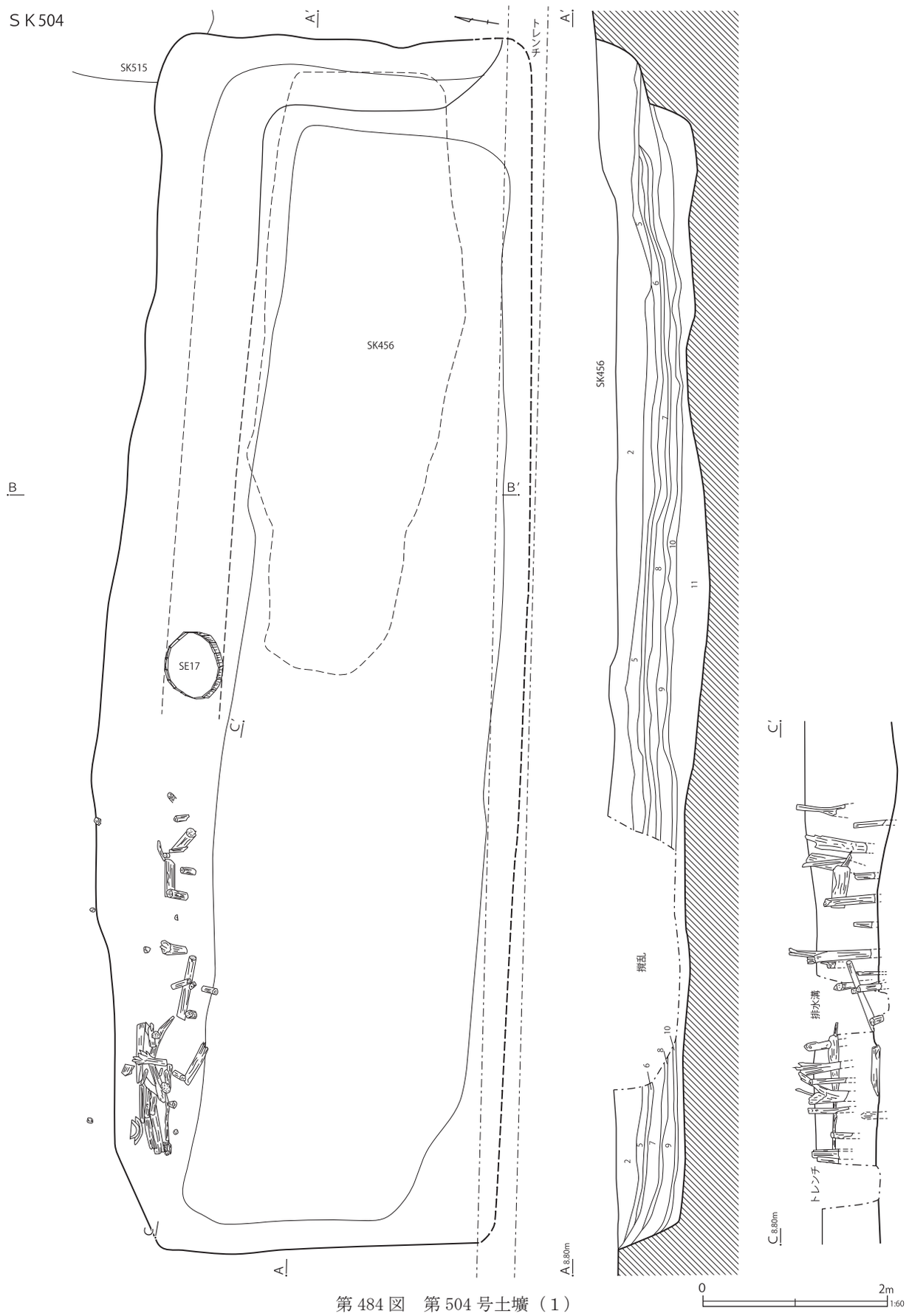
14は膳である。表面に赤漆、裏面に黒漆が塗布される。裏面には、脚の痕跡が左右に２条みられる。脚は３箇所ずつ木釘で留め、表面は、各辺の４箇所に木釘で側板を留めていたようである。

第481図15は桶ないし樽の側板である。表面に墨書が認められるが、右半分のみで判読できない。上部は炭化している。

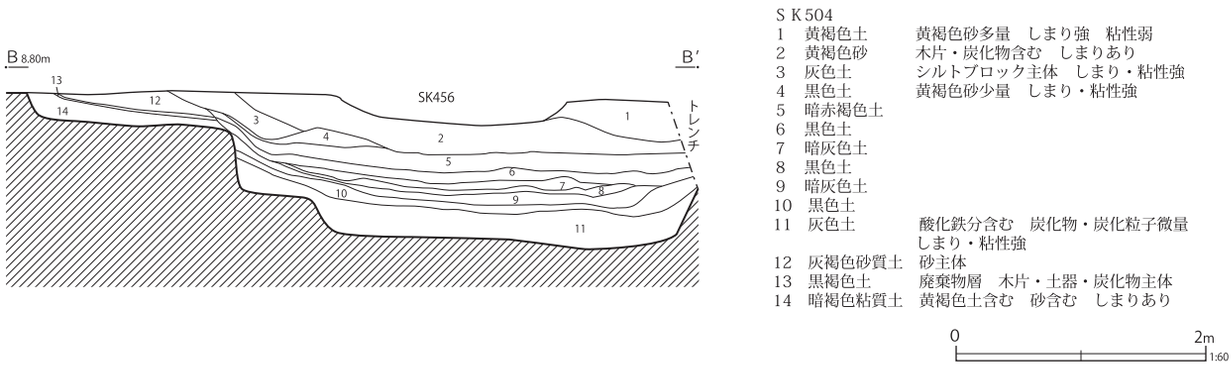
16～18は箱の部材と思われる板である。16は下部を斜めに切断しており、鉄釘が３箇所、木釘が２箇所に遺存している。表面に墨書「玉二／セ□」とみえる。

17は長方形の板で、鉄釘が２箇所に遺存している。表面に墨書「土津」とみえる。18は漆塗のもので、側板と思われる。表面に黒漆、裏面に赤漆が塗布される。表面に赤漆で文字が書かれるが、判読できない。

19は蓋である。20は櫛である。第482図21



第 484 図　第 504 号土壙（1）



第 485 図　第 504 号土壙（２）

～ 23 は箸である。24 は羽子板である。

25 ～ 28 は下駄である。28 は陰卯下駄である。本体の歯を差し込む部分の側面に方形の加工、後歯の上端部に半円状の加工が施されている。

29 は器種不詳の環状製品である。何らかの部材であろう。

第 483 図１～ 13 は金属製品である。１は煙管の雁首である。首から銅の部分が六角形で文様がみられる。

２～９は針金である。10 は鉄製の錠前である。

11 は器種不詳の鉄製品である。

12 は寛永通寶である。13 は銅製の雁首銭である。

第 483 図 14 ～ 17 は石製品である。14 ～ 16 までは砥石で、14・15 は流紋岩、16 はホルンフェルス製である。

15 は上下端面と左側面に、刃幅の広い工具痕がみられる。使用痕は認められない。表・裏・右側面にはノコギリ状工具痕が遺存するが、使用痕により消されている。被熱による剥落、黒色化が認められる。

16 は砥面が２面遺存し、下端面には密なノコギリ状工具痕がみられる。

17 は軽石製の磨石で、左側面と裏面に使用痕が認められる。自然面が大きく残る。使用面は緩い凸面である。

第 504 号土壙（第 484 ～ 503 図）

Ｂ５－Ｉ５、Ｂ５－Ｊ４・５・６グリッドに位置し、第 456 号土壙より古く、樹皮堆積層より新しい。本跡の底面から、第 17 号井戸跡が検出されたが、新旧関係は不詳である。また、重複する第 515 号土壙との新旧関係も不詳である。

平面形は隅丸長方形で、長軸 13.08 m、短軸は推定 4.65 m、深さ 1.10 mの大型の土壙である。北部と東部は､底面から階段状に立ち上がる。栗橋宿跡第８地点で検出された第 497 号土壙に、規模・形態・構造が類似する（埼埋文 2022a）。

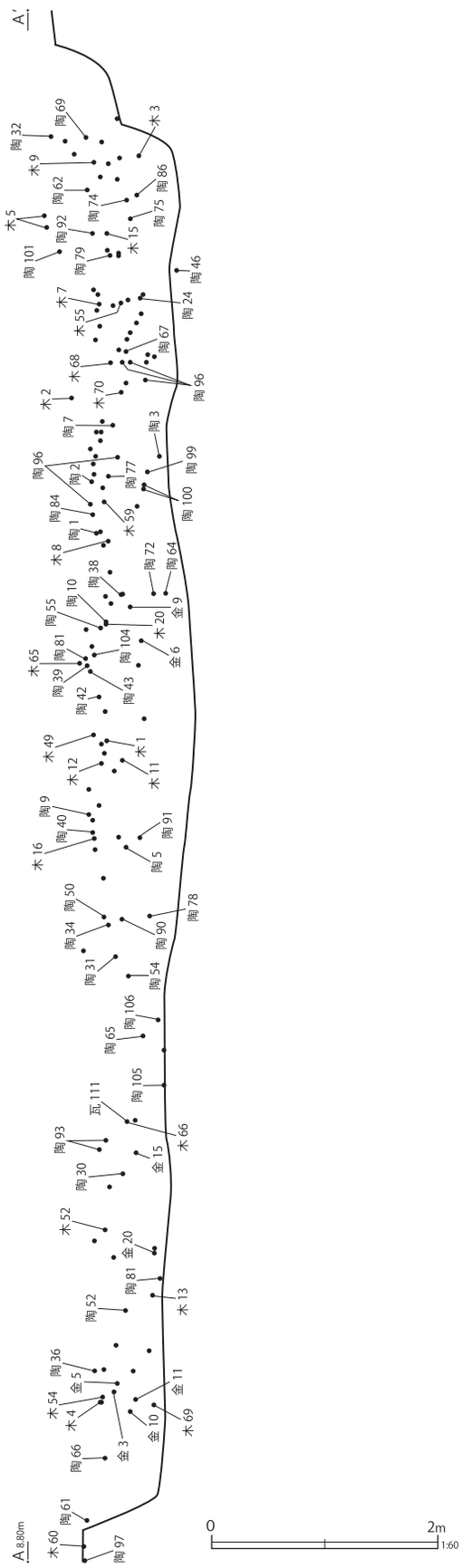
北西部では、低面から１段上がったテラスに、杭と側板が遺存していた。土留めと思われるが、一部の検出に留まった。最終的に陶磁器等が多量に廃棄されていたが、本来は別の機能を持った構築物であったと推測される。

覆土は、最下層の第 11 層に微量の炭化物が含まれる灰色土が厚く堆積し、その直上の第５～ 10 層は薄い水平堆積が連続していた。第２層には、木片や炭化物を含む砂が厚く水平堆積していた。

覆土の堆積環境を復元することを目的として、珪藻分析を行った（Ⅴ　自然科学分析６参照）。分析サンプルは、セクションＢの第６～ 11 層の各層から採取した。

分析結果では、細粒質のシルト・泥の流入と乾

第 486 図　第 504 号土壙（3）



第 487 図　第 504 号土壙（４）

燥を繰り返し、遺構が埋没したと指摘している。

したがって、本跡は用途が不詳だが、長期にわたって開口状態にあった何らかの施設であったと考えられる。

出土遺物は極めて多く、木製品、木材を中心に陶磁器、瓦、金属製品、石製品等が出土した。また、自然遺物は、種実類、骨類、貝類が少量出土した。

種実類については、種実同定を実施した。詳細は「Ⅴ　自然科学分析９」を参照されたい。

最新の陶磁器として、肥前系磁器の小広東碗、外面青磁釉の製品（小丸碗、丸碗の蓋、猪口）が認められた。産地不詳陶器の燗徳利も出土しているが、上層からの混入であり、推定廃絶時期は 18 世紀第Ⅲ四半期である。

第 488 ～ 503 図に出土遺物を示した。

第 488・489 図１～ 29 は肥前系磁器である。１～ 10 は粗製碗で、外面に雪輪草花文が染付される。３は一部に笹文がみられる。７は大碗サイズで、内底面に二重圏線と五弁花文が染付される。

11 は小碗で、器形は小広東碗に類似するものである。内外面に、赤い上絵付で同心円文様が施される。

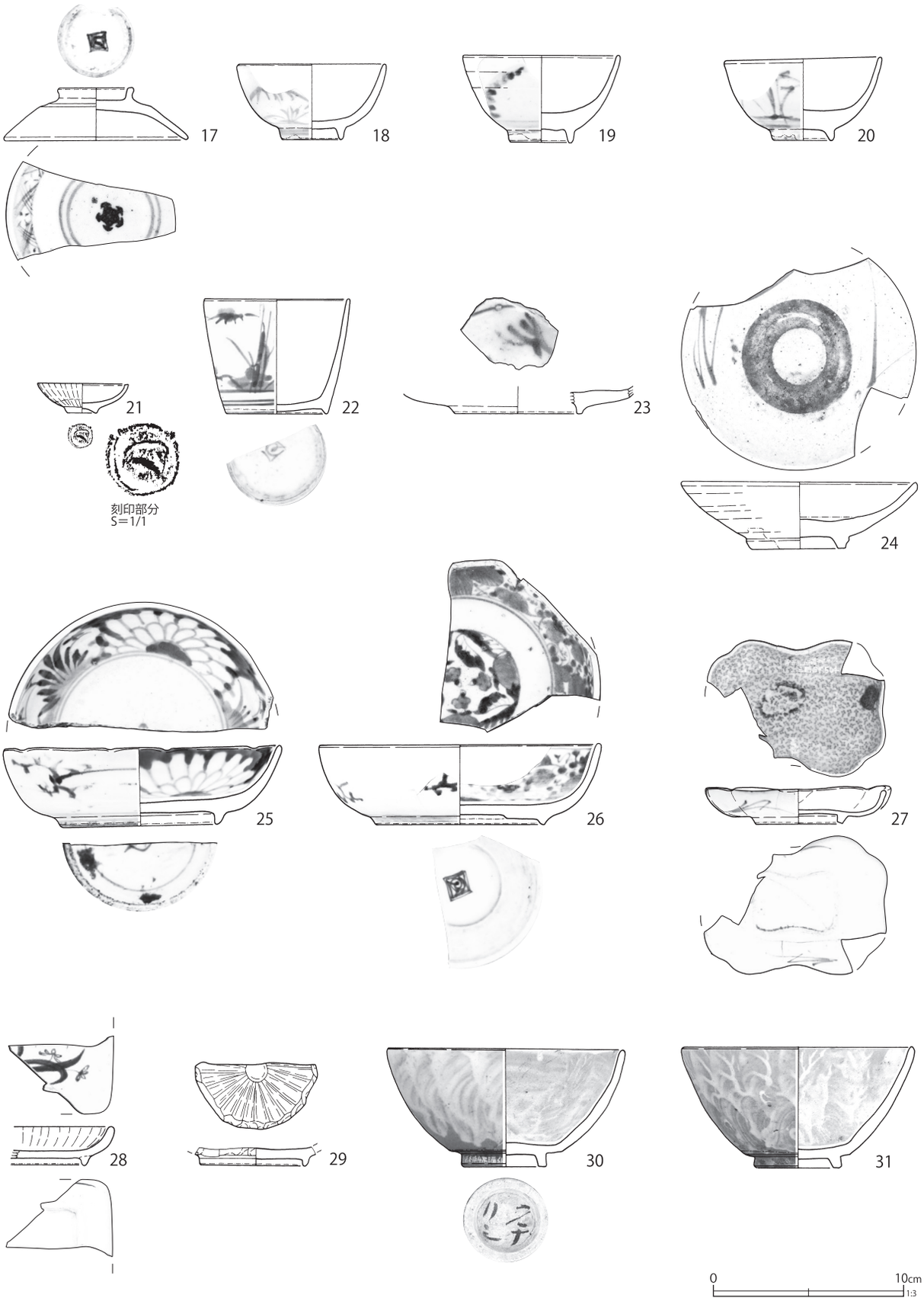
12 ～ 14 は大振りの筒形碗である。14 は腰がシャープに屈曲する。内底面に二重圏線と環状松竹梅文、内面の口縁部に四方襷文の染付が施される。外面もおそらく松竹梅文と思われるが、梅文の位置が欠損している。

15・16 は小広東碗である。本跡の出土遺物で最新のものである。17 は体部が朝顔形に開口する碗の蓋で、外面に青磁釉が施されるものである。内面に四方襷文と二重圏線、五弁花文の染付が施される。18 ～ 20 は坏である。

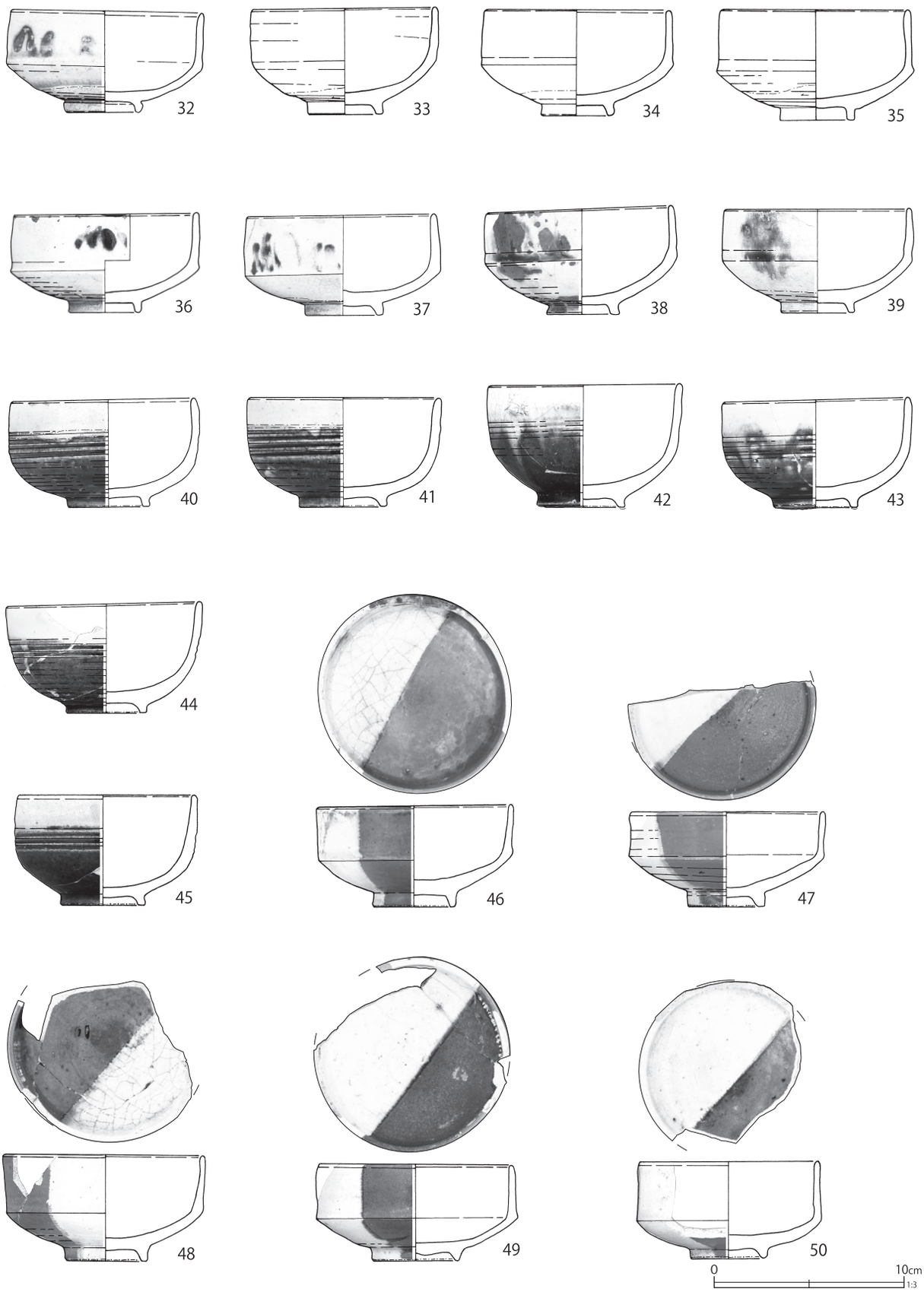
21 は紅皿である。型成形で、外面に鎬状の施文がみられる。高台内に刻印と思われるものが認められる。22 は猪口で、輪高台のものである。

23 は初期伊万里様式の皿である。高台畳付はやや幅広で、釉薬は厚く、青味がかる。

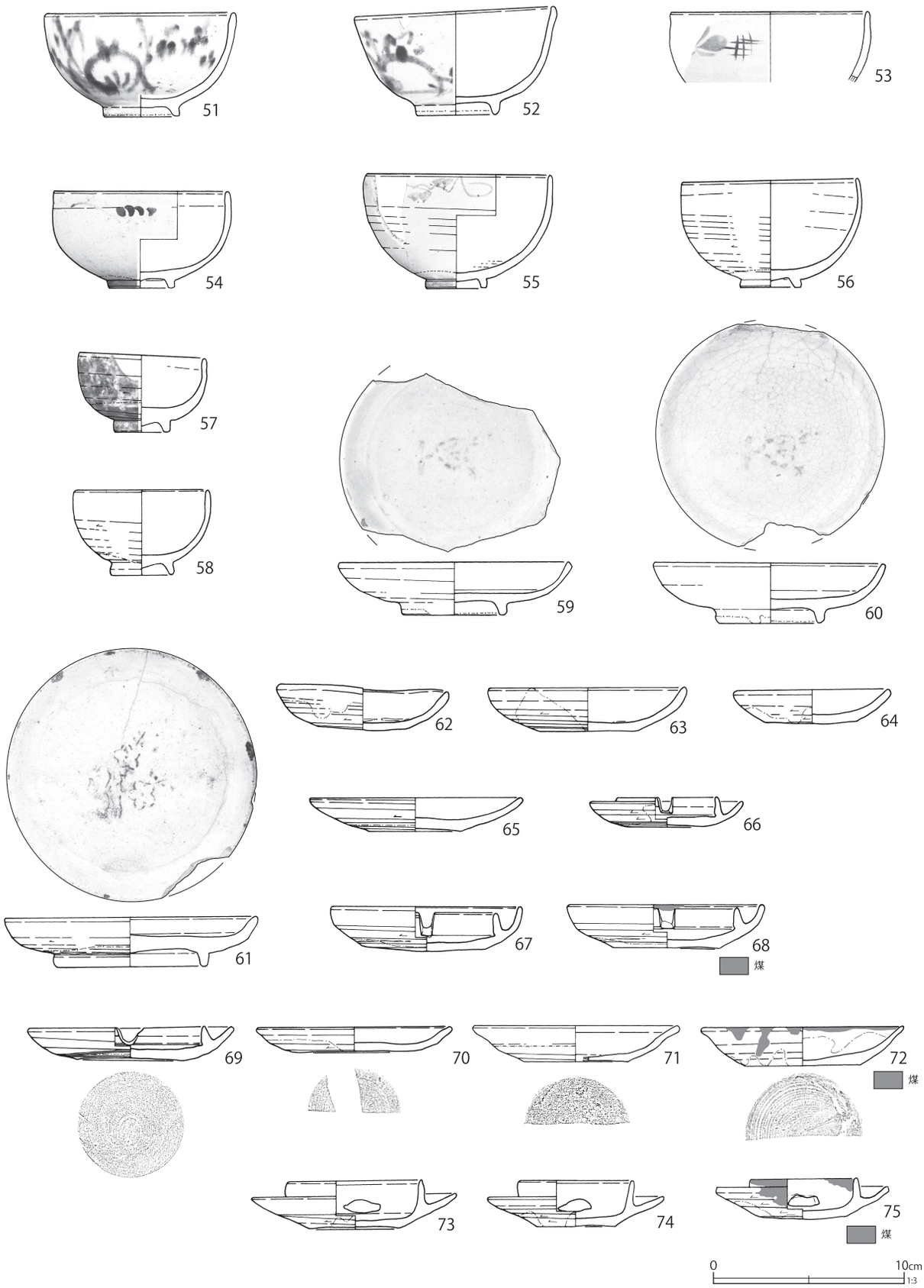
第 488 図　第 504 号土壙出土遺物（1）



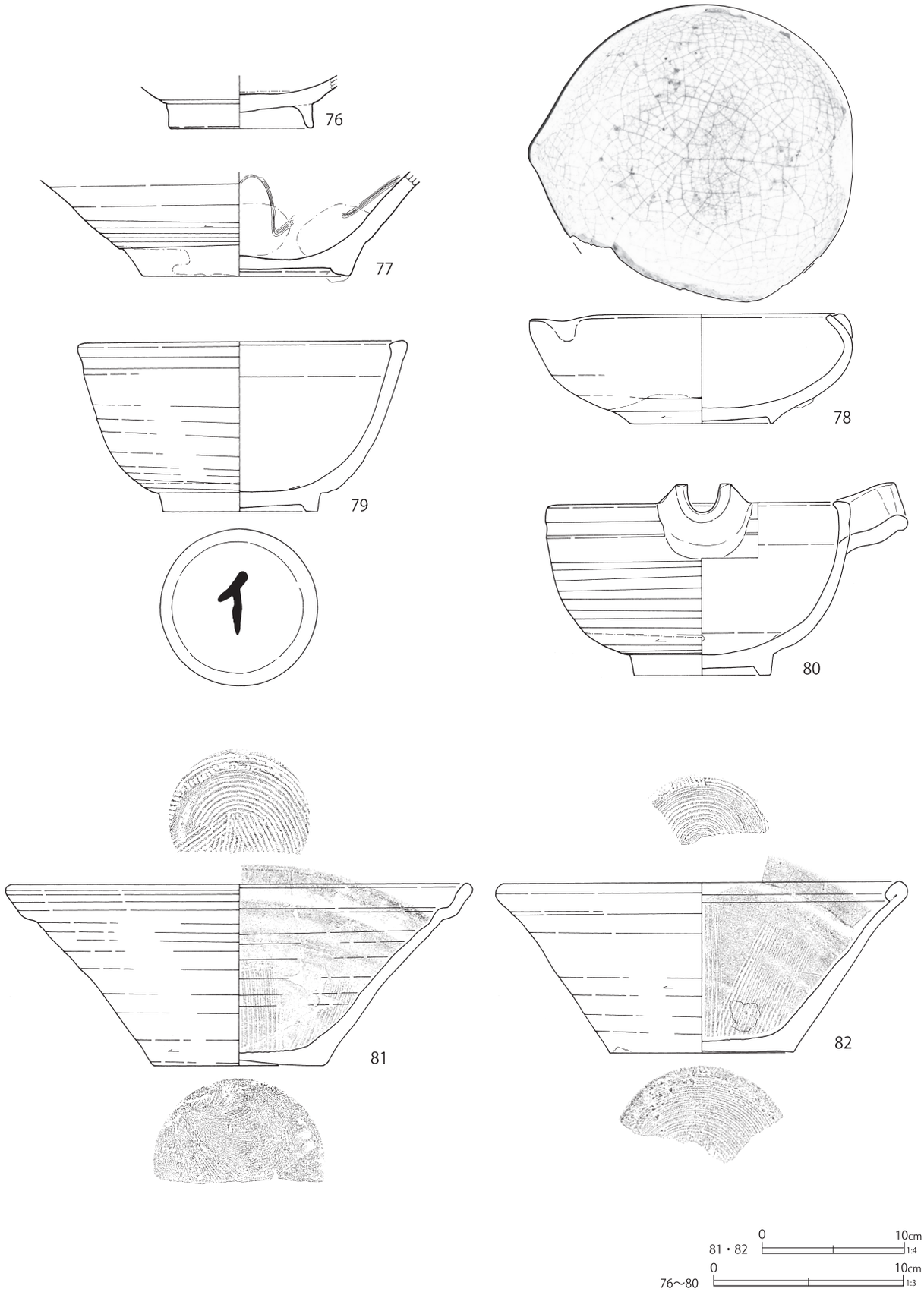
第 489 図　第 504 号土壙出土遺物（２）



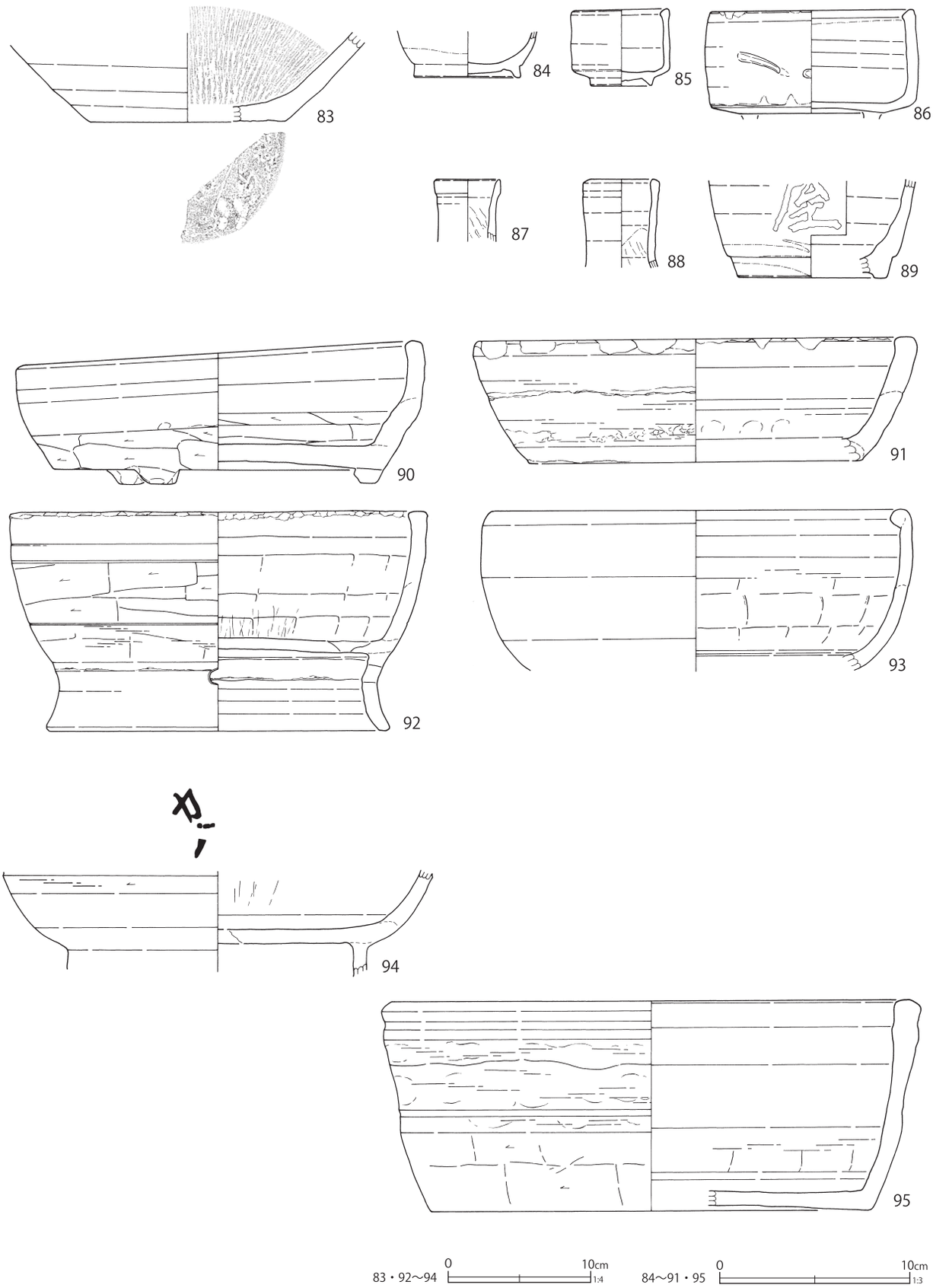
第 490 図　第 504 号土壙出土遺物（3）



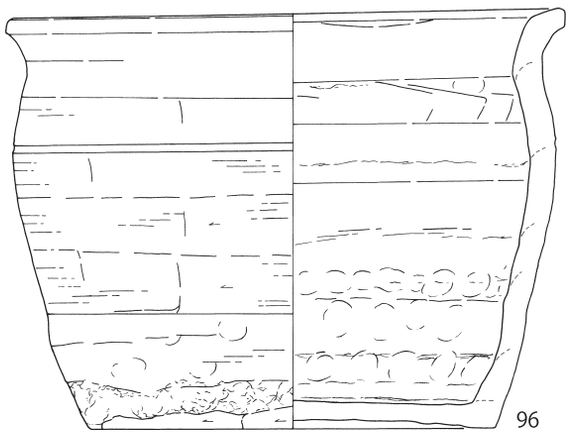
第 491 図　第 504 号土壙出土遺物（4）

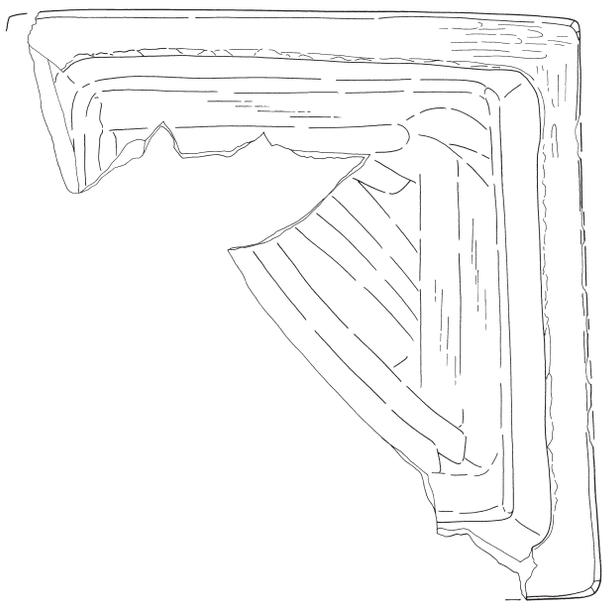


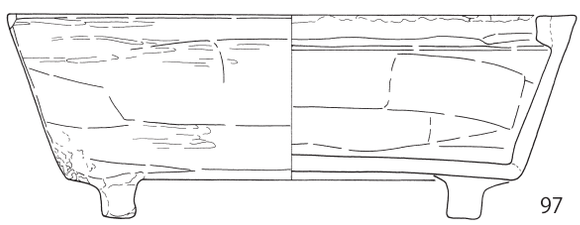
第 492 図　第 504 号土壙出土遺物（5）

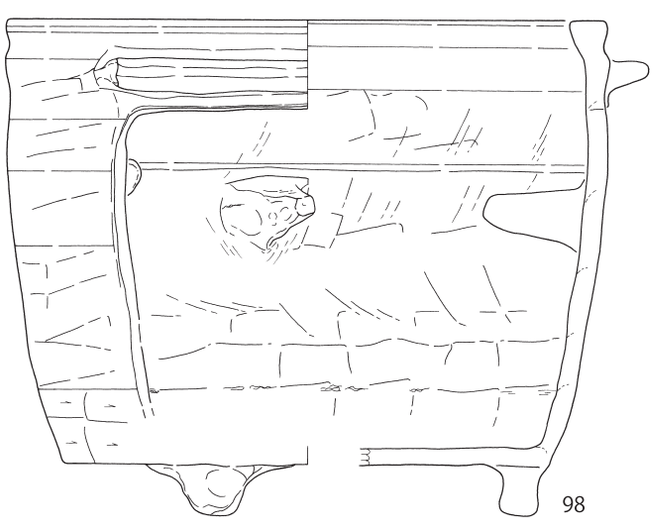


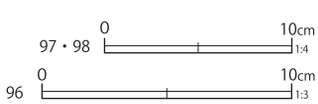
第 493 図　第 504 号土壙出土遺物（6）



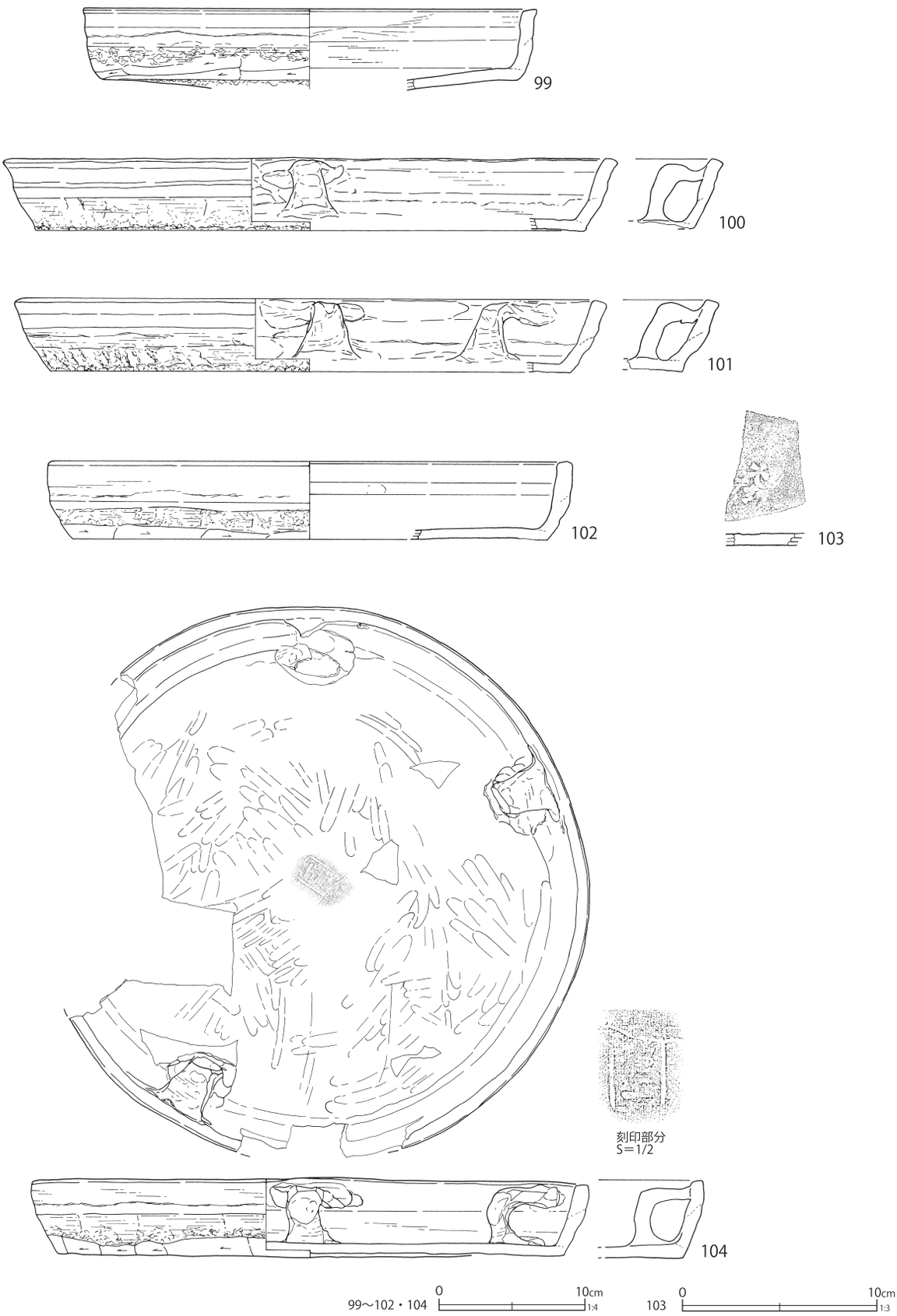




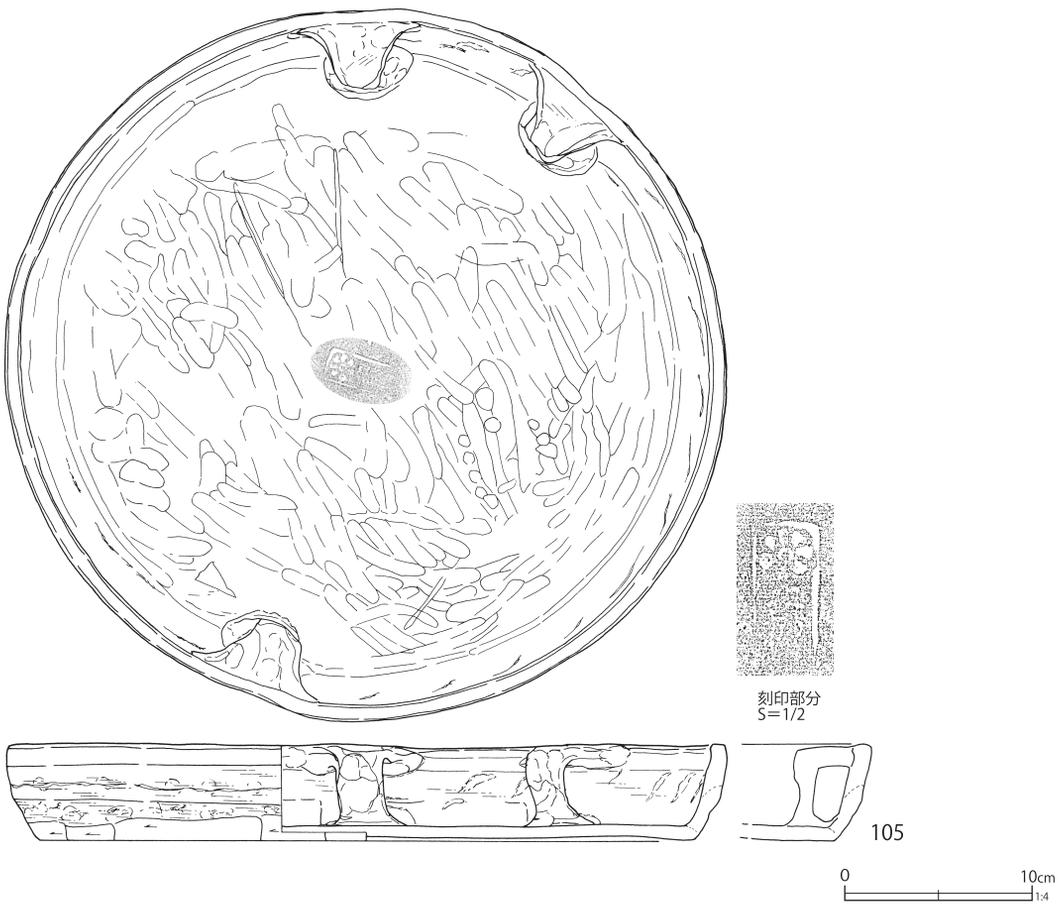




第 494 図　第 504 号土壙出土遺物（7）



第 495 図　第 504 号土壙出土遺物（8）



第 496 図　第 504 号土壙出土遺物（9）

24 は見込みに蛇の目状釉剥ぎを施した皿である。底部が厚手で、高台径は小さい。底部は露胎である。

25 は粗製の五寸皿で、口縁部が輪花状になるものである。灰白色気味の色調である。外面に唐草文、内面に半菊文の染付が施される。破断面に漆継痕が認められる。

26 は高台が低い、蛇の目凹形高台のものである。破断面に漆継痕が認められる。

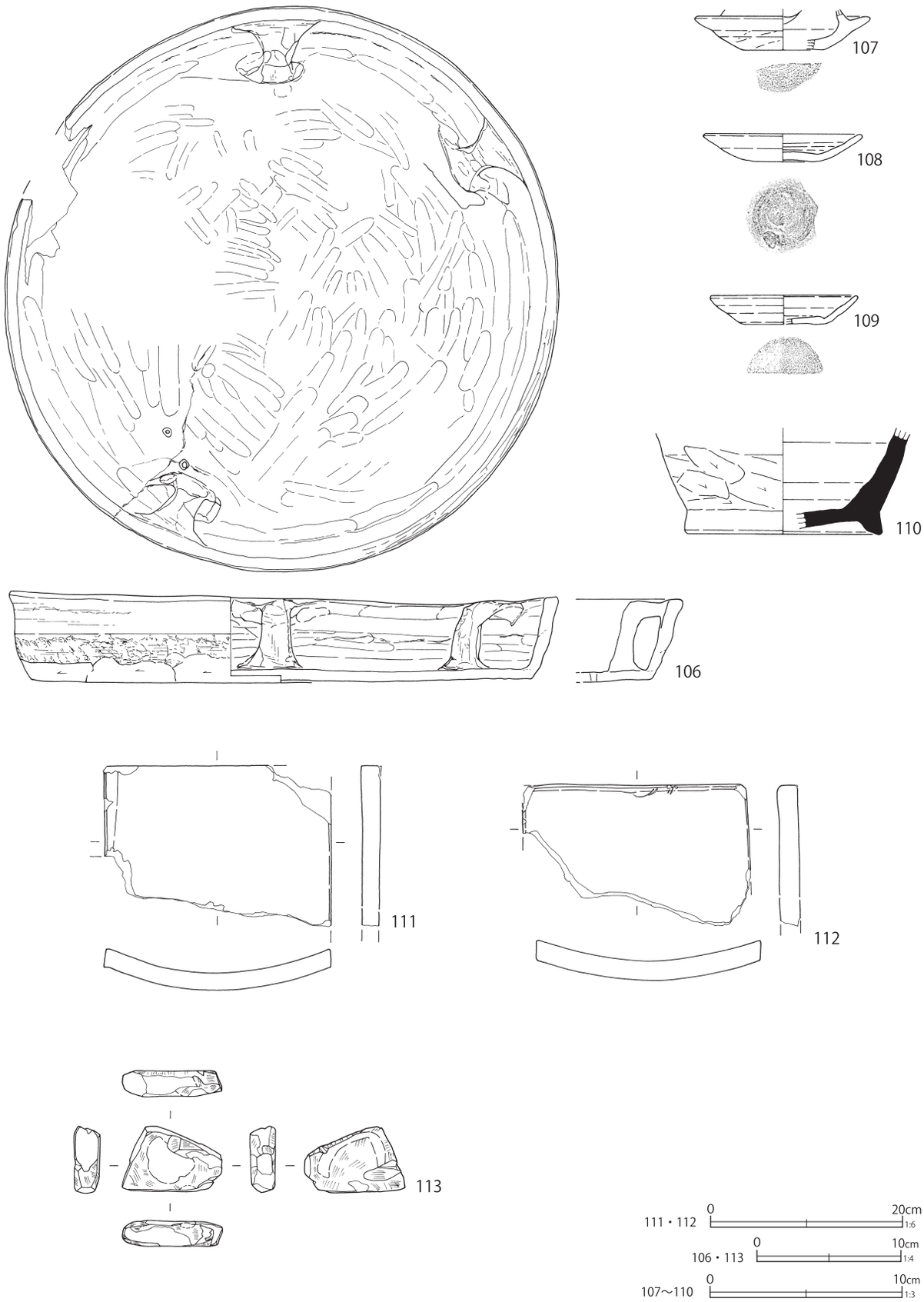
27 は変形皿で、内面に型紙摺絵染付が施される。弱く被熱し、一部が白色に変色する。28 は角形の皿で、付高台である。29 は内面に菊花の陽刻状施文がみられるものである。底部の周囲を打ち欠き、円盤状に整形している。

第 489 ～ 491 図 30 ～ 52 までは瀬戸美濃系陶器の碗である。このうち30･31 は体部が平杉形で、腰が角張る碗である。内外面に黄色味の強い打ち刷毛目釉が施される。30 は高台内に墨書が認められる。

32 ～ 39 まではせんじ碗である。外面の 1 箇所に、鉄釉と呉須を散らすもの（32・37）、呉須絵が施されるもの（36）、鉄釉を散らすもの（38・39）が認められる。36 は崩れた笹文状の呉須絵である。

40 ～ 45 までは腰錆碗である。外面下位の鉄釉の色調は、赤味が強いもの（44）、黒釉（42）、やや透過性がある黄色気味のもの（40・41・43）である。いずれも、鉄釉の光沢が強い。

46 ～ 50 までは、灰釉・鉄釉が左右に掛け分けられたせんじ形の碗である。全て、高台部畳付以



第 497 図　第 504 号土壙出土遺物（10）

第 173 表　第 504 号土壙出土遺物観察表（1）（第 488 ～ 497 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	磁器	碗	10.0	5.4	4.2	―	80	普通	白	肥前系 内外面施釉 外面染付	
2	磁器	碗	(9.9)	5.4	4.0	―	70	普通	白	肥前系 内外面施釉 外面染付 外面少量煤付着	
3	磁器	碗	9.8	5.4	4.2	―	80	普通	白	肥前系 内外面施釉 外面染付	
4	磁器	碗	(10.4)	5.3	3.8	―	70	普通	白	肥前系 内外面施釉 外面染付	
5	磁器	碗	9.8	5.4	3.8	―	95	普通	白	肥前系 内外面施釉 外面染付	211-4
6	磁器	碗	9.6	5.5	4.2	―	95	普通	白	肥前系 内外面施釉 外面染付	211-5
7	磁器	碗	12.7	6.5	4.4	―	80	普通	白	肥前系 内外面施釉・染付	211-6
8	磁器	碗	(9.4)	5.4	4.1	―	50	普通	白	肥前系 内外面施釉 外面染付	
9	磁器	碗	9.5	5.3	4.0	―	95	普通	白	肥前系 内外面施釉 外面染付	211-7
10	磁器	碗	(10.0)	5.3	4.2	―	35	普通	白	肥前系 内外面施釉 外面染付	
11	磁器	碗	―	[2.6]	(3.0)	K	20	普通	白	肥前系 内外面施釉 色絵（赤）	212-1
12	磁器	碗	(8.4)	6.7	4.2	K	40	普通	白	肥前系 内外面施釉・染付（筒形碗）SK513 と接合	
13	磁器	碗	(7.8)	6.7	4.5	―	40	普通	白	肥前系 内外面施釉・染付 弱く被熱（筒形碗）	
14	磁器	碗	(8.0)	6.2	4.0	―	60	普通	白	肥前系 内外面施釉・染付（筒形碗）SK516･536 と接合	211-8
15	磁器	碗	(7.4)	[2.3]	―	―	10	普通	白	肥前系 内外面施釉・染付（小広東碗）	
16	磁器	碗	(8.4)	[3.3]	―	―	15	普通	白	肥前系 内外面施釉・染付（小広東碗）	
17	磁器	蓋	3.7	2.7	(9.4)	―	30	普通	白	肥前系 内外面施釉・染付 外面青磁釉	
18	磁器	坏	(7.6)	3.9	3.0	―	40	良好	白	肥前系 内外面施釉 外面染付	
19	磁器	坏	8.0	4.5	3.2	―	40	普通	白	肥前系 内外面施釉 外面染付	
20	磁器	坏	8.0	4.3	3.0	―	85	普通	灰白	肥前系 内外面施釉 外面染付	
21	磁器	紅皿	4.7	1.5	1.5	K	60	普通	白	肥前系 型成形 内外面施釉 型押施文 底部刻印ヵ	212-2
22	磁器	猪口	(7.5)	6.0	5.2	IK	50	普通	白	肥前系 内外面施釉 外面染付	
23	磁器	皿	―	[1.4]	(6.6)	IK	10	普通	白	肥前系 内外面施釉 内面染付（初期伊万里様式）	212-3
24	磁器	皿	12.1	3.5	4.6	―	70	普通	白	肥前系 内外面施釉 内面染付・蛇の目状釉剥	
25	磁器	皿	14.8	4.0	8.0	K	50	普通	白	肥前系 内外面施釉・染付 漆継痕	
26	磁器	皿	(14.6)	4.1	(8.6)	―	35	普通	白	肥前系 内外面施釉・染付 蛇の目凹形高台 漆継痕	
27	磁器	皿	9.0	1.7	4.5	―	75	普通	白	肥前系 型成形 内外面施釉・染付（内面型紙摺絵染付）弱く被熱 一部白変	212-4
28	磁器	皿	縦[4.1] 横[5.3] 高さ2.0			―	25	良好	白	肥前系 型成形 内外面施釉・染付	
29	磁器	皿	―	[1.0]	5.5	―	50	普通	白	肥前系 内外面施釉 内面施文 二次敲打（底部円盤状製品転用）重さ 21.0g	239-1
30	陶器	碗	(12.2)	6.2	4.2	EK	40	普通	浅黄橙	瀬戸美濃系 内外面打ち刷毛目釉 高台内墨書 被熱	212-5 238-5
31	陶器	碗	11.9	6.3	4.4	IK	55	普通	浅黄橙	瀬戸美濃系 内外面打ち刷毛目釉	212-6
32	陶器	碗	9.9	5.3	3.8	K	55	普通	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉 外面鉄釉・呉須散らし（せんじ碗）	
33	陶器	碗	9.5	5.5	3.8	IK	60	普通	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉（せんじ碗）	212-7
34	陶器	碗	9.6	5.5	3.4	IK	80	普通	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉（せんじ碗）	213-1
35	陶器	碗	(9.7)	5.8	3.8	IK	40	普通	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉（せんじ碗）	
36	陶器	碗	(9.7)	5.2	3.6	IK	50	普通	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉 外面呉須絵（せんじ碗）	
37	陶器	碗	9.7	5.2	3.8	IK	95	普通	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉 外面鉄釉・呉須散らし（せんじ碗）	213-2
38	陶器	碗	9.6	5.6	3.6	K	95	普通	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉 外面鉄釉散らし（せんじ碗）	213-3
39	陶器	碗	9.7	5.4	3.7	IK	80	普通	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉 外面鉄釉散らし（せんじ碗）	213-4
40	陶器	碗	9.5	5.6	4.2	IK	90	普通	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉 外面鉄釉掛け分け（腰錆碗）	213-5
41	陶器	碗	9.8	5.7	4.5	IK	60	普通	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉 外面鉄釉掛け分け（腰錆碗）	
42	陶器	碗	9.9	6.4	4.6	IK	85	普通	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉 外面鉄釉掛け分け 高台畳付に重ね焼き痕（腰錆碗）	213-6
43	陶器	碗	9.6	5.7	4.3	EIK	70	普通	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉 外面鉄釉掛け分け（腰錆碗）	213-7
44	陶器	碗	(10.0)	5.8	4.0	K	40	普通	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉 外面鉄釉掛け分け（腰錆碗）	
45	陶器	碗	9.2	5.7	4.4	K	55	普通	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉 外面鉄釉掛け分け（腰錆碗）	
46	陶器	碗	10.0	5.3	4.2	I	80	普通	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉・鉄釉掛け分け 少量煤付着	
47	陶器	碗	10.1	4.9	4.0	DIK	40	普通	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉・鉄釉掛け分け	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
48	陶器	碗	(10.4)	5.5	4.2	DIK	55	普通	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉・鉄釉掛け分け	
49	陶器	碗	10.0	5.0	4.4	IK	70	普通	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉・鉄釉掛け分け	213-8
50	陶器	碗	(9.2)	5.0	3.8	IK	40	普通	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉・鉄釉掛け分け	
51	陶器	碗	9.8	5.3	3.8	HIK	80	普通	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉 外面染付（太白手丸碗）	214-1
52	陶器	碗	(10.3)	5.5	4.2	IK	80	普通	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉 外面染付（太白手丸碗）	
53	陶器	碗	(10.2)	[3.6]	―	K	10	普通	灰白	京都信楽系 内外面透明釉 外面色絵（緑・赤・青）	
54	陶器	碗	9.1	5.0	3.2	IK	70	普通	灰白	京都信楽系 内外面透明釉 外面鉄絵	
55	陶器	碗	9.5	5.9	3.1	K	70	普通	灰白	京都信楽系 内外面透明釉 外面鉄絵	214-2
56	陶器	碗	9.0	5.6	3.0	K	60	良好	灰白	京都信楽系 内外面透明釉	
57	陶器	坏	6.4	4.1	2.7	IK	90	普通	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉 外面呉須絵	214-3
58	陶器	坏	(6.8)	4.4	3.1	K	40	普通	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉	
59	陶器	皿	(11.9)	2.7	5.2	I	40	普通	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉 内面摺絵	
60	陶器	皿	11.9	3.2	5.2	IK	90	普通	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉 内面摺絵	214-4
61	陶器	皿	12.9	2.5	7.8	IK	95	普通	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉 内面摺絵	214-5
62	陶器	灯明皿	8.7	2.2	4.7	DI	100	普通	灰白	瀬戸美濃系 内外面柿釉 底部拭き取り 内面直重ね焼き痕 口縁部歪む	
63	陶器	灯明皿	10.1	2.2	4.8	I	65	普通	灰白	瀬戸美濃系 内外面柿釉 底部拭き取り 内面直重ね焼き痕	
64	陶器	灯明皿	7.9	1.8	4.7	I	60	普通	灰白	瀬戸美濃系 内外面柿釉 底部拭き取り	
65	陶器	灯明皿	10.9	1.7	4.8	IK	95	普通	灰白	瀬戸美濃系 内外面柿釉 底部拭き取り 内面直重ね焼き痕 口縁部煤付着	
66	陶器	灯明皿	5.1	1.5	4.0	I	100	普通	浅黄	瀬戸美濃系 内外面柿釉 底部拭き取り 外面直重ね焼き痕	
67	陶器	灯明皿	9.8	2.3	6.2	IK	100	普通	にぶい橙	瀬戸美濃系 内外面柿釉 底部拭き取り 直重ね焼き痕	
68	陶器	灯明皿	10.0	2.3	5.4	E	85	普通	浅黄	瀬戸美濃系 内外面柿釉 底部拭き取り 直重ね焼き痕 口縁部の一部に煤付着	
69	陶器	灯明皿	10.5	1.7	5.6	IK	100	普通	灰黄	瀬戸美濃系 内外面柿釉 底部拭き取り 直重ね焼き痕 口縁部に歪みあり	
70	陶器	灯明皿	(10.0)	1.3	5.2	I	45	良好	灰褐	志戸呂系 底部回転ケズリ 内外面鉄釉	215-1
71	陶器	灯明皿	(10.4)	1.8	(5.4)	IK	30	普通	にぶい赤褐	志戸呂系 底部糸切痕 内外面錆釉 口縁部煤付着	
72	陶器	灯明皿	(10.5)	2.0	6.0	I	35	普通	にぶい橙	志戸呂系 底部糸切痕 内外面鉄釉（錆釉） 口縁部煤付着	215-2
73	陶器	灯明皿	6.9	2.5	4.6	EIK	95	普通	明赤褐	志戸呂系 内外面鉄釉（錆釉） 最大径(10.7)cm	214-6
74	陶器	灯明皿	5.9	2.4	4.1	I	60	普通	にぶい黄橙	志戸呂系 内外面鉄釉（錆釉）	
75	陶器	灯明皿	5.5	2.1	4.7	I	85	普通	橙	志戸呂系 内外面鉄釉（錆釉） 煤付着 最大径(9.0)cm	215-3
76	陶器	鉢	―	[2.7]	7.3	IK	10	普通	にぶい黄橙	瀬戸美濃系 内面灰釉・蛇の目状釉剥ぎ SK456と接合	
77	陶器	鉢	―	[5.4]	10.8	IK	15	普通	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉・目跡 内面櫛歯波状文施文	
78	陶器	鉢	15.5	5.7	7.4	DEI	60	普通	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉 口縁部を歪ませ片口部を作り出す	215-4
79	陶器	片口鉢	16.8	8.9	8.1	IK	65	普通	淡黄	瀬戸美濃系 内外面灰釉 内面目跡 高台内墨書「イ」	238-6
80	陶器	片口鉢	14.8	10.0	7.2	IK	75	普通	淡黄	瀬戸美濃系 内外面灰釉 内面目跡3	215-5
81	陶器	擂鉢	(32.0)	12.7	11.8	IK	45	普通	灰白	瀬戸美濃系 底部糸切痕（右） 内外面柿釉 内面擂目	215-6
82	陶器	擂鉢	(28.2)	12.1	(13.0)	DK	25	普通	橙	瀬戸美濃系 底部糸切痕 内外面柿釉・目跡 内面擂目	
83	陶器	擂鉢	―	[6.2]	(13.6)	DGH	10	普通	赤橙	備前系 底部ヘラケズリ 内面擂目	
84	陶器	壺甕類ヵ	―	[2.3]	5.4	K	15	普通	灰白	瀬戸美濃系 内面柿釉 外面鉄釉	
85	陶器	香炉	4.9	4.0	3.1	ADEK	95	普通	淡黄	瀬戸美濃系 外面灰釉	216-1
86	陶器	香炉	10.5	[5.4]	7.4	IK	55	普通	灰黄	志戸呂系 鉄化粧後灰釉施釉 鎬状施文 脚剥落	216-2
87	陶器	徳利	3.3	[3.2]	―	K	5	普通	褐灰	瀬戸美濃系 内外面柿釉	
88	陶器	徳利	3.2	[4.6]	―	IK	10	良好	灰白	瀬戸美濃系 外面灰釉	
89	陶器	徳利	―	[5.0]	(7.6)	IK	5	普通	灰白	瀬戸美濃系 外面灰釉 釘書き「屋」	216-3
90	瓦質土器	火鉢	20.1	7.4	17.2	CHIK	95	普通	灰白	底部シワ状痕	216-4
91	瓦質土器	火鉢	(22.6)	[6.5]	17.3	CGHI	35	普通	にぶい黄橙 黄灰	やや酸化炎焼成 口縁部二次敲打痕	
92	瓦質土器	火鉢	(27.4)	15.2	(23.6)	CG	45	普通	灰白 灰	砂目底 脚穿孔2遺存 やや酸化炎焼成 口縁部二次敲打痕 底部二次穿孔 内面下位火箸状痕	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
93	瓦質土器	火鉢	28.5	[11.1]	―	CEHIK	35	普通	にぶい橙 黄灰		
94	瓦質土器	火鉢	―	[7.0]	―	CEHI	25	普通	にぶい橙 黄灰	砂目底 内底部墨書「カ□」わずかに火箸状痕 やや酸化炎焼成	216-5 238-7
95	瓦質土器	火鉢	(27.2)	10.9	(23.0)	CEFHIK	35	普通	にぶい黄橙 黄灰	底部シワ状痕 やや酸化炎焼成 SK456と接合	
96	瓦質土器	火消壺	21.5	16.6	16.0	CIK	75	普通	にぶい橙 灰白	底部シワ状痕 内外面煤付着 被熱 SK513と接合	216-6
97	瓦質土器	火鉢	30.2	10.9	24.0	CIK	40	普通	灰白	底部シワ状痕 外面ヘラナデ後一部ヘラミガキ 燻す 口縁部二次敲打痕	
98	瓦質土器	竈	(31.6)	26.4	(25.8)	CI	70	普通	灰黄	底部シワ状痕 燻す SK456･513と接合	216-7
99	瓦質土器	焙烙	(30.9)	[5.6]	(28.4)	ACHIK	20	良好	明赤褐	底部シワ状痕 外面煤付着 やや丸底になる	
100	瓦質土器	焙烙	(40.4)	4.9	(37.6)	CHIK	15	普通	灰白	底部シワ状痕 燻す 101と同一個体ヵ	
101	瓦質土器	焙烙	(39.0)	4.9	(35.5)	CIK	15	普通	灰白	底部シワ状痕 燻す 100と同一個体ヵ	216-8
102	瓦質土器	焙烙	(35.2)	5.3	(32.5)	CEHIK	10	普通	灰黄	底部シワ状痕 外面煤付着 103と同一個体ヵ	
103	瓦質土器	焙烙	―	[0.6]	―	CEI	5	普通	灰黄	底部シワ状痕 内面刻印「大極上」102と同一個体ヵ	217-1
104	瓦質土器	焙烙	37.5	5.5	34.7	CHI	80	普通	灰白	底部シワ状痕 内面刻印「[大]極上」燻す 外面煤付着	217-2
105	瓦質土器	焙烙	37.2	5.3	34.8	CHI	95	普通	浅黄橙	砂目底 内底面刻印「(菊花文)[大極上]」外面煤付着 やや酸化炎焼成	217-3
106	瓦質土器	焙烙	37.8	6.4	34.7	CFI	95	普通	灰白	底部シワ状痕 内面ヘラミガキ 燻す 外面煤付着	217-4
107	瓦質土器	灯明皿	(8.6)	[2.1]	(4.0)	AI	20	普通	灰	江戸在地系 底部糸切痕 表裏面キラ粉付着 燻す	
108	かわらけ	小皿	7.9	1.4	3.1	AI	65	普通	褐灰	底部離糸切痕	217-5
109	かわらけ	小皿	(7.5)	1.5	(3.9)	AK	20	良好	にぶい黄橙	江戸在地系 底部糸切痕 胎土粉質	
110	須恵器	瓶類	―	[5.5]	(10.0)	IK	15	良好	灰		
111	瓦	桟瓦	長さ[17.0] 幅24.1			AIK	-	普通	灰白	厚さ2.1cm 高さ4.4cm	
112	瓦	平瓦	長さ[14.9] 幅23.5			AIK	-	普通	灰白	被熱 厚さ2.2cm 高さ4.2cm	
113	瓦	平瓦ヵ	長さ5.0 幅6.9			AIK	-	普通	灰白	砥具転用 厚さ1.8cm	248-5

外は施釉される。48は灰釉に大きく貫入が入る。

51・52は太白手丸碗である。染付は、滲みが多い。

第491図53～56までは、京都信楽系陶器の半球形の丸碗である。53は外面に緑･青で草花文、赤で格子状の文が上絵付けされる。54・55はワンポイントで鉄絵が施される。56は絵付けがみられないものである。胎質は緻密・硬質で、釉の光沢は強い。高台部はやや「ハ」字状に開く。

57・58は瀬戸美濃系陶器の坏で灰釉が施される。58には口縁部下に呉須絵の痕跡があるが、文様は崩れている。また､外面に煤が付着するが、胎土自体に被熱の痕跡は認められない。

59～61までは瀬戸美濃系陶器の皿である。59は白色味の強い灰釉、60は黄色味が強い灰釉が施される。ともに青の呉須で摺絵が入れられており、文様も似ている。内面の底面外周に僅かな稜を有す。

61は鉄絵の摺絵が施されるもので、器壁は厚手である。釉は黄色味が強い。やはり内面の底面外周に稜を有す。

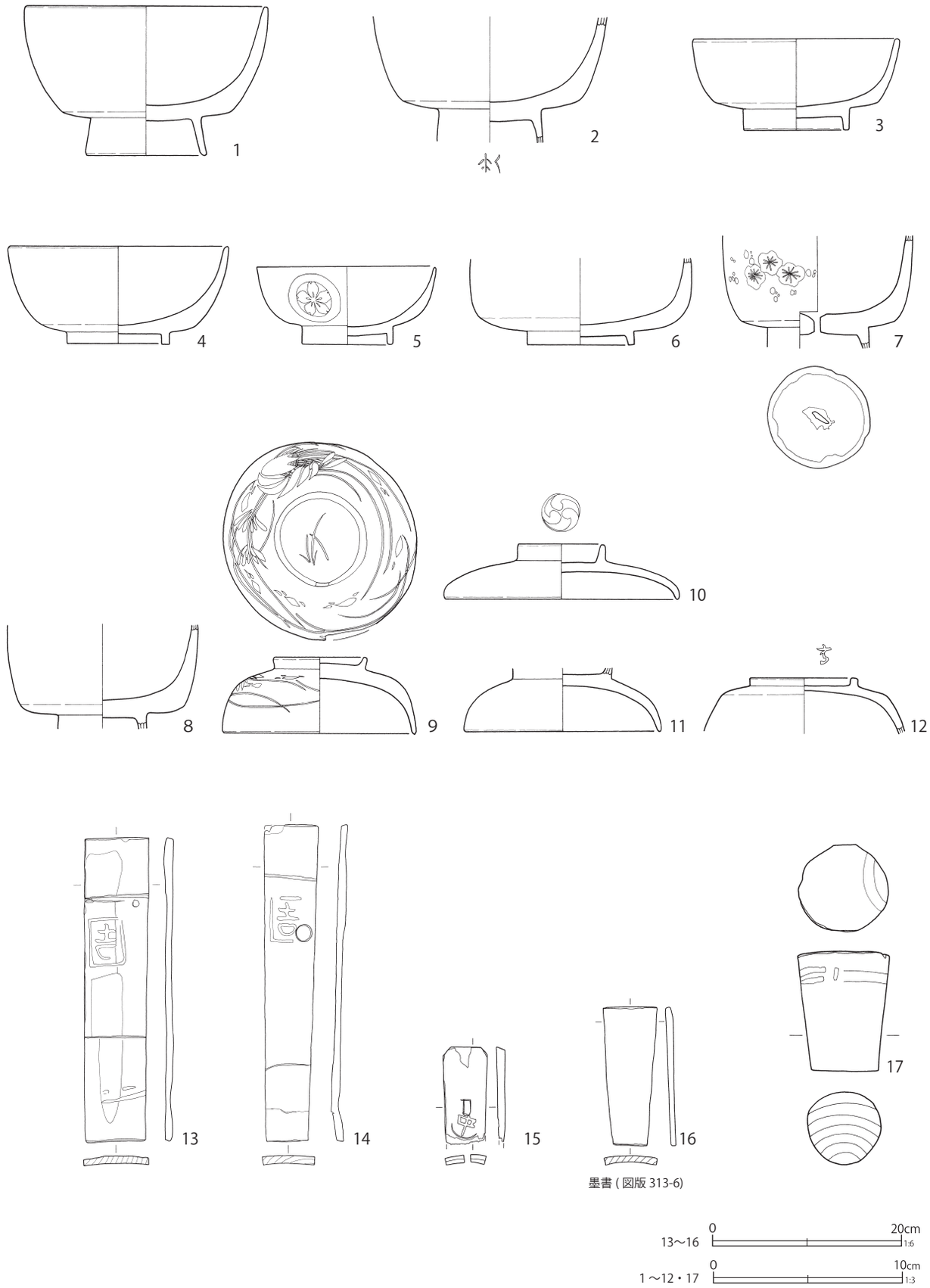
62～69までは、瀬戸美濃系陶器の柿釉灯明皿である。このうち、62～65までは油皿である。

62はやや深手で、柿釉はやや紫色味を帯び、光沢は鈍い。口縁部は歪みが大きい。内底面には径4.4㎝の重ね焼き痕がある。

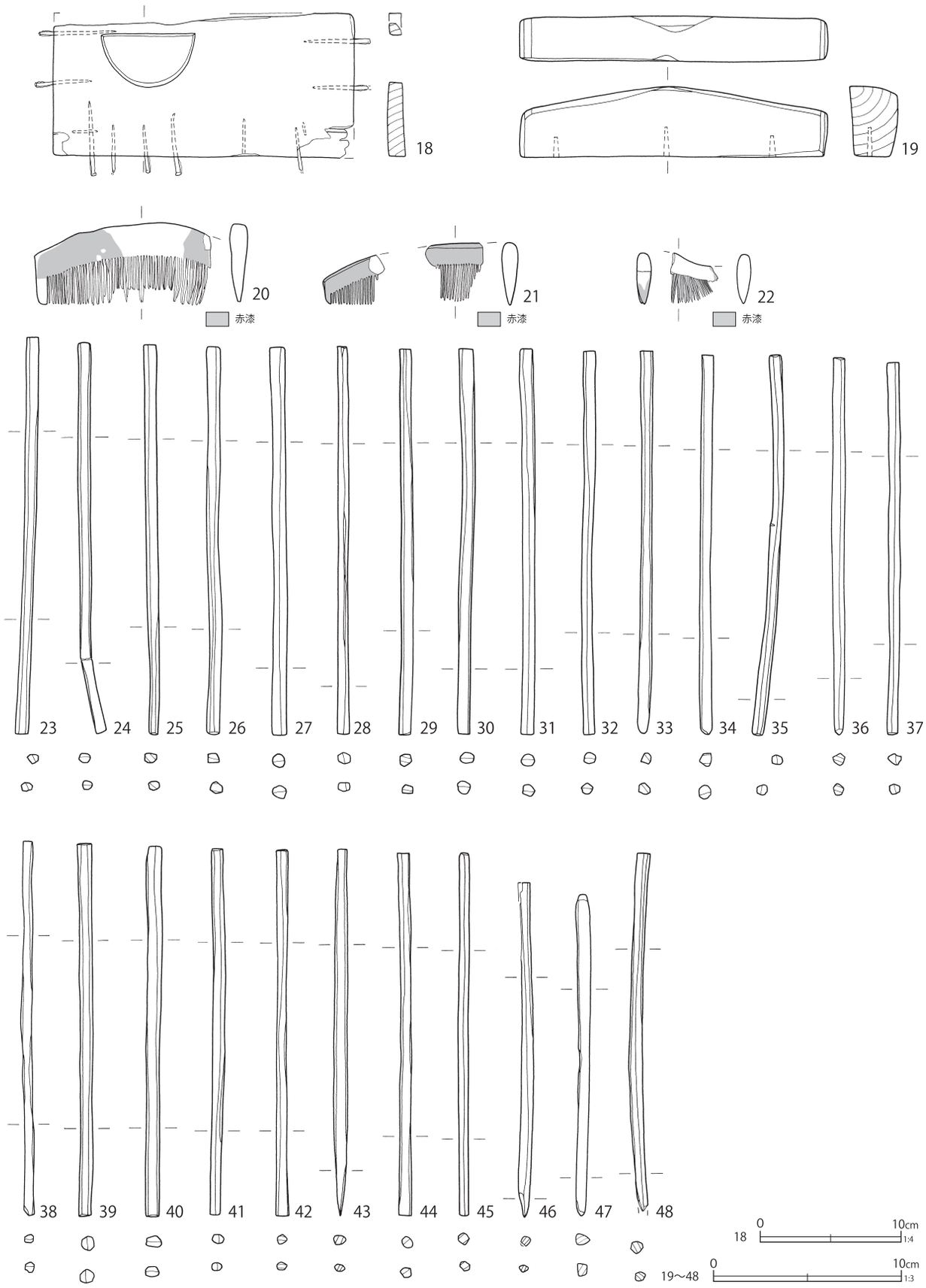
63も器形はやや深手である。柿釉は薄く施され、黄色味を帯びる。内面に径4.1㎝の重ね焼き痕が残る。

64は小形のものである。柿釉は暗色味が強く、光沢はほとんど無い。内面の重ね焼き痕は確認できない。65は器形が厚手・扁平のものである。明るい色調の柿釉が施される。内底面に径4.2㎝の重ね焼き痕がある。

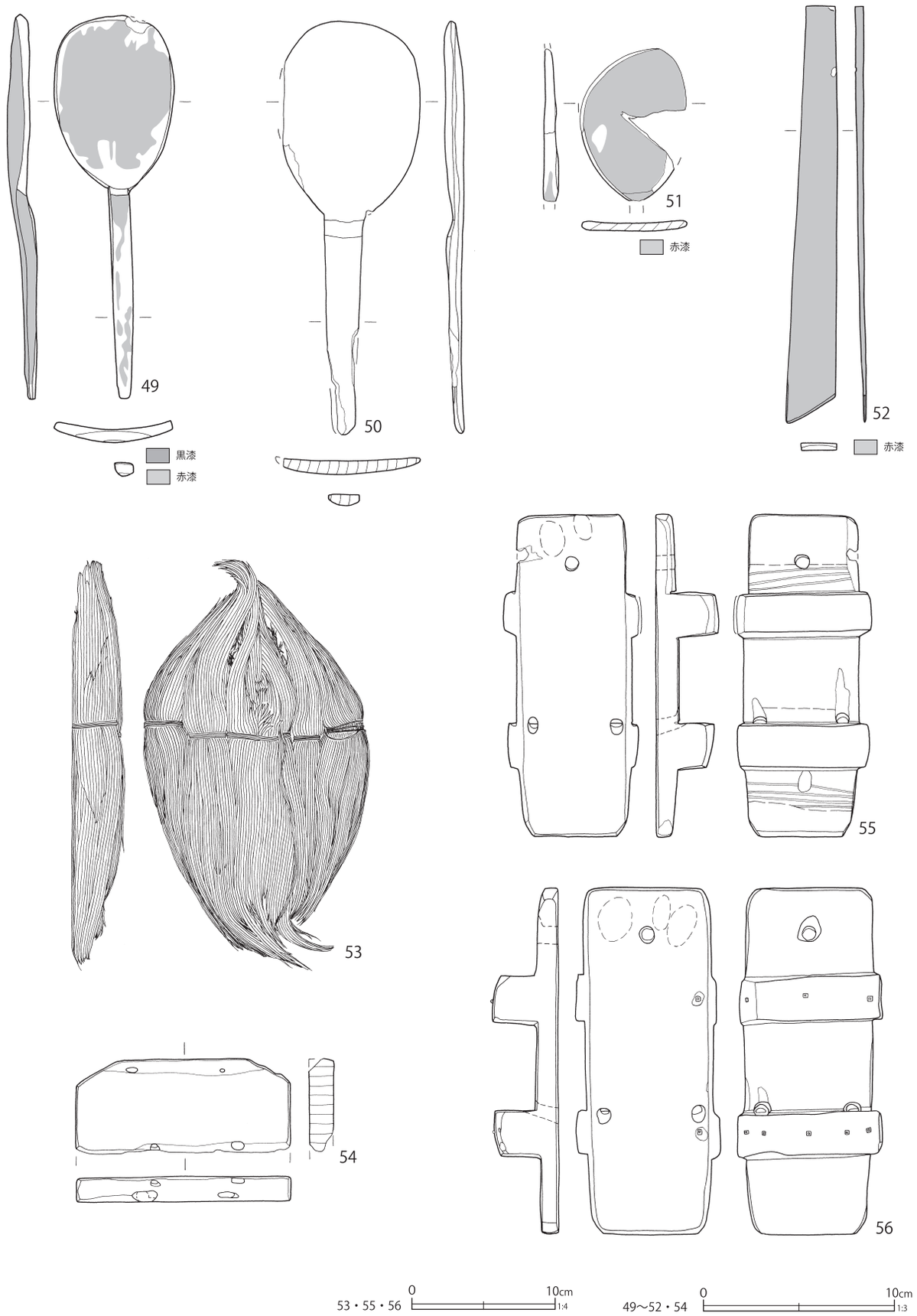
66～69までは油受皿である。66は光沢がほとんど無い柿釉が､薄く掛けられる。色調は暗く、



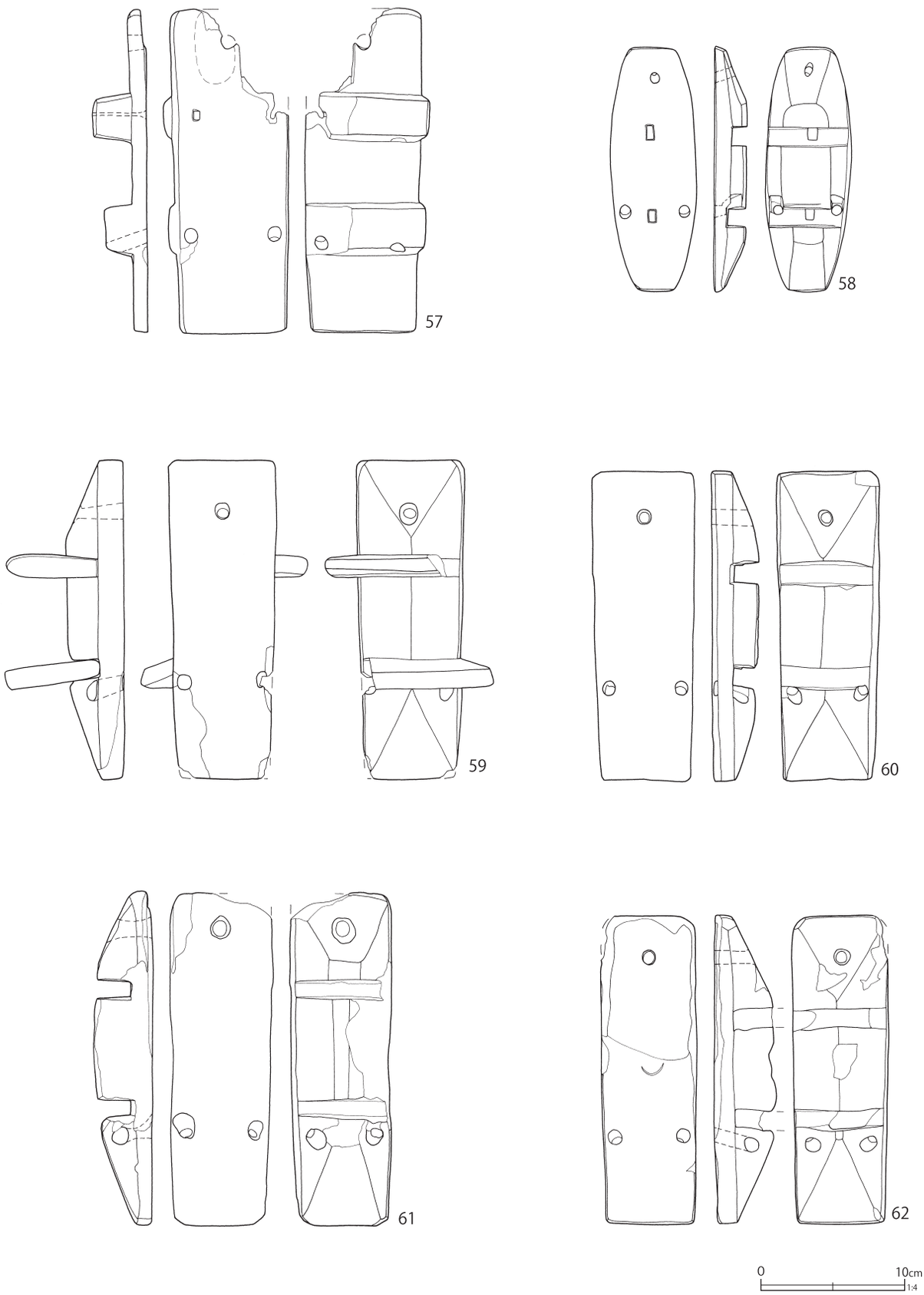
第 498 図　第 504 号土壙出土遺物（11）



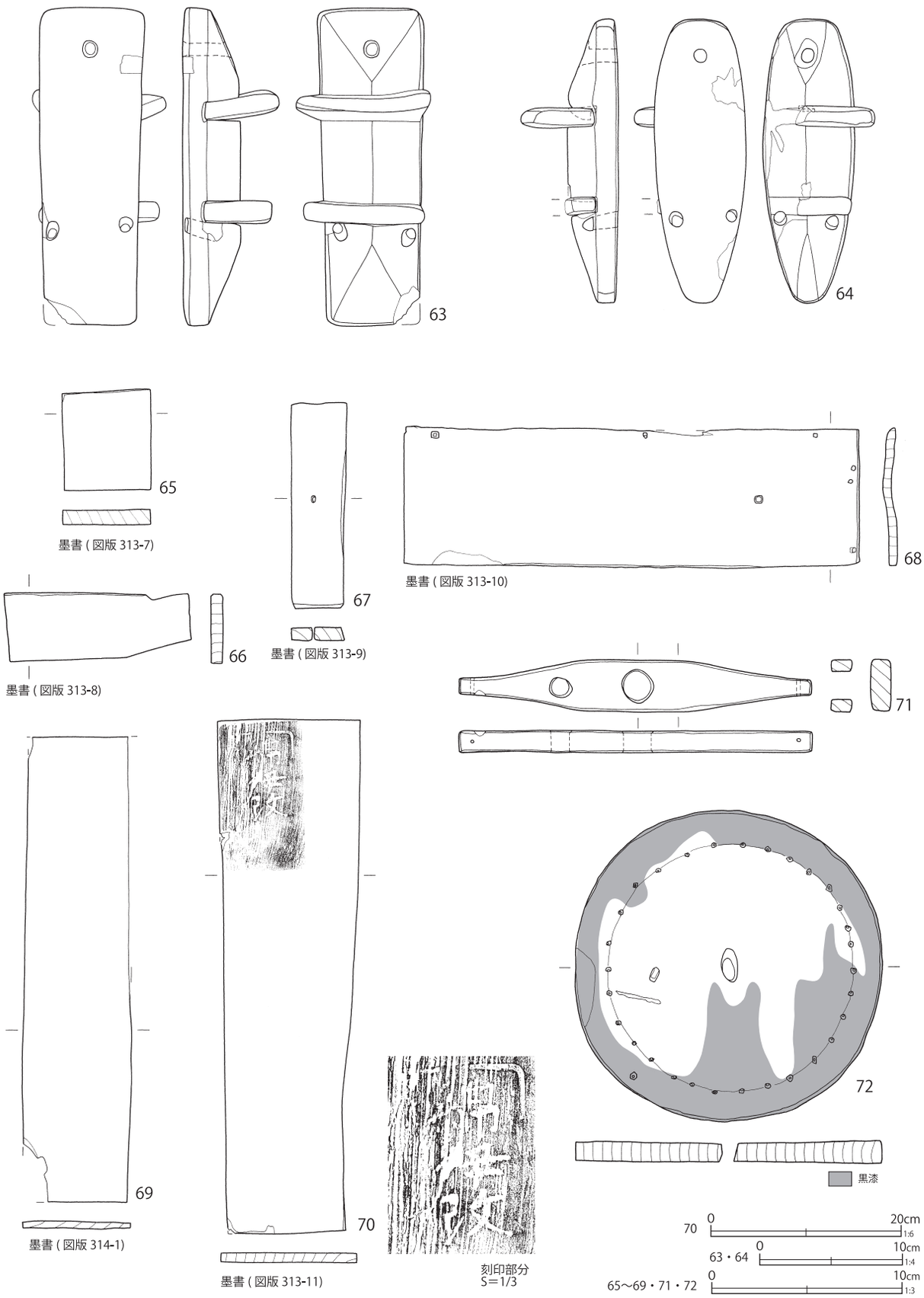
第 499 図　第 504 号土壙出土遺物（12）



第 500 図　第 504 号土壙出土遺物（13）



第 501 図　第 504 号土壙出土遺物（14）



第 502 図　第 504 号土壙出土遺物（15）

第 174 表　第 504 号土壙出土遺物観察表（２）（第 498 ～ 502 図）

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	口径 / 径	高さ	底径	木取り	備考	図版
1	木製品	漆椀	－	－	－	(12.7)	7.8	(6.2)	横木取り	内外面赤漆　口唇部黒漆　歪みあり	
2	木製品	漆椀	－	－	－	－	[6.6]	－	横木取り	内外面赤漆　高台内文字（黒漆）	
3	木製品	漆椀	－	－	－	(11.0)	4.7	5.6	横木取り	内外面赤漆	
4	木製品	漆椀	－	－	－	11.6	5.1	5.6	横木取り	内外面赤漆	
5	木製品	漆椀	－	－	－	(9.4)	4.0	4.8	横木取り	内面赤漆　外面黒漆　外面３箇所紋（金）	269-7
6	木製品	漆椀	－	－	－	－	[4.5]	(5.6)	横木取り	内外面赤漆	
7	木製品	漆椀	－	－	－	－	[5.9]	－	横木取り	内面赤漆　外面黒漆　外面文様（赤漆） 高台内二次穿孔	269-8
8	木製品	漆椀	－	－	－	－	[5.4]	－	横木取り	内外面赤漆	
9	木製品	漆椀蓋	－	つまみ径 4.8		10.0	4.0	－	横木取り	内外面赤漆　口唇部・つまみ端部黒漆　外面文様（黒漆）	269-9
10	木製品	漆椀蓋	－	つまみ径 4.6		(12.4)	2.9	－	横木取り	内外面赤漆　つまみ内紋（黒漆）	
11	木製品	漆椀蓋	－	つまみ径－		(10.4)	[3.3]	－	横木取り	内外面赤漆　口縁部黒漆	
12	木製品	漆椀蓋	－	つまみ径 (5.7)		－	[2.6]	－	横木取り	内外面赤漆　つまみ内文字（黒漆）	
13	木製品	桶・樽	32.1	6.9	0.8	－	－	－	板目	側板　加工痕　木釘１　焼印「固」	
14	木製品	樽	33.5	5.6	0.8	－	－	－	板目	側板　孔１　焼印「固」	
15	木製品	桶	[10.2]	4.7	0.9	－	－	－	板目	側板　長方形の孔　焼印「㊥」	
16	木製品	桶・樽	14.5	5.7	0.7	－	－	－	板目	側板　表面墨書（文字資料 120）	
17	木製品	栓	－	－	－	4.9	6.3	－	分割材	側面圧痕　上面焼印	
18	木製品	箱	10.2	21.4	1.1	－	－	－	板目	半円形の孔　鉄釘 12	269-10
19	木製品	蓋	3.7	16.3	2.6	－	－	－	板目	把手　下面木釘３	
20	木製品	櫛	[9.4]	4.3	0.9	－	－	－	不明	表裏面赤漆	269-11
21	木製品	櫛	[8.5]	3.1	0.9	－	－	－	板目	全面赤漆	269-12
22	木製品	櫛	[2.5]	2.1	0.8	－	－	－	柾目	全面赤漆	
23	木製品	箸	21.1	0.7	0.5	－	－	－	削出棒状		270-1
24	木製品	箸	20.8	0.7	0.5	－	－	－	削出		270-1
25	木製品	箸	20.7	0.6	0.5	－	－	－	削出棒状		270-1
26	木製品	箸	20.6	0.7	0.6	－	－	－	削出棒状		270-1
27	木製品	箸	20.6	0.8	0.8	－	－	－	削出		270-1
28	木製品	箸	20.5	0.7	0.6	－	－	－	分割棒状		270-1
29	木製品	箸	20.5	0.6	0.6	－	－	－	削出棒状		270-1
30	木製品	箸	20.5	0.8	0.7	－	－	－	削出		270-1
31	木製品	箸	20.5	0.7	0.7	－	－	－	削出		270-2
32	木製品	箸	20.4	0.6	0.6	－	－	－	削出		270-2
33	木製品	箸	20.3	0.6	0.6	－	－	－	削出	先端炭化	270-2
34	木製品	箸	20.1	0.6	0.7	－	－	－	削出	先端炭化	270-2
35	木製品	箸	20.0	0.6	0.7	－	－	－	分割棒状		270-2
36	木製品	箸	20.0	0.6	0.6	－	－	－	削出	先端炭化	270-2
37	木製品	箸	19.8	0.6	0.6	－	－	－	削出		270-2
38	木製品	箸	19.8	0.5	0.5	－	－	－	削出		270-2
39	木製品	箸	19.7	0.7	0.7	－	－	－	分割棒状		270-2
40	木製品	箸	19.7	0.8	0.6	－	－	－	削出		270-3
41	木製品	箸	19.5	0.7	0.5	－	－	－	削出		270-3
42	木製品	箸	19.5	0.7	0.5	－	－	－	削出		270-3
43	木製品	箸	19.4	0.6	0.5	－	－	－	削出	炭化	270-3
44	木製品	箸	19.2	0.7	0.6	－	－	－	削出		270-3
45	木製品	箸	19.1	0.8	0.5	－	－	－	分割棒状		270-3
46	木製品	箸	17.7	0.6	0.6	－	－	－	削出	炭化	270-3
47	木製品	箸	17.0	0.7	0.6	－	－	－	削出	上下端炭化	270-3
48	木製品	箸	[19.0]	0.7	0.6	－	－	－	削出	炭化	270-3
49	木製品	杓子	20.0	6.2	1.4	－	－	－	板目	全面赤漆	270-4
50	木製品	杓子	21.6	7.0	0.7	－	－	－	柾目		270-5
51	木製品	杓子	[7.9]	[5.4]	0.5	－	－	－	板目	全面赤漆	270-6

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	口径 / 径	高さ	底径	木取り	備考	図版
52	木製品	箆	21.8	2.5	0.4	―	―	―	板目	全面赤漆	270-7
53	木製品	箒	28.7	15.7	3.7	―	―	―	―	棕櫚 針金 4 本巻 5 束	
54	木製品	火打金	[4.9]	11.2	1.3	―	―	―	柾目	柄 穴 6 一部炭化	270-8
55	木製品	下駄	22.5	8.1	―	―	4.4	―	板目	連歯下駄 裏面前後に線状圧痕 7 条	
56	木製品	下駄	24.1	8.3	―	―	4.6	―	板目	連歯下駄 歯に鉄釘 8	
57	木製品	下駄	22.6	8.0	―	―	3.8	―	板目	連歯下駄 鉄釘 1 鉄釘痕 1	
58	木製品	下駄	17.1	5.9	―	―	[2.2]	―	板目	露卯下駄	270-10
59	木製品	下駄	22.2	7.5	―	―	8.3	―	板目	陰卯下駄	
60	木製品	下駄	21.6	7.1	―	―	[3.2]	―	板目	陰卯下駄	
61	木製品	下駄	23.2	7.1	―	―	[4.2]	―	板目	陰卯下駄	
62	木製品	下駄	21.5	6.6	―	―	[4.3]	―	板目	陰卯下駄 焼印	
63	木製品	下駄	22.3	7.4	―	―	6.7	―	柾目	陰卯下駄	
64	木製品	下駄	19.8	6.4	―	―	7.0	―	柾目	陰卯下駄 歯の側面に楔加工 ケヤキ	
65	木製品	木札	5.2	4.6	0.8	―	―	―	板目	表裏面墨書（文字資料 121）	
66	木製品	木札	3.6	9.8	0.6	―	―	―	板目	表面墨書（文字資料 122）	
67	木製品	木札	10.7	2.8	0.7	―	―	―	板目	表裏面墨書（文字資料 123）	
68	木製品	木札	7.3	23.9	0.4	―	―	―	板目	裏面罫線 表裏面墨書（文字資料 124）	
69	木製品	木札	24.3	5.7	0.4	―	―	―	板目	表面墨書（文字資料 125）	
70	木製品	木札	54.4	15.1	1.0	―	―	―	板目	焼印「（長方形枠に）綿紐ヵ改」墨書（文字資料 126）	271-1
71	木製品	不明	2.6	18.5	1.0	―	―	―	板目	木釘 1 木釘孔 1 孔 2	270-9
72	木製品	不明	16.3	16.0	1.2	―	―	―	柾目	全面黒漆（上面ムラあり） 中央孔 1 上面円形の線刻・孔 31	271-2

白斑がみられる。受部は高く突出し、上端に重ね焼き痕が認められる。切り込みは長方形である。外面には重ね焼き痕がある。

68 はやや深身のものである。釉は少し紫色味を帯びる柿釉で、光沢はあまり無く、白斑が入る。受部切り込みは長方形である。受部上端に重ね焼き痕があり、径は 7.6 ㎝である。外面の重ね焼き痕は径 7.1 ㎝である。

69 はやや扁平で、底部が厚い。釉は明るい色調で光沢がある。やや施釉にムラがある。受部切り込みは「U」字形である。受部上端に重ね焼き痕があり、径は 7.4 ～ 7.6 ㎝である。また、外面には径 8.0 ㎝の重ね焼き痕がある。

70 ～ 75 までは、志戸呂系陶器の灯明皿である。このうち 70 ～ 72 は油皿である。70 は扁平な器形で、口縁部に若干の歪みがある。体部外面下位と底部は回転ケズリ痕が残される。72 はやや深身のものである。体部外面はヨコナデ（あるいはロクロナデ）で処理され、ケズリ痕跡は認められない。底部には糸切痕が残される。

73 ～ 75 までは油受皿である。73 は、受部の切り込み（孔）が対向して２箇所認められる。体部外面下位と底部には回転ケズリ痕が残される。

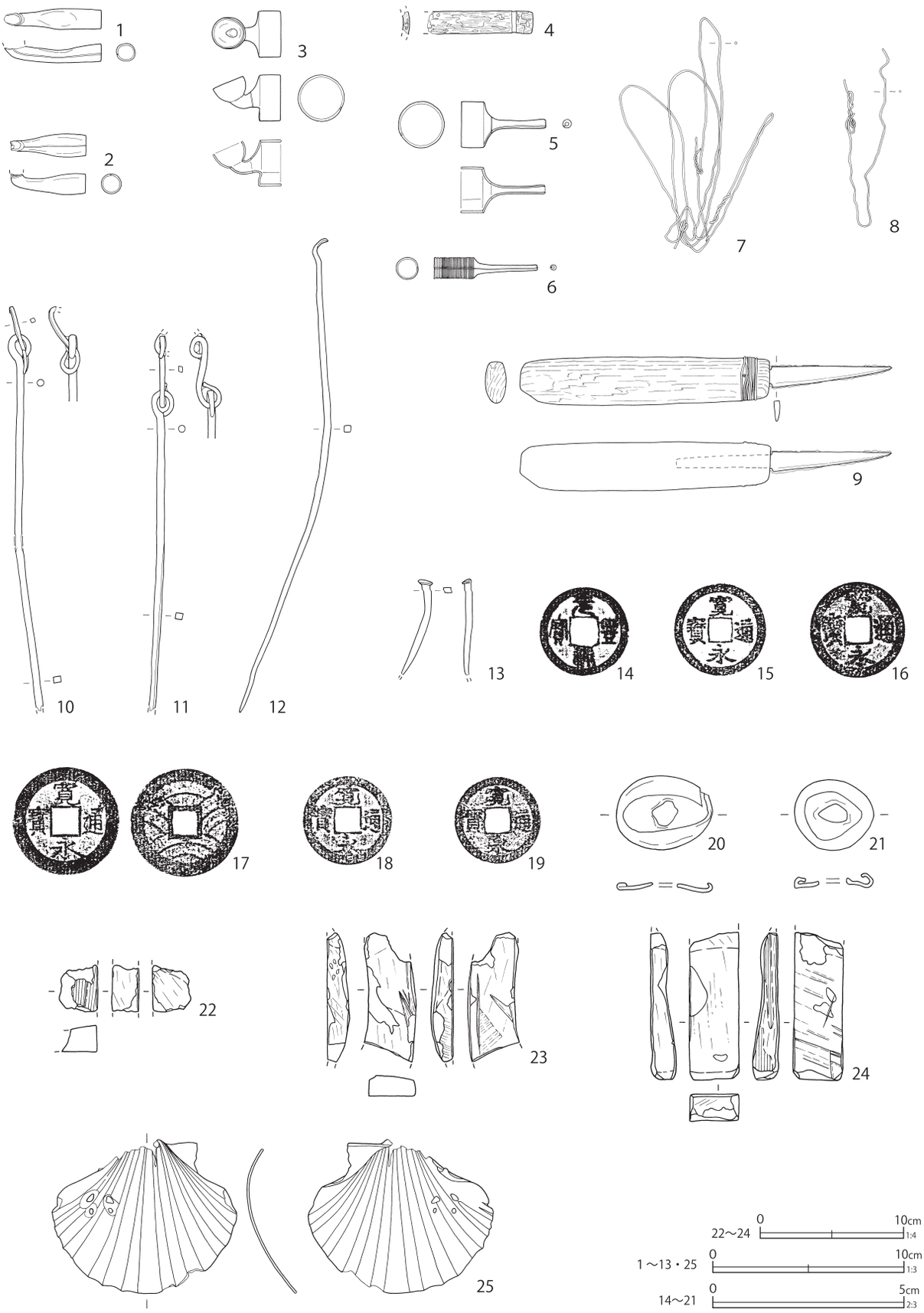
74・75 は 73 より小形で、受部の切り込み（孔）は１箇所のみである。体部外面下位と底部は回転ケズリ痕が残される。

第 492 図 76 ～ 78 までは瀬戸美濃系陶器の鉢である。76 は内面が蛇の目状釉剥ぎされた灰釉の鉢である。高台は付け高台である。

77 は内面に櫛歯波状文が施文される鉢である。内面には灰釉を拭って３箇所の目跡が残される。本来は４箇所あったものと推測される。対応して高台部畳付にも目跡が残っている。

78 は口縁部を歪ませて片口状にしている。灰釉には貫入が多い。底部は削り込んで成形する。

79・80 は瀬戸美濃系陶器の片口鉢である。いずれも黄色味を濃く帯びた灰釉が施される。79 は片口を欠損する。内面に２箇所の目跡が残され、本来は３箇所あったものであろう。底部に墨書「イ」が認められる。80 は内底面に３箇所の目跡



第 503 図　第 504 号土壙出土遺物（16）

第 175 表　第 504 号土壙出土遺物観察表（３）（第 503 図）

番号	種別	器種	法量	備考	図版
1	銅製品	煙管	長さ 5.1 小口径 1.0 × 0.9 重さ 5.9	雁首 鍍金あり 火皿欠損	
2	銅製品	煙管	長さ［3.9］小口径 1.1 × 1.0 重さ 4.7	雁首 鍍金あり 火皿欠損	
3	銅製品	煙管	長さ 3.6 火皿径 1.7 × 1.6 小口径 2.4 重さ 13.6	雁首 鍍金あり	286-3
4	木製品	煙管の羅宇	長さ［5.5］幅 1.2	5 の羅宇	
5	銅製品	煙管	長さ 4.4 小口径 2.4 口付径 0.5 重さ 11.1	吸口 鍍金あり	286-3
6	銅製品	煙管	長さ 5.4 小口径 1.1 口付径 0.3 重さ 6.6	吸口 鍍金あり	286-1
7	銅製品	針金	縦 12.3 横 8.0 厚さ 0.1 重さ 4.2		
8	銅製品	針金	縦 9.4 横 2.4 厚さ 0.1 重さ 1.3		
9	鉄と銅	刀子	長さ 19.5 刃長 11.3 刃幅 1.1 背幅 0.3 重さ 49.1	柄は木製 針金が銅製	288-4
10	鉄製品	火箸	長さ［21.2］厚さ 0.4 重さ 11.4	一部欠失	287-5
11	鉄製品	火箸	長さ［19.7］厚さ 0.4 重さ 9.5	一部欠失	287-5
12	鉄製品	火箸	長さ 24.9 厚さ 0.4 重さ 13.4		
13	鉄製品	釘	長さ［5.0］幅 0.4 厚さ 0.3 重さ 3.2	一部欠失	
14	銅製品	銭貨	径 22.5 厚さ 1.1 重さ 2.9	元豊通寶	
15	銅製品	銭貨	径 24.4 厚さ 1.4 重さ 3.8	寛永通寶（古）	288-7
16	銅製品	銭貨	径 25.2 厚さ 1.3 重さ 3.6	寛永通寶（古）	
17	銅製品	銭貨	径 28.6 厚さ 1.2 重さ 4.6	寛永通寶（新）11 波	288-9
18	銅製品	銭貨	径 23.6 厚さ 1.1 重さ 2.8	寛永通寶（新）	
19	銅製品	銭貨	径 22.9 厚さ 0.9 重さ 2.4	寛永通寶（新）	
20	銅製品	雁首銭	径 2.5 × 1.9 厚さ 0.2 重さ 3.6	鍍金あり	288-6
21	銅製品	雁首銭	径 2.1 × 1.8 厚さ 0.4 重さ 2.3	鍍金あり	288-6
22	石製品	砥石	長さ［3.2］幅［2.7］厚さ 1.8 重さ 19.0	流紋岩 裏面ノコギリ痕 砥面 2	
23	石製品	砥石	長さ［8.9］幅 3.6 厚さ 1.5 重さ 65.9	流紋岩 裏面削痕 1 ヶ所 砥面 4 表・裏・側面刃物痕多数	
24	石製品	砥石	長さ［10.2］幅 3.4 厚さ 1.8 重さ 87.9	流紋岩 側面ノコギリ痕 裏面幅広工具痕 砥面 4 刃物痕あり 被熱（黒色化）	295-1
25	貝製品	貝杓子	長さ 8.0 幅 9.7 厚さ 0.1 重さ 22.2	イタヤガイ 穿孔 4	299-2

を有す。

81・82 は瀬戸美濃系陶器の擂鉢である。81 は口縁部に段差があるもので内面の擂目は一単位 14 条である。外面底部と内底面に僅かに目跡とみられる痕跡が残るが、明瞭ではない。底部の釉は拭き取られる。

82 はやや小形で、口縁部が内側に折り返されて玉縁状になるものである。内面の擂目は一単位 15 条である。外面底部と内底面に目跡が残される。底部の釉の拭き取りは甘く、ほとんど釉が残っている。

第 493 図 83 は備前系陶器の擂鉢である。内面は一単位８条の擂目を有す。外面はケズリをヨコナデで消している。

84 は瀬戸美濃系陶器の底部で、小形の壺甕類と思われる。内面は薄く柿釉が施され、上位から漆黒色の鉄釉が流れ込む。外面は鉄釉が施される。

85 は瀬戸美濃系陶器で、小形の香炉である。黄色味の強い灰釉が施される。

86 は志戸呂系陶器と思われる香炉である。釉下に薄く鉄化粧が施される。底部を回転ケズリで処理する。脚が剥がれ落ちた痕跡が認められる。

87 ～ 89 までは瀬戸美濃系陶器の徳利である。87 は柿釉が施された頸部の破片である。88 は灰釉が施された頸部の破片である。89 は底部から胴部下位の破片で、灰釉は黄色味が強い。底部の灰釉は拭き取られる。太い釘書きで「屋」の文字が書かれる。

第 493 図 90・91 は瓦質土器の丸火鉢である。90 の体部の内面上位には、強いヨコナデが筋状に残る。下位は工具ナデが廻る。内底面は平滑にヘラナデされる。外面下位はケズリ痕が残される。底部には、やや扁平な楕円形の脚が３箇所に付く。

91 は接点が無い体部の二破片が出土した。内

面は強いヨコナデだが、口縁部以下は工具ナデの可能性もある。外面も体部はやや粗くヨコナデ痕が残され、やはり工具ナデの可能性もある。体部下位には、僅かに指圧痕とシワ状痕が残される。最下位のみ、丁寧にナデ調整されている。90 と同様に、楕円形でやや扁平な脚が付く丸火鉢であろう。胎土には角閃石・赤色粒子・白色粒子が目立つ。口縁部には二次的な敲打痕が多い。

92 ～ 94 までは輪高台状の脚を有す瓦質土器の火鉢である。いずれも一見、酸化炎焼成にみえるが、断面中心は灰色、周囲は灰白色を呈す。

92 の内面は口縁部がヨコナデ、以下は三段のヘラナデで整形され、下位に火箸状痕跡が認められる。外面は細い沈線で横区画をつくり、工具ナデが施される。このヘラナデは沈線を越えて体部下位まで及ぶが、後にヨコナデで消される。脚部には穿孔２箇所が残るが、対角線上とはややずれて穿たれる。胎土には角閃石が多く含まれる。胎土の色調は前述の通りだが、表裏面のみ橙色味を帯びる。

93 は口縁部～体部の破片で、口縁部は内側に折り返されて、丸く収められる。内面上位はヨコナデ、内面下位にはヘラナデが三段施される。外面は全体に丁寧にナデ調整される。

94 は体部下位～脚部の破片である。体部外面は丁寧なヨコナデで調整されており、92 と類似するが、沈線が廻る点が異なる。内面下位に火箸状痕跡がみられ、内底面には「カ□」の墨書が認められる。胎土には角閃石が多く含まれる。

95 は底部がべた底状の火鉢にみえるが、僅かに脚の端部が残っており、三足の脚を有すものだったことが分かる。内面は口縁部付近に剥離が多いが、上位はヨコナデ、下端は弱いヘラナデが施される。外面は、口縁部下に凹線状の窪みを有す。以下は弱い指圧痕がヨコナデで消されるが、調整は甘く粗雑である。下部に沈線が巡り、以下はケズリが施される。色調はにぶい黄橙色で酸化炎焼成したようにみえる。ただし、断面の一部が黄灰色や暗色を呈する。

第 494 図 96 は瓦質土器の火消壺で、口縁部が外反して開く「甕形」のものである。肩部内面にはヘラナデが施されるが、以下はヨコナデで調整される。外面は体部上位が丁寧なヘラナデで、細かな筋状のナデ痕跡が残る。下位はあまり整形・調整されていないが、下端部にはケズリが施される。胎土に角閃石が多く含まれる。上位を中心に煤が多く付着する。下位は一部赤く変色しており、被熱している可能性がある。

97 は瓦質土器の角火鉢である。底部にシワ状痕が残り、円柱状の脚が３箇所（推定４箇所）に付く。外面はヘラナデ、一部に光沢があるヘラミガキが施される。内底面、内面の体部はヘラナデで処理される。口縁部の内面は、ヨコナデが施され、端部に敲打痕が認められる。胎土に角閃石が多く含まれる。燻されて表面は灰色である。

98 は瓦質土器の竈である。内面の体部中位の３箇所に、突起が付くものである。底部はシワ状痕が残り、楕円形の脚が３箇所につく。外面の大部分にヘラナデが施され、下端部付近に幅の広いケズリが施される。口縁部付近はヨコナデで処理される。内底面は平滑なナデ調整で、内面の体部はヘラナデが施される。胎土に角閃石が含まれる。

第 495 ～ 497 図 99 ～ 106 までは瓦質土器の焙烙である。

第 495 図 99 は底部がやや丸底気味になるものである。口縁部の断面は角形で、外面側の端部が突出する。底部には大きく明瞭なシワ状痕が残り、外面の体部下位にケズリが施される。内面の体部には筋状のナデがみられる。体部から底部にかけて煤が付着する。

100・101 は同一個体と思われる。100 は内耳が１箇所、101 は２箇所に遺存する。底部にやや大きいシワ状痕が残る。外面下位は弱いヘラナデでシワ状痕が消されるが、シワは大きく残ってい

る。外面上位及び内面は、ヨコナデで処理される。口縁部の断面は角形で、端部はやや突出する。胎土に角閃石が多く含まれる。

102 は内耳が全て欠損しているものである。底部にシワ状痕が残る。外面下端部は、幅の広いケズリが施される。その直上は、弱いヘラナデでシワ状痕が消されるが、シワは大きく残っている。外面上位は強いヨコナデで処理される。内底面は平滑で、やや光沢のある粗いミガキ状である。その周囲には、回転ナデが施される。口縁部の断面は、丸みのある角形である。胎土に角閃石が含まれる。

103 は 102 と同一個体と思われる底部破片で、内面に刻印「大極上」がみられる。

104 は、内底面に「大極上」と思われる刻印が認められるものである。底部に大きなシワ状痕が残る。外面の下端部は幅の広いケズリ、その直上は粗いヘラナデでシワ状痕が消される。シワは、窪んだ部分を中心に残っている。内底面は弱いミガキが不規則に施され、内面の体部は強い筋状のナデがみられる。口縁部の断面は、角形である。胎土に角閃石がやや多く含まれる。

第 496 図 105 は、中央に菊花文と「大極上」と思われる刻印がみられるものである。底部は、横方向に擦痕がみられる砂目である。外面は、下端部にケズリ、その直上に弱いヘラナデが施され、体部のシワ状痕が消される。上位はヨコナデで処理される。内底面はヘラミガキ状で、強い光沢が認められる。内面の体部は、強い筋状のヨコナデが施される。やや酸化炎焼成で、表面は橙色味が強い。胎土に角閃石が含まれる。

第 497 図 106 の底部は、弱いナデ痕跡が認められるシワ状痕である。小さい種子状の圧痕がある。外面はシワ状痕を消すように、下端部に幅の広いケズリが施される。上位はヨコナデで処理される。内底面及び内面の体部は、幅広の弱いヘラミガキが施される。口唇部もミガキが施され、断面形はやや丸みのある角形である。胎土の角閃石はやや少ないが、軽石粒が含まれる。

107 は灯明皿（油受皿）で、瓦質土器である。細粒の雲母が含まれ、内外面にキラ粉が付着していることから、江戸在地系土器と思われる。

108・109 はかわらけ小皿で、108 は離し糸切痕、109 は回転方向不詳の糸切痕が残される。109 は粉質な胎土で、細粒な雲母が含まれる江戸在地系土器である。

第 497 図 110 は須恵器の瓶類である。栗橋宿跡では遺構に混入する形で、稀に古代以前の遺物が出土するが、西本陣跡では、その量が特に多い。

第 497 図 111 ～ 113 は瓦である。111 は桟瓦である。左側の隅切りの角が僅かに遺存する。112 は平瓦としたが、左側面の遺存状態が悪く、桟瓦の可能性もある。

113 は瓦を砥具に転用したものである。器種は不詳だが、平瓦や軒平瓦を転用したものかもしれない。擦痕が明瞭にみえる。

第 498 ～ 502 図は木製品である。第 498 図１～８までは漆椀で、このうち１～４は一文字腰椀である。１～３は強く腰が角張るが、４は張りが弱く、やや丸みを帯びる。１は内外面に赤漆、口唇部に黒漆が塗布される。２～４は内外面に赤漆が塗布され、２は高台内に黒漆で文字が書かれる。

５は腰丸椀で、見込みが浅く、高い高台を持つものである。内面に赤漆、外面に黒漆が塗布され、外面の３箇所に金で紋が描かれる。

６は腰が丸く張り、体部が垂直に立ち上がる筒形のもので、壺椀と思われる。内外面に赤漆が塗布される。高台は低く、端部は幅広の角形である。

７・８は筒状のもので、壺椀である。ともに腰が角張る。７は内面に赤漆、外面に黒漆が塗布され、外面には赤漆で文様が描かれる。高台内の中央に二次穿孔が認められる。８は内外面に赤漆が塗布される。

９～ 12 までは漆椀の蓋である。９は厚手で肩

部の丸みが強く、見込みが深いものである。内外面に赤漆、口唇部とつまみの端部には黒漆が塗布される。外面には黒漆で文様が描かれる。

10 は平椀の蓋である。薄手で、つまみ端部は丸い。内外面に赤漆が塗布され、つまみ内に黒漆で三巴文が描かれる。

12 は一文字腰椀の蓋で、肩部の角張りは強い。つまみの断面は幅広の角形である。内外面に赤漆が塗布され、つまみ内には黒漆で文字が書かれる。

13 は桶ないし樽、14 は樽の側板である。ともに焼印「吉」がみえる。14 の上部には栓の孔がみられる。15 は桶の側板の上部で、長方形の孔は把手を接続する部分である。焼印「㊥」がみえる。16 は桶ないし樽の側板である。17 は栓である。

第 499 図 18 は箱、19 は蓋の把手である。20 ～ 22 は櫛である。

23 ～ 48 までは箸で、ほとんどが寸胴箸だが、43・46 は先端が尖り、片口箸と思われる。33・34・36・43・46 ～ 48 には、被熱による炭化がみられる。

第 500 図 49 ～ 51 までは杓子で、 49 と 51 には赤漆が塗布される。52 は箆である。53 は箒である。54 は火打金の柄である。上端部と下部は欠損し、欠損部に穴がみられる。下面下部の長楕円形の穴は、金属部分（刃）の差し込み穴とみられる。一部が炭化している。

55・56 は連歯下駄である。55 は歯の前後に細い線状の圧痕が前に３条、後ろに４条認められる。56 は前後の歯に合計８箇所の鉄釘があり、補修したとみられる。

第 501 図 57 は連歯下駄である。前歯を鉄釘で補修している。58 は小形の露卯下駄である。西本陣跡では出土量が少ない。

59 ～ 62 までは陰卯下駄である。ほとんどが長方形のものである。62 には焼印の痕跡が僅かに認められる。

第 502 図 63・64 は陰卯下駄である。64 は楕円状のもので、歯の側面に楔状の加工が施される。樹種同定を行った結果、本体、差歯ともにケヤキが使われていた（Ⅴ　自然科学分析 10 参照）。

65 ～ 70 までは木札で墨書がみえる。判読できない、もしくは文意が取れないものが多い。70 は焼印「（長方形枠に）綿紐ヵ改」と墨書「長谷川伝兵衛」がみえる。

71・72 は器種不詳のものである。71 は跳ね釣瓶の部材に類似するが、幅が狭く、大・中・小の孔が認められる。

72 は円盤状のもので、全面に黒漆が塗布されているが、上面はムラがある。中央に孔、周囲に極小の孔（31 箇所）と、それらを繋ぐように細い線刻が認められる。

第 503 図１～３、５～ 21 は金属製品である。

１～３は銅製品で、煙管の雁首である。

４は木製品だが、煙管の羅宇であるため、挿図では金属製品とともに図示する。

５・６は銅製品で、煙管の吸口である。３～５は同一製品の可能性がある。

７・８は銅製の針金である。９は木柄に銅製の針金が巻き付いた鉄製の刀子である。

10 ～ 12 は鉄製の火箸である。13 は鉄釘である。

14 ～ 21 は銭貨である。14 は元豊通寳である。15 ～ 19 は寛永通寳である。そのうち 15・16 は古寛永である。20・21 は雁首銭である。

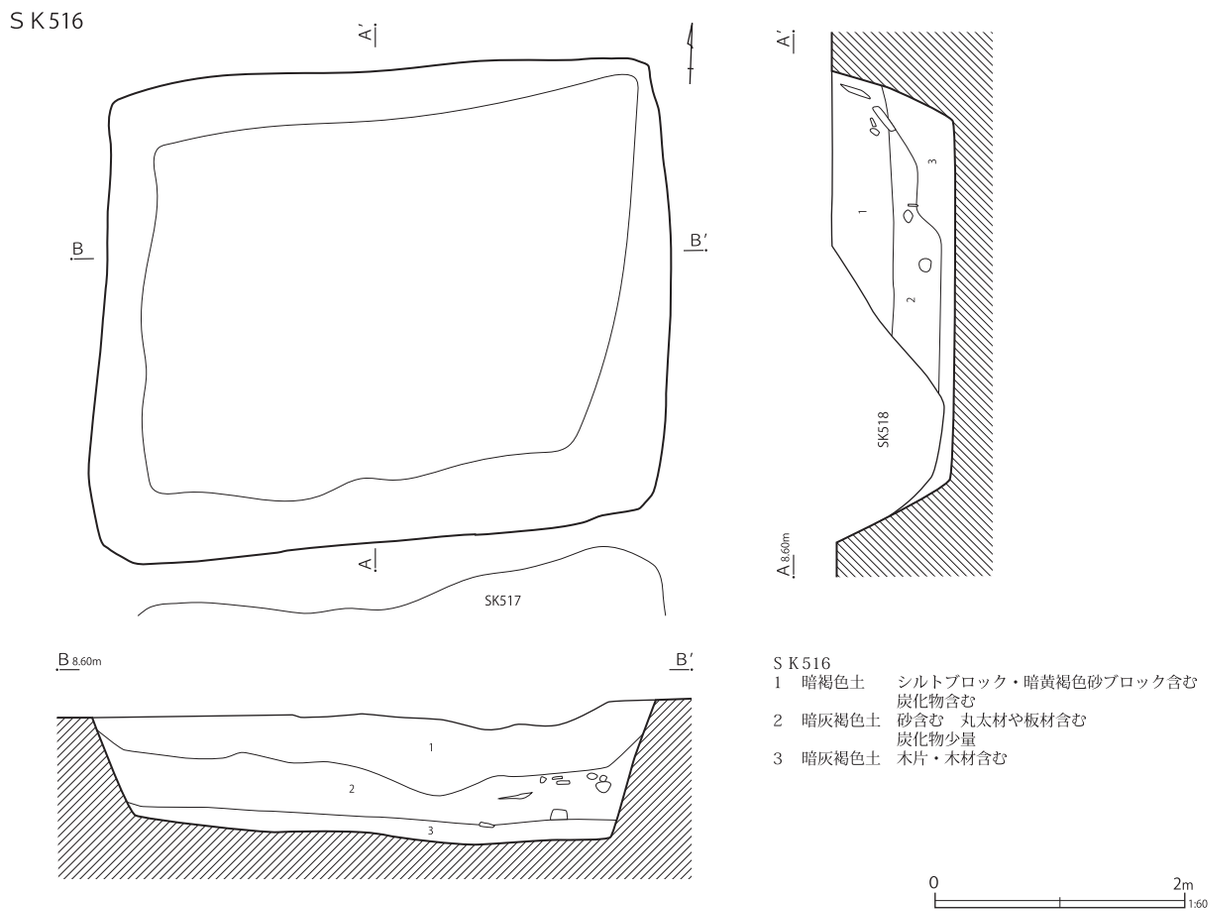
第 503 図 22 ～ 24 までは石製品である。すべて白色の流紋岩製の砥石である。

22 はノコギリ状工具痕が認められ、砥面は２面遺存している。

23 は湾曲した形状で、砥面は４面残る。裏面にはノッキング状の幅の広い削痕が認められる。

24 は右側面のノコギリ状工具痕が、使用痕に消されている。裏面には幅広の工具痕が認められるが、砥面としているため、滑らかになっている。被熱により黒化している。

25 は貝杓子である。イタヤガイ製で、孔が４



第 504 図　第 516 号土壙（１）

箇所に穿たれている。

第 516 号土壙（第 504 ～ 513 図）

Ｂ５－Ｊ４・５グリッドに位置し、重複する第 518 号土壙より古い。平面形は隅丸長方形である。

覆土は３層に分けられたが、第２・３層は色調に差がなかった。ともにシルトだが、第２層は砂を含み、炭化物が少量みられた。上層はシルトブロックと砂ブロックを含んだシルトであった。

出土遺物は、木製品・木材、陶磁器が主体である。このほかに、瓦、金属製品、骨類、種実類が少量出土した。遺物の出土は第２・３層に集中した。

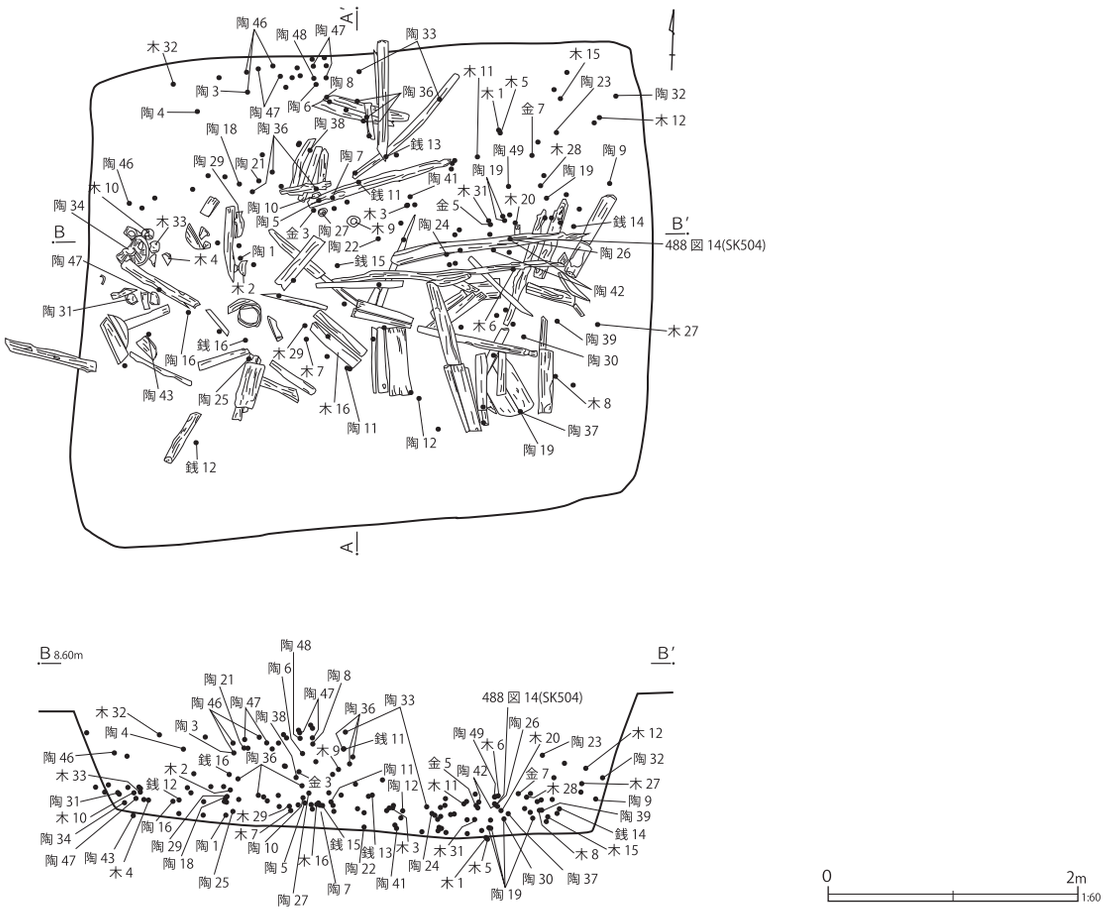
陶磁器では、肥前系磁器の外面青磁釉の筒形碗が最新期である。陶器は、瀬戸美濃系陶器のせんじ碗、腰錆碗が主体である。また、近接・重複する第 504・517・518 号土壙出土破片と接合する陶磁器がみられた。推定廃絶時期は、18 世紀第Ⅲ四半期である。

第 506 ～ 513 図に出土遺物を示した。

第 506 図１～ 15 までは肥前系磁器である。１は碗で、大形のものである。外面にコンニャク印判による染付が施される。

２～６までは粗製碗で、雪輪草花文が染付されるものである。いずれも高台の断面形は丸みを帯びるが、内面側の畳付き部は角張っている。高台内に裏銘が染付されるが、文字は完全に崩れている。

７は小形の粗製碗で、梅樹文が染付される。８・９は、大振りの筒形碗である。いずれも外面に梅樹文が染付されるもので、松竹梅文が染付されている可能性が高い。８は内面の口縁部に四方襷文、９は内面の口縁部に二重圏線が染付される。



第 505 図　第 516 号土壙（2）

10 は猪口で、やはり外面には松竹梅文が染付される。

11 ～ 14 までは皿である。11 は、内面が蛇の目状釉剥ぎされた皿である。

12 は腰部の張る形態の皿で、口縁部は僅かに窪みを入れて輪花状に、高台は蛇の目凹形高台とする。染付が密に施され、比較的凝った絵付である。破断面に漆継痕が認められる。

13 は小形の皿で内面に水辺、外面に山が染付される。併せて山水文を表すものであろう。

14 は口縁部が短く反る皿で、高台内に裏銘が染付される。崩れた「大明成化年製」銘であろうか。高台部断面は逆台形である。

15 は油壺と思われる。内面は露胎、外面は高台畳付部以外を施釉後、赤絵の上絵付けで圏線が描かれる。器壁は薄い。

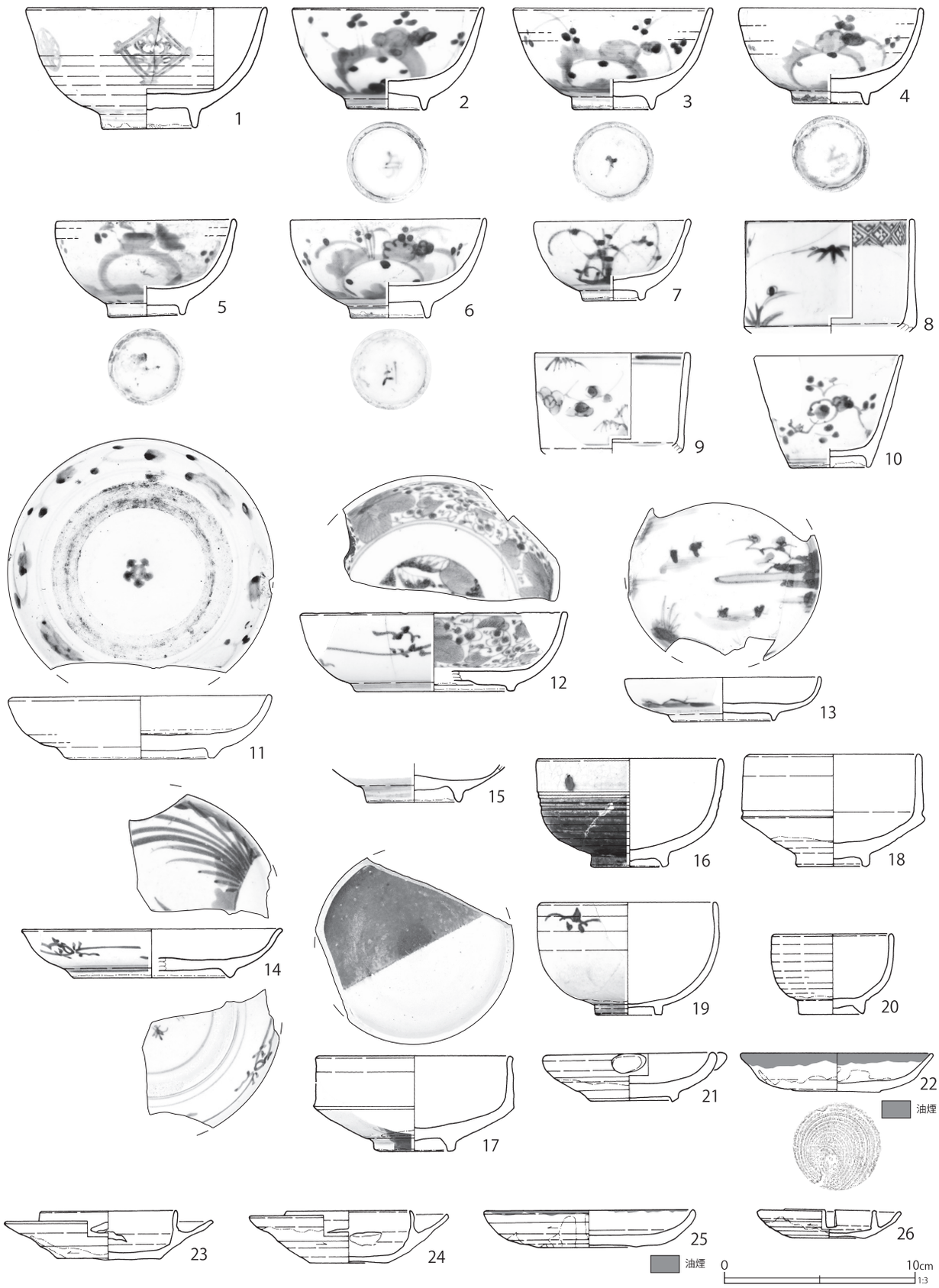
16 は瀬戸美濃系陶器の腰錆碗で、灰釉には大きな貫入が入る。鉄釉は光沢が強い。灰釉・鉄釉の掛け分け部の境界が、一部露胎となる。

17 は瀬戸美濃系陶器のせんじ形の碗で、灰釉と赤味の強い鉄釉（柿釉）が掛け分けられる。高台畳付部のみ露胎である。

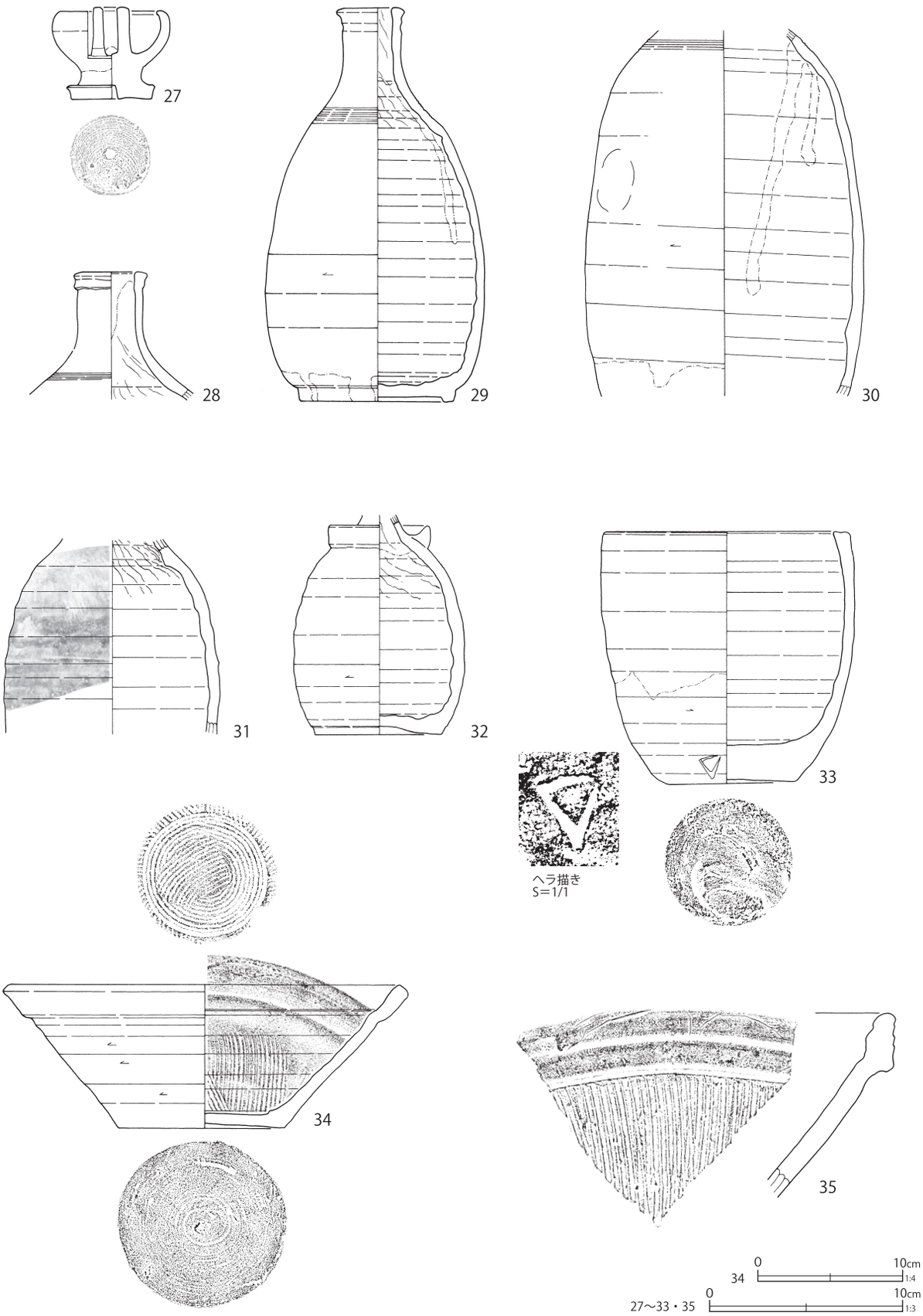
18 は瀬戸美濃系陶器のせんじ碗で、内面の灰釉に大きな貫入が入る。

19 は京都信楽系陶器の丸碗で、薄手である。釉薬には細かな貫入が多い。外面にワンポイントで鉄絵が施される。

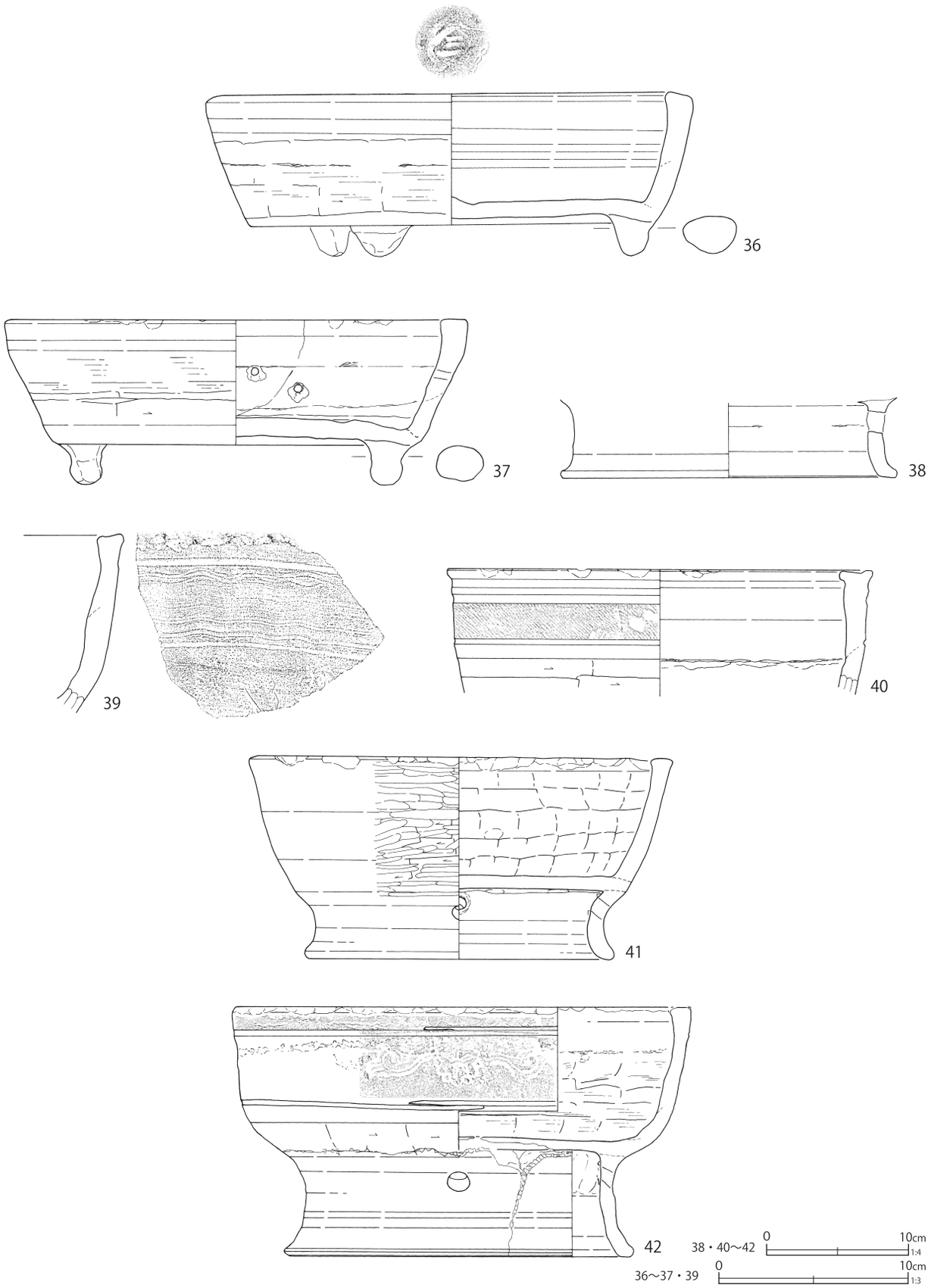
20 は瀬戸美濃系陶器の坏で、灰釉は白っぽく、御深井釉に近い。体部下位に細かなケズリが施されているようである。



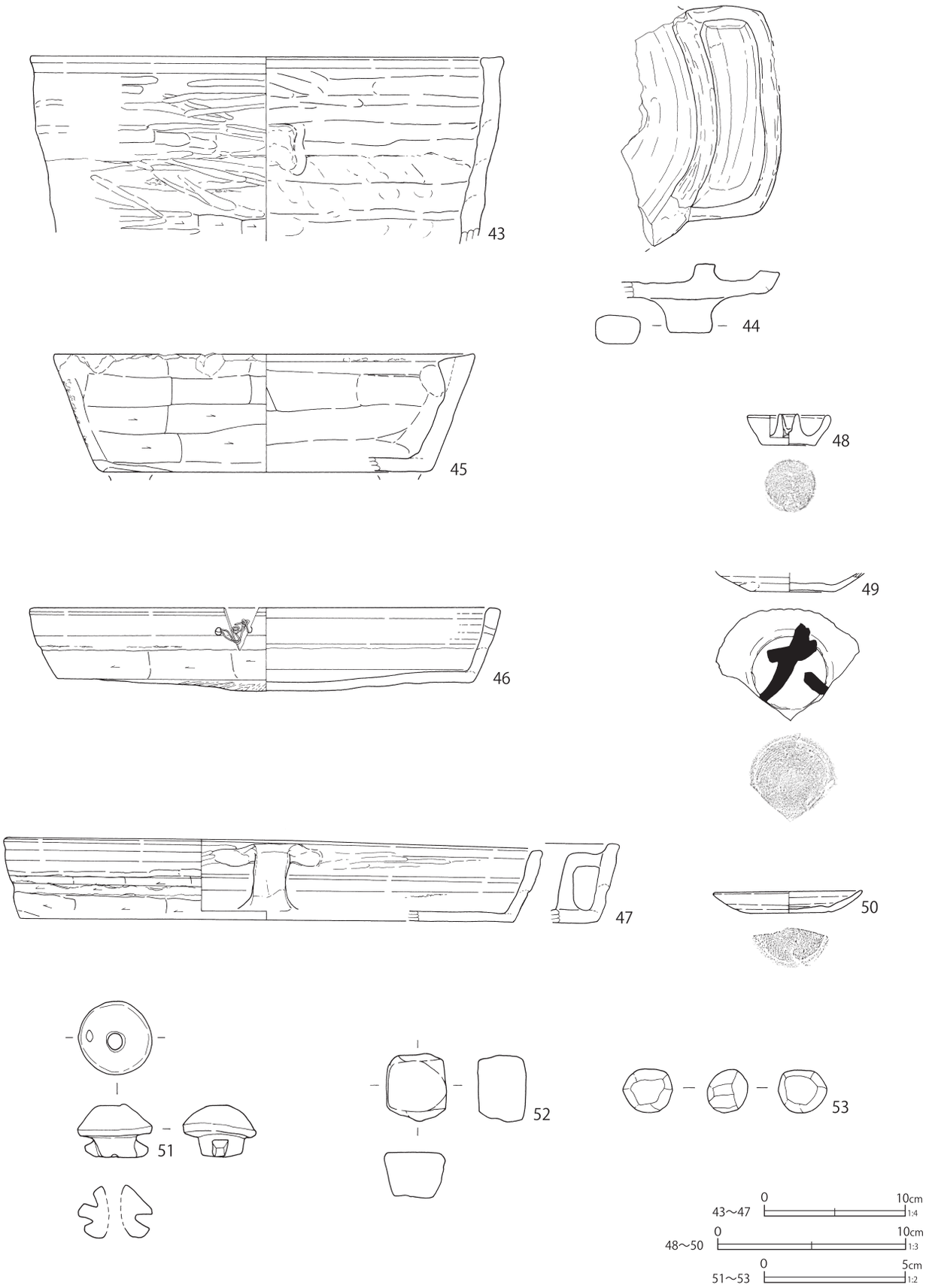
第 506 図　第 516 号土壙出土遺物（1）



第 507 図　第 516 号土壙出土遺物（2）



第508図　第516号土壙出土遺物（3）



第 509 図　第 516 号土壙出土遺物（4）

第 176 表　第 516 号土壙出土遺物観察表（1）（第 506 ～ 509 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	磁器	碗	12.4	6.3	4.8	―	80	良好	白	肥前系 内外面施釉 外面染付 高台畳付に少量砂付着	217-8
2	磁器	碗	9.8	5.3	3.9	―	95	良好	白	肥前系 内外面施釉 外面染付 SK518 と接合	218-1
3	磁器	碗	10.2	5.3	4.0	―	80	良好	白	肥前系 内外面施釉 外面染付 僅かに煤付着	
4	磁器	碗	9.3	4.9	3.8	―	95	良好	白	肥前系 内外面施釉 外面染付	
5	磁器	碗	9.2	5.0	3.8	―	100	良好	白	肥前系 内外面施釉 外面染付 僅かに煤付着	
6	磁器	碗	10.0	5.1	3.8	―	80	良好	白	肥前系 内外面施釉 外面染付	
7	磁器	碗	7.9	4.1	2.8	―	100	良好	白	肥前系 内外面施釉 外面染付	218-2
8	磁器	碗	(8.6)	5.3	―	―	20	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付（筒形碗）	
9	磁器	碗	(8.0)	5.2	―	―	15	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付（筒形碗）	
10	磁器	猪口	7.6	5.8	4.0	―	65	良好	白	肥前系 内外面施釉 外面染付	
11	磁器	皿	13.4	3.2	7.2	―	30	良好	白	肥前系 内外面施釉 内面染付・染付・蛇の目状釉剥ぎ	218-3
12	磁器	皿	(13.6)	4.0	(8.0)	―	80	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付 蛇の目凹形高台 漆継痕 SK517 と接合	
13	磁器	皿	10.0	2.2	5.2	―	65	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付 SK517 と接合	218-4
14	磁器	皿	(13.4)	2.5	(8.0)	―	20	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付	218-5
15	磁器	油壺	―	[1.9]	4.8	K	20	良好	白	肥前系 外面施釉・色絵（赤）	
16	陶器	碗	9.4	5.6	3.5	IK	90	普通	灰白	瀬戸美濃系 内面灰釉 外面鉄釉掛け分け（腰錆碗）	219-1
17	陶器	碗	(10.0)	4.9	3.5	DK	50	良好	灰	瀬戸美濃系 内外面灰釉・鉄釉掛け分け	
18	陶器	碗	8.9	5.8	3.5	GK	80	普通	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉（せんじ碗）	219-2
19	陶器	碗	9.0	5.8	3.3	IK	85	良好	灰白	京都信楽系 内外面透明釉 外面鉄絵	219-3
20	陶器	坏	6.2	4.1	3.3	IK	80	良好	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉 SK517 と接合	219-4
21	陶器	灯明皿	8.6	2.4	4.1	DK	100	良好	淡黄	瀬戸美濃系 内外面灰釉 全面煤付着	219-5
22	陶器	灯明皿	9.8	2.0	4.5	DIK	80	良好	にぶい橙	志戸呂系 底部糸切痕（右）内外面鉄釉 口縁部油煙多く付着	219-6
23	陶器	灯明皿	7.0	2.5	5.3	ADG	100	良好	にぶい橙	志戸呂系 内外面鉄釉 受部半円形切込 2 最大径 (10.8)cm	
24	陶器	灯明皿	6.4	2.7	4.0	ADIK	65	良好	浅黄橙	志戸呂系 内外面鉄釉 受部半円形切込 2 最大径 (10.3)cm	
25	陶器	灯明皿	10.8	1.9	5.0	I	100	良好	灰黄	瀬戸美濃系 内外面柿釉 底部拭き取り 口縁部油煙付着 SK504 と接合	
26	陶器	灯明皿	4.6	1.4	3.7	GIK	70	良好	浅黄	瀬戸美濃系 内外面柿釉 底部拭き取り 最大径 (7.6)cm	
27	陶器	秉燭	5.0	4.7	4.0	DK	95	良好	灰白	瀬戸美濃系 底部糸切痕（右）・穿孔 内外面鉄釉	219-7
28	陶器	徳利	2.7	[6.6]	―	DK	15	良好	灰	瀬戸美濃系 外面灰釉	
29	陶器	徳利	2.6	20.1	7.8	DIK	70	良好	灰白	瀬戸美濃系 外面灰釉 底部拭き取り	220-1
30	陶器	徳利	―	[18.8]	―	DI	20	良好	灰白	瀬戸美濃系 外面灰釉 内面・断面に一部煤付着	
31	陶器	徳利	―	[10.0]	―	DIK	20	良好	灰	瀬戸美濃系 外面灰釉 SK518 と接合	
32	陶器	油徳利	―	[11.3]	(6.6)	K	45	良好	淡黄	瀬戸美濃系 外面柿釉 底部拭き取り	
33	陶器	甕	11.2	13.0	6.6	IK	95	普通	浅黄	瀬戸美濃系 底部糸切痕（右）内外面柿釉 口縁部摩耗 外面体部下位ヘラ描きあり（銭甕）SK518 と接合	220-2
34	陶器	擂鉢	26.8	9.9	11.4	DIK	80	普通	浅黄	瀬戸美濃系 内外面柿釉 内面擂目 SK518 と接合	220-3
35	陶器	擂鉢	―	[9.5]	―	DEGI	5	良好	にぶい橙	堺明石系 内面擂目	
36	瓦質土器	火鉢	23.2	8.7	21.5	CEIK	80	普通	灰白	底部シワ状痕 内底面刻書「㐅」ヵ	220-4
37	瓦質土器	火鉢	21.8	8.7	16.4	CFHIK	40	普通	灰白	砂目底 内面煤付着 口縁部僅かに二次敲打痕 補修孔 2 SK517 と接合	
38	瓦質土器	火鉢	―	[5.3]	(23.6)	CHIK	10	普通	にぶい橙	脚部穿孔 1 遺存 やや酸化炎焼成 SK518 と接合	
39	瓦質土器	火鉢	―	[9.0]	―	CIK	20	普通	にぶい橙	外面櫛歯波状文 内面煤付着 口縁部二次敲打痕 被熱・変色	
40	瓦質土器	火鉢	(29.8)	[8.7]	―	CIK	10	普通	灰白	外面施文 口縁部に僅かに二次敲打痕 煤付着 SK517 と接合	
41	瓦質土器	火鉢	28.5	14.2	21.2	CFIK	75	普通	灰白	底部シワ状痕 外面ヘラミガキ 脚部穿孔 2 燻す	220-5
42	瓦質土器	火鉢	(31.6)	17.3	24.0	CHIK	85	普通	にぶい橙	砂目底 外面菊花文スタンプ 脚部穿孔 2 口唇部二次敲打 脚部と胴部を切断しようとして刺突を廻らす やや酸化炎焼成 SK518 と接合	220-6
43	瓦質土器	竈	(33.4)	13.6	―	CEI	10	普通	にぶい黄橙	外面ヘラミガキ 被熱	
44	瓦質土器	竈	―	[4.9]	―	CI	10	普通	黒	煤付着	
45	瓦質土器	火鉢	(29.8)	8.3	(22.0)	CHIK	20	普通	灰	燻す SK517 と接合	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
46	瓦質土器	焙烙	32.4	5.8	29.5	ACHIK	75	普通	浅黄橙	底部シワ状痕 外面煤付着 補修孔 2 銅線遺存 SK504 と接合	220-7
47	瓦質土器	焙烙	37.8	5.5	35.0	CIK	55	普通	灰白	砂目底 外面の一部に煤付着 SK518 と接合	
48	土師質土器	秉燭	4.2	1.6	2.8	AHI	100	普通	にぶい黄橙	底部糸切痕（左）胎土粉質 口縁部・芯立て上端に煤付着	220-8
49	かわらけ	小皿	(7.8)	[1.1]	4.0	AHIK	60	普通	にぶい橙	江戸在地系 底部糸切痕（左）・墨書「大」	221-1 238-8
50	かわらけ	小皿	(7.8)	1.1	(4.4)	AIK	35	普通	にぶい黄橙	江戸在地系 底部糸切痕（左）胎土粉質	
51	施釉土器	蓋	高さ1.8 幅2.6 重さ7.8			G	―	普通	橙	江戸在地系 透明釉 焼成前穿孔 2（孔 1，穴 1）（算盤玉形秉燭）	221-2
52	瓦	不明	長さ2.3 幅2.1 厚さ1.1 高さ10.3			I	―	普通	灰	瓦を円形に整形（転用）	248-6
53	瓦	不明	長さ1.5 幅1.8 厚さ1.5 高さ3.2				―	普通	灰	瓦を球体状に整形（転用）	248-7

21 は、舌状の把手がつけられた瀬戸美濃系陶器の皿で、灯明皿として用いられたものである。削り出し高台である。露胎部を中心に煤が多く付着する。

22 ～ 24 までは志戸呂系陶器の灯明皿である。22 は油皿で、底部には右方向の糸切痕がそのまま残される。体部下位はケズリ後にナデ調整され、工具痕が消されているものらしい。口縁部に油煙が多く付着する。

23・24 は油受皿で、いずれも底部は回転ケズリである。体部下位にもケズリ痕が残る。受部のほぼ対向する位置に、半円形の切り込み（孔）があるが、穿孔は粗雑である。24 のほうが焼成が甘く、やや酸化炎焼成にみえる。

25・26 は瀬戸美濃系陶器の柿釉灯明皿である。25 は油皿で、扁平で大形である。柿釉はやや光沢が鈍い臙脂色で、ムラ無く掛けられる。内底面には幅広い回転ナデ痕が釉下に観察される。体部外面は口縁部を除いて回転ケズリ痕である。一見、重ね焼き痕は見られないが、底部外周に僅かに痕跡が残っている。

26 は小形の油受皿である。柿釉は施釉が薄く、底部にはほとんど掛かっていないようにみえる。受部上端に重ね焼き痕があるようだが、体部外面の重ね焼き痕は認められない。体部が薄手なのが特徴的である。

第 507 図 27 は瀬戸美濃系陶器の秉燭で、鉄釉の光沢が強い。底部に右回転の糸切痕が残り、貫通しない穿孔がある。

28 ～ 31 までは瀬戸美濃系陶器の徳利である。28 は口縁部～肩部破片で、光沢のある灰釉はやや黄色味を帯びる。肩部の沈線は明瞭である。

29 は全体が遺存するものである。肩部には灰釉の上に、うのふ釉状の白っぽい釉が流れる。釉薬は尾呂徳利に似る。肩部の沈線は比較的はっきり認められる。

30 は灰釉を施す一升徳利で、肩部の沈線は比較的明瞭である。内面の一部に煤が付着するが、断面にも煤が付くので、破損後に付着したものだろうか。31 は、いわゆる尾呂徳利の破片である。

32 は瀬戸美濃系陶器の油徳利である。底面のみ釉薬が部分的に拭き取られている。

33 は瀬戸美濃系陶器の口縁部が開放する形態の甕で、生産地では「銭甕」と呼ばれるものである。口縁部は使用により摩耗している。外面体部の露胎部は、ケズリ後にナデ調整している。ヘラ記号のような焼成前のヘラ描きが認められる。底部は糸切痕を無調整で残す。

34 は瀬戸美濃系陶器の擂鉢で、やや小形の物である。内面に一単位 19 条の擂目が施される。底部は回転ケズリである。

35 は堺明石系陶器の擂鉢で、内面の擂目は一単位８条である。

第 508 図 36・37 は瓦質土器の火鉢で、脚が３

箇所に付くタイプのものである。

36 は楕円形の脚で、口縁部はやや丸みのある角形で肥厚する。底部にシワ状痕が認められる。外面下位は強いヘラナデ、中位に弱いヘラナデが施される。内底面には「㐅」と思われる刻書がみられる。底面は平滑にナデが施され、その周囲は回転ナデで処理される。内面の体部は、強い筋状のヨコナデである。

37 は円柱状の脚で、口縁部は角形で肥厚する。底部は砂目である。外面下位にケズリ、上位はヨコナデが施される。補修孔が２箇所に認められる。口縁部には僅かに敲打痕がみられる。

38 ～ 42 までは輪高台状の脚を有する瓦質土器の火鉢である。量の多少はあるが、いずれの胎土にも角閃石が含まれる。

38 は脚部破片で、端部が反るものである。やや酸化炎焼成で、黄白色を帯びている。胎土中心部は黄灰色、周囲は灰白からにぶい橙色である。角閃石は少ない。

39 は口縁から体部の破片で、口唇部は肥厚する。外面下位はケズリ、その上位に櫛歯波状文が施文される。口縁部に敲打痕が認められる。被熱により変色しており、使用によるものと思われる。胎土の中の角閃石は多い。

40 は口縁部から体部の破片で、厚手のものである。口唇部は窪んでいる。外面下位にやや強いヘラナデが施される。中位に１条、口縁部付近に２条の沈線が廻り、沈線の区画内にはハケメ状の施文がみられる。内面は筋状のナデが施される。胎土中の角閃石はやや多い。

41 は燻されて黒色を帯びるものである。底部にシワ状痕がみられ、脚部に焼成前穿孔が２箇所認められる。外面の体部は、ケズリ後にヘラミガキで処理される。内面の体部は、筋状のヘラナデが施される。胎土中心部は黒色で、周囲は灰白色である。

42 は高台が高いものである。砂目底で、外面の体部下位にケズリが施される。体部の沈線で区画された中には、菊花文スタンプが２箇所に認められる。また、外面の口縁部付近には、櫛歯波状文が施文される。内面の体部には、筋状のナデが施される。体部下端から脚部にかけて、二次的な刺突が行われている。体部と脚の境界を切断しようとしたものとみられる。

第 509 図 43・44 は瓦質土器の竈である。43 は体部上位の破片で、内面に突起の剥離痕が認められる。３箇所に突起が付くと考えられる。外面はヘラナデ後にヘラミガキが施されている。

44 は舌部の破片で受け皿状を呈する。脚の横断面は隅丸長方形である。ヘラナデが施され、口唇部は僅かにミガキ状になる。

45 は瓦質土器の角火鉢である。脚部は欠損しているが、痕跡は認められる。外面下位はヘラケズリ、上位はヘラナデで仕上げられる。燻されており、胎土中心部は黒色、周囲は灰～灰白色である。胎土に角閃石が多く含まれる。

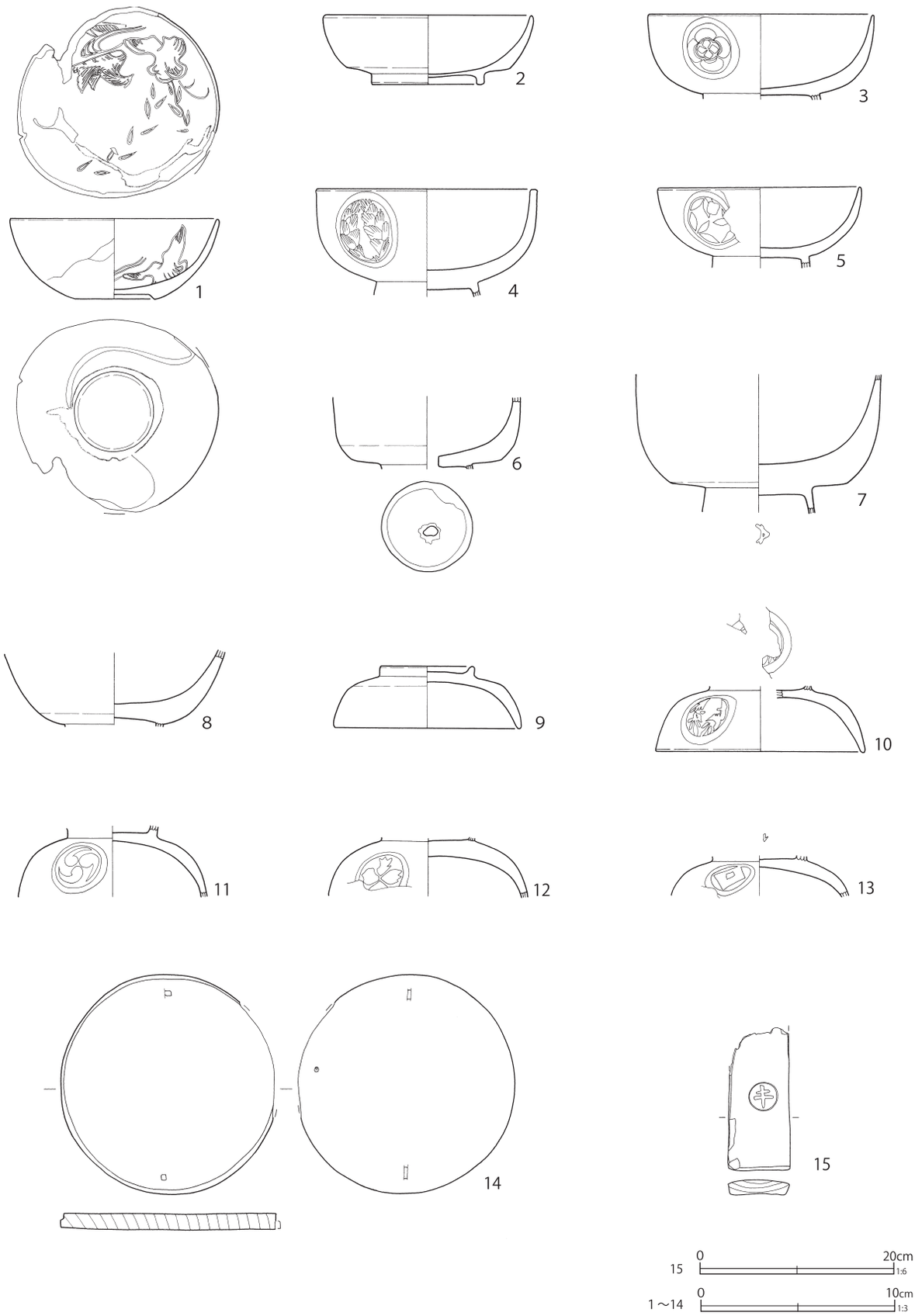
46・47 は瓦質土器の焙烙である。

46 は底部中心部がやや丸底状に膨らむものである。底部にシワ状痕とスノコ状の圧痕が認められる。外面の体部下位にはケズリが施される。内底面は一方向にナデが施され、平滑である。周囲は回転ナデで処理される。胎土に角閃石と細粒の雲母が含まれる。

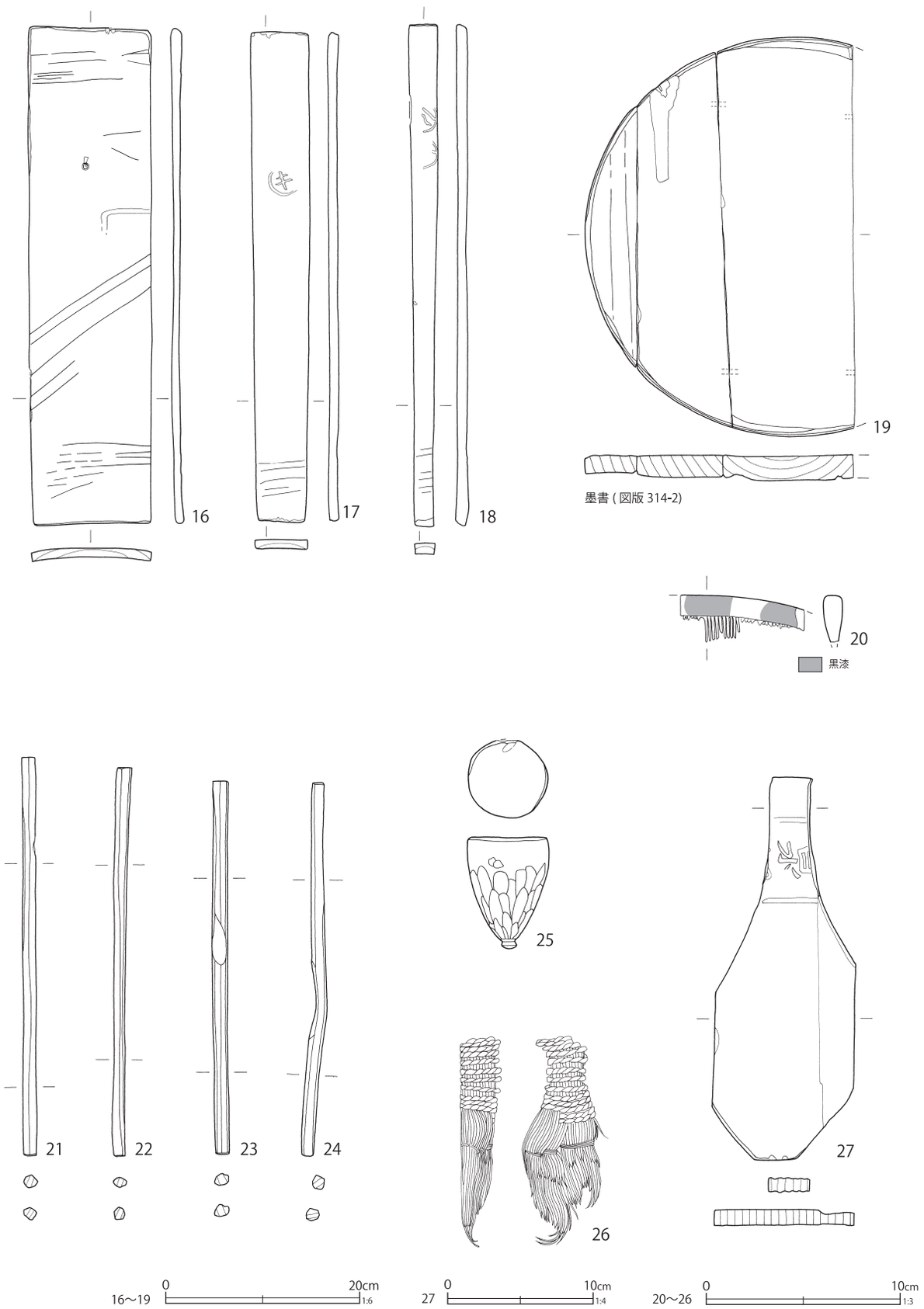
47 は内耳が２箇所に遺存しているものである。砂目底で、外面の体部下位はケズリ、上位はナデで処理される。内面の体部はヨコナデで、上位の一部にミガキが認められる。胎土に角閃石が含まれる。

48 は土師質土器の秉燭である。底部に左回転の糸切痕がみられる。細粒の雲母を含む粉質な胎土である。口縁部と芯立の上端部に煤が付着し、使用痕と思われる。

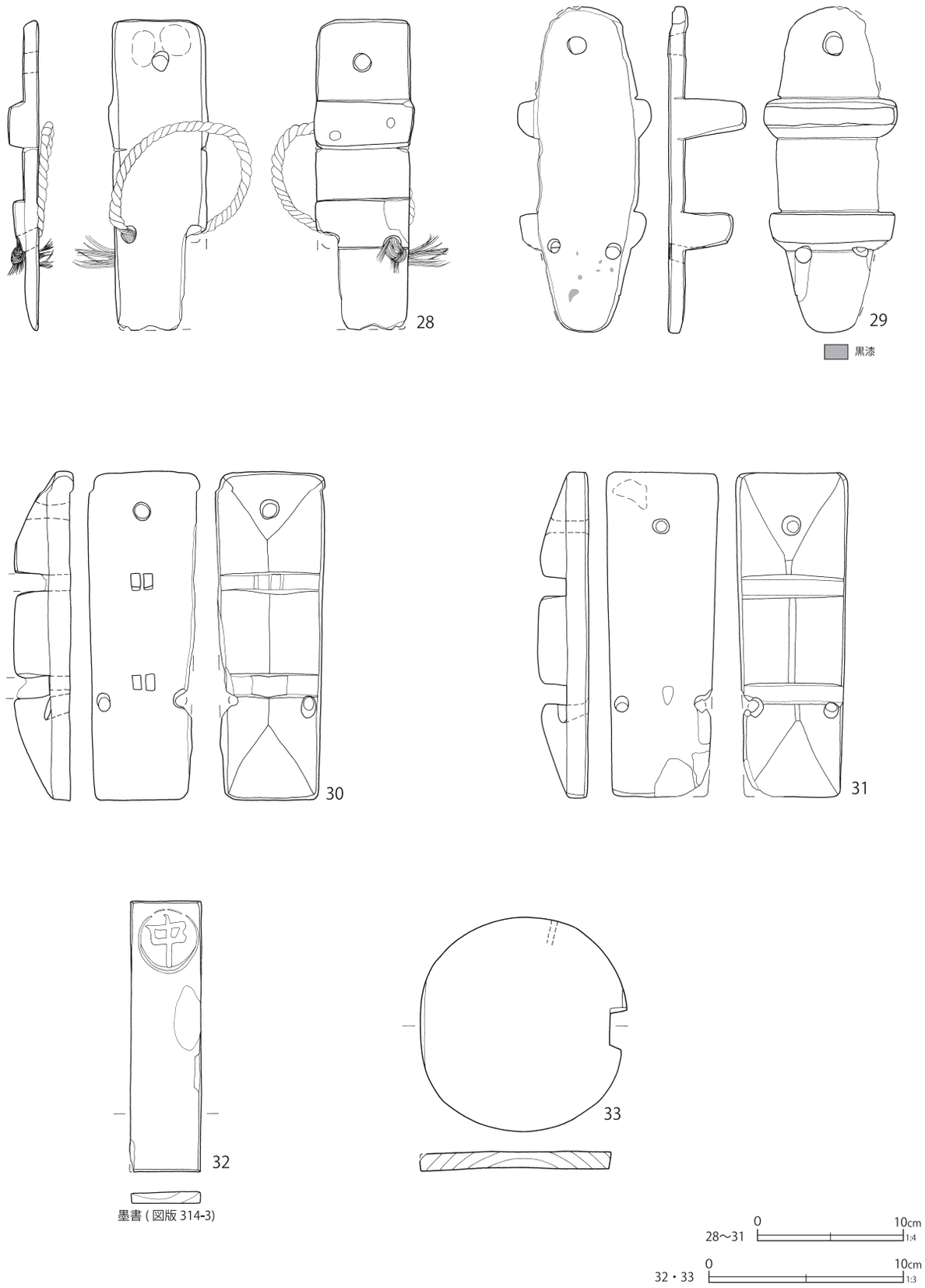
49・50 は江戸在地系土器のかわらけ小皿である。ともに左回転の糸切痕がみられ、49 は墨書



第 510 図　第 516 号土壙出土遺物（5）



第 511 図　第 516 号土壙出土遺物（6）



第 512 図　第 516 号土壙出土遺物（7）

第 177 表　第 516 号土壙出土遺物観察表（２）（第 510 ～ 512 図）

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	口径 / 径	高さ	底径	木取り	備考	図版
1	木製品	漆椀	－	－	－	(10.6)	4.1	4.1	横木取り	内面赤漆 外面黒漆 内面文様（黒漆・金） 外面文様（金）	271-6
2	木製品	漆椀	－	－	－	(10.5)	3.5	5.7	横木取り	内外面赤漆 口縁・高台端部黒漆 歪みあり	
3	木製品	漆椀	－	－	－	11.6	[4.3]	－	横木取り	内面赤漆 外面黒漆 外面３箇所紋（赤漆）	271-7
4	木製品	漆椀	－	－	－	(11.4)	[5.4]	－	横木取り	内外面赤漆 外面３箇所紋（黒漆）	271-8
5	木製品	漆椀	－	－	－	(10.4)	[4.1]	－	横木取り	内面赤漆 外面黒漆 外面３箇所紋（金）	
6	木製品	漆椀	－	－	－	－	[3.7]	－	横木取り	内外面赤漆 高台内二次穿孔	
7	木製品	漆椀	－	－	－	－	[7.1]	－	横木取り	内外面黒漆 高台内文字（赤漆）	
8	木製品	漆椀	－	－	－	－	[3.8]	－	横木取り	内面赤漆 外面黒漆	
9	木製品	漆椀蓋	－	つまみ径 4.8		(9.6)	3.1	－	横木取り	内外面赤漆	
10	木製品	漆椀蓋	－	つまみ径 －		(10.8)	[3.3]	－	横木取り	内面赤漆 外面黒漆 外面４箇所紋（赤漆）	
11	木製品	漆椀蓋	－	つまみ径 －		－	[3.7]	－	横木取り	内面赤漆 外面黒漆 外面３箇所紋（赤漆）	271-9
12	木製品	漆椀蓋	－	つまみ径 －		－	[3.0]	－	横木取り	内面赤漆 外面黒漆 外面３箇所紋（赤漆）	271-10
13	木製品	漆椀蓋	－	つまみ径 －		－	[2.1]	－	横木取り	内面赤漆 外面黒漆 外面３箇所紋（赤漆） つまみ内文様（赤漆）	
14	木製品	曲物	11.3	[11.0]	0.8	－	－	－	柾目	底板 木釘１ 樹皮紐２ 墨書	
15	木製品	桶・樽	[14.6]	6.4	1.5	－	－	－	板目	側板 焼印「㊥」	
16	木製品	桶・樽	51.8	12.6	1.0	－	－	－	板目	側板 表面箍痕・焼印 裏面白色物付着 木釘１	
17	木製品	桶・樽	51.0	6.0	1.0	－	－	－	板目	側板 表面箍痕 焼印「㊥」	
18	木製品	桶・樽	52.3	2.5	1.1	－	－	－	板目	側板 表面箍痕 焼印	
19	木製品	樽	41.6	[27.9]	2.4	－	－	－	板目	蓋 木釘残 表面墨書（文字資料 127）	
20	木製品	櫛	[6.0]	[2.4]	0.9	－	－	－	板目	全面黒漆	271-11
21	木製品	箸	20.5	0.7	0.6	－	－	－	削出		
22	木製品	箸	20.0	0.8	0.6	－	－	－	削出		
23	木製品	箸	19.3	0.7	0.6	－	－	－	削出		
24	木製品	箸	19.3	0.7	0.7	－	－	－	削出	中央部潰れ	
25	木製品	独楽	－	－	－	4.0	5.6	－	芯持材		271-12
26	木製品	箒	10.7	3.7	2.0	－	－	－	－	棕櫚 針金固定 木軸残存	
27	木製品	不明	26.3	9.7	1.0	－	－	－	柾目	櫂状 柄部に焼印「［　］泉［　］」	272-1
28	木製品	下駄	21.2	6.4	－	－	2.1	－	板目	連歯下駄 鼻緒残存	272-2
29	木製品	下駄	22.3	7.0	－	－	5.3	－	板目	連歯下駄 黒漆 歯の前後に加工線	
30	木製品	下駄	22.4	7.4	－	－	[3.9]	－	板目	露卯下駄 方形の孔４（歯が有り）	
31	木製品	下駄	22.1	7.7	－	－	[3.5]	－		陰卯下駄	
32	木製品	木札	13.8	3.6	0.6	－	－	－	板目	焼印「㊥」墨書（文字資料 128）	
33	木製品	不明	－	－	0.8	11.0	－	－	板目	全面黒色塗料 孔１	272-3

「大」がみえる。

51 は施釉土器の蓋で、江戸在地系土器である。算盤玉形秉燭に伴うもので、栗橋宿跡では稀である。左右に突起がみられ、中心部に貫通孔、中心からややずれた位置に貫通しない穴が認められる。透明釉が施釉される。

52・53 は、瓦片を再加工したものである。

第 510 ～ 512 図は木製品である。第 510 図１～８までは漆椀である。

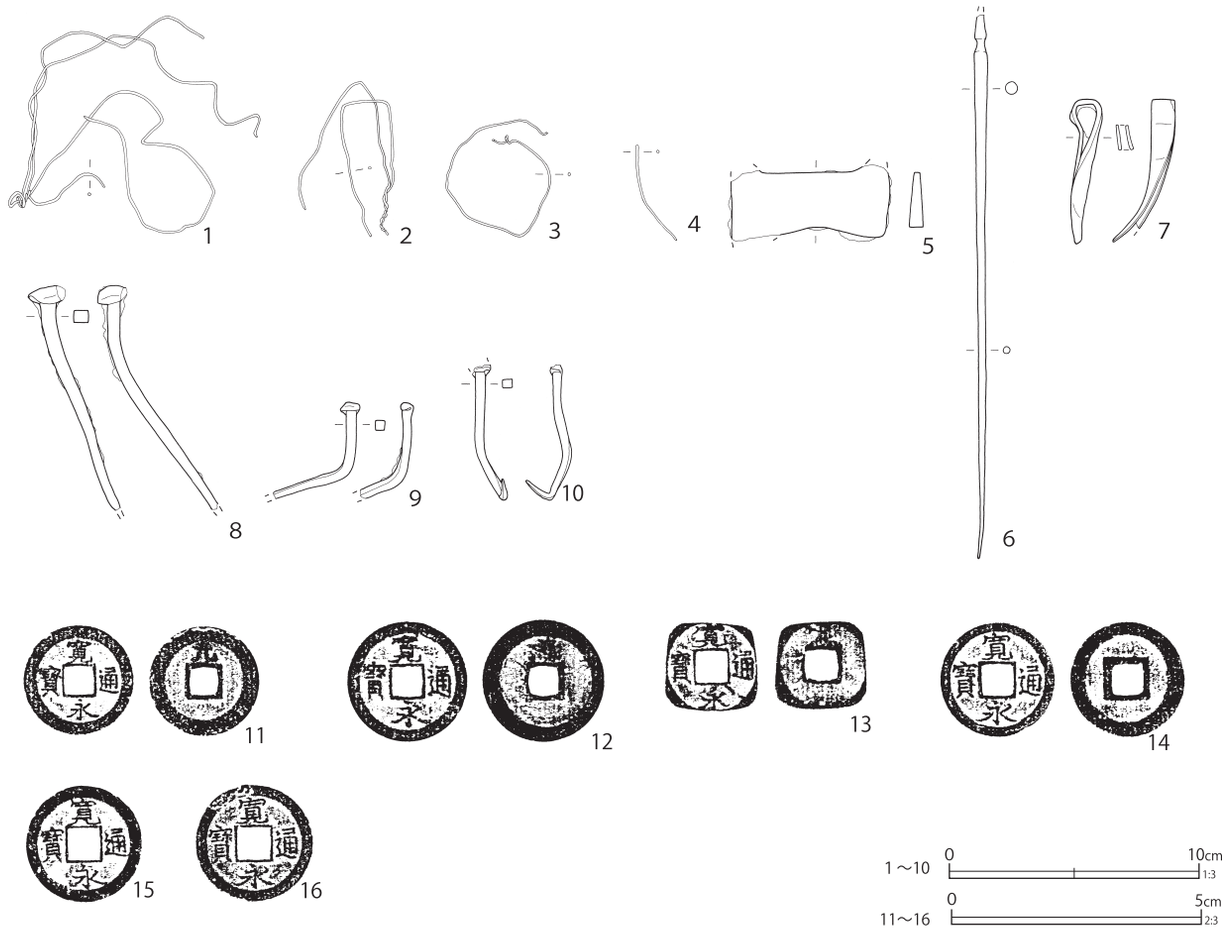
１は刳り高台のもので、栗橋宿跡では稀な器形である。内面に赤漆､外面に黒漆が塗布される。内面は黒漆と金で、外面は金で文様が描かれる。

２は一文字腰椀である。底部は極めて薄手で、腰の角張りが強い。内外面は赤漆、口縁部及び高台端部には、黒漆が塗布される。

３～５までは腰丸椀である。３は底部が薄手のもので、内面に赤漆、外面に黒漆が塗布される。外面の３箇所に赤漆で紋が描かれる。

４は厚手で、器高が高いものである。高台は「ハ」字状に開く。内外面に赤漆が塗布され、外面の３箇所に黒漆で紋が描かれる。

５は底部から体部まで、厚みが一定である。内



第 513 図　第 516 号土壙出土遺物（８）

第 178 表　第 516 号土壙出土遺物観察表（３）（第 513 図）

番号	種別	器種	法量	備考	図版
1	銅製品	針金	縦 8.7 横 10.1 厚さ 0.1 重さ 3.2		
2	銅製品	針金	縦 6.2 横 3.8 厚さ 0.1 重さ 0.9		
3	銅製品	針金	縦 4.7 横 4.2 厚さ 0.1 重さ 0.8		
4	銅製品	針金	長さ 3.8 厚さ 0.1 重さ 0.2		
5	鉄製品	火打金	長さ 6.4 幅［2.9］厚さ 0.6 重さ 27.7	一部欠失	
6	鉄製品	火箸	長さ［21.8］厚さ 0.5 重さ 14.0	一部欠失	
7	鉄製品	環釘	長さ 5.8 幅 0.1 厚さ 1.0 重さ 7.9	一部欠失	
8	鉄製品	釘	長さ［9.0］幅 0.6 厚さ 0.5 重さ 11.9	一部欠失	
9	鉄製品	釘	長さ［3.8］幅 0.4 厚さ 0.4 重さ 5.0	一部欠失	
10	鉄製品	釘	長さ 5.4 幅 0.4 厚さ 0.3 重さ 3.6		
11	銅製品	銭貨	径 22.1 厚さ 1.0 重さ 1.9	寛永通寶（新）背元	
12	銅製品	銭貨	径 24.4 厚さ 1.3 重さ 3.6	寛永通寶（新）背不明	
13	銅製品	銭貨	縦 17.5 横 18.4 厚さ 0.8 重さ 1.1	寛永通寶（新）背不明 縁方形に面取り	288-10
14	銅製品	銭貨	径 23.1 厚さ 1.1 重さ 2.5	寛永通寶（新）	
15	銅製品	銭貨	径 23.3 厚さ 1.0 重さ 2.4	寛永通寶（新）	
16	銅製品	銭貨	径 23.4 厚さ 1.2 重さ 3.1	寛永通寶（新）	

面に赤漆、外面に黒漆が塗布され、外面の３箇所に金で紋が描かれる。

６は壺椀である。腰部が面取り状に角張り、体部は筒形である。内外面に赤漆が塗布される。高台内には二次穿孔が認められる。

７は一文字腰椀に類似するものである。厚手で、体部がほぼ垂直に立ち上がる筒状である。内外面に黒漆が塗布され、高台内に赤漆で文字が書かれる。

８は腰丸椀と思われる。厚手で、底部は窪むように削り込まれる。内面に赤漆、外面に黒漆が塗布される。

９～13までは漆椀の蓋である。９は肩部がやや角張るもので、一文字腰椀の蓋と思われる。肩部は丸みを帯び、内外面に赤漆が塗布される。

10～13は腰丸椀の蓋である。いずれも内面に赤漆、外面に黒漆が塗布される。外面には赤漆で紋が描かれる。12は他より厚手である。

14は曲物の底板である。周縁には側板を受ける段が付く。木釘が１箇所、樹皮紐が２箇所認められる。上面に墨書がみえる。

15～18までは桶ないし樽の側板である。15は厚手のもので、焼印「㋭」がみえる。

第511図16～18は表面に箍の痕跡が認められる。16は焼印がみえるが判読できない。裏面に白色物が付着する。17は焼印「㋭」、18もやはり焼印が認められるが判読できない。19は墨書が認められるため、樽の蓋とした。墨書は「九」とみえる。20は櫛である。全面に黒漆が塗布され、一部剥落している。

21～24までは寸胴箸である。25は独楽である。26は箒である。針金で３束に固定し、上部は棕櫚を巻いて束ねている。

27は器種不詳のもので、器形は櫂状である。焼印「[　]泉[　]」が横位に押されて、途切れていることから、転用が示唆される。

第512図28～31は下駄である。28は連歯下駄で、鼻緒が遺存する。29は連歯下駄で、黒漆が僅かに遺存する。歯の前後にやや深い線状の切込みが認められる。

30は露卯下駄、31は陰卯下駄である。32は木札である。「㊥」の焼印がみられ、墨書もみえるが、判読できない。

33は器種不詳のもので、曲物の底板のような形状である。何らかの製品の一部と考えられる。栗橋宿跡ではしばしば出土が確認される。

第513図は金属製品である。１～４は銅製の針金である。

５は鉄製の火打金である。６は鉄製の火箸である。７は鉄製の環釘である。８～10は鉄製の釘である。

11～16は寛永通寶である。そのうち13には背文字があり、縁が方形に再加工されている。

第517号土壙（第514～545図）

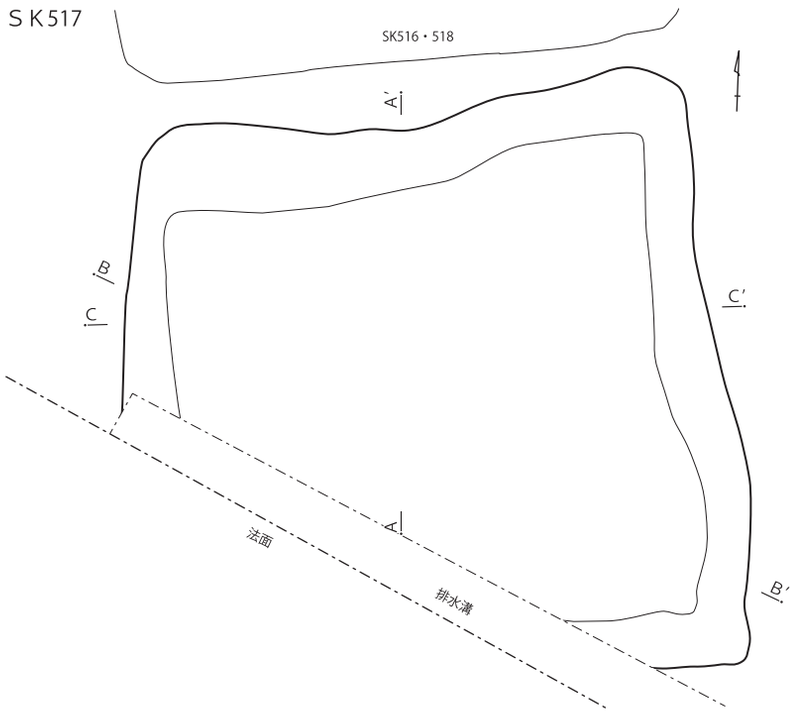
Ｂ５－Ｊ４・５、Ｃ５－Ａ４・５グリッドに位置し、南西角は調査区域外である。平面形は隅丸方形である。

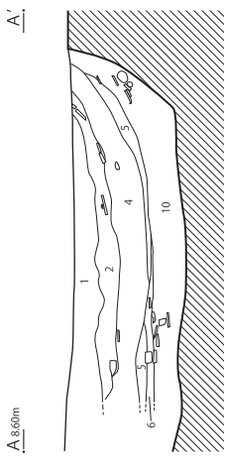
覆土下層の第７～10層には、焼土ブロック、炭化物が多量に含まれていた。特に、第９層に焼土ブロックの量が多く、第７層では一部に炭化物層がみられた。木材が多量に廃棄されており、下層の堆積物は、火災に関わるものと考えられる。

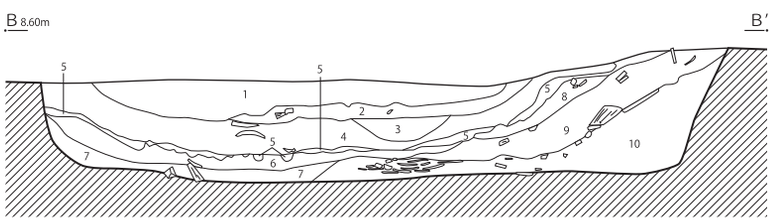
また、上位の第４・６層は洪水堆積層とみられ、第５層に軽石の純層が堆積していた。本層はテフラ分析が行われており、天明三年（1783）の浅間Ａ軽石に比定された（Ⅴ　自然科学分析７参照）。

軽石層より上層の第１～４層には、建築材や木片が多く認められ、第１・２層には浅間Ａ軽石が含まれていた。第１・２層の軽石は、埋め戻す際に混入したものと考えられる。

以上のことから、本跡は開口状態にあり、浅間Ａ軽石降下前後に、少なくとも２度の廃棄が行われたと考えられる。







ＳＫ517

1　褐色土　浅間Ａ軽石・炭化物・黄褐色粒子
・黄褐色ブロック（φ10～20㎜）
・暗灰色粘土ブロック（φ10～20㎜）多量
しまりややあり　粘性弱

2　褐色土　木片主体　建築部材・板材・陶磁器含む
しまり・粘性弱
浅間Ａ軽石含む　砂粒子含む

3　暗褐色土　炭化物・粘土ブロック・黄褐色ブロック含む
砂粒含む　木片含む　しまり・粘性弱

4　暗灰色土　炭化物含む　しまり・粘性強　陶磁器少量
洪水堆積層

5　灰色土　浅間Ａ軽石層　細かい白色粒子の純層

6　暗灰色土　洪水堆積層　炭化物含む　しまり・粘性強

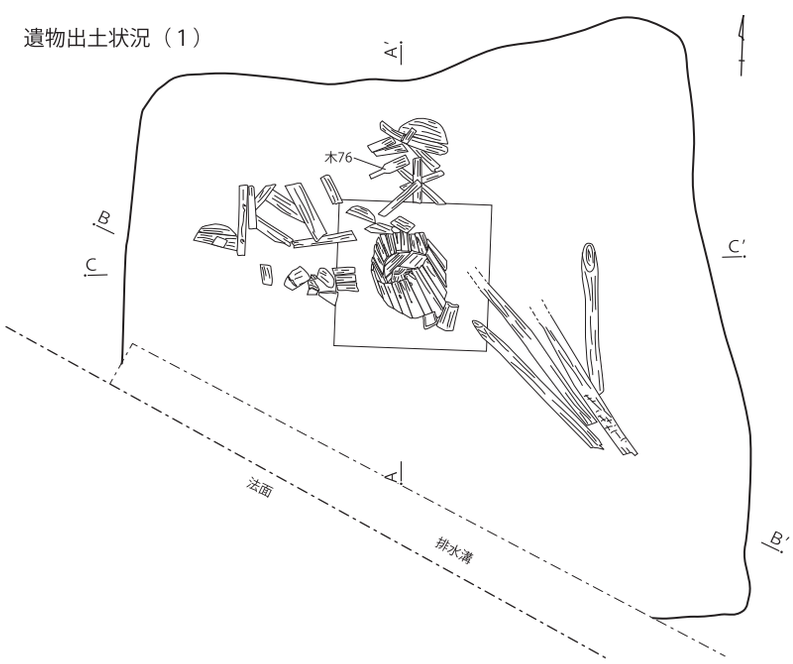
7　黒褐色土　炭化物含む　一部炭化物層を形成
しまり・粘性あり

8　黒灰色土　炭化物・木片多量　しまり・粘性やや弱

9　黒褐色土　焼土粒子
・焼土ブロック（φ10～30㎜）多量
炭化物（φ20～30㎜）含む
しまり・粘性やや弱　木材多量

10　暗褐色土　焼土ブロック・焼土粒子・炭化物
・炭化物ブロック含む
しまり・粘性ややあり　木材片含む

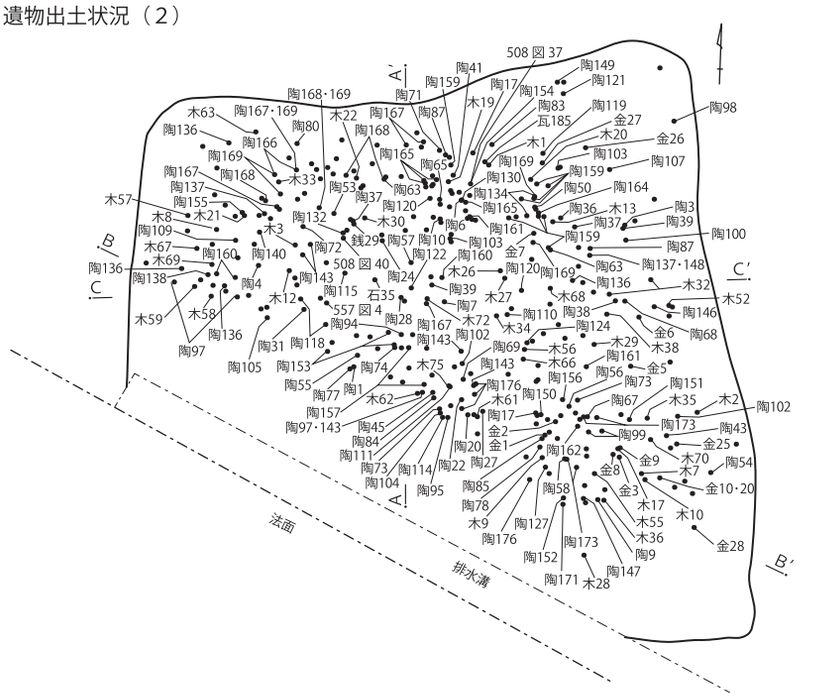
遺物出土状況（1）

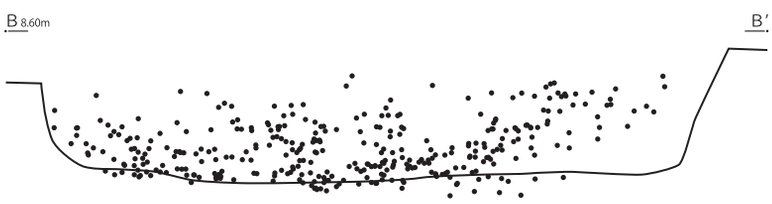


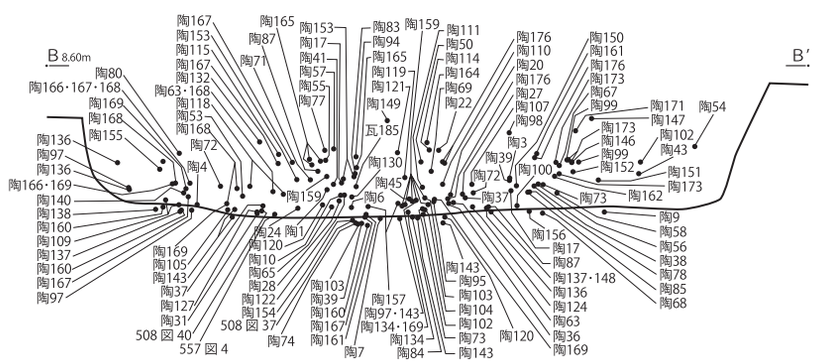
0　2m
1:60

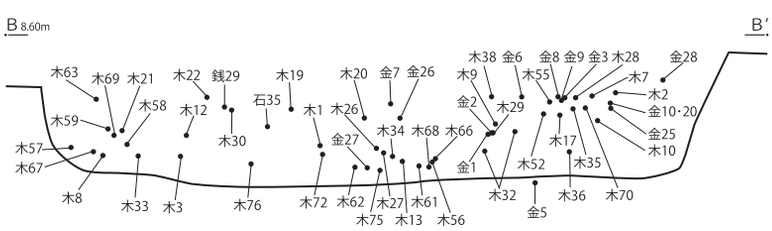
第514図　第517号土壙（1）

遺物出土状況（2）



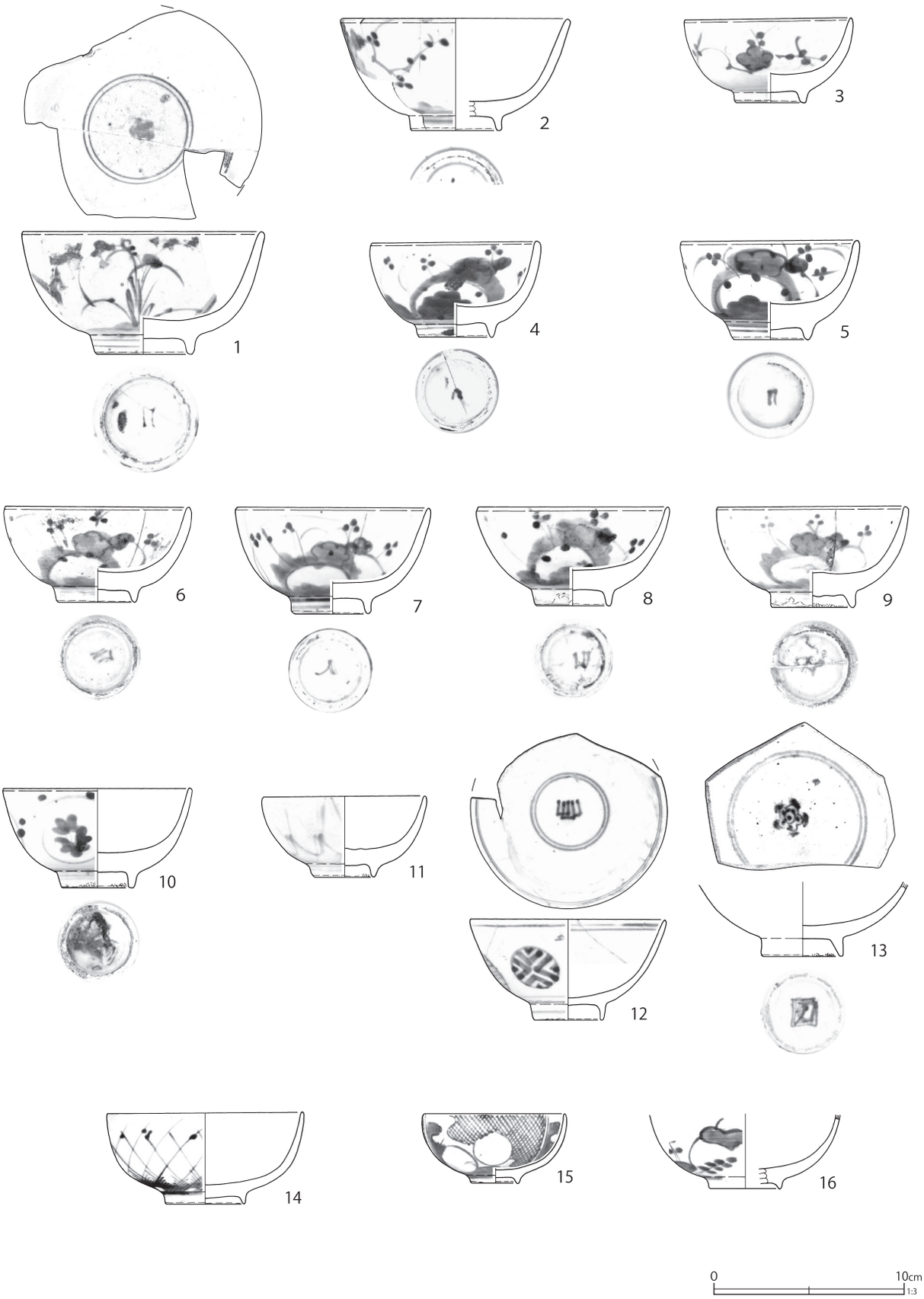




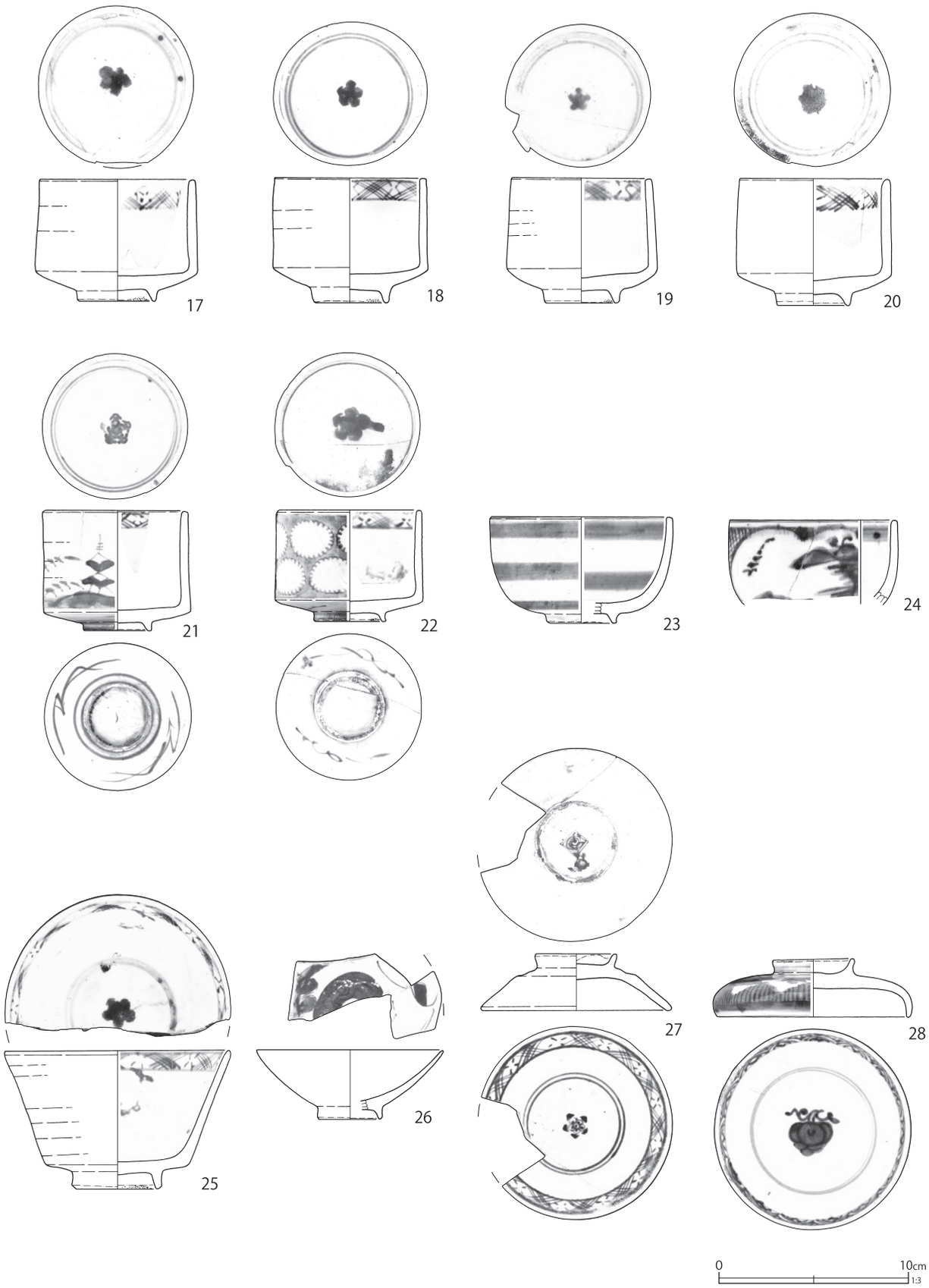


0 2m 1:60

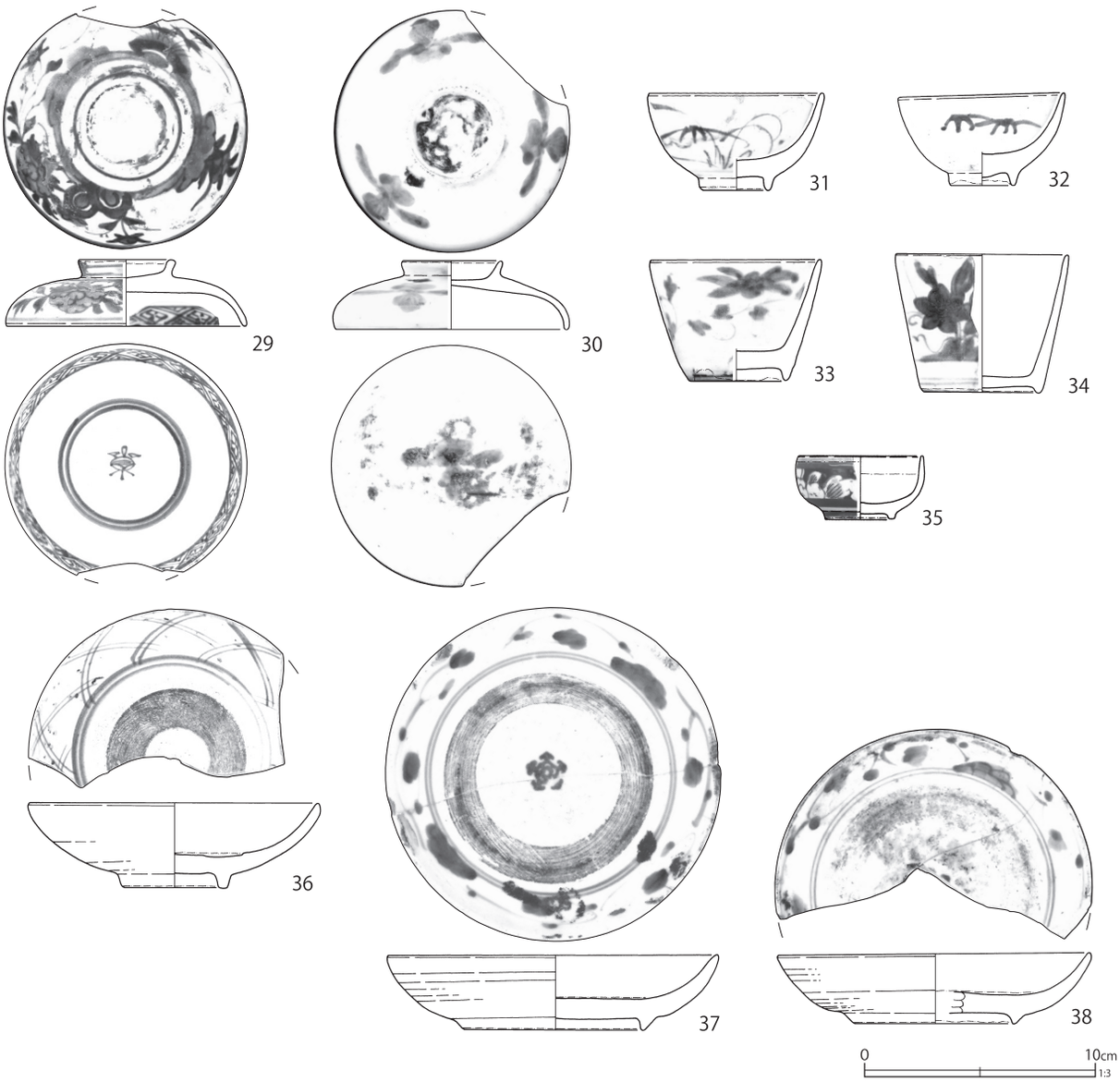
第 515 図　第 517 号土壙（2）



第 516 図　第 517 号土壙出土遺物（1）



第 517 図　第 517 号土壙出土遺物（2）



第 518 図　第 517 号土壙出土遺物（３）

出土遺物は、建築材、杭、桶、曲物、木札、漆椀、下駄等の木製品と陶磁器が中心で、このほかに瓦、金属製品、石製品がみられる。特筆すべき遺物として、浅間Ａ軽石層の下から卒塔婆（第 541 図 77）が出土している。

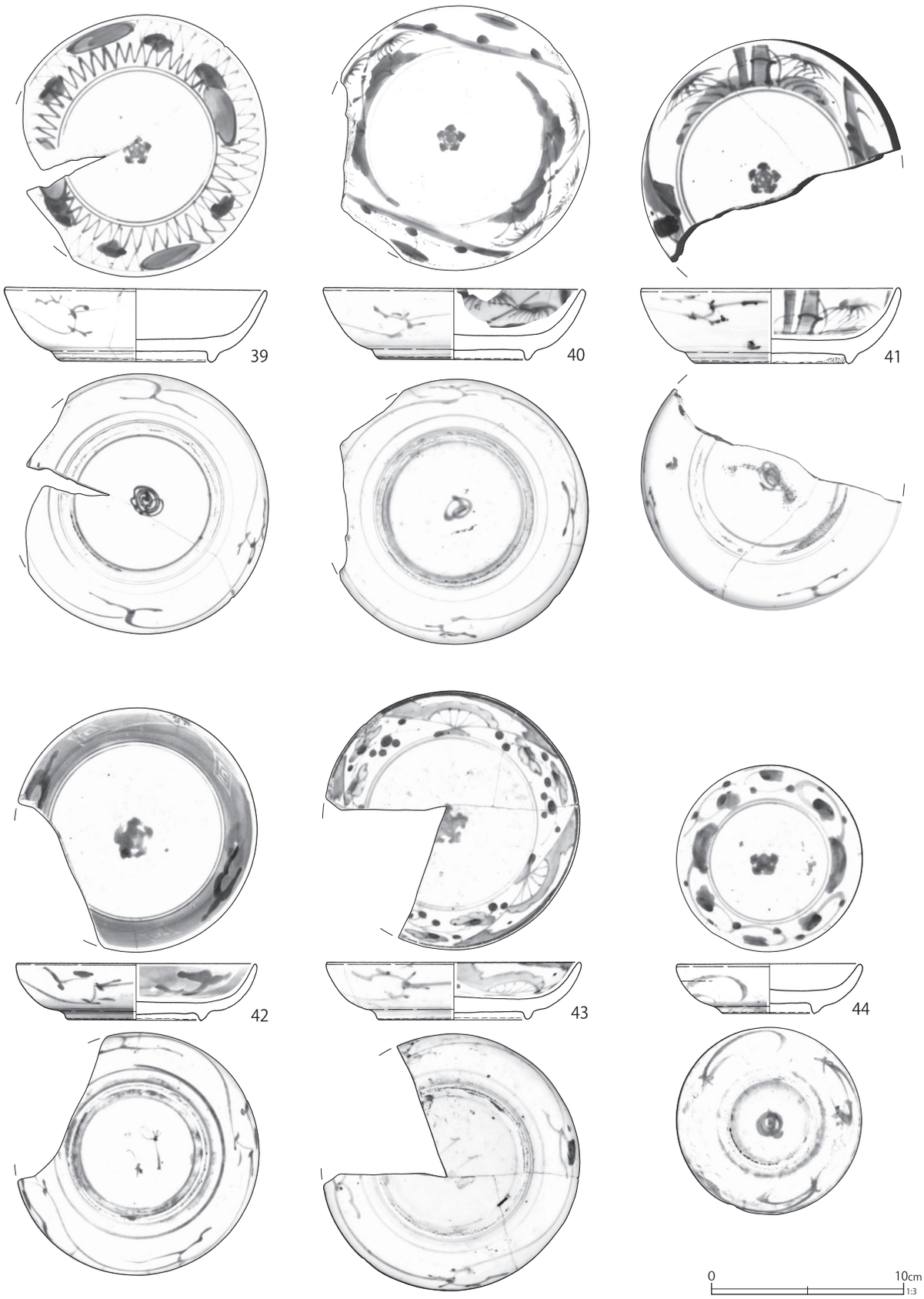
遺物は覆土上層から下層にかけて出土したが、特に浅間Ａ軽石層以下に集中していた。

陶磁器は、明確な年代差が認められず、浅間Ａ軽石降下前後で分けられるような要素はみえなかった。図示した磁器碗（第 517 図 25）と蓋（第 517 図 28）が最新のものであり、天明三年以後のものはほとんどないと思われる。また、煤の付着や弱い被熱痕跡がみられるものがあるが、それほど多くはないうえ、火災によるものか判断しがたい。

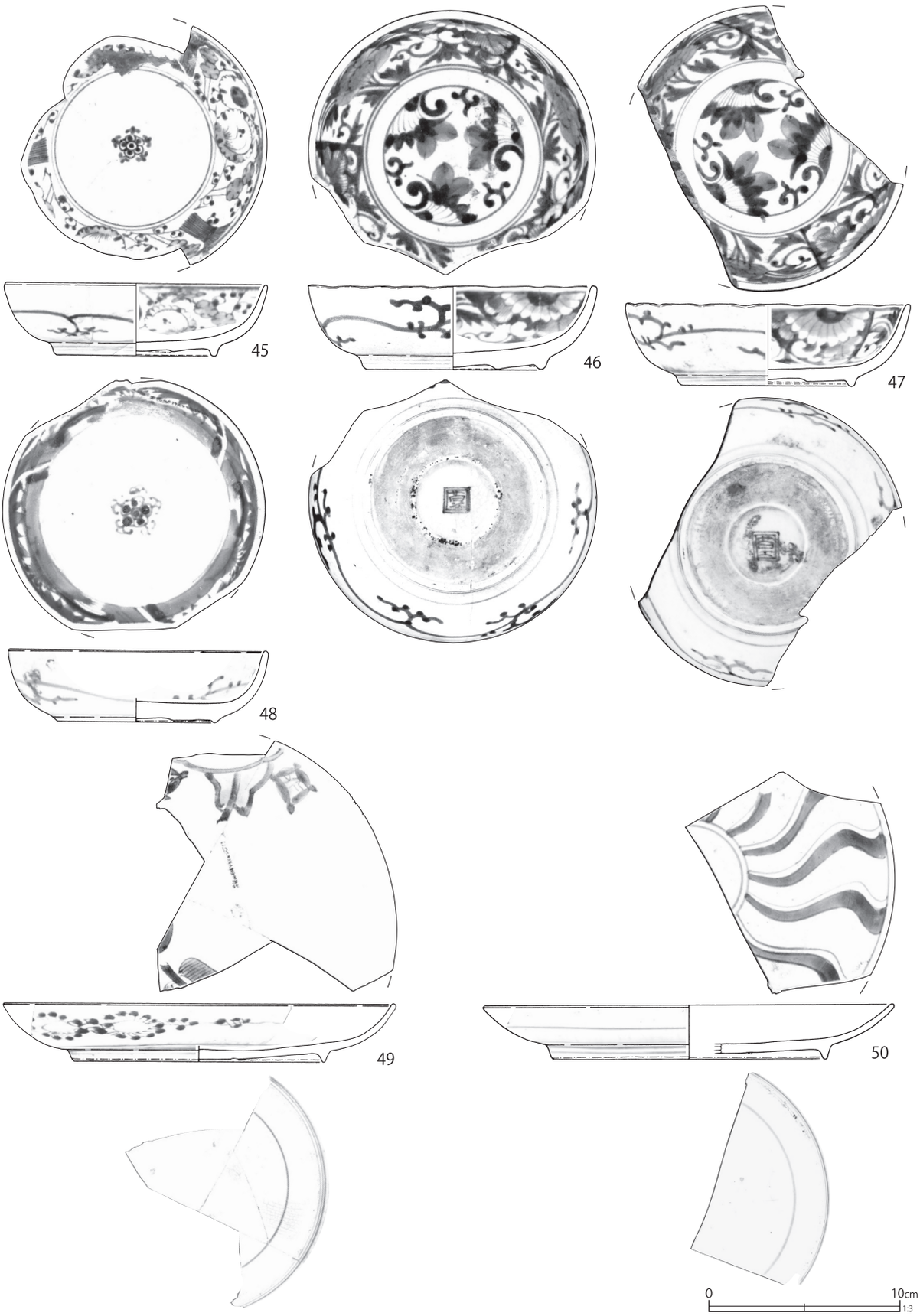
陶磁器からみた推定廃絶時期は 18 世紀第Ⅲ四半期だが、最終的に埋没したのは天明三年以後の 18 世紀第Ⅳ四半期である。

第 516 ～ 545 図に出土遺物を示した。

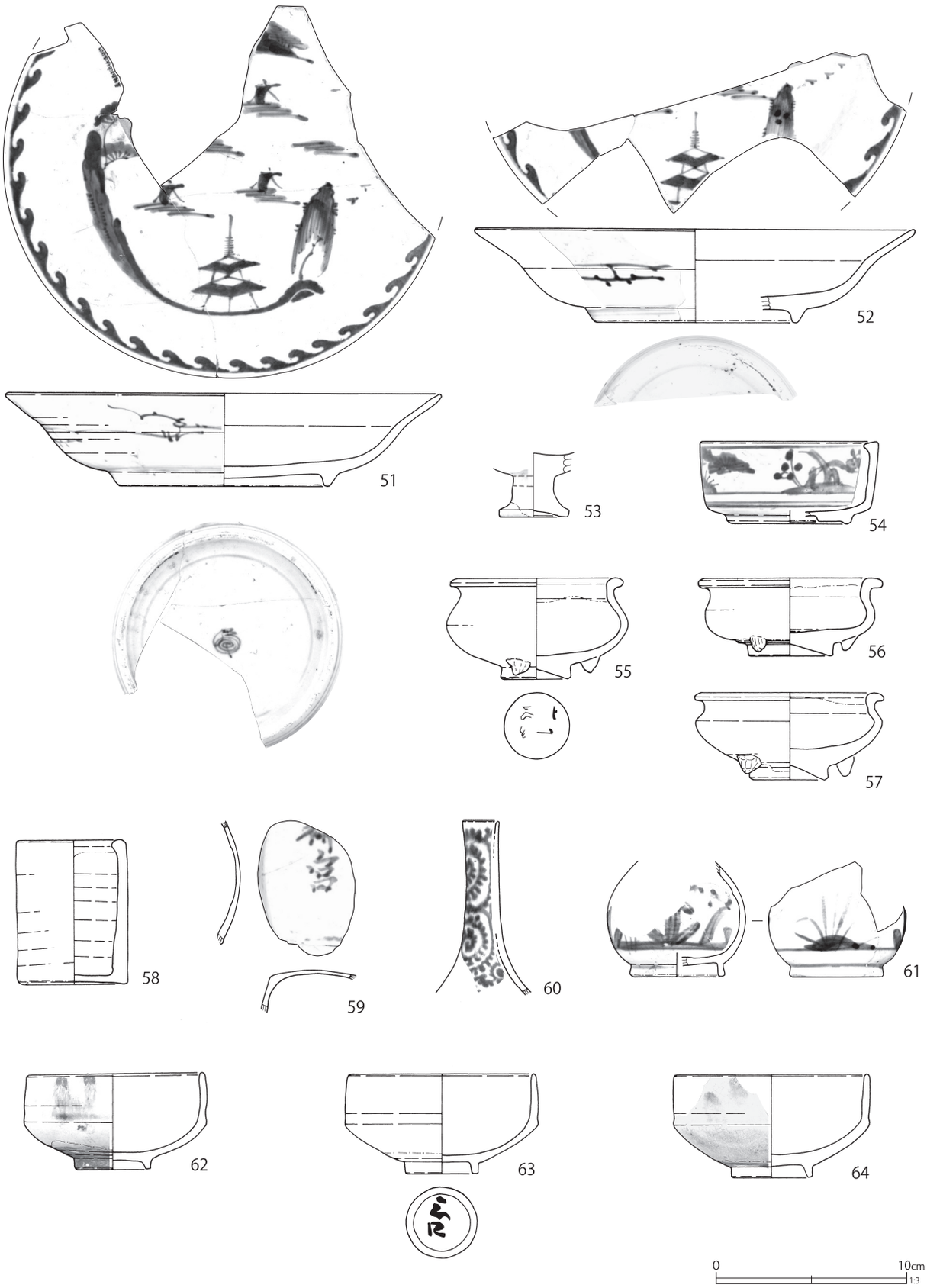
第 516 ～ 521 図 1 ～ 61 は肥前系磁器である。



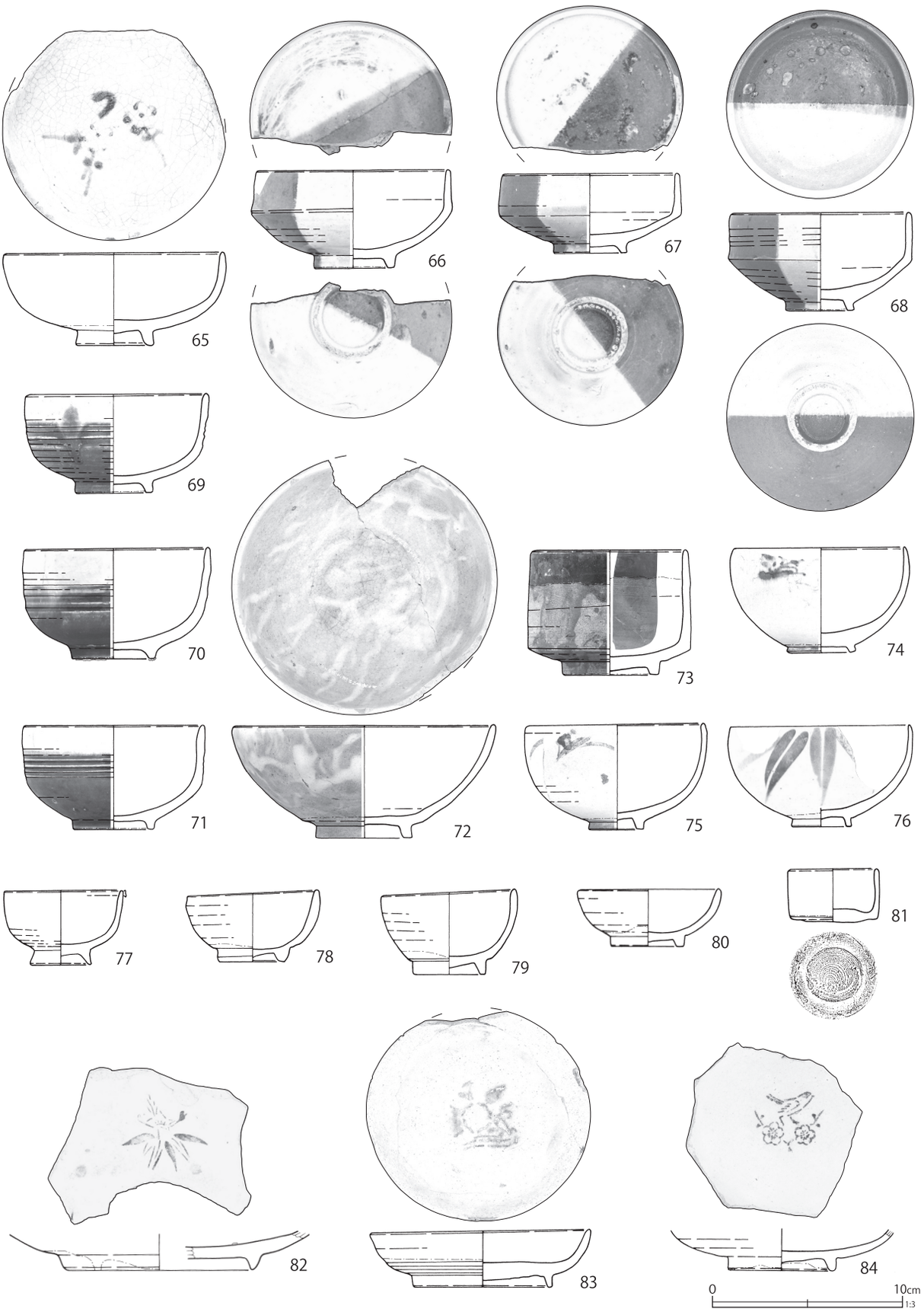
第 519 図　第 517 号土壙出土遺物（4）



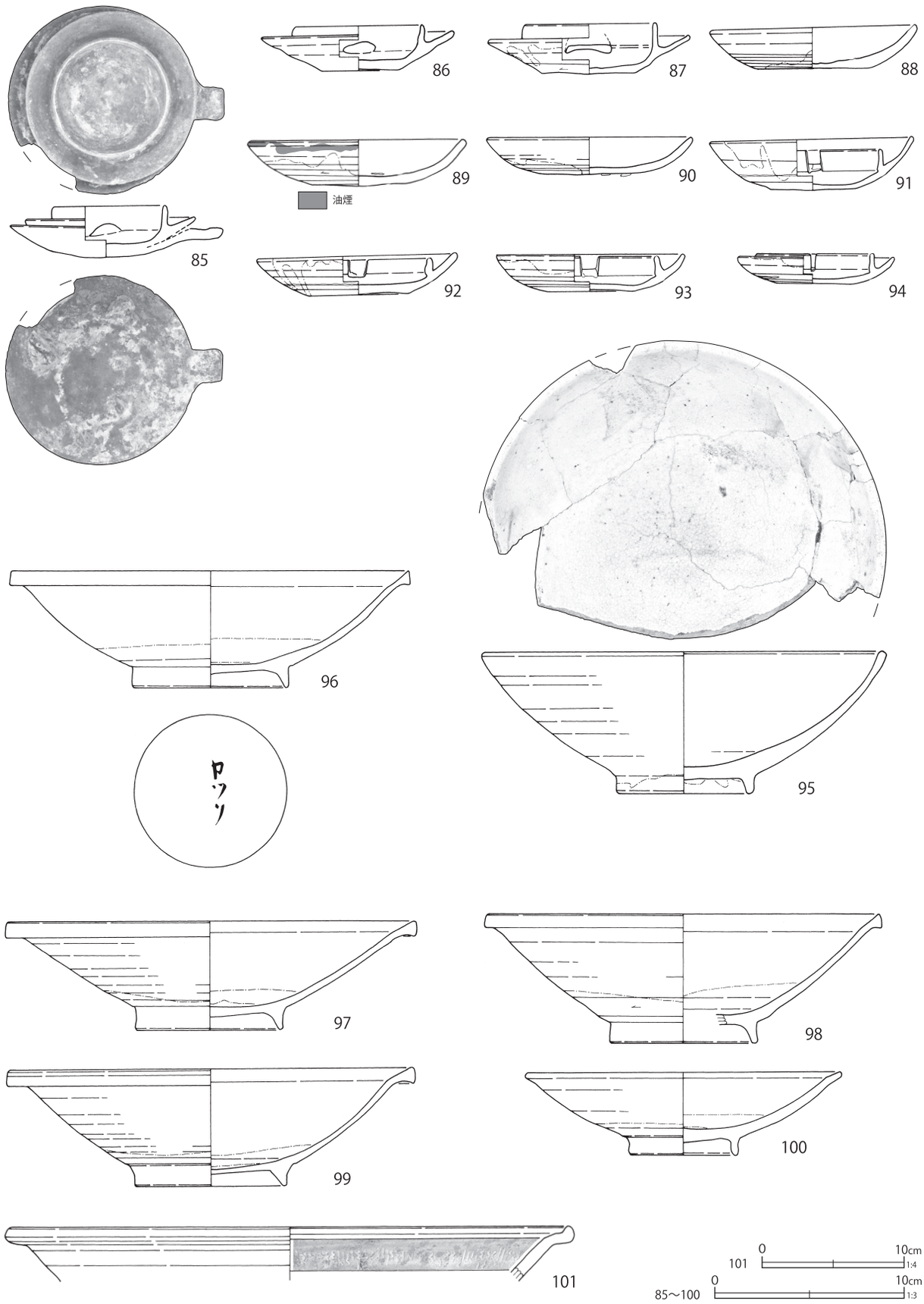
第 520 図　第 517 号土壙出土遺物（5）



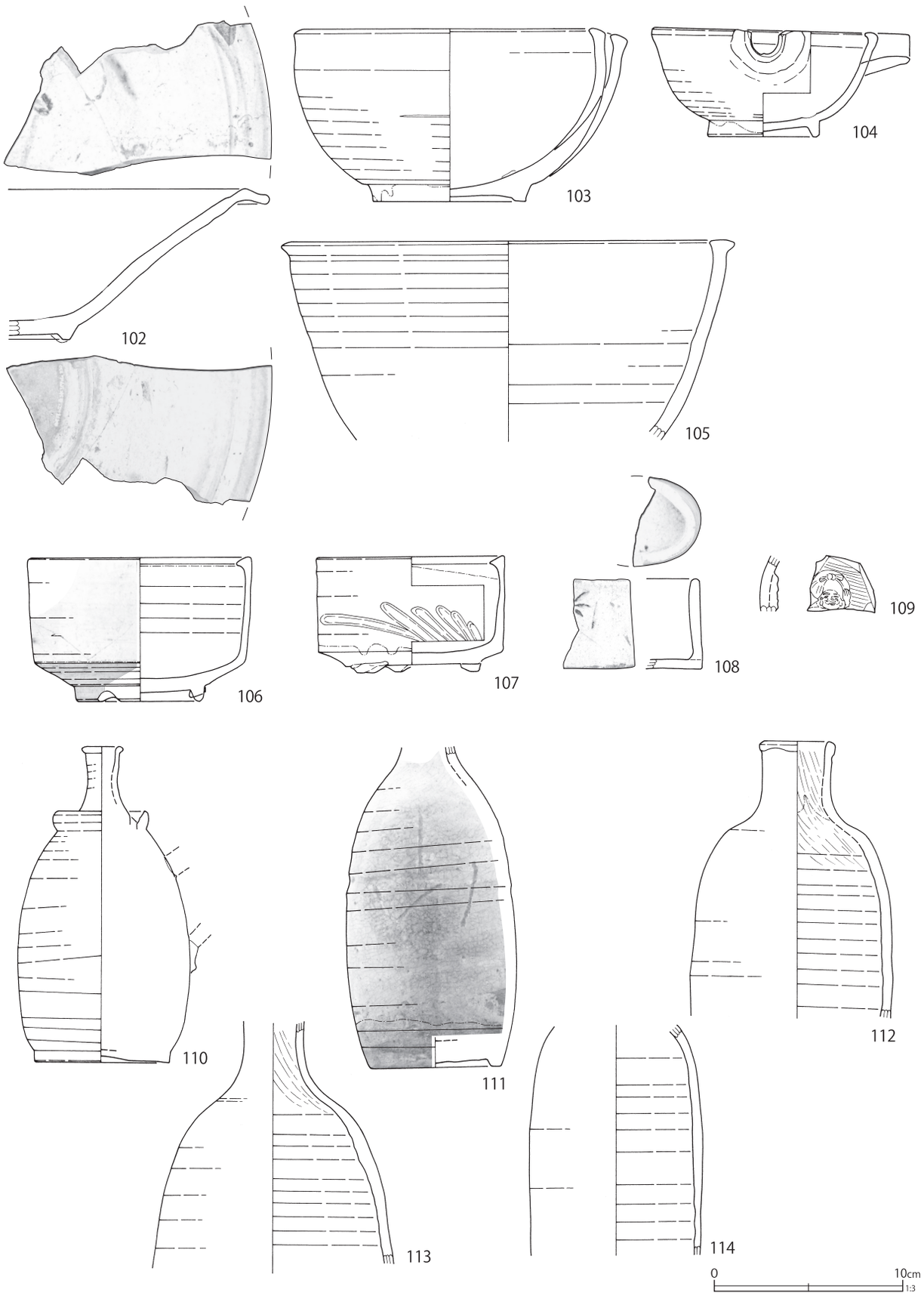
第 521 図　第 517 号土壙出土遺物（6）



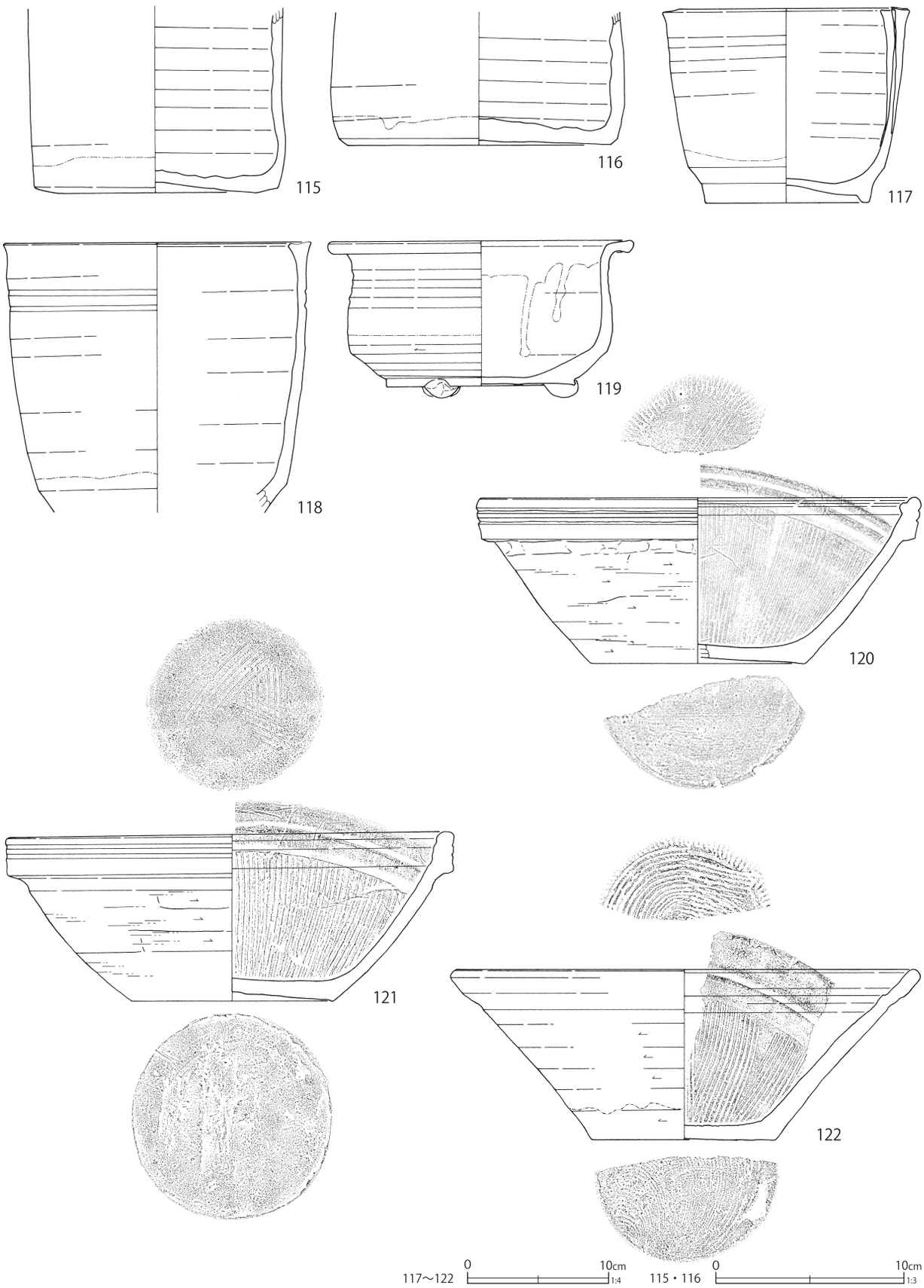
第 522 図　第 517 号土壙出土遺物（7）



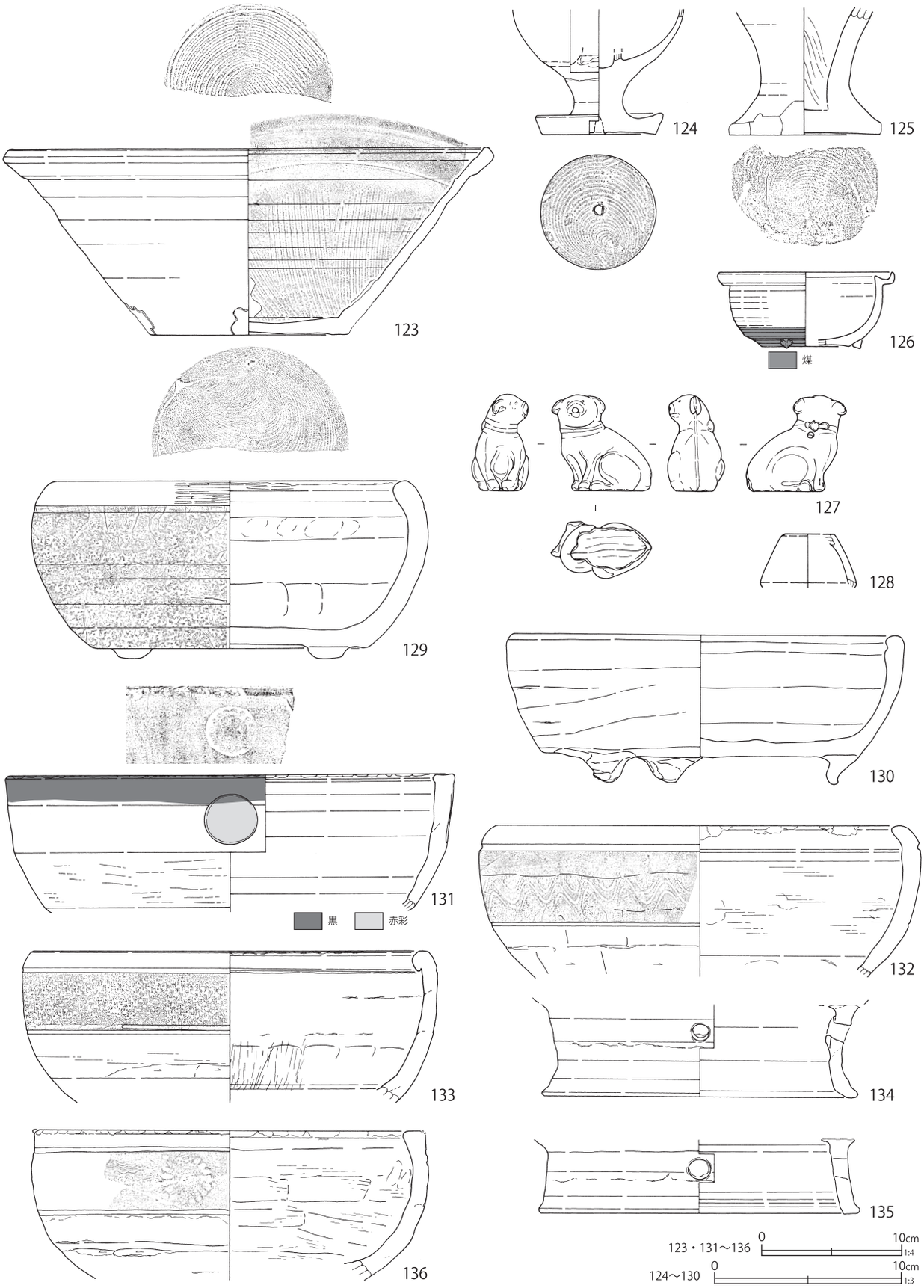
第 523 図　第 517 号土壙出土遺物（8）



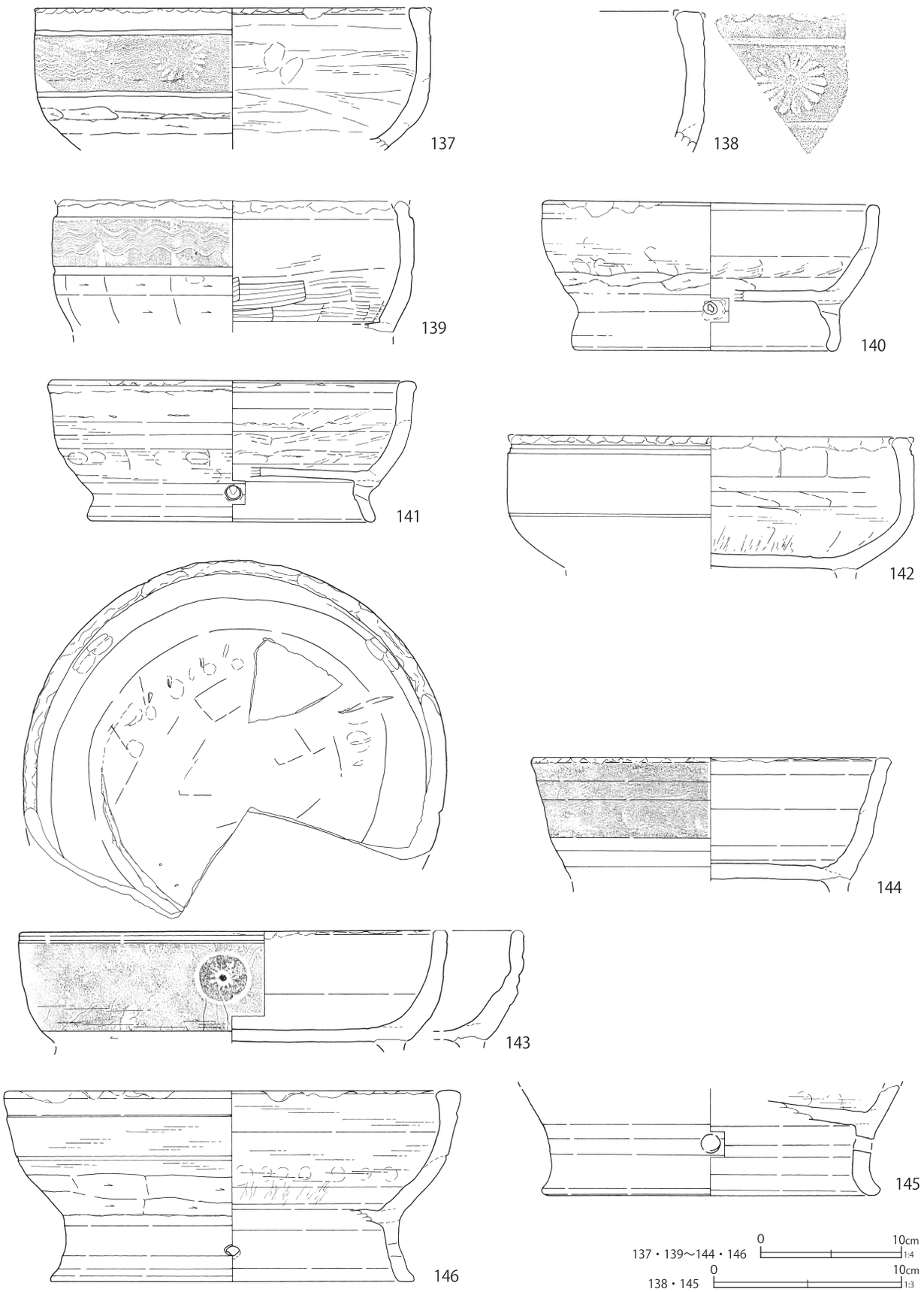
第 524 図　第 517 号土壙出土遺物（9）



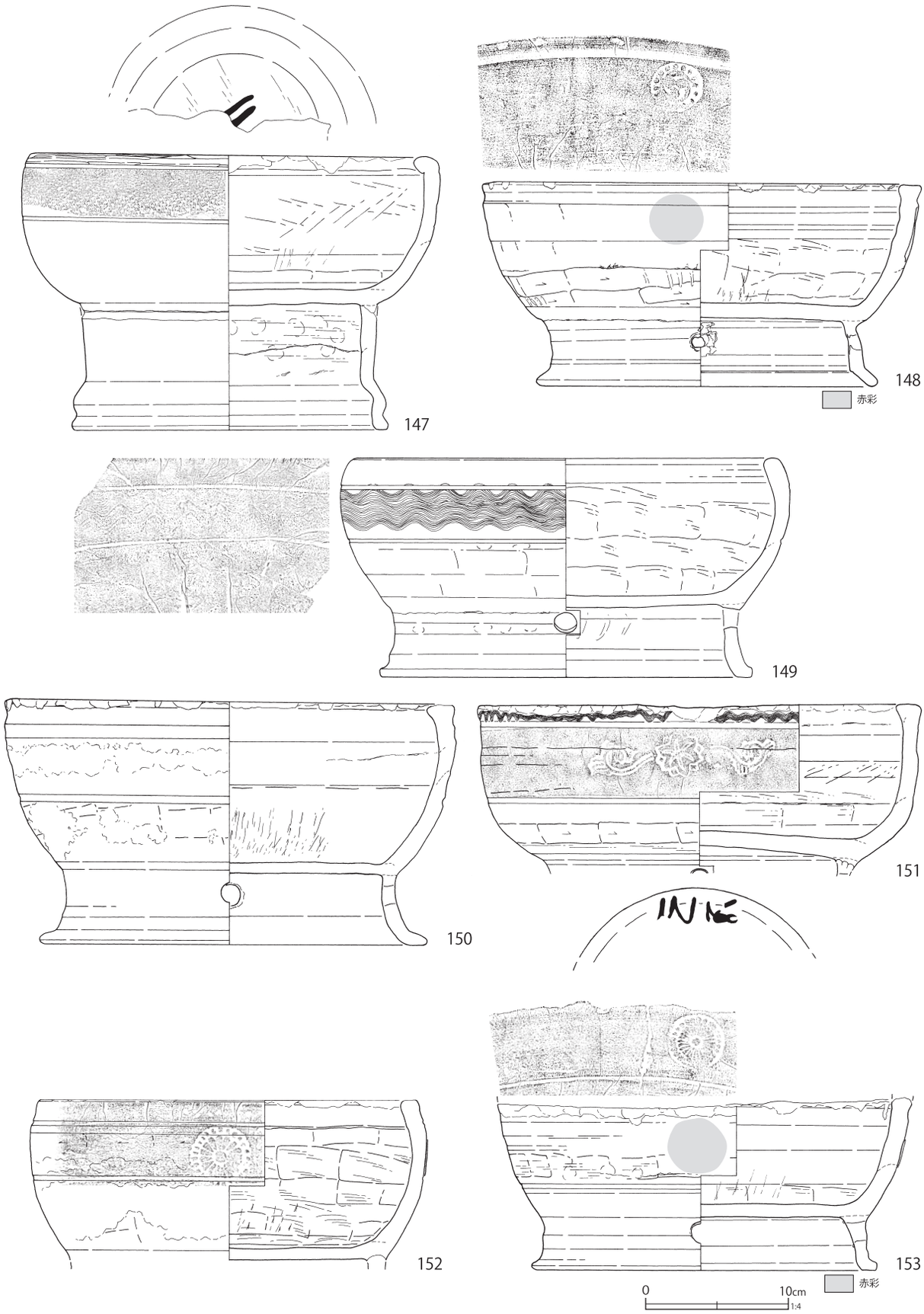
第 525 図　第 517 号土壙出土遺物（10）



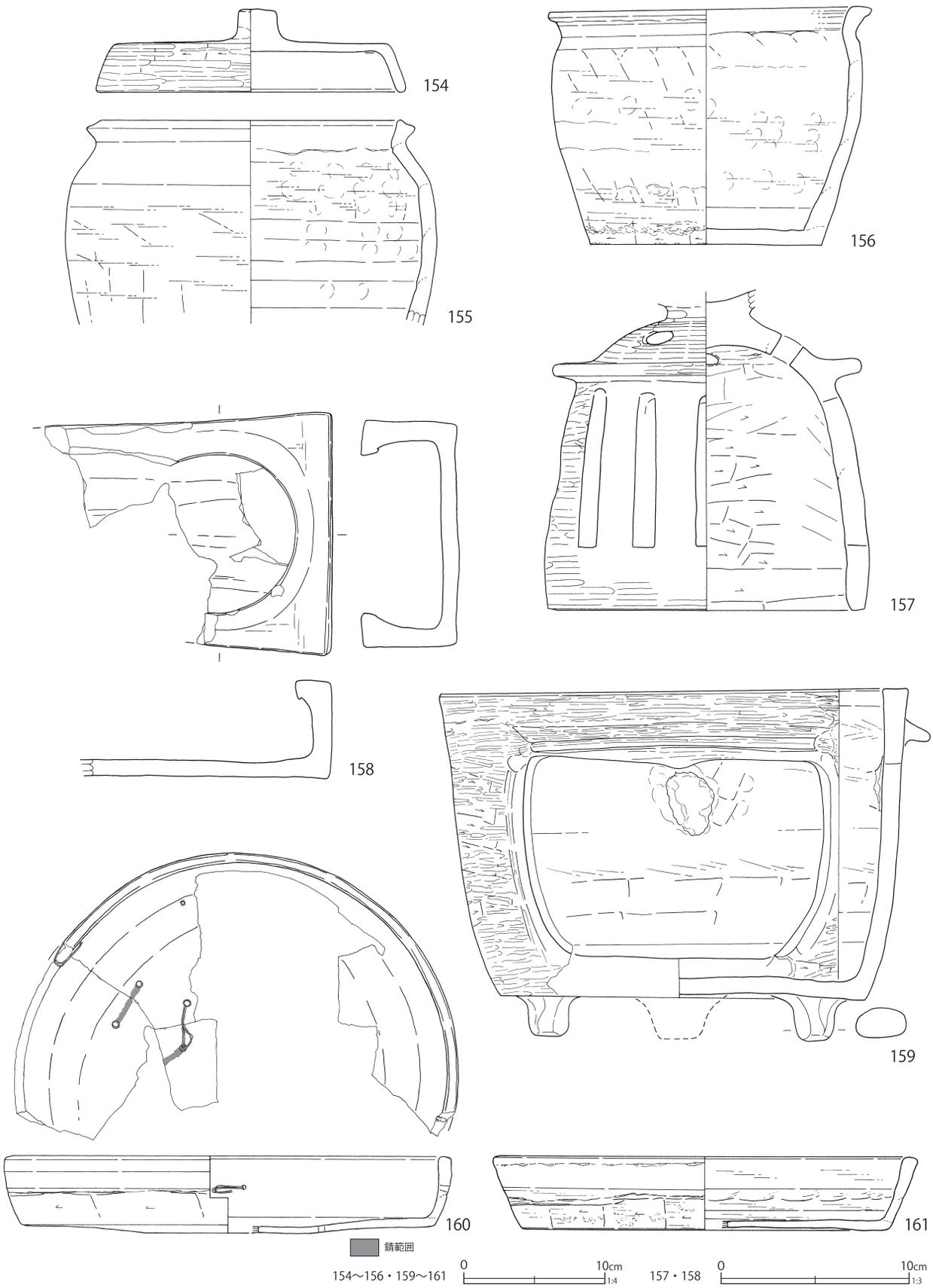
第 526 図　第 517 号土壙出土遺物（11）



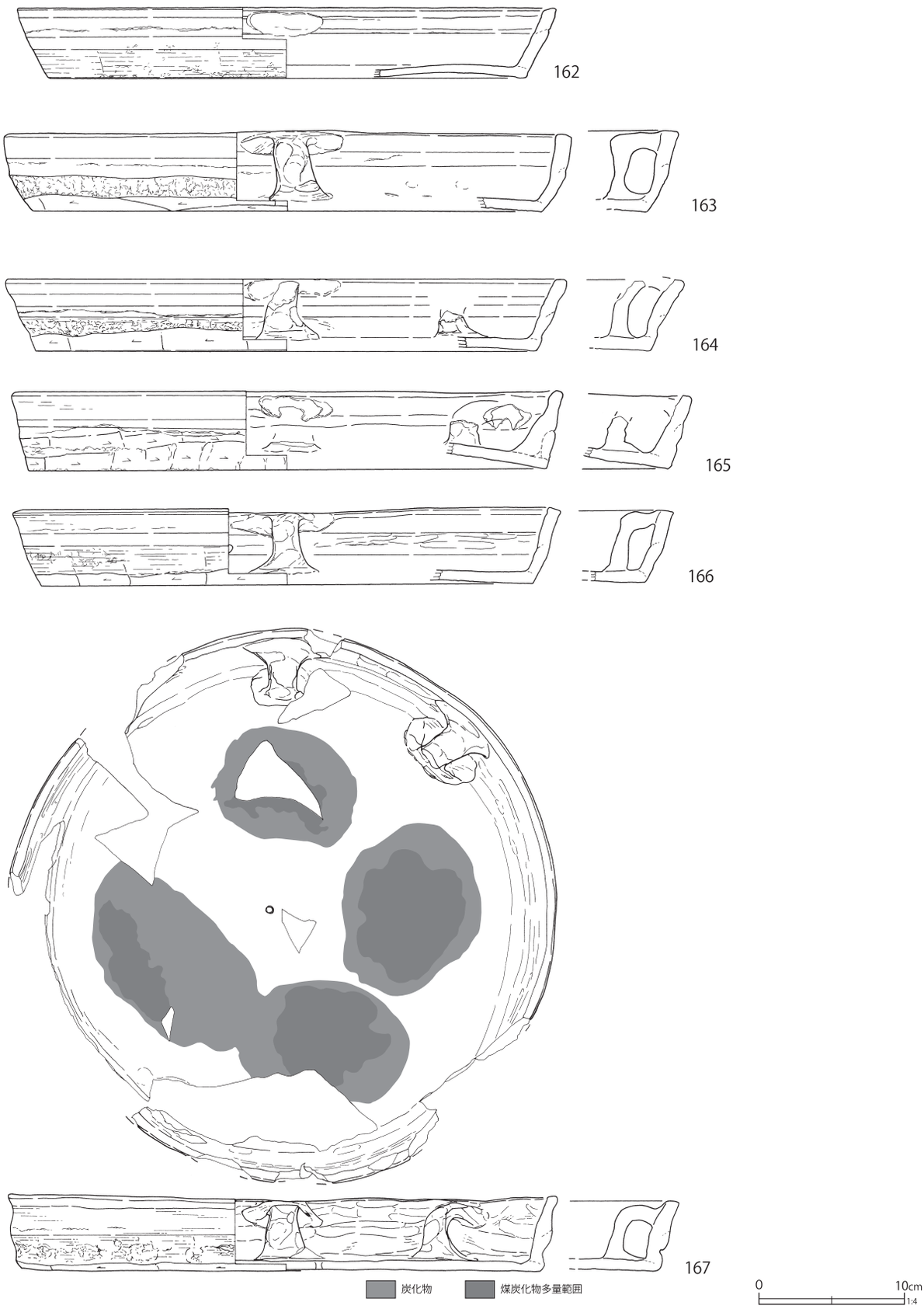
第 527 図　第 517 号土壙出土遺物（12）



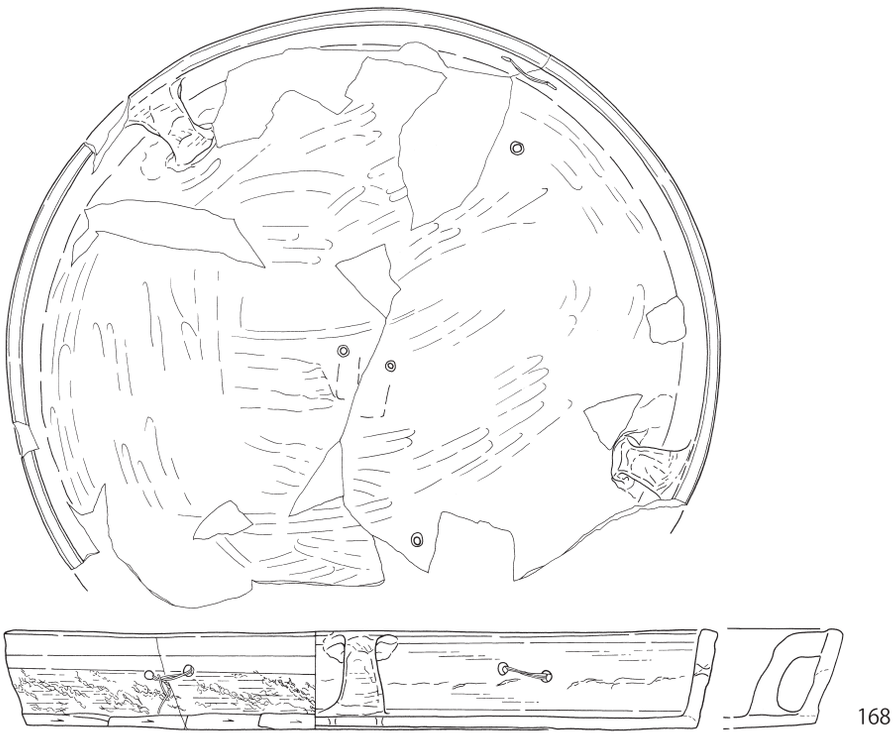
第 528 図　第 517 号土壙出土遺物（13）



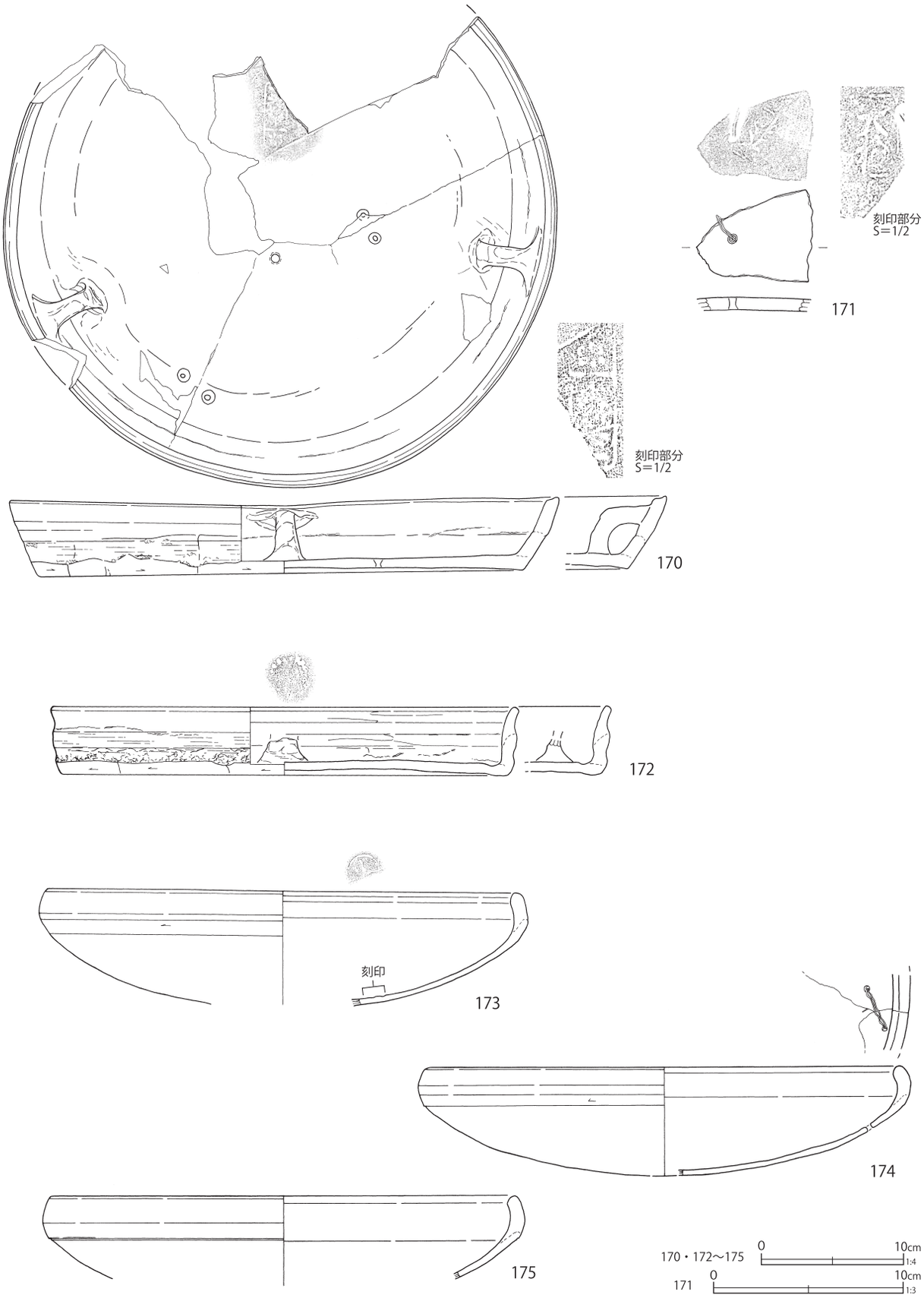
第 529 図　第 517 号土壙出土遺物（14）



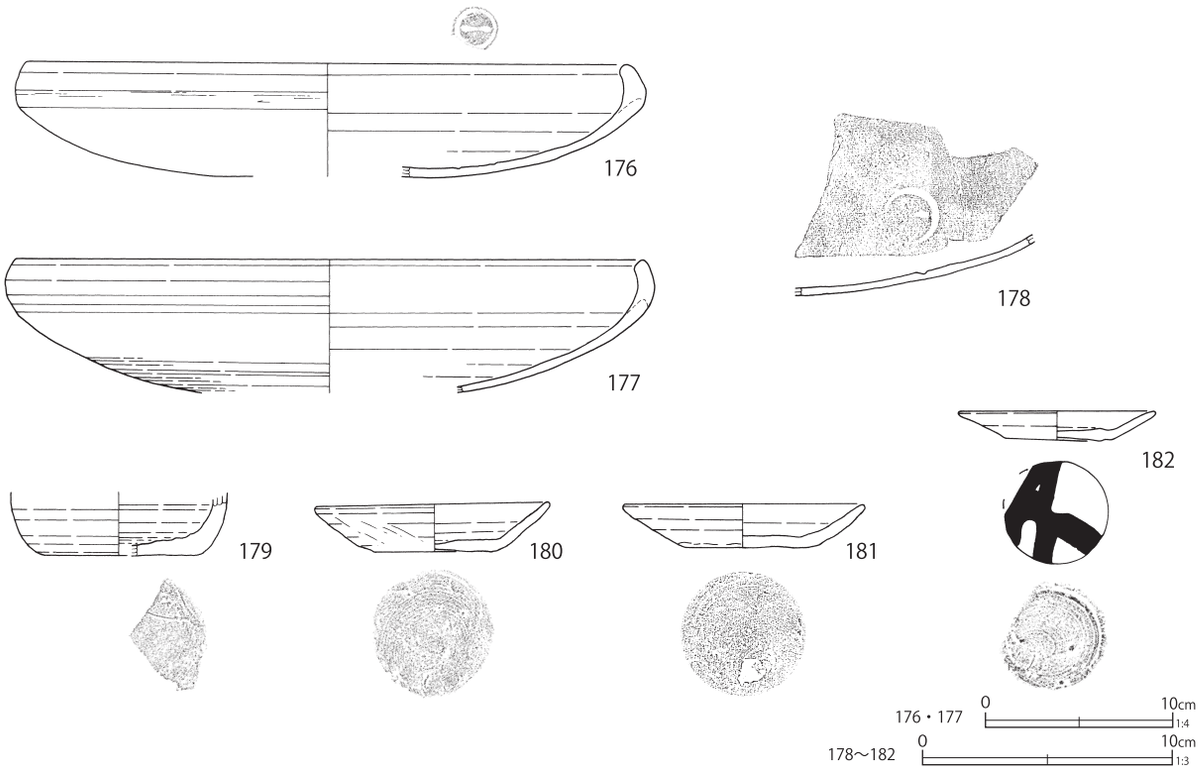
第 530 図　第 517 号土壙出土遺物（15）



第 531 図　第 517 号土壙出土遺物（16）



第 532 図　第 517 号土壙出土遺物（17）



第 533 図　第 517 号土壙出土遺物（18）

第 179 表　第 517 号土壙出土遺物観察表（１）（第 516 ～ 533 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	磁器	碗	(12.5)	6.3	4.9	―	60	良好	灰白	肥前系 内外面施釉・染付	
2	磁器	碗	11.6	5.8	(4.6)	―	40	普通	白	肥前系 内外面施釉 外面染付	
3	磁器	碗	8.6	4.4	3.6	―	95	普通	白	肥前系 内外面施釉 外面染付	221-3
4	磁器	碗	8.6	4.9	3.8	―	95	普通	灰白	肥前系 内外面施釉 外面染付	
5	磁器	碗	9.2	5.1	3.8	―	100	普通	白	肥前系 内外面施釉 外面染付	
6	磁器	碗	9.6	4.9	4.0	―	100	普通	白	肥前系 内外面施釉 外面染付 煤付着	
7	磁器	碗	9.9	5.5	3.8	―	100	普通	灰白	肥前系 内外面施釉 外面染付 僅かに煤付着	221-4
8	磁器	碗	9.9	5.1	3.8	―	100	普通	灰白	肥前系 内外面施釉 外面染付	221-5
9	磁器	碗	9.8	5.2	4.2	―	90	普通	白	肥前系 内外面施釉 外面染付 SK518 と接合	221-6
10	磁器	碗	9.8	5.1	3.8	―	60	普通	白	肥前系 内外面施釉 外面染付	
11	磁器	碗	8.4	4.2	3.0	―	70	普通	白	肥前系 内外面施釉 外面染付	
12	磁器	碗	10.1	5.2	3.5	―	55	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付	221-7
13	磁器	碗	―	[3.9]	4.0	―	40	良好	白	肥前系 内外面施釉（外面青磁釉）内面染付	
14	磁器	碗	10.2	4.8	(4.0)	―	50	良好	白	肥前系 内外面施釉 外面染付	
15	磁器	碗	7.3	3.6	2.4	―	95	良好	白	肥前系 内外面施釉 外面染付	221-8
16	磁器	碗	―	[3.9]	(3.6)	―	25	良好	白	肥前系 内外面施釉 外面染付（半球形碗）	
17	磁器	碗	8.0	6.3	3.9	―	75	良好	白	肥前系 内外面施釉（外面青磁釉）内面染付（筒形碗）SK518 と接合	
18	磁器	碗	7.8	6.5	3.7	―	95	良好	白	肥前系 内外面施釉（外面青磁釉）内面染付（筒形碗）	222-1
19	磁器	碗	7.2	6.5	3.6	―	75	良好	白	肥前系 内外面施釉（外面青磁釉）内面染付（筒形碗）	
20	磁器	碗	7.8	6.6	3.7	―	80	良好	白	肥前系 内外面施釉（外面青磁釉）内面染付（筒形碗）	
21	磁器	碗	7.3	6.3	3.5	―	90	普通	白	肥前系 内外面施釉・染付（筒形碗）	
22	磁器	碗	7.3	5.8	3.5	―	80	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付（筒形碗）	
23	磁器	碗	(9.2)	5.5	(3.4)	―	35	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付（小丸碗）	
24	磁器	碗	8.7	[4.3]	―	―	50	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付（小丸碗）SK518 と接合	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
25	磁器	碗	11.7	7.2	4.2	―	55	良好	白	肥前系 内外面施釉（外面青磁釉）内面染付	222-2
26	磁器	坏	(9.6)	3.6	(3.2)	―	40	良好	白	肥前系 内外面施釉 内面色絵（赤・緑）	222-3
27	磁器	蓋	4.2	2.9	9.8	―	80	普通	白	肥前系 内外面施釉（外面青磁釉）・染付 少量煤付着 SK518 と接合	222-4
28	磁器	蓋	4.2	3.0	10.0	―	85	普通	白	肥前系 内外面施釉・染付 同文別個体１あり SK518 と接合	222-5
29	磁器	蓋	4.0	2.8	10.3	―	95	普通	白	肥前系 内外面施釉・染付 同文別個体２あり	
30	磁器	蓋	4.1	2.9	10.0	―	90	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付	
31	磁器	坏	7.4	4.1	2.8	―	95	普通	白	肥前系 内外面施釉 外面染付 少量煤付着 SK456 と接合	222-7
32	磁器	坏	7.0	3.9	2.1	―	90	普通	白	肥前系 内外面施釉 外面染付	
33	磁器	猪口	(7.2)	5.2	4.1	―	60	普通	白	肥前系 内外面施釉 外面染付 弱く被熱	
34	磁器	猪口	7.2	5.9	5.0	―	60	普通	白	肥前系 内外面施釉 外面染付 少量煤付着	
35	磁器	合子	(5.2)	2.7	2.7	―	45	良好	白	肥前系 内外面施釉 外面上絵付（赤・緑）	222-6
36	磁器	皿	(12.4)	3.6	(4.2)	―	40	良好	白	肥前系 内外面施釉 内面蛇の目状釉剥・染付 煤付着	
37	磁器	皿	14.1	3.2	7.6	―	95	良好	白	肥前系 内外面施釉 内面蛇の目状釉剥・染付 同文別個体２あり	
38	磁器	皿	13.3	3.0	6.7	―	40	普通	白	肥前系 内外面施釉 内面蛇の目状釉剥・染付 弱く被熱 煤付着	
39	磁器	皿	13.3	3.7	7.7	―	90	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付 同文別個体１あり	
40	磁器	皿	13.2	3.6	7.6	―	80	普通	白	肥前系 内外面施釉・染付 漆継痕	
41	磁器	皿	13.2	3.9	7.9	―	55	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付 漆継痕	
42	磁器	皿	12.2	2.9	6.9	―	70	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付 少量煤付着	
43	磁器	皿	13.0	2.9	7.6	―	75	普通	白	肥前系 内外面施釉・染付・口紅	
44	磁器	皿	9.4	2.5	4.6	―	95	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付 同文別個体１あり	223-1
45	磁器	皿	(13.4)	3.7	8.2	―	65	普通	白	肥前系 内外面施釉・染付 蛇の目凹形高台	223-2
46	磁器	皿	14.6	4.3	9.0	―	70	普通	白	肥前系 内外面施釉・染付 蛇の目凹形高台	223-3
47	磁器	皿	14.5	4.2	8.8	―	60	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付 蛇の目凹形高台 漆継痕	
48	磁器	皿	13.2	3.7	8.1	―	85	普通	白	肥前系 内外面施釉・染付 蛇の目凹形高台	
49	磁器	皿	(20.2)	3.0	(13.0)	―	45	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付 高台内ピン痕３遺存	
50	磁器	皿	(21.2)	2.8	(14.0)	―	25	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付 高台内ピン痕１遺存 同文別個体１以上あり	223-4
51	磁器	皿	22.6	4.8	10.8	―	65	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付	224-1
52	磁器	皿	(22.7)	4.8	(10.4)	―	25	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付	224-2
53	磁器	仏飯器	―	[3.3]	(3.5)	―	50	良好	白	肥前系 内外面施釉 外面染付	
54	磁器	香炉	(9.0)	4.2	(6.0)	―	45	普通	白	肥前系 内外面施釉 外面染付 蛇の目凹形高台	224-3
55	磁器	香炉	(8.0)	5.2	3.3	―	65	良好	白	肥前系 外面青磁釉 底部墨痕	224-4 238-9
56	磁器	香炉	(9.0)	4.0	4.1	―	50	普通	白	肥前系 外面青磁釉	
57	磁器	香炉	9.2	4.5	3.7	―	100	普通	灰白	肥前系 外面青磁釉	224-5
58	磁器	香炉	5.2	7.5	5.2	―	100	良好	白	肥前系 外面青磁釉	225-1
59	磁器	徳利	―	[6.4]	―	―	10	普通	白	肥前系 板作り成形 内外面施釉 外面染付文字「［大］神宮」	225-2
60	磁器	徳利	1.8	[8.9]	―	―	10	普通	白	肥前系 外面施釉・染付	
61	磁器	徳利	―	[6.0]	4.5	―	30	良好	白	肥前系 外面施釉・染付	
62	陶器	碗	9.0	5.0	3.7	IK	100	良好	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉 外面上位鉄釉散らし（せんじ碗）	225-3
63	陶器	碗	(9.5)	5.2	3.6	EIK	35	良好	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉 高台内墨書「三四」（せんじ碗）	238-10
64	陶器	碗	(10.0)	6.3	(4.0)	IK	55	良好	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉 外面上位呉須・鉄釉散らし 被熱（せんじ碗）	
65	陶器	碗	(11.3)	4.8	3.8	IK	85	良好	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉 内面呉須・鉄絵	225-4
66	陶器	碗	(9.9)	5.1	4.0	IK	60	良好	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉・鉄釉掛け分け 被熱・煤付着	
67	陶器	碗	9.0	4.1	3.7	IK	75	普通	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉・鉄釉掛け分け 内面・破断面黒色付着物	
68	陶器	碗	9.2	5.1	3.2	IK	100	良好	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉・鉄釉掛け分け	225-5
69	陶器	碗	9.2	5.1	3.8	K	95	良好	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉 外面鉄釉掛け分け（腰錆碗）	225-6

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
70	陶器	碗	9.4	5.7	4.2	K	75	良好	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉 外面鉄釉掛け分け 高台畳付に重ね焼き痕 SK504･516と接合（腰錆碗）	
71	陶器	碗	9.2	5.4	4.1	IK	70	良好	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉 外面鉄釉掛け分け（腰錆碗）	
72	陶器	碗	13.4	5.8	4.8	K	85	良好	灰白	瀬戸美濃系 内外面打ち刷毛目釉 同文別個体1あり SK518と接合	225-7
73	陶器	碗	7.8	6.5	4.9	IK	75	良好	灰白	瀬戸美濃系 内外面鉄釉・錆釉掛け分け（筒形碗）	226-1
74	陶器	碗	(8.8)	5.4	3.0	K	70	普通	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉 外面鉄絵	226-2
75	陶器	碗	9.1	5.5	2.8	K	80	普通	灰白	京都信楽系 内外面施釉 外面鉄絵 SK272と接合	
76	陶器	碗	(9.3)	5.2	3.0	EIK	35	普通	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉 外面上絵付（緑・赤）弱く被熱	
77	陶器	坏	6.0	3.8	3.0	K	55	良好	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉 口縁部に別器種の口縁部溶着	
78	陶器	坏	6.6	3.7	3.4	EK	100	普通	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉	226-3
79	陶器	坏	6.8	4.4	3.7	IK	75	普通	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉	
80	陶器	坏	7.2	3.0	3.7	K	80	良好	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉	226-4
81	陶器	餌入れ	(4.5)	2.7	2.4	K	80	普通	灰白	瀬戸美濃系 底部糸切痕（右）内外面灰釉	
82	陶器	皿	―	[1.8]	9.6	IK	15	普通	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉 内面摺絵 目跡2遺存 同文別個体1あり	
83	陶器	皿	11.3	3.0	7.1	IK	95	良好	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉 内面摺絵	226-5
84	陶器	皿	―	[2.2]	5.3	EK	20	普通	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉 内面摺絵	
85	陶器	灯明皿	5.9	2.7	―	―	95	普通	暗赤褐	志戸呂系 鉄釉（錆釉）透かし孔1あり 鉄製手燭の上に溶着している 煤付着 最大径(8.7)cm 手燭口径(10.1)cm	227-2
86	陶器	灯明皿	6.6	2.3	4.0	―	80	普通	赤灰	志戸呂系 内外面鉄釉（錆釉）・煤付着 最大径9.8cm	
87	陶器	灯明皿	6.7	2.6	4.8	I	90	普通	灰褐	志戸呂系 内外面鉄釉（錆釉）透孔1（欠損）あり 最大径10.4cm	
88	陶器	灯明皿	10.6	2.2	5.8	IK	95	普通	灰白	瀬戸美濃系 内外面柿釉 外面下位・底部釉拭き取り 内面直重ね焼き痕	227-1
89	陶器	灯明皿	11.2	2.3	4.8	IK	100	普通	灰白	瀬戸美濃系 内外面柿釉 外面下位・底部釉拭き取り 内面・底部直重ね焼き痕 油煙付着	227-1
90	陶器	灯明皿	10.5	1.9	4.6	I	100	良好	褐灰	瀬戸美濃系 内外面柿釉 外面下位・底部釉拭き取り 底部直重ね焼き痕（別個体の胎土付着）	227-1
91	陶器	灯明皿	10.9	2.6	4.5	IK	100	普通	にぶい黄橙	瀬戸美濃系 内外面柿釉 外面下位・底部釉拭き取り 受口端部・体部中位直重ね焼き痕	227-1
92	陶器	灯明皿	10.3	2.0	5.3	K	100	普通	灰白	瀬戸美濃系 内外面柿釉 外面下位・底部釉拭き取り 受口端部・体部中位直重ね焼き痕	227-1
93	陶器	灯明皿	9.7	1.9	4.6	K	100	普通	灰白	瀬戸美濃系 内外面柿釉 外面下位・底部釉拭き取り 受口端部・体部中位直重ね焼き痕	227-1
94	陶器	灯明皿	6.0	1.4	3.8	I	100	普通	灰白	瀬戸美濃系 内外面柿釉 外面下位・底部釉拭き取り 受口端部・体部中位直重ね焼き痕 最大径8.0cm	227-1
95	陶器	鉢	(21.0)	7.4	6.7	EK	55	普通	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉 内面呉須絵	226-6
96	陶器	鉢	(20.8)	7.1	7.9	EK	60	普通	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉 高台内墨書 弱く被熱 高台黒化 SK456と接合	226-7 238-11
97	陶器	鉢	(21.2)	5.7	7.5	IK	70	普通	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉	
98	陶器	鉢	(20.4)	6.7	(7.5)	DK	30	普通	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉	
99	陶器	鉢	21.1	6.1	7.6	DK	35	普通	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉 露胎部煤付着	
100	陶器	鉢	(16.4)	4.3	(5.5)	K	45	普通	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉 被熱・煤付着	
101	陶器	鉢	(39.2)	[3.8]	―	IK	5	普通	赤褐	肥前系 内外面施釉 内面白土象嵌・弱く被熱・煤付着	
102	陶器	鉢	―	7.9	―	IK	10	普通	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉 内面緑釉流し掛け 内面目跡・直重ね焼き痕1遺存 被熱・煤付着	
103	陶器	鉢	(15.4)	9.0	(8.0)	DIK	30	普通	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉 内面目跡・体部中位直重ね焼き痕1あり 口縁部歪む	
104	陶器	片口鉢	11.5	5.7	5.7		95	普通	灰白	瀬戸美濃系 内外面尾呂釉 内外面目跡3あり 弱く被熱	227-3
105	陶器	こね鉢	(22.8)	[10.5]	―	DK	15	普通	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉 SK518と接合	
106	陶器	香炉	(11.4)	7.5	6.3	IK	65	普通	灰白	瀬戸美濃系 外面灰釉・摺絵（鉄）高台3箇所凹ませる	
107	陶器	香炉	9.8	6.0	7.0	DIK	95	普通	灰白	瀬戸美濃系 外面鎬文・鉄釉	227-4
108	陶器	鬢水入れ	―	4.7	―	DK	15	普通	灰白	瀬戸美濃系 板作り成形 内外面灰釉 外面摺絵（鉄絵）	227-5
109	陶器	徳利	―	[2.8]	―	K	5	良好	灰白	備前系 外面条線文・型成形人形貼付 胎土極硬質	
110	陶器	油徳利	1.8	16.7	7.0	K	95	普通	灰白	瀬戸美濃系 外面柿釉 底部釉拭き取り	228-1

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
111	陶器	徳利	―	[16.8]	6.8	IK	95	普通	灰	瀬戸美濃系 外面灰釉 外面下位・底部釉拭き取り 外面釘書「山」	228-2 238-12
112	陶器	徳利	3.3	[14.5]	―	DK	45	普通	灰白	瀬戸美濃系 外面灰釉	
113	陶器	徳利	―	[12.7]	―	IK	20	普通	灰白	瀬戸美濃系 外面尾呂釉	
114	陶器	徳利	―	[12.0]	―	IK	10	普通	灰白	瀬戸美濃系 外面灰釉	
115	陶器	徳利	―	[9.3]	10.4	EIK	15	普通	灰白	瀬戸美濃系 外面柿釉 外面下位・底部釉拭き取り	228-3
116	陶器	有耳壺	―	[7.0]	13.8	IK	15	普通	灰白	瀬戸美濃系 外面鉄釉 外面下位・底部釉拭き取り	
117	陶器	半胴甕	(15.0)	13.7	11.5	DIK	70	普通	灰	瀬戸美濃系 内外面施釉 口唇部目跡2遺存	228-4
118	陶器	半胴甕	21.5	[19.0]	―	DIK	85	普通	灰白	瀬戸美濃系 内外面施釉 被熱 口唇部目跡5	
119	陶器	瓶掛	(21.0)	11.1	13.3	DIK	70	普通	灰白	瀬戸美濃系 外面緑釉	228-5
120	陶器	擂鉢	(30.8)	11.7	(15.0)	DEI	35	普通	明赤褐	堺明石系 底部ケズリ 内面擂目	
121	陶器	擂鉢	30.9	11.8	14.2	DEIK	75	普通	明赤褐	堺明石系 砂目底をケズリ仕上げ 内面擂目	228-6
122	陶器	擂鉢	(32.0)	12.0	(13.0)	EI	35	普通	淡黄	瀬戸美濃系 底部糸切痕（右）内外面柿釉 内面擂目	228-7
123	陶器	擂鉢	(34.0)	13.2	14.0	EIK	35	普通	浅黄	瀬戸美濃系 底部糸切痕（右）内面擂目 全面柿釉 内外面下位目跡3ずつ遺存	
124	陶器	秉燭	―	[6.6]	6.0	EGK	60	良好	灰白	瀬戸美濃系 底部糸切痕（左）内外面鉄釉	
125	陶器	花生	―	[6.8]	8.0	I	15	普通	灰白	瀬戸美濃系 底部糸切痕（右）内面灰釉 外面鉄釉 底部外周打ち欠き	
126	陶器	鍋	(9.2)	3.9	(4.7)	IK	45	良好	にぶい黄橙	内外面柿釉 露胎部煤付着	228-8
127	陶器	水滴	長さ5.1 幅5.3 厚さ3.0			HK	100	普通	灰白	犬 左右合二枚型成形 外面灰釉 下面露胎 孔2箇所 重量38.3g	229-1
128	施釉土器	秉燭	―	[2.8]	―	AI	10	良好	橙	江戸在地系 内外面施釉	
129	瓦質土器	火鉢	(18.4)	9.4	(14.2)	AIK	35	良好	灰	砂目底 口縁・体部ミガキ 体部スタンプ文 口唇部敲打痕	229-2
130	瓦質土器	火鉢	20.6	7.8	16.8	CGHIK	85	普通	にぶい黄橙	砂目底・圧痕 やや酸化炎焼成 内底面円周状のナデ 外面・口唇部被熱（黒化）	229-3
131	瓦質土器	火鉢	(31.5)	[9.7]	―	CHIK	15	普通	にぶい橙	やや酸化炎焼成 画面菊花文スタンプをナデ消し スタンプ文を赤彩 外面上位黒色塗布 口縁端部敲打痕	
132	瓦質土器	火鉢	(28.8)	[10.7]	―	CI	10	良好	にぶい橙	外面櫛歯波状文 やや酸化炎焼成	
133	瓦質土器	火鉢	(28.0)	[10.8]	―	CHIK	20	普通	にぶい橙	外面施文	
134	瓦質土器	火鉢	―	[6.6]	(22.2)	CHIK	10	普通	灰黄	脚部穿孔1遺存 SK292と接合	
135	瓦質土器	火鉢	―	[5.2]	(22.5)	CIK	15	普通	明褐灰	脚部穿孔2	
136	瓦質土器	火鉢	(27.2)	[10.6]	―	CGHI	10	良好	にぶい橙	外面菊花文スタンプ・櫛歯波状文 やや酸化炎焼成 口縁部歪み 口唇部二次敲打 137と同一個体	
137	瓦質土器	火鉢	(27.2)	[10.0]	―	CGHI	15	良好	にぶい橙	外面菊花文スタンプ・櫛歯波状文 やや酸化炎焼成 口縁部歪み 口唇部二次敲打 136と同一個体	229-4
138	瓦質土器	火鉢	―	[7.4]	―	CGHI	5	良好	にぶい橙	外面菊花文スタンプやや酸化炎焼成 口縁部二次敲打	
139	瓦質土器	火鉢	(23.8)	[9.3]	―	CHIK	20	普通	にぶい橙	外面櫛歯波状文 口縁部二次敲打	
140	瓦質土器	火鉢	23.3	10.5	(18.3)	CEFHI	60	普通	灰白	砂目底 脚部穿孔1遺存 口唇部二次敲打 内面煤付着 SK518と接合	229-5
141	瓦質土器	火鉢	25.6	10.0	20.0	CHIK	65	普通	にぶい橙	砂目底 やや酸化炎焼成 口唇部僅かに二次敲打痕 内面煤付着	229-6
142	瓦質土器	火鉢	(27.4)	[9.5]	―	CHIK	30	普通	にぶい黄橙	砂目底 やや酸化炎焼成 内面火箸状痕 口唇部二次敲打痕	
143	瓦質土器	火鉢	(29.8)	[7.9]	―	CEHIK	30	普通	にぶい黄橙	砂目底 外面菊花文スタンプ	
144	瓦質土器	火鉢	(25.0)	[8.6]	―	CEHIK	40	普通	にぶい黄橙	砂目底 外面櫛歯波状文 口縁部二次敲打痕	
145	瓦質土器	火鉢	―	[7.5]	(23.0)	CHIK	15	普通	にぶい橙	砂目底 脚部穿孔1遺存 やや酸化炎焼成	
146	瓦質土器	火鉢	(31.6)	13.5	(25.6)	CHIK	25	普通	浅黄橙	外面一部黒色処理 脚部穿孔1遺存 口唇部二次敲打痕 内底面火箸状痕	
147	瓦質土器	火鉢	27.5	19.4	(21.8)	CEHIK	70	普通	浅黄橙	砂目底 外面施文・剥落多い 口縁部の一部ミガキ 内底面墨書 脚部に意図的な切断痕あり 口縁部二次敲打痕 内底面の一部に火箸状痕	229-7 238-13
148	瓦質土器	火鉢	28.6	14.2	23.5	CHIK	75	普通	浅黄橙	底部シワ状痕 外面十六珠三巴文スタンプ（赤彩）脚部穿孔1遺存 内底面火箸状痕 やや酸化炎焼成	229-8
149	瓦質土器	火鉢	(29.2)	15.3	25.8	CHIK	40	普通	浅黄橙	底部シワ状痕・砂目底 外面櫛歯波状文・一部黒色処理 脚部穿孔2 やや酸化炎焼成	
150	瓦質土器	火鉢	30.3	17.1	25.5	CEHIK	95	普通	浅黄橙	底部シワ状痕 脚部穿孔2 やや酸化炎焼成 口唇部二次敲打痕 内面火箸状痕 器面の剥離激しい	230-1

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
151	瓦質土器	火鉢	30.3	[11.9]	—	CGHIK	80	普通	にぶい橙	砂目底 外面スタンプ状施文 脚部穿孔２遺存 やや酸化炎焼成 口縁部二次敲打 底部墨書「三五」	230-2 238-14
152	瓦質土器	火鉢	26.4	[11.1]	—	CEHIK	65	普通	浅黄橙	砂目底 外面菊花文スタンプ やや酸化炎焼成 口唇部二次敲打痕 内面僅かに火箸状痕	
153	瓦質土器	火鉢	—	[12.1]	(22.7)	CIK	70	普通	にぶい黄橙	砂目底 外面菊花文スタンプ（赤彩） 外面全体を黒色処理 脚部穿孔１遺存 やや酸化炎焼成 口縁部二次敲打痕 内面僅かに火箸痕	230-3
154	瓦質土器	蓋	—	5.8	(21.6)	CHIK	45	普通	にぶい橙	外面ヘラミガキ 内面煤多く付着	230-4
155	瓦質土器	火消壺	(20.0)	[14.4]	—	CFIK	30	良好	にぶい橙	やや酸化炎焼成 口縁部煤付着	
156	瓦質土器	火消壺	22.5	16.7	16.3	CK	90	普通	浅黄橙	底部シワ状痕	230-5
157	瓦質土器	瓦燈	—	[16.8]	(16.8)	CHIK	50	普通	灰白	外面ミガキ 上部穿孔３ 前面に長方形孔	230-6
158	土師質土器	風口	—	5.2	—	AIK	40	良好	淡赤橙	江戸在地系 砂目底をナデ調整 長さ[15.1]cm 幅13.0cm	230-7
159	瓦質土器	竈	32.8	24.8	25.7	CIK	80	普通	にぶい橙	底部シワ状痕 外面ミガキ 内面煤付着 SK536と接合	230-8
160	瓦質土器	焙烙	(30.4)	5.5	29.3	CEHIK	40	普通	灰白	底部シワ状痕 外面煤付着 補修痕８遺存（5箇所）・うち２箇所に銅線遺存	
161	瓦質土器	焙烙	(29.0)	5.1	(26.0)	CIK	25	普通	浅黄橙	砂目底 やや酸化炎焼成 外面煤付着	
162	瓦質土器	焙烙	(36.8)	4.8	(32.8)	CEHIK	20	普通	にぶい黄橙	砂目底・一部シワ状痕 外面煤付着 やや酸化炎焼成	
163	瓦質土器	焙烙	(38.2)	5.5	(35.0)	CHIK	10	普通	明褐灰	底部シワ状痕 やや酸化炎焼成 外面煤付着	
164	瓦質土器	焙烙	(38.2)	5.0	(34.4)	CEFHIK	20	普通	灰白	底部シワ状痕 弱く燻す	
165	瓦質土器	焙烙	(36.0)	5.4	(35.5)	CHIK	20	普通	明褐灰	底部シワ状痕 燻す	
166	瓦質土器	焙烙	(37.0)	5.2	(33.8)	CHIK	20	普通	浅黄橙	底部シワ状痕 燻す	
167	瓦質土器	焙烙	37.1	5.3	35.7	CI	75	普通	灰白	底部シワ状痕 内面体部ヘラミガキ 弱く燻す 外面煤付着 内面円形炭化物痕 SK518と接合	
168	瓦質土器	焙烙	36.9	5.5	36.0	CIK	80	普通	灰白 黒褐	底部シワ状痕 外面煤付着 補修痕６遺存（4箇所）・銅線遺存 SK518と接合	231-1
169	瓦質土器	焙烙	37.4	5.7	34.8	CI	95	普通	灰白	底部シワ状痕 燻す	231-2
170	瓦質土器	焙烙	38.2	5.4	33.6	CHIK	75	普通	灰白	底部シワ状痕 内底面刻印	231-3
171	瓦質土器	焙烙	—	0.7	—	HIK	5	普通	灰白	底部シワ状痕 内面刻印「大極上」 穿孔１・銅線遺存	231-4
172	瓦質土器	焙烙	(32.6)	4.6	(31.1)	CIK	70	良好	にぶい黄橙	底部シワ状痕 内底面菊花文スタンプ	231-5
173	土師質土器	焙烙	32.5	[8.0]	33.1	AHK	40	普通	にぶい黄橙	江戸在地系 砂目底 胎土粉質 内底面刻印「㊀」外面煤付着	231-6
174	土師質土器	焙烙	(33.0)	[7.6]	(33.7)	AIK	40	普通	にぶい橙	江戸在地系 底部シワ状痕 砂目底 補修痕２ 銅線遺存	
175	土師質土器	焙烙	(32.5)	[5.8]	33.2	AHIK	25	不良	にぶい黄橙	江戸在地系 砂目底 胎土粉質 外面煤付着	
176	土師質土器	焙烙	32.0	[6.0]	32.5	AIK	70	普通	にぶい橙	江戸在地系 砂目底 胎土粉質 内底面刻印「㊀」外面煤付着	231-7
177	土師質土器	焙烙	(33.4)	[7.0]	(33.8)	AK	10	普通	にぶい褐	江戸在地系 砂目底 胎土粉質 外面煤付着	
178	土師質土器	焙烙	—	[2.4]	—	AI	5	普通	にぶい黄褐	江戸在地系 砂目底 胎土粉質 内面刻印「㊀」	231-8
179	土師質土器	植木鉢	—	[2.5]	(6.0)	AHIK	15	良好	にぶい橙	江戸在地系 底部糸切痕 胎土粉質	
180	かわらけ	小皿	9.2	1.9	4.8	AEGHIK	100	良好	にぶい橙	江戸在地系 底部糸切痕（左） 胎土粉質 口縁部煤付着	232-1
181	かわらけ	小皿	9.4	1.7	4.8	AHIK	80	不良	にぶい橙	底部糸切痕（左） 口縁部少量煤付着	232-2
182	かわらけ	小皿	(7.8)	1.2	3.9	AIK	60	普通	にぶい黄橙	江戸在地系 底部糸切痕（左） 胎土粉質	

１～25は碗である。１は粗製碗で、大形のものである。外面に雪輪草花文、内底面に二重圏線と崩れた五弁花文の染付が施される。かなり粗雑で、色調は灰色を呈する。

２～11は粗製碗である。２は体部が直線的に立ち上がり、３は小碗サイズである。ともに外面に梅樹文が染付される。

４～９には雪輪草花文の染付が施される。９は第518号土壙から出土した個体と接合した。

10の染付は、唐草状に梅文が繋がる。11は小碗で、外面に二重網目文の染付が施される。

12は器形が小広東碗状の丸碗で、薄手のものである。

13は外面青磁釉の丸碗である。体部が青磁釉だが発色は弱く、淡い。内面の透明釉もやや青味がかる発色である。内面は二重圏線と明瞭な五弁

花文の染付が施される。

15 は半球形の小碗である。外面は手描きで３区画に分けて、波状文と丸枠が描かれる。波状枠は濃塗り、一部には斜格子文が充填される。

17 ～ 22 は筒形碗である。このうち 17 ～ 20 は外面に青磁釉が施されたもので、いずれも内面の口縁部には四方襷文、底部に崩れの著しい五弁花文が染付される。17 は第 518 号土壙から出土した破片と接合した。21 は外面に山水楼閣文、内面の口縁部に四方襷文、内底面に二重圏線とコンニャク印判の五弁花文が染付される。22 は雪輪文を上下に配し、内面の口縁部は四方襷文、内底面は圏線と崩れた五弁花文が染付される。

23・24 は小丸碗で厚手のものである。23 は内外面に同心円状の染付が施される。24 の外面は斜格子、雪輪状の区画内に山水文が染付される。内面の口縁部は、横帯状の染付内に列点文が施される。第 518 号土壙から出土した破片と接合した。

25 は碗で、体部が朝顔形に開くものである。外面に青磁釉が施される。内面の口縁部は四方襷文、内底面は、二重圏線と崩れた五弁花文が染付される。

26 は坏で、体部が直線的に開く。胎土と釉は白色味が強く、内面に上絵付けで色絵が施される。

27 ～ 30 は碗の蓋である。27 は外面に青磁釉が施されるもので、体部が朝顔形に開く碗の蓋である。内面の口縁部に四方襷文、中心に五弁花文、外面つまみ内に渦福文が染付される。表面に少量の煤が付着するが、被熱によるものか否かは判断つかない。

28 ～ 30 は体部が強く内湾するもので、つまみが逆「ハ」字状に開く。同形態の高台を有する碗に伴うものである。28 は内面の口縁部に四方襷文、中心に草花文、外面に柳・岩などが染付されるもので、同文のものが他に１個体ある。

29 は内面の口縁部に四方襷文、中心に昆虫文、外面に牡丹・草花文が染付されるもので、同文のものが他に２個体ある。30 は内面中心・外面ともに崩れた蕪文が染付される。

31・32 は坏である。31 は外面に笹文と草花文、32 は笹文のみが染付される。

33・34 は輪高台の猪口である。33 は厚手のもので、外面に蔓文とみられる草花文が染付される。

34 は外面に桔梗文が染付される。若干の煤が付着するとともに、断面の一部が黒化していることから被熱していると考えられる。

35 は合子である。外面に赤と緑の上絵付で、花文が描かれる。赤は変色し、部分的に黒くなる。

36 ～ 52 までは皿である。

36 ～ 38 は、内面を蛇の目状釉剥ぎするものである。36 は高台径の小さなもので、二重線で斜格子文が染付される。表裏面に若干の煤が付着し、被熱している可能性があるが明確ではない。

37・38 は高台径の大きなもので、内面に崩れた花唐草文が染付される。器壁も厚手で重量感がある。37 は、同文のものが他に２個体ある。

38 は弱く被熱しているようで、表裏面に煤が付着するほか、断面も一部黒化している。

39 ～ 44 までは粗製・厚手のものである。39 は内面に鋸歯状になる網目文、外面には一重の太い唐草文が染付される。また、内底面に五弁花文、高台内に渦文が染付される。同文のものが他に１個体ある。

40・41 は内面に竹文、外面には一重の唐草文が染付される。また、内底面に五弁花文、高台内に渦文が染付される。両者は同じような意匠の染付であるが、文様の構成は異なる。いずれも漆継痕がみられる。

42・43 はやや腰が張るタイプである。42 は内面の体部が濃塗りされ、菱形の角渦文が墨弾きされる。外面には一重の唐草文が染付される。また、内底面には崩れた五弁花文、高台内に大きく崩した「大明年製」銘が染付される。全体が若干煤けていて、弱く被熱している可能性がある。

43 は内面に扇状文と花文、外面には一重の唐草文が染付される。また、内底面にはコンニャク印判による五弁花文、高台内には大きく崩した「大明年製」銘が染付される。

44 は小形のもので、内面に梅樹文、外面には一重の唐草文が染付される。また、内底面にはコンニャク印判による五弁花文、高台内に渦文が染付される。文様はいずれも崩れている。同文のものが他に１個体ある。

45 ～ 48 は、蛇の目凹形高台を有すものである。高台の高さは低い。45 はやや薄手の器壁をもち、染付も比較的丁寧である。内面には梅樹文、露草丸文・雪輪丸文や稲束文、外面には一重の唐草文が染付される。また、内底面には丁寧な五弁花文が染付される。

46・47 はほぼ同文の構成である。内面体部を区画して菊花・牡丹文などを、外面には一重の唐草文、高台内に「筒江」銘款を染付する。47 の破断面に漆継痕がみられる。

49・50 は、高台断面がシャープな「U」字状のものである。49 は手描きで枠線が描かれ、その中が濃塗りされる丁寧な作りである。高台内にピン痕が３箇所遺存する。

50 は内面に、枠線内を濃塗りした捻花文の染付が施される。高台内にピン痕が１箇所遺存する。同文のものが他に１個体以上ある。

51・52 は同文の深手の皿で、口縁部はやや折れ鍔状である。内面の口縁部付近に波濤文、底面に山水楼閣文が染付される。表面の色調はややくすんだ灰白色である。

53 は肥前系磁器の仏飯器で、底面は中心に向かって抉り込まれる。外面の体部に染付の一部が残っている。体部を中心に、打ち欠きによる二次加工が施される。

54 ～ 58 までは香炉である。54 は蛇の目凹形高台を有し、内面まで施釉される。外面に松・梅文の染付がみられ、松竹梅文が配されたものと思われる。

55 ～ 57 は底部が窪み、円盤状の露胎部を有すものである。いずれも青磁釉が施され、55 の底部には墨痕が認められる。

58 はベタ底で、円筒状のものである。外面に青磁釉が施される。底部には筋状の回転ナデが明瞭に残る。

59 ～ 61 までは御神酒徳利である。59 は板作り成形のもので、外面には染付の文字「神宮」が遺存する。おそらくは「大神宮」と思われる。60・61 は鶴首形のものである。60 は蛸唐草文染付、61 は松竹梅文の染付が配される。

第 521・522 図 62 ～ 74・76 ～ 84 までは、瀬戸美濃系陶器である。

62 ～ 64 はせんじ碗で、灰釉が施釉される。62 は外面の１箇所に鉄釉が散っている。63 は高台内に墨書がみえる。64 は被熱し、釉の一部が白変する。外面の１箇所に呉須と鉄釉が散っている。

65 は平碗である。灰釉が施釉され、内面に呉須・鉄絵が施される。

66 ～ 68 は、鉄釉と灰釉が左右に掛け分けられるせんじ形の碗である。畳付を除く全面が施釉される。66 は被熱し、煤が付着する。67 は内面と破断面に煤のような黒色の付着物がみられる。

69 ～ 71 は腰錆碗である。体部に丸みがあり、上位は垂直に立ち上がる器形である。灰釉が施釉され、外面は光沢のある鉄釉が掛け分けられる。

72 は平形の腰が張る碗で、打ち刷毛目釉が施される。同文の別個体が他に１個体ある。第 518 号土壙から出土した破片と接合した。

73 は筒形碗である。内外面に、鉄釉と錆釉が上下に掛け分けられている。

74・76 は瀬戸美濃系、75 は京都信楽系陶器の半球形碗である。74 は底部が厚手、75 は薄手で、外面に鉄絵が施される。75 は第 272 号土壙から出土した破片と接合した。76 は外面に赤と緑で上絵付が施される。弱く被熱している。

77 ～ 80 は灰釉の坏である。77 は、口縁部に別の器種の口縁部が溶着している。81 は餌入れである。

82 ～ 84 は摺絵皿である。82 は大形のもので、高台の断面は三角形である。内面に摺絵と目跡が２箇所遺存する。同文の別個体が１個体ある。

第 523 図 85 ～ 87 までは志戸呂系陶器の灯明皿（油受皿）である。85 は１箇所に半円状の透孔があり、手燭状の鉄製品と溶着している。煤が全面に付着する。

88 ～ 94 までは瀬戸美濃系陶器の灯明皿である。このうち、88 ～ 90 は油皿で、柿釉が施釉される。外面下位から底部にかけて釉が拭き取られている。89 は外面の口縁部に油煙が付着する。

91 ～ 94 は、油受皿である。柿釉が施釉され、外面下位から底部にかけて釉が拭き取られる。切り込みは長方形で、小形の 94 は特に幅が狭い。

95 ～ 100 は瀬戸美濃系陶器の鉢である。95 は内面に呉須絵が施される。96 ～ 100 は灰釉が施釉され、内面が蛇の目状釉剥ぎされる。このうち 100 は小形のもので、他は同程度のサイズである。96 は高台内に墨書がみられる。第 456 号土壙から出土した破片と接合した。

101 は肥前系陶器の三島手鉢である。

第 524 図 102 は瀬戸美濃系陶器の鉢である。103 は瀬戸美濃系陶器の鉢としたが、形態から片口鉢かもしれない。口縁部から体部が歪む。

104 ～ 107 までは瀬戸美濃系陶器である。104 は片口鉢で、小形・丸形のものである。105 は、こね鉢である。106・107 は香炉で、106 は高台の３箇所を窪ませ、外面に摺絵が施されるものである。107 は外面に鎬状文が施される。

108 は瀬戸美濃系陶器の鬢水入れである。板作り成形で、底部と体部の境に接合痕がみられる。灰釉が施釉され、外面には摺絵が施される。

109 は備前系陶器の人形徳利で、体部の破片である。窪みがあり、型成形の人形が貼り付けられる。外面には条線文がみられる。胎土は極めて硬質で、厚手である。

110 は瀬戸美濃系陶器の油徳利である。

第 524・525 図 111 ～ 115 までは瀬戸美濃系陶器の徳利である。外面に灰釉が施釉され、下位と底部は釉が拭き取られる。111 は、外面に釘書で大きく「山」と書かれている。

116 は瀬戸美濃系陶器の袋物の下部で、舟徳利の可能性もあるが、釉調、作りから有耳壺と判断した。外面に鉄釉が施釉され、下端部と底部は釉が拭き取られている。117・118 は瀬戸美濃系陶器の半胴甕である。119 は瀬戸美濃系陶器の瓶掛で、緑釉が施釉される。

120・121 は堺明石系陶器の擂鉢である。120 は全体に赤色味の強いものである。内面には一単位 10 条の擂目が施される。体部外面はケズリ後に、全体に丁寧なヨコナデが施される。底部は一方向のケズリで処理される。

121 は、120 に比べて赤味が弱く、くすんだ色調である。内面の擂目は一単位８条で、内底面の擂目は三角パターンである。外面の体部は、ケズリ痕が弱いヨコナデで消される。底部の砂目は、粗くヘラケズリで調整される。

第 525・526 図 122・123 は瀬戸美濃系陶器の擂鉢である。122 は全体に柿釉が施された後、底部の釉薬は拭き取りされる。内面の擂目は一単位 13 条である。

124 は瀬戸美濃系陶器の秉燭である。底部に糸切痕が残る。内外面に鉄釉が施釉される。

125 は瀬戸美濃系陶器の花生である。底部に右回転の糸切痕が残り、周囲は二次的に打ち欠かれる。内面は灰釉、外面の遺存部分は鉄釉である。

126 は小形の柿釉鍋である。露胎部に使用痕と思われる煤が付着する。産地は不詳である。

127 は水滴である。産地不詳のもので、犬をモチーフとする。左右合わせの二枚型成形である。灰釉が施釉され、底部は露胎である。首の背面と

口に孔がみられる。

128 は江戸在地系の施釉土器で、算盤玉形を呈する秉燭の上部破片である。内外面に透明釉が施釉される。栗橋宿跡における出土は稀である。

129・130 は瓦質土器の丸火鉢である。129 は硬質・瓦質のもので、燻されて灰色ないし黒色を呈する。砂目底で、円形の脚が３箇所につき、口縁部にはミガキが施される。外面の口縁部付近に、沈線を１条廻らし、以下はミガキと施文を行う。口唇部に敲打痕がみられる。

130 はやや酸化炎焼成で、外面に銀化状の光沢がみられる。砂目底で、段を有す直線状の圧痕が認められる。また、板状の脚が２箇所遺存する。脚の周囲は強いナデが施され、体部はヨコナデで処理される。内底面には円周状のナデが施される。

第 526 ～ 528 図 131 ～ 153 までは瓦質土器の火鉢で、輪高台状の脚を有すものである。

132 は口縁部が内湾するもので、やや酸化炎焼成である。外面下位はケズリ、その直上は弱いヘラナデで処理される。体部の沈線の区画内には、櫛歯波状文が施文される。内面は筋状のナデが施され、口唇部には若干の敲打痕が認められる。胎土に角閃石が含まれる。

136・137 は口縁部から体部の破片で、同一個体のものである。やや酸化炎焼成で、胎土に角閃石が多く含まれる。外面下位はナデ、その直上に幅の狭いケズリが施される。沈線の区画内には、菊花文スタンプと櫛歯波状文が施文される。内面は全体に筋状のナデがみられる。内外の口唇部に、敲打痕が認められる。

139 は口縁部から体部の破片である。外面の下位は、幅が広くやや粗いケズリが施される。その直上に沈線が廻り、櫛歯波状文が施文される。内面の下位には刷毛目がみられ、上位には筋状のナデが認められる。口縁部は敲打により欠失する。胎土に角閃石が多く含まれる。

140 はやや小形のものである。砂目底で、脚部との境界には回転ナデが施される。外面の体部下位は幅の狭いヘラナデ、内面の下位は筋状の弱いヘラナデで処理される。内底面は平滑なナデで、周囲に回転ナデが施される。胎土に角閃石が含まれる。

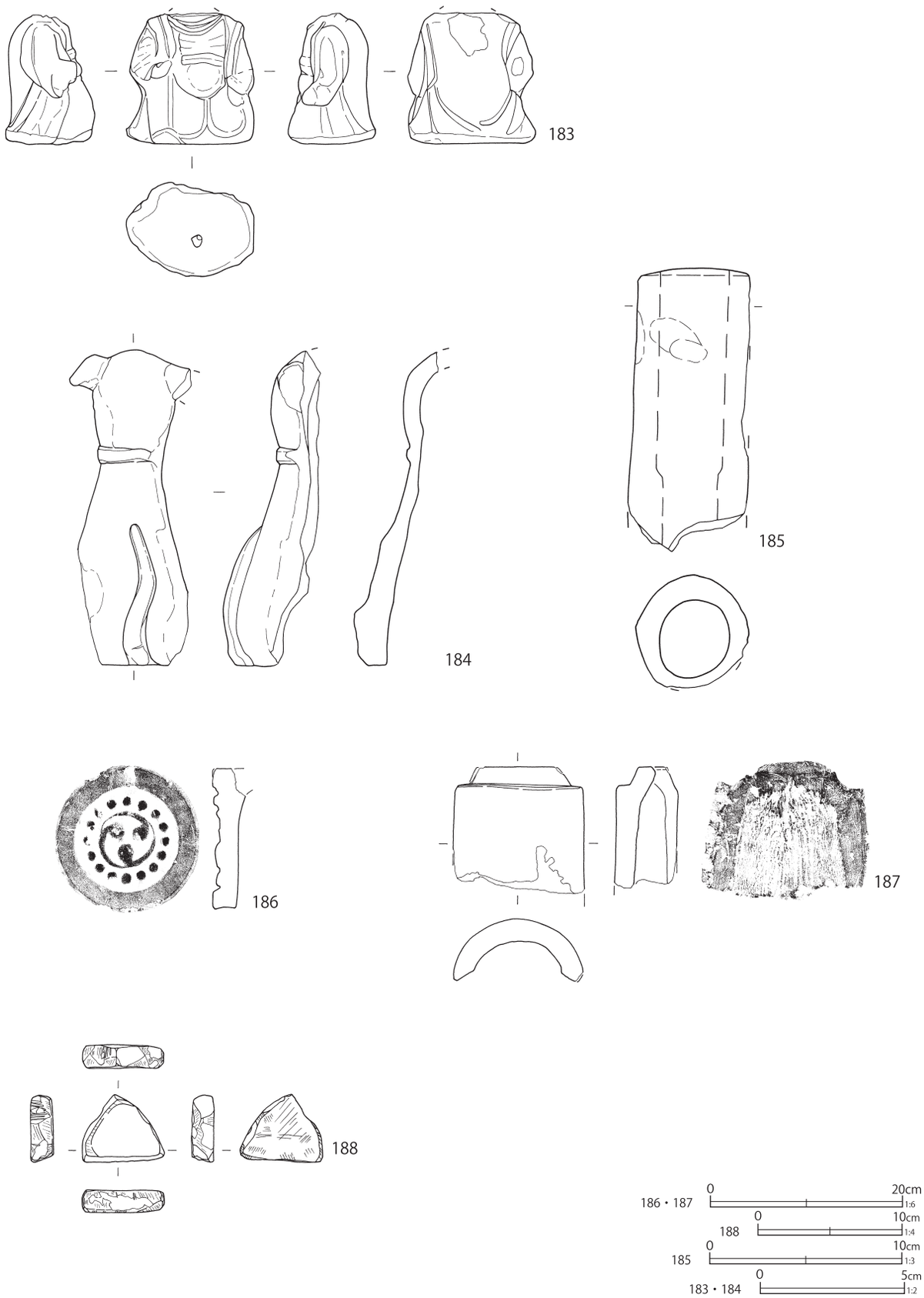
141 は 140 より一回り大きいものである。やや酸化炎焼成で、胎土に角閃石が目立って含まれる。砂目底である。外面の体部下位は強い筋状のヨコナデ、上位はヨコナデで処理される。内面下位は筋状のヘラナデが施される。

143 は砂目底で、外面下位はケズリ後に弱いヨコナデで処理される。体部に施文された菊花文スタンプは、２箇所遺存し、本来は４箇所に付くと思われる。内底面は弱いヘラナデで平滑に処理され、周囲に沿ってヘラの当たりと指圧痕が並ぶ。内面の体部に、強い筋状のナデが施される。胎土には角閃石が少量含まれる。

146 は外面の体部下位と口縁部に、黒色処理が施されるものである。体部下位は弱いケズリ、上位は筋状のナデが施される。口縁部は強いナデで処理し、下端部に段が付く。体部中位に沈線が１条廻る。内面の下位は、指圧痕がみられ、筋状のヨコナデで処理される。胎土の角閃石はやや多い。

第 528 図 147 は、段が付く高い脚を有すものである。脚部の付け根を意図的に切断し、脚部の再成形が行われている。脚部の内面上位は粗いナデが施され、指圧痕がみられる。底部は僅かにシワ状痕がみられる砂目底で、体部と口縁部に２条の沈線が廻る。口縁部は粗いミガキが施される。沈線の区画内は、列点状文が充填される。内面下位はヨコナデで、上位は不定方向の丁寧なナデで処理される。胎土の角閃石はやや多い。

148 は体部の中位に、赤彩された十六珠の三巴文がスタンプされるものである。栗橋宿跡では稀な文様である。やや酸化炎焼成で、胎土の角閃石はやや多い。外面の体部下位は幅の広い２段のヘラケズリ、その直上はヘラナデ状の調整が施され



第 534 図　第 517 号土壙出土遺物（19）

第 180 表　第 517 号土壙出土遺物観察表（２）（第 534 図）

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	焼成	色調	備考	図版
183	土製品	人形	－	4.4	2.9	37.1	AH	普通	にぶい黄橙	江戸在地系 唐子 前後合型成形 中空 中に玉 高さ 4.5cm	242-3
184	土製品	人形	－	4.2	1.3	44.4	AEH	良好	橙	江戸在地系 犬 前後合型成形 中空 高さ 10.9cm	
185	土製品	羽口	[14.4]	－	－	340.4	CEI	普通	灰白	下部内面段あり 外面凹み 断面径（外径 5.8cm 内径 3.6cm） 炉側径（外径 (6.1)cm 内径 (2.8)cm） 鞴側径（外径 5.7cm 内径 3.5cm）	242-5
186	瓦	軒丸瓦	[3.1]	－	2.7	－	AIK	普通	灰	右巻き 十六連珠三巴文 径 14.9cm	248-8
187	瓦	丸瓦	[13.3]	[13.9]	2.3	－	AIK	普通	灰白	被熱 高さ [6.7]cm	248-9
188	瓦	不明	4.7	5.7	1.6	－	AIK	普通	灰	平・軒平瓦ヵ 砥具転用 刃ならし痕	248-10

る。内底面は多方向に及ぶナデで平滑に処理され、周囲に回転ナデが施される。内面の体部下位は弱いヘラナデ、上位は筋状のヨコナデで処理される。

151 は外面の体部中位に、花文に唐草文を配したスタンプが施されたものである。やや酸化炎焼成で、胎土に角閃石が多量に含まれる。砂目底で、底部の外周囲はナデが施される。外面の体部下位は幅の広いケズリが施され、上位２条の沈線区画内にはスタンプ文、口縁部付近には櫛歯波状文が施文される。内底面はナデで平滑に、周囲は筋状の回転ナデで処理される。内面の体部下位は弱いヘラナデ、直上を斜方向のナデ、上位はヨコナデが施される。底部に墨書がみえる。

第 529 図 154 は瓦質土器の蓋で、火消壺に伴うものである。円柱状のつまみを有し、つまみ周囲はナデで処理される。上面の砂目に、ヘラナデと思われるナデ痕が不規則にみられる。外面の体部は、ケズリ後にヘラミガキが施される。胎土に角閃石が多量に含まれる。

155 は瓦質土器の火消壺である。口縁部がやや反る甕形のものである。やや酸化炎焼成で、胎土に角閃石が含まれる。外面は筋状のナデが施され、内面の指圧痕は筋状のナデで消される。口唇部はやや窪んでいる。

156 は瓦質土器の火消壺で、口縁部が反って開く甕形のものである。底部に粗いシワ状痕がみられる。外面の下端部は、シワ状痕を消すようにケズリが施される。上位の縦方向のヘラナデがヨコナデで消される。内底面は、中央に一方向のナデ、周囲に回転ナデが施される。内面の口縁部付近は、強い筋状のヨコナデがみられる。胎土に角閃石が含まれる。

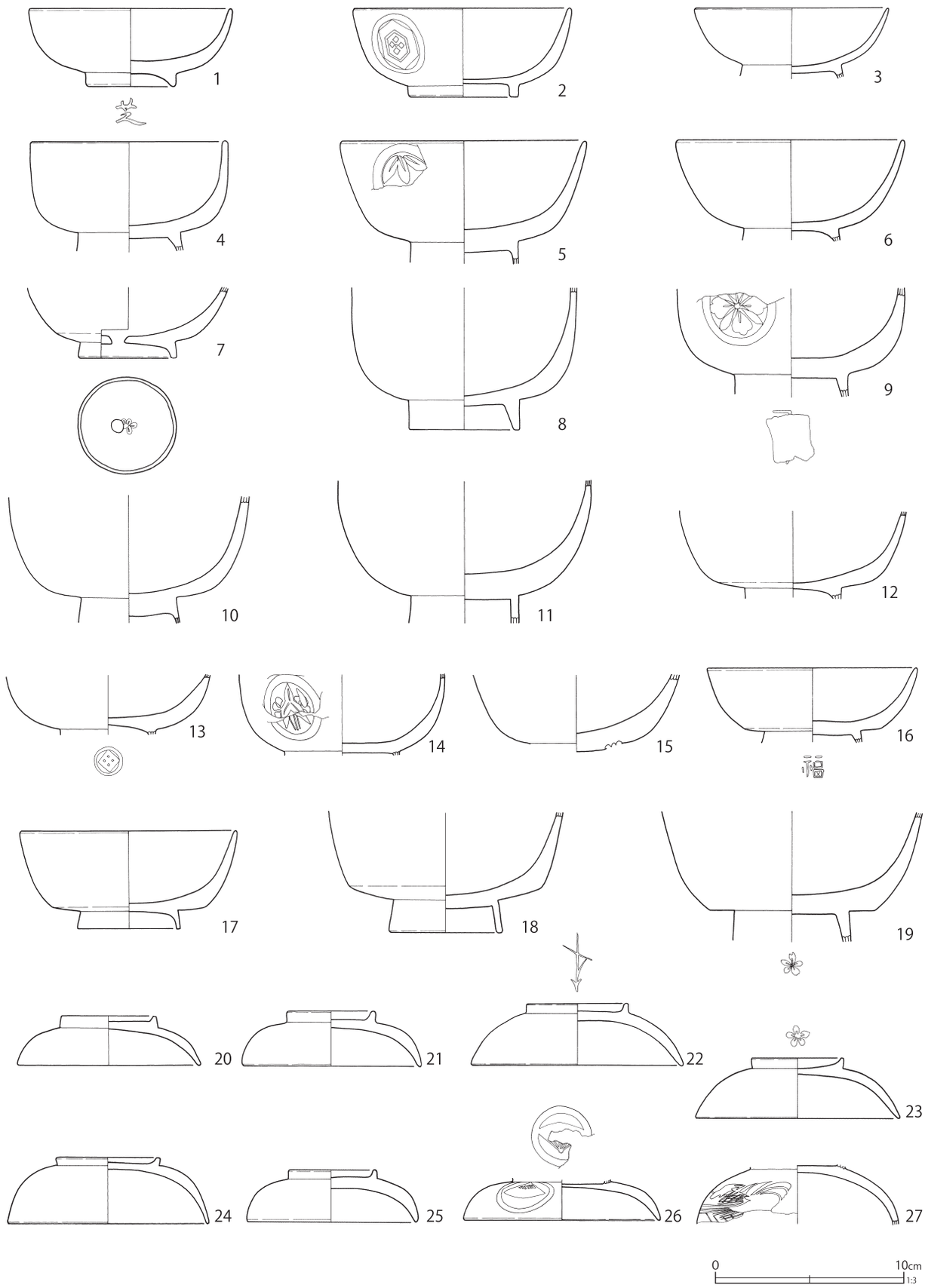
157 は瓦質土器の瓦燈で、蓋である。正面にみえる長方形の透かし孔は、左側２箇所の上端部が遺存し、それを元に復元した。外面はミガキ、内面はヘラナデが施される。天井部には円形の透かし孔が３箇所に遺存している。胎土には角閃石が含まれる。

158 は土師質土器の風口である。胎土が粉っぽいが、硬質で、細粒の雲母が含まれる。江戸在地系土器である。砂目底だが、砂目は弱くなで消される。内底面に一方向のナデがみられる。内面の体部はヨコナデが施される。

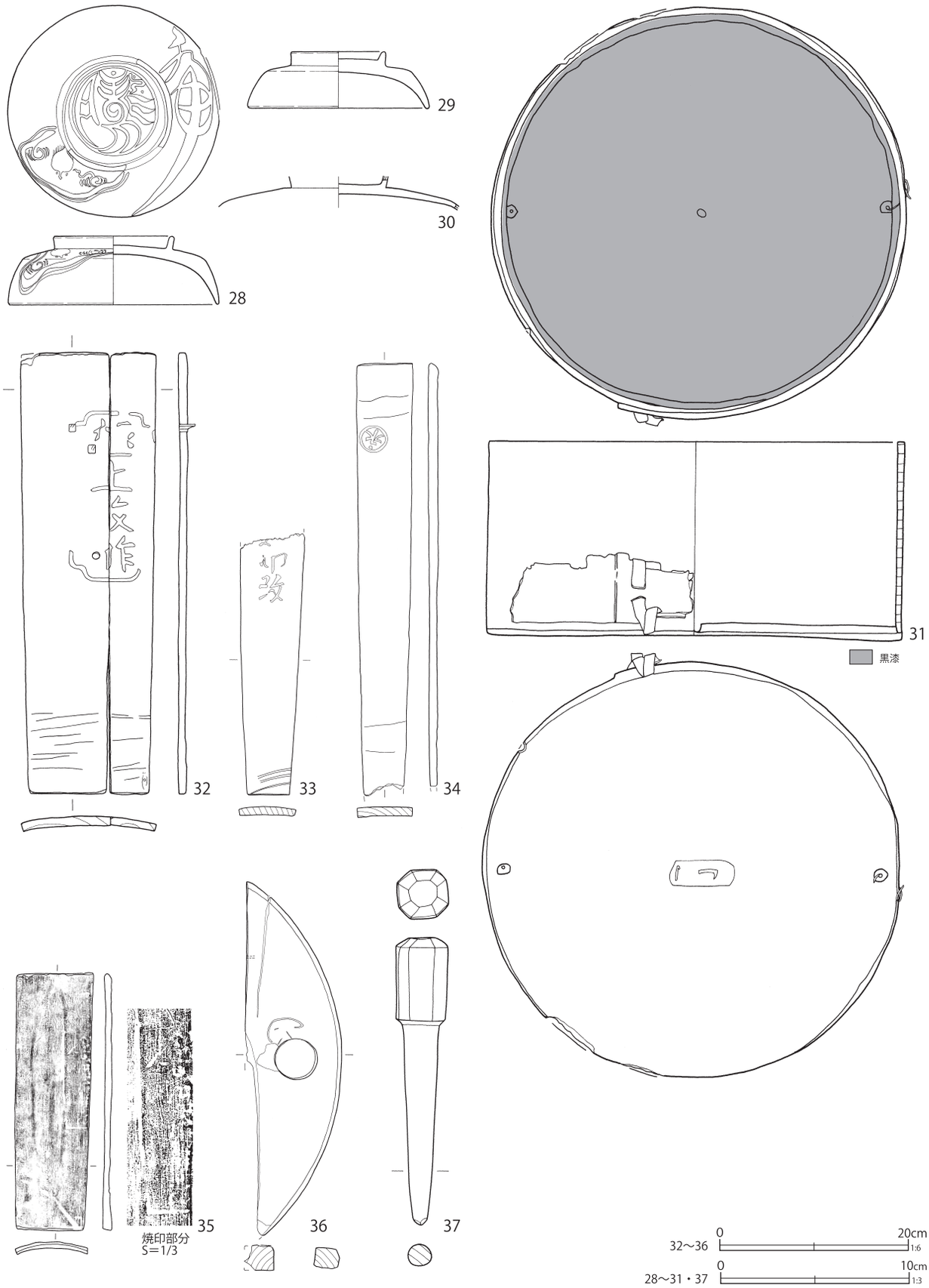
159 は瓦質土器の竈である。重複関係がない第 536 号土壙出土の破片と接合したが、破片サイズが大きかった本跡に帰属させた。窓部の下位は欠失しているが、受け皿状の舌部が付くかもしれない。楕円柱状の脚が２箇所に遺存する。挿図では、欠失している３箇所目の脚は破線で示した。内面の突起は３箇所に付くが、すべて欠失している。底部にシワ状痕がみられる。外面は全面にヘラナデ後、ヘラミガキが施される。内面の下位はヘラナデが施される。胎土に角閃石が多く含まれる。

第 529 ～ 532 図 160 ～ 172 までは瓦質土器の焙烙である。

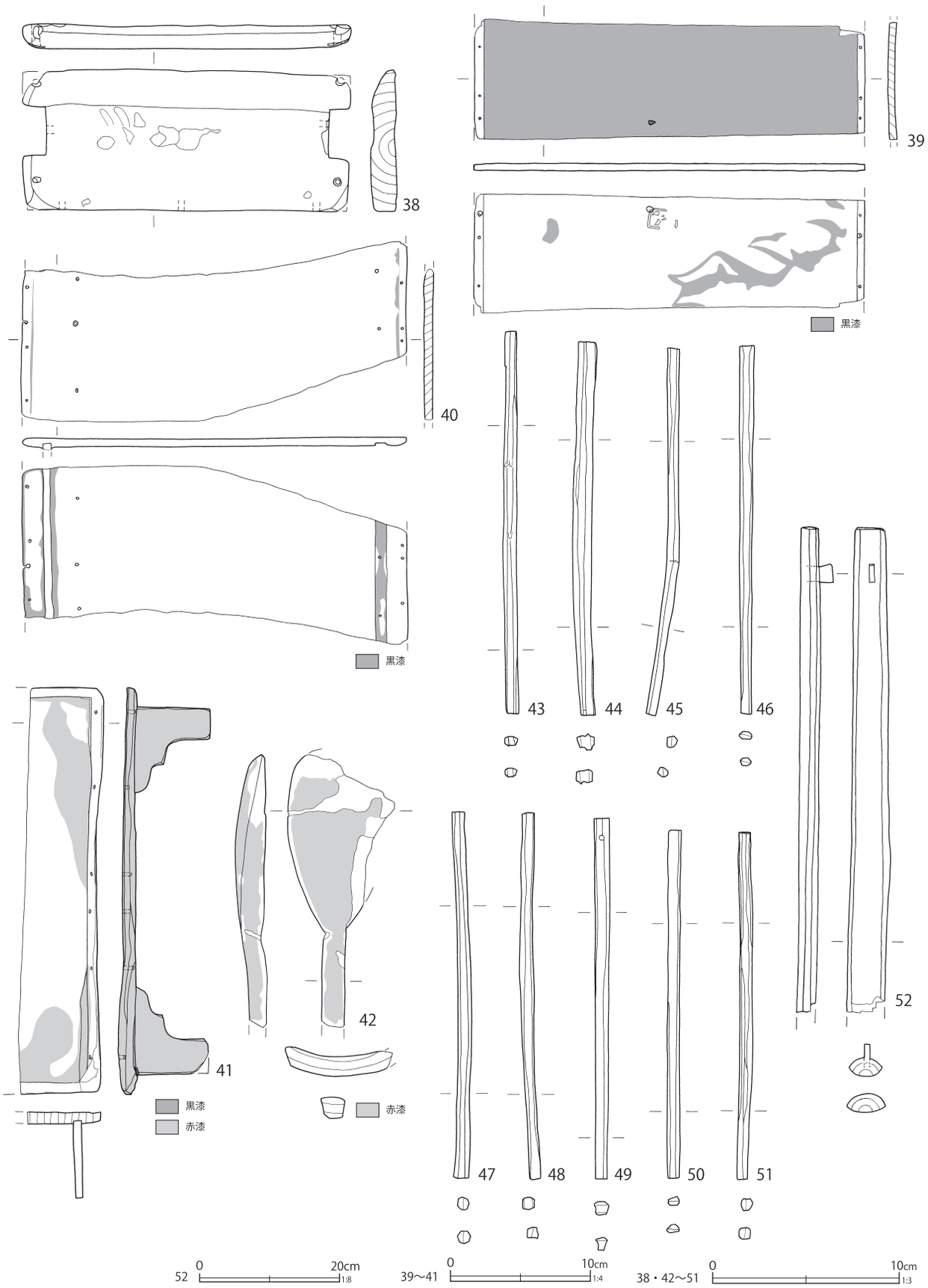
160 は内耳がみられない。底部にシワ状痕がみられ、中央が僅かに膨らむ。外面の体部下位は、幅の広いケズリ、上位は強いヨコナデで処理され



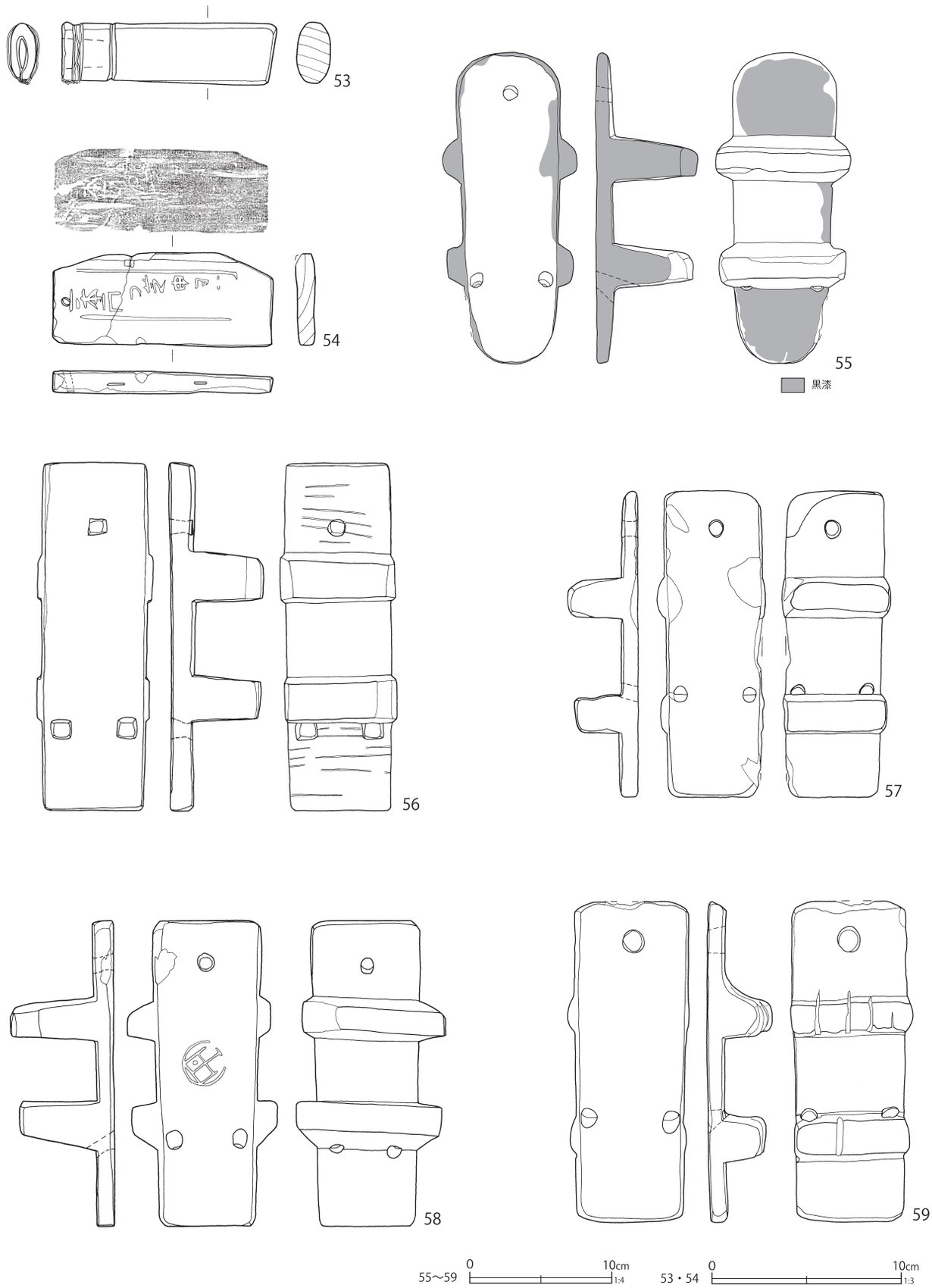
第 535 図　第 517 号土壙出土遺物（20）



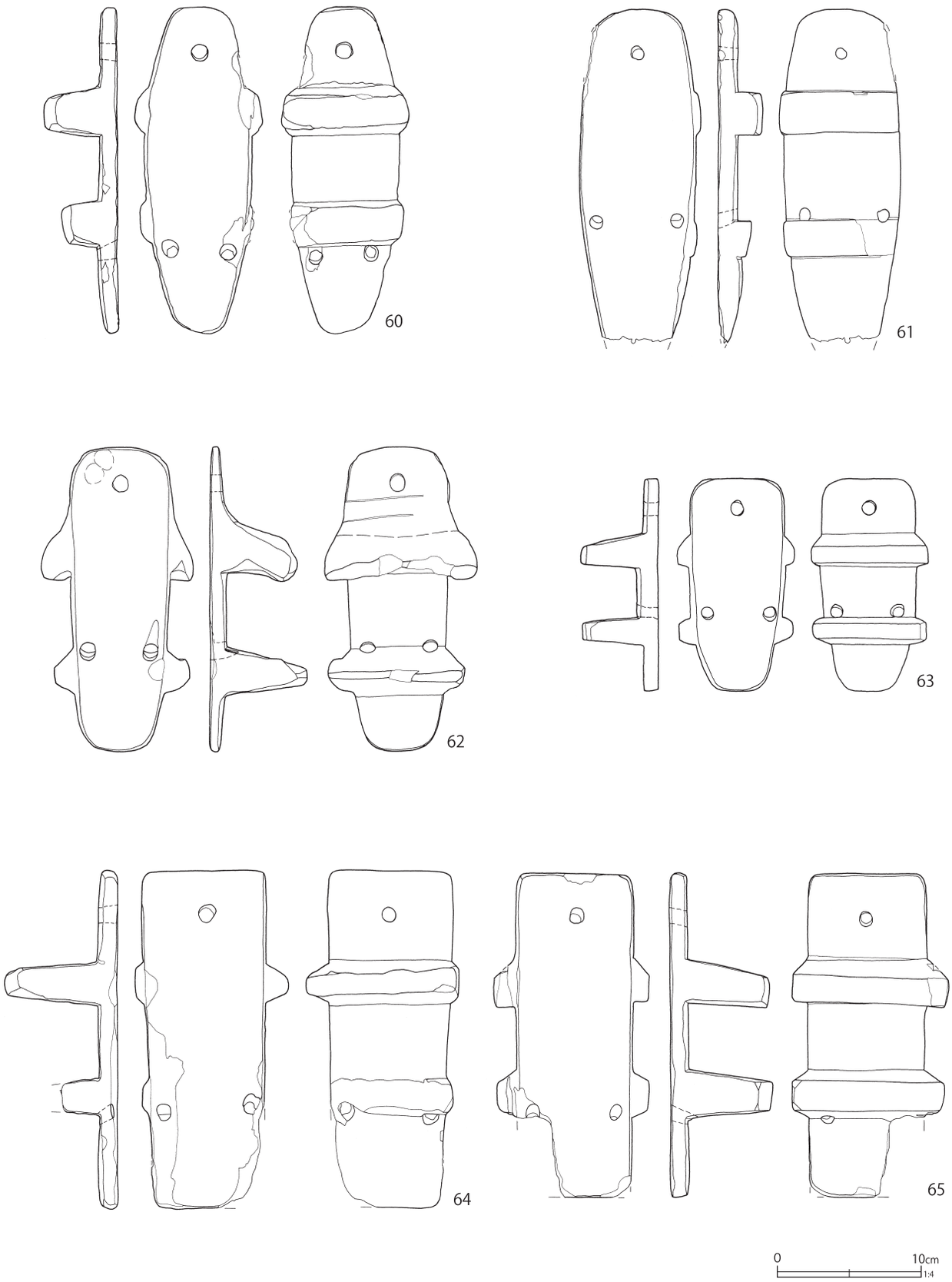
第 536 図　第 517 号土壙出土遺物（21）



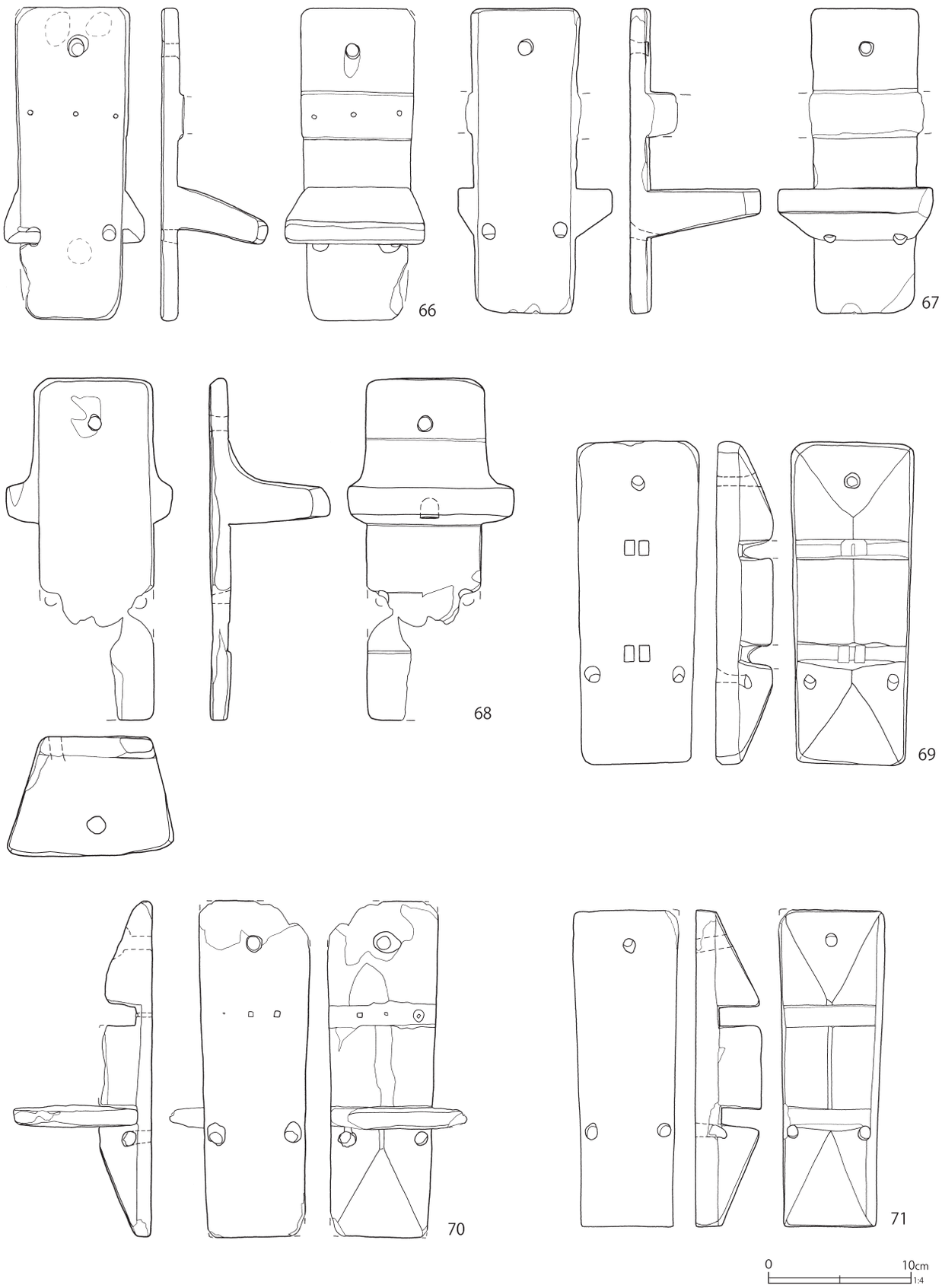
第 537 図　第 517 号土壙出土遺物（22）



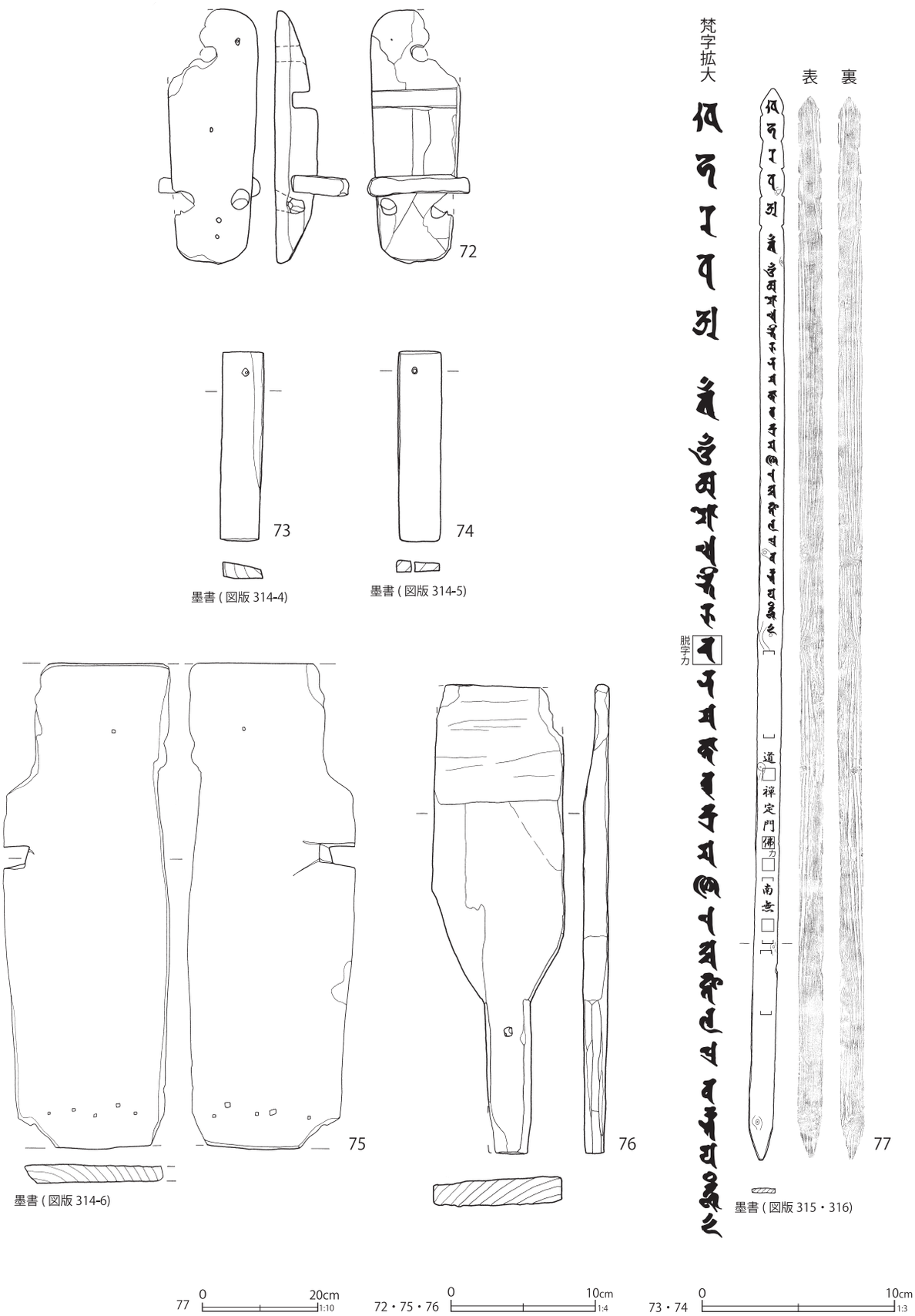
第 538 図　第 517 号土壙出土遺物（23）



第 539 図　第 517 号土壙出土遺物（24）



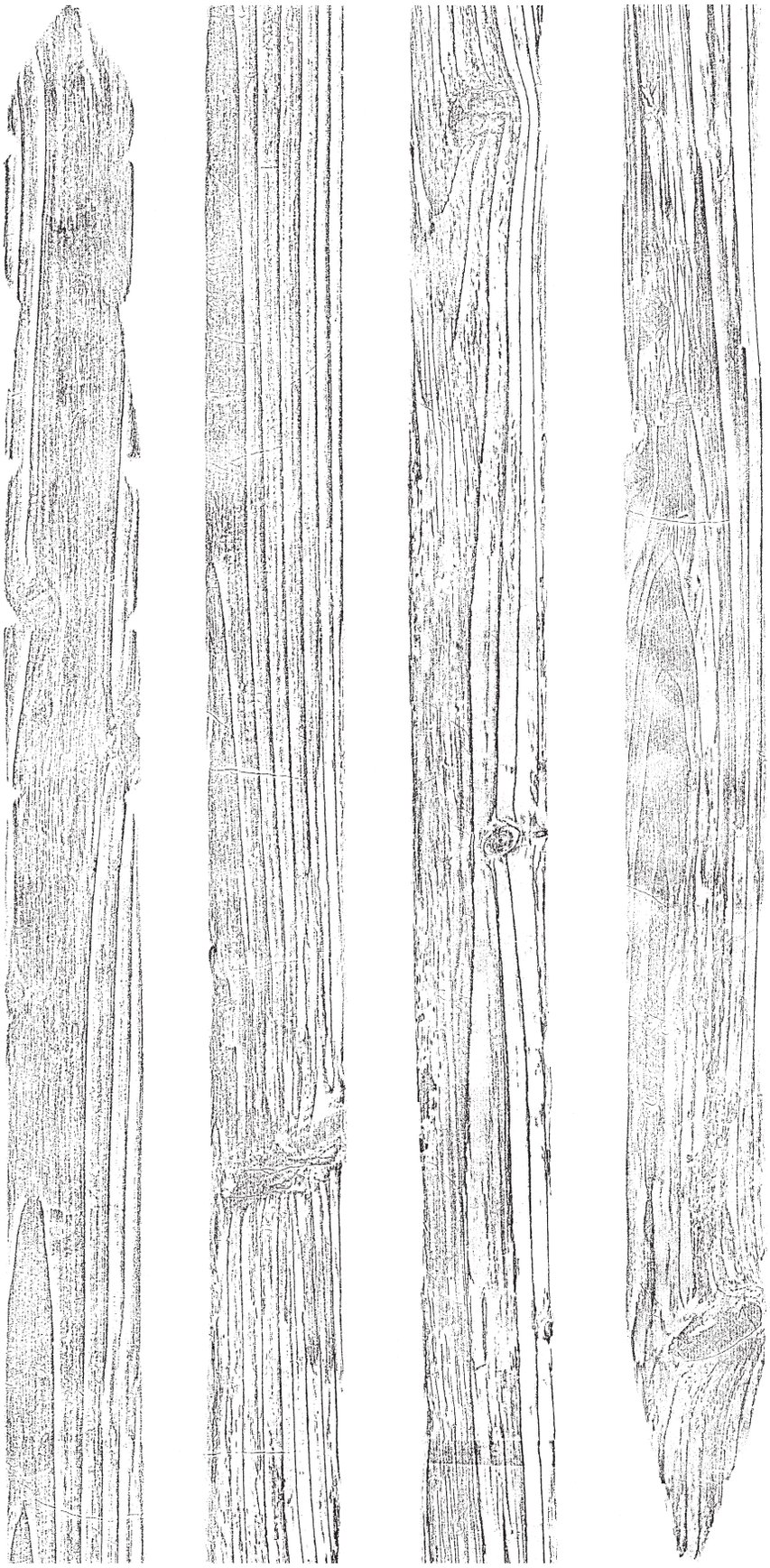
第 540 図　第 517 号土壙出土遺物（25）



第 541 図　第 517 号土壙出土遺物（26）

第 542 図　第 517 号土壙出土遺物（27）

裏



第 543 図　第 517 号土壙出土遺物（28）

第 181 表　第 517 号土壙出土遺物観察表（3）（第 535 ～ 543 図）

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	口径 / 径	高さ	底径	木取り	備考	図版
1	木製品	漆椀	－	－	－	10.8	4.2	(4.8)	横木取り	内外面赤漆 口唇・高台端部黒漆 高台内文字「芝」（金）	272-4
2	木製品	漆椀	－	－	－	11.6	4.6	5.7	横木取り	内面赤漆 外面黒漆 外面 3 箇所紋（金）	272-5
3	木製品	漆椀	－	－	－	(10.2)	[3.7]	－	横木取り	内外面赤漆 口唇部黒漆	
4	木製品	漆椀	－	－	－	(10.4)	[5.7]	－	横木取り	内面赤漆 外面黒漆	
5	木製品	漆椀	－	－	－	(12.8)	[6.4]	－	横木取り	内面赤漆 外面黒漆 外面紋（金） 下層	
6	木製品	漆椀	－	－	－	(11.8)	[5.2]	－	横木取り	内面赤漆 外面黒漆 下層	
7	木製品	漆椀	－	－	－	－	[3.7]	5.2	横木取り	内外面赤漆 高台内文様（金）	272-7
8	木製品	漆椀	－	－	－	－	[7.5]	(5.8)	横木取り	内面赤漆 外面黒漆	
9	木製品	漆椀	－	－	－	－	[5.8]	－	横木取り	内面赤漆 外面黒漆 外面 3 箇所紋（赤漆） 高台内文字（赤漆）	272-6
10	木製品	漆椀	－	－	－	－	[6.6]	－	横木取り	内外面赤漆	
11	木製品	漆椀	－	－	－	－	[7.5]	－	横木取り	内面赤漆 外面黒漆	
12	木製品	漆椀	－	－	－	－	[4.5]	－	横木取り	内外面赤漆	
13	木製品	漆椀	－	－	－	－	[3.1]	－	横木取り	内外面赤漆 高台内紋（金）	272-8
14	木製品	漆椀	－	－	－	－	[4.2]	－	横木取り	内面赤漆 外面黒漆 外面 3 箇所紋（赤漆）	272-10
15	木製品	漆椀	－	－	－	－	[4.1]	－	横木取り	内外面黒漆 火山灰より上層	
16	木製品	漆椀	－	－	－	11.2	[3.9]	－	横木取り	内外面赤漆 高台内文字「福」（黒漆）	272-9
17	木製品	漆椀	－	－	－	11.4	5.1	5.4	横木取り	内面赤漆 外面黒漆 ブナ属	
18	木製品	漆椀	－	－	－	－	[6.3]	(5.8)	横木取り	内外面赤漆 高台端部黒漆 下層	
19	木製品	漆椀	－	－	－	－	[6.8]	－	横木取り	内外面赤漆 下地に黒色塗料 高台内文様	273-1
20	木製品	漆椀蓋	－	つまみ径 5.0		9.6	2.6	－	横木取り	内外面赤漆 つまみ端部・口唇部黒漆	
21	木製品	漆椀蓋	－	つまみ径 4.7		9.2	2.9	－	横木取り	内面赤漆 外面・つまみ端部・口唇部黒漆	
22	木製品	漆椀蓋	－	つまみ径 (5.0)		(11.0)	3.2	－	横木取り	内外面赤漆 つまみ端部・口唇部黒漆 つまみ内文様（黒漆）	272-11
23	木製品	漆椀蓋	－	つまみ径 (4.9)		(10.8)	3.2	－	横木取り	内外面赤漆 つまみ端部・口唇部黒漆 つまみ内文様（黒漆）	
24	木製品	漆椀蓋	－	つまみ径 5.4		10.6	3.4	－	横木取り	内面赤漆 外面黒漆 下層	
25	木製品	漆椀蓋	－	つまみ径 (4.7)		9.0	2.7	－	横木取り	内面赤漆 外面黒漆 下層	
26	木製品	漆椀蓋	－	つまみ径－		(10.3)	[2.2]	－	横木取り	内面赤漆 外面黒漆 外面 3 箇所紋（金）	
27	木製品	漆椀蓋	－	つまみ径－		－	[3.1]	－	横木取り	内面赤漆 外面赤漆 外面文様（黒漆）	273-3
28	木製品	漆椀蓋	－	つまみ径 6.2		11.0	3.6	－	横木取り	内面赤漆 外面黒漆 つまみ端部・口唇部黒漆 外面文様（金） つまみ内文様（赤漆）	273-2
29	木製品	漆椀蓋	－	つまみ径 5.0		(9.6)	3.0	－	横木取り	内外面赤漆 つまみ端部・口唇部黒漆	
30	木製品	漆椀蓋	－	つまみ径－		－	[1.6]	－	横木取り	内外面黒漆 歪み大	
31	木製品	曲物	－	－	－	22.0	10.3	－	側板：柾目 底板：板目	内面黒漆 銅線で固定 歪み大 底部焼印 火山灰より下層	
32	木製品	桶・樽	47.0	14.5	1.0	－	－	－	板目	側板 木釘 2 孔 1 焼印「□上改作」	
33	木製品	桶・樽	[27.8]	6.7	0.8	－	－	－	板目	側板 箍痕 焼印「 ］□［改ヵ」 表面上部炭化	
34	木製品	桶・樽	45.8	5.8	1.0	－	－	－	板目	側板 箍痕 表面焼印「㊌」	
35	木製品	桶・樽	27.0	8.2	0.9	－	－	－	板目	側板 表面焼印「仝／河内屋［改ヵ］」	
36	木製品	樽	[37.5]	(10.2)	2.6	－	－	－	板目	蓋 栓孔 1 焼印	
37	木製品	栓	15.2	2.7	2.6	－	－	－	板目		
38	木製品	箱	17.5	7.6	1.3	－	－	－	板目	側板 表面圧痕 木釘 4 孔 5	273-4
39	木製品	膳	[8.5]	28.0	0.5	－	－	－	板目	表裏面黒漆 木釘孔 6 裏面焼印	273-5
40	木製品	膳	[10.5]	[27.5]	0.8	－	－	－	板目	表裏面黒漆 木釘孔 10	273-7
41	木製品	膳	29.0	[5.7]	－	－	6.8	－	柾目	全面赤漆 側板接着痕 木釘 6	273-6
42	木製品	杓子	[14.5]	[5.7]	1.0	－	－	－	板目	全面赤漆	273-8
43	木製品	箸	20.4	0.7	－	－	0.5	－	分割棒状		273-9
44	木製品	箸	19.8	1.0	－	－	0.7	－	分割棒状	中央に溝	273-9
45	木製品	箸	19.7	0.7	－	－	0.6	－	削出		273-9
46	木製品	箸	19.6	0.7	－	－	0.5	－	削出		273-9
47	木製品	箸	19.5	0.7	－	－	0.7	－	削出		273-9

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	口径 / 径	高さ	底径	木取り	備考	図版
48	木製品	箸	19.4	0.7	―	―	0.7	―	削出		273-9
49	木製品	箸	19.2	0.8	―	―	0.7	―	分割棒状		273-9
50	木製品	箸	18.7	0.7	―	―	0.5	―	削出		273-9
51	木製品	箸	18.4	0.6	―	―	0.7	―	削出		273-9
52	木製品	天秤棒	[69.2]	5.6	3.0	―	―	―	分割材	高さ 4.7cm	273-10
53	木製品	柄	3.2	11.2	1.8	―	―	―	板目	側面柄孔 針金固定	274-1
54	木製品	火打金	5.0	11.5	1.2	―	―	―	板目	柄 木釘 1 表面焼印「芝［神明前］／本□や三郎兵へ」（本は「木」「ー」に分かつ）	274-2
55	木製品	下駄	21.4	7.3	―	―	16.9	―	板目	連歯下駄 全面黒漆	274-3
56	木製品	下駄	24.4	7.5	―	―	6.5	―	板目	連歯下駄 下面に刻み	
57	木製品	下駄	21.5	7.1	―	―	5.0	―	板目	連歯下駄	
58	木製品	下駄	21.5	7.8	―	―	7.3	―	板目	連歯下駄 焼印 火山灰より上層	274-4
59	木製品	下駄	22.5	7.6	―	―	4.7	―	板目	連歯下駄 歯に切り込み 5	274-5
60	木製品	下駄	22.6	7.3			5.1		柾目	連歯下駄 トネリコ属	
61	木製品	下駄	[23.2]	7.8	―	―	3.1	―	板目	連歯下駄 火山灰より上層	
62	木製品	下駄	21.1	6.9	―	―	6.8	―	板目	連歯下駄 前歯歪み	
63	木製品	下駄	14.7	6.2	―	―	5.4	―	板目	連歯下駄	
64	木製品	下駄	23.5	8.4	―	―	7.9	―	板目	連歯下駄	
65	木製品	下駄	22.3	8.0	―	―	6.9	―	柾目	連歯下駄 クリ	
66	木製品	下駄	21.9	8.0	―	―	7.5	―	柾目	連歯下駄 補修痕	
67	木製品	下駄	21.3	7.4	―	―	9.2	―	板目	連歯下駄	
68	木製品	下駄	24.0	8.1	―	―	8.4	―	板目	連歯下駄 前歯に穴 1	
69	木製品	下駄	22.6	8.6	―	―	[4.0]	―	板目	露卯下駄	
70	木製品	下駄	23.5	7.7	―	―	9.9	―	板目	陰卯下駄	
71	木製品	下駄	22.5	7.5	―	―	[4.6]		板目	陰卯下駄	
72	木製品	下駄	17.7	6.2	―	―	5.2	―	板目	陰卯下駄 孔 4	
73	木製品	木札	9.8	2.1	0.8	―	―	―	板目	孔 1 表裏面墨書（文字資料 129）	
74	木製品	木札	9.8	2.2	0.6	―	―	―	板目	表裏面墨書（文字資料 130）	
75	木製品	不明	33.6	[11.5]	1.2	―	―	―	板目	鉄釘 6 表面墨書（文字資料 131）火山灰より上層	
76	木製品	不明	32.3	9.1	1.9	―	―	―	板目	把手部に釘穴	274-6
77	木製品	卒塔婆	185.5	4.0	0.8	―	―	―	柾目	刻梵字 墨書（文字資料 132）スギ	274-7 315 316

る。内底面は周囲を回転ナデ、内面の体部には筋状のヨコナデが施される。

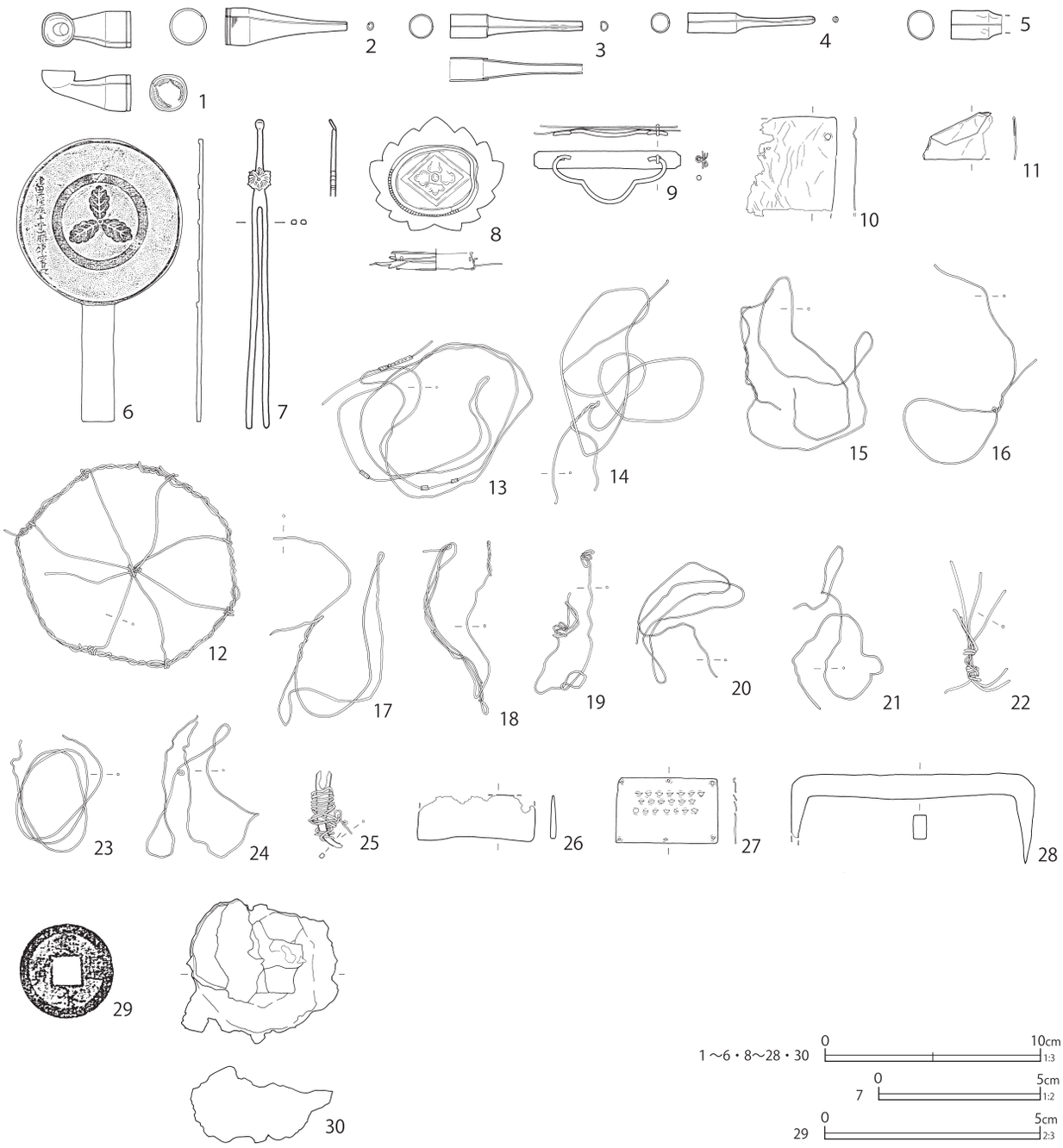
167 は底部に粗いシワ状痕がみられる。外面の体部下端部はケズリ、その直上は粗くヘラナデされ、シワ状痕が消される。上位はヨコナデで処理される。内面の体部下位にヘラナデ、上位にヘラミガキが施される。内底面の４箇所に炭化物が円形に付着する。挿図では炭化物が特に多く付く部分を濃いトーン掛けで示した。

168 は底部に粗いシワ状痕がみられる。外面の体部下端部にはケズリが施され、直上のシワ状痕は雑になで消される。上位はヨコナデが施される。内底面のヘラミガキは明瞭で、内面の体部は筋状のナデで処理される。胎土に角閃石が含まれる。

169 は底部に粗いシワ状痕がみられる。外面の体部下位は、シワ状痕が幅の広いケズリで消されるが、強い指圧痕がある部分は消しきれず、シワが残る。上位はヨコナデが施される。内面の体部はヨコナデで、中位に指圧痕がみられるが、ほとんどなで消される。胎土に角閃石が含まれる。

170 は内底面に、「大極上」と思われる刻印が押されるものである。刻印に書かれた文字の上部には花文が認められる。底部にシワ状痕がみられ、外面の体部下位はケズリ、上位はヨコナデで処理される。胎土に角閃石が多く含まれる。

171 も底部破片で、内面「大極上」の刻印がある。

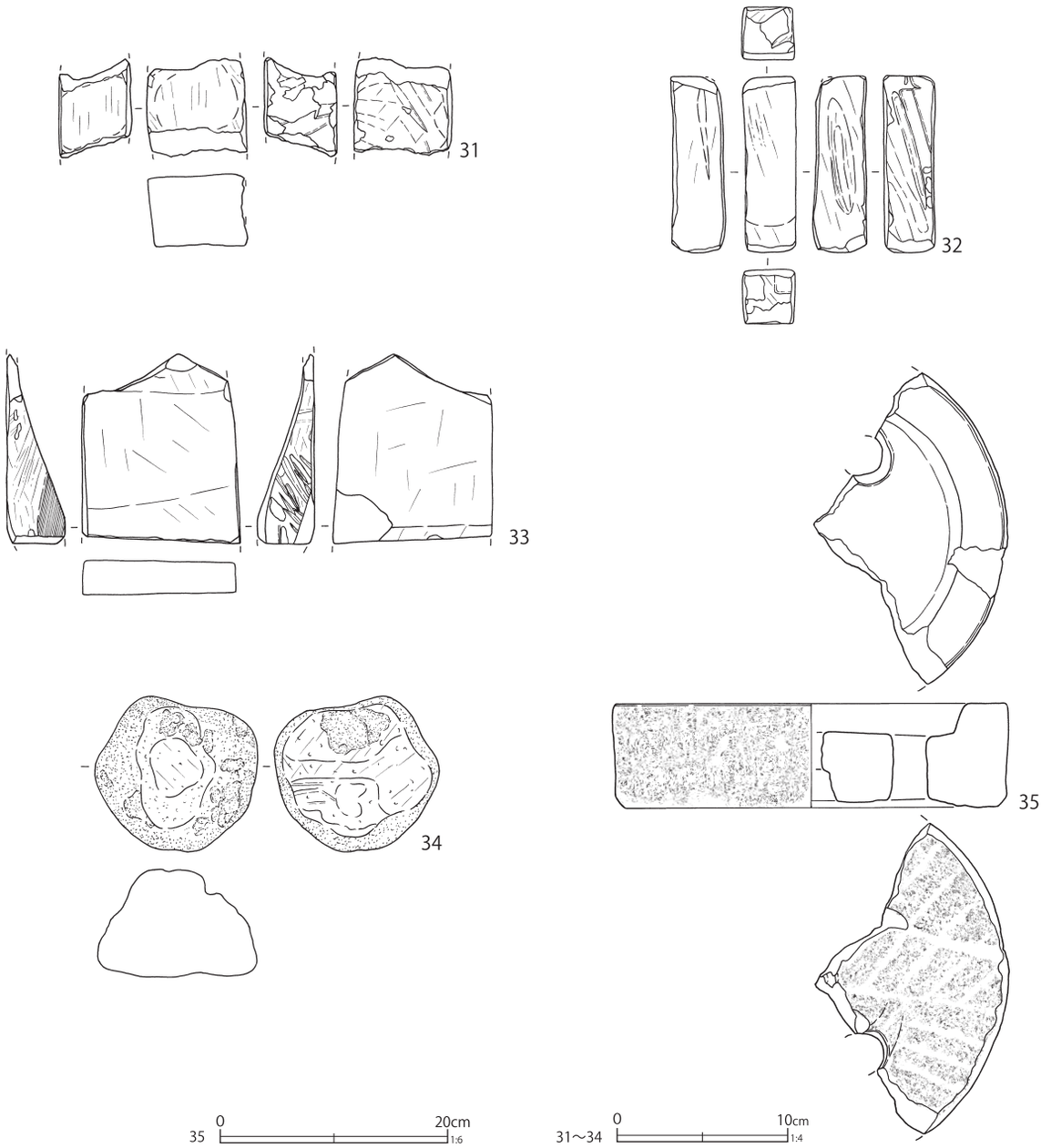


第 544 図　第 517 号土壙出土遺物（29）

172 は内底面に菊花文スタンプが押されているものである。底部にシワ状痕がみられる。外面の体部下位にはケズリが施される。その直上は、粗いナデでシワ状痕が消されるが、指圧痕部分を中心にシワが残る。上位には強いヨコナデが施される。内底面は弱くヘラミガキが施され、光沢は強い。内面の体部の一部にヘラミガキが施される。胎土には角閃石が多く含まれる。

第 532・533 図 173 ～ 178 までは土師質土器の焙烙である。すべて、江戸在地系土器である。このうち、173・176・178 の内面には、刻印「㊀」が認められる。

173 ～ 175 は砂目底だが、一部がシワ状となる。173 は外面の体部下位に幅の広いケズリ、内面は



第 545 図　第 517 号土壙出土遺物（30）

中心部まで細かい回転ナデが施される。174 は外面の体部下位に幅の広いケズリが施され、ケズリの上位はなで消される。内面には、中心部まで細かい回転ナデが施される。175 の外面の体部下位は幅の広いケズリが施された後、なで消される。内面には回転ナデが施される。

176 の底部は細かい砂目である。外面の体部下位はケズリ、内面は中心まで回転ナデが施される。

177 の底部も細かい砂目だが、中央付近には、筋状のケズリが認められる。外面の体部下位は幅の狭い２段のケズリが施され、上位はナデで調整される。内面は筋状の回転ナデが施される。

第 533 図 179 は、土師質土器の植木鉢である。胎土が粉質で、細粒の雲母が含まれる。江戸在地系土器である。底部に回転糸切痕が残り、内外面はロクロナデである。

第 533 図 180 ～ 182 は、かわらけ小皿である。180 は江戸在地系のもので、底部に左回転の糸切

第 182 表　第 517 号土壙出土遺物観察表（４）（第 544・545 図）

番号	種別	器種	法量	備考	図版
1	銅製品	煙管	長さ 4.1 火皿径 1.6 小口径 1.7 × 1.7 重さ 11.2	雁首 鍍金あり 羅宇残存	286-2
2	銅製品	煙管	長さ 5.7 小口径 1.7 口付径 0.4 × 0.3 重さ 9.2	吸口 鍍金あり	286-2
3	銅製品	煙管	長さ 6.2 小口径 1.1 口付径 0.4 × 0.4 重さ 5.8	吸口 鍍金あり	286-1
4	銅製品	煙管	長さ 5.9 小口径 0.9 口付径 0.3 重さ 4.2	吸口	286-1
5	銅製品	煙管	長さ［2.4］小口径 1.3 × 1.2 重さ 9.2	吸口 鍍金あり	
6	銅製品	手鏡	長さ 13.1 厚さ 0.2 鏡面径 7.7 重さ 72.4	「津田薩摩守藤原家長」三つ柏紋	287-1
7	銅製品	簪	長さ 9.6 幅 0.5 厚さ 0.2 重さ 4.4		287-2
8	銅製品	襖引手	縦 5.3 横 6.2 高さ 0.9 重さ 10.8	鍍金あり	286-6
9	銅製品	把手ヵ	縦 2.5 横 6.8 厚さ 0.2 重さ 5.0	鍍金あり	286-5
10	銅製品	不明	縦［4.6］横［4.2］厚さ 0.03 重さ 2.3	鍍金あり	
11	銅製品	不明	縦 2.2 横［3.2］厚さ 0.03 重さ 1.5	一部欠失	
12	銅製品	針金	縦 9.6 横 11.0 厚さ 0.1 重さ 6.3	火山層上層 製品か	288-1
13	銅製品	針金	縦 7.3 横 9.8 厚さ 0.08 重さ 3.2	下層	
14	銅製品	針金	縦 10.4 横 7.0 厚さ 0.1 重さ 1.9		
15	銅製品	針金	縦 8.1 横 6.1 厚さ 0.07 重さ 1.7		
16	銅製品	針金	縦 9.3 横 6.2 厚さ 0.08 重さ 0.9	下層	
17	銅製品	針金	縦 8.8 横 5.2 厚さ 0.1 重さ 1.5	上層	
18	銅製品	針金	縦 8.1 横 3.2 厚さ 0.1 重さ 1.4		
19	銅製品	針金	縦 6.7 横 2.8 厚さ 0.1 重さ 1.4		
20	銅製品	針金	縦 5.6 横 5.0 厚さ 0.06 重さ 1.2		
21	銅製品	針金	縦 7.6 横 4.2 厚さ 0.1 重さ 1.0		
22	銅製品	針金	縦 6.2 横 3.0 厚さ 0.1 重さ 1.7		
23	銅製品	針金	縦 5.4 横 4.2 厚さ 0.1 重さ 1.6		
24	銅製品	針金	縦 6.6 横 5.2 厚さ 0.1 重さ 1.6		
25	銅・鉄製品	不明	縦［3.6］横 2.1 厚さ 0.1 重さ 3.6	鉄製品に巻き付いている	
26	鉄製品	火打金	長さ 5.4 幅 2.2 厚さ 0.3 重さ 9.7		
27	金属製品	不明	縦 3.05 横 4.7 厚さ 0.02 重さ 2.8	材質不明	288-3
28	鉄製品	鋏	長さ 11.3 幅 1.1 厚さ 0.6 重さ 47.1		
29	銅製品	銭貨	径 22.4 厚さ 1.4 重さ 2.1	寛永通寳（新）	
30	鉄滓	椀形滓	長さ 6.7 幅 7.3 厚さ 3.5 重さ 119.9	磁着あり 羽口付着	
31	石製品	砥石	長さ［5.7］幅 5.8 厚さ 4.3 重さ 209.3	流紋岩 側・裏面削痕 砥面 3	
32	石製品	砥石	長さ 10.3 幅 3.1 厚さ 3.1 重さ 175.8	流紋岩 裏面幅広工具痕 砥面 4 刃物痕多数	295-1
33	石製品	砥石	長さ［11.0］幅 9.3 厚さ 3.2 重さ 377.1	ホルンフェルス 側面ノコギリ痕 砥面 4 刃物痕多数	295-1
34	石製品	磨石	長さ 9.1 幅 9.6 厚さ 6.3 重さ 133.7	軽石 使用面 2 刃物痕あり	295-4
35	石製品	石臼	径（35.0）器高 9.3 重さ 4000.0	安山岩 上臼 下面摺目 上面摩耗 供給孔 1 芯棒受 穴 1	290-7

痕が残る。外面は、筋状のナデ痕跡で、ナデ上げ痕も残る。口縁部に煤が付着する。

第 534 図 183・184 は土製品の人形である。183 は唐子をモチーフとしたものである。中空の、前後合わせ二枚型成形で、内部に楕円状の玉が入っている。表面は雲母（キラ粉）が付着する。江戸在地系である。

184 は犬をモチーフとしたやや大形のものである。下面が開口する中空の前後合わせ二枚型成形である。接合部に沿って欠損しており、背面のみ遺存する。江戸在地系のもので、赤味の強い橙色に焼成されている。

第 534 図 185 は土製品で、鞴の羽口である。内面は、途中から急激に窄まる。

第 534 図 186 ～ 188 は瓦である。186 は軒丸瓦で、十六連珠の右巻き三巴文である。187 は丸瓦である。内面にゴザメがみられる。188 は瓦を転用した砥具で、擦痕が明瞭である。左側面には刃ならし状の刻みがみられる。

第 535 ～ 543 図は木製品である。第 535 図 1

～ 19 までは漆椀である。

このうち、１～ 15 までは腰丸椀である。１は器高が低く、厚手のものである。高台内は窪むように削り込まれる。内外面に赤漆、口唇・高台端部に黒漆が塗布される。高台内に、金で「芝」の文字が書かれる。

２は底部が薄手のもので、高台は幅広の角形である。内面に赤漆、外面に黒漆が塗布され、外面の３箇所に金で紋が描かれる。４は厚手で、体部が垂直に立ち上がるものである。高台は高い。内面に赤漆、外面に黒漆が塗布される。

５は２と体部の形態が類似するが、高台が高く、底部はかなり厚手である。内面に赤漆、外面に黒漆が塗布される。７は２に類似するもので、腰丸椀としたが、腰部に弱い稜線がみられる点がやや不自然である。一文字腰椀の可能性もある。内外面に赤漆が塗布され、高台内には金で花文が描かれる。底部に二次穿孔が認められる。

８～ 10 は体部が垂直気味に立ち上がるものである。８は腰部に厚みがあり、内面に赤漆、外面に黒漆が塗布される。

９は厚手のもので、内面に赤漆、外面に黒漆が塗布される。外面の３箇所に赤漆で花の紋を描き、高台内は赤漆で書かれた文字が僅かに遺存する。

10 は、やや薄手の体部だが、底部はかなり厚い。内外面に赤漆が塗布される。

11 はかなり厚手で、体部が丸く立ち上がるものである。内面に赤漆、外面に黒漆が塗布される。

12 は腰丸椀と判断したが、腰部に弱い稜線がみられ、一文字腰椀の可能性も考えられる。底部はかなり薄手で、体部は斜めに直線気味に開く。内外面に赤漆が塗布される。

14 は外面の３箇所に赤漆で紋が描かれる。

16 ～ 19 までは一文字腰椀である。16・17 は器高が低いもので、16 は厚手、17 は底部が薄手である。16 は内外面に赤漆が塗布され、高台内に黒漆で「福」の文字が書かれる。17 は内面に赤漆、外面に黒漆が塗布される。樹種同定によると、椀木地はブナ属が利用されている（Ⅴ　自然科学分析 10 参照）。

18・19 は器高が高いものである。18 は腰部の角張りが強く、高台部付け根より高い位置で屈曲する。内外面に赤漆、高台端部に黒漆が塗布される。19 は厚手で、腰部の角張りが強い。下地に黒色塗料が施され、内外面は赤漆である。高台内に花文が描かれる。

第 535・536 図 20 ～ 30 までは漆椀の蓋である。21・24・25 は類似する器形のもので、肩部の丸みが強い。21 は内面に赤漆、外面とつまみ端部、口唇部に黒漆が塗布される。24 はやや薄手のもので、内面に赤漆、外面に黒漆が塗布される。25 は厚手のもので、同じく内面に赤漆、外面に黒漆が塗布される。

20・22・23・26 は器形が類似するもので、肩部の丸みが弱く、緩やかな立ち上がりである。

22・23 は内外面に赤漆、つまみ端部と口唇部に黒漆が塗布される。つまみ内には黒漆で文様が描かれる。26 はつまみ内の器壁がかなり薄手である。内面に赤漆、外面に黒漆が塗布され、外面の２箇所とつまみ内に金で紋が描かれる。

28・29 は肩が角張るもので、一文字腰椀の蓋である。28 は大振りで、内面に赤漆、外面に黒漆が塗布される。外面は金で、つまみ内は赤漆で文様が描かれる。29 は厚手のもので、内外面に赤漆、つまみ端部と口唇部に黒漆が塗布される。

30 は扁平な大振りのもので、平椀の蓋である。薄手で、内外面に黒漆が塗布される。

31 は曲物の身である。内面に黒漆が塗布される。底部に２箇所の孔がみられ、銅線を通して側板に固定される。底部に焼印がみられるが、判読できない。

32 ～ 35 までは、桶ないし樽の側板である。32 は表面に「□上改作」と読める焼印がある。34 は、表面に「㊍」の焼印がある。35 は、焼印「仝 /

河内屋［改ヵ］」がみえる。

36は樽の蓋である。栓の孔と焼印がみられる。37は樽の栓である。

第537図38は箱の側板である。39～41は膳である。41は脚部が２箇所に遺存する。全面に赤漆が塗布され、上面には側板の接着痕が認められる。42は杓子、43～51までは寸胴箸である。52は天秤棒である。

第538図53は柄である。54は火打金の柄である。金属部分は遺存していないが、本跡では刃の出土もみられた（第544図26）。「芝［神明前］/本□や三郎兵へ」と読める焼印がみられる。芝神明前は、現在の港区芝大神宮周辺を指す。

第538～541図55～72までは下駄である。60は連歯下駄で、トネリコ属が利用されている（Ⅴ　自然科学分析10参照）。65も連歯下駄だが、本資料はクリが利用されている（Ⅴ　自然科学分析10参照）。

73・74は木札である。73は両面に墨書「五十六」、74も両面に墨書「四十二」がみえる。75・76は器種不詳である。75は墨書がみえる。

77は卒塔婆で、スギを素材としている（Ⅴ自然科学分析10参照）。表面には梵字などが墨書されている。梵字は五輪塔発心門、金剛界大日如来、光明真言が記されている。しかし、一字みられないものがあり、脱字と思われれる。

長大なもので、墨書の部分は周囲の腐植により僅かに盛り上がり、エンボス状を呈す。挿図では第542図に表面、第543図に裏面の拓本の拡大図を分割して示した。また、写真図版315・316に一部の写真を示した。

第544図１～29は金属製品である。１～24までは銅製品で、１は煙管の雁首である。２～５は煙管の吸口である。６は手鏡である。裏面に「津田薩摩守藤原家長」の銘と三つ柏の家紋がみられる。７は簪である。８は襖引手である。９は把手であろうか。

10・11は器種不詳の銅製品である。きわめて薄く、鍍金が施されている。12～24は針金である。このうち、12は車輪のような形に作られたもので、製品の状態であろうか。

25は器種不詳の銅・鉄製品である。26は鉄製の火打金である。27は材質不明の金属製品である。28は鉄製の鎹である。29は寛永通寶である。

30は椀形滓である。磁着があり、羽口の先端部が付着している。

第545図は石製品である。31～33までは砥石で、31・32は白色の流紋岩製、33はホルンフェルス製である。

31は裏・右側面に刃幅の広い工具による削痕が遺存する。裏面は使用痕により滑らかである。砥面は３面残る。

32は、裏面に刃幅の広い工具痕が遺存する。下端面にも刃幅の広い工具によるものと思われる段がみられる。裏・右側面には溝状の使用痕が認められる。砥面は４面である。酸化鉄分が全面に著しく付着している。

33は左側面に密なノコギリ状工具痕が遺存する。右側面に断面「Ⅴ」字状の刃物痕が多くみられる。砥面は４面残る。

34は軽石製の磨石で、自然面が大きく残る。表・裏面が擦り面で、平坦な部分も認められる。

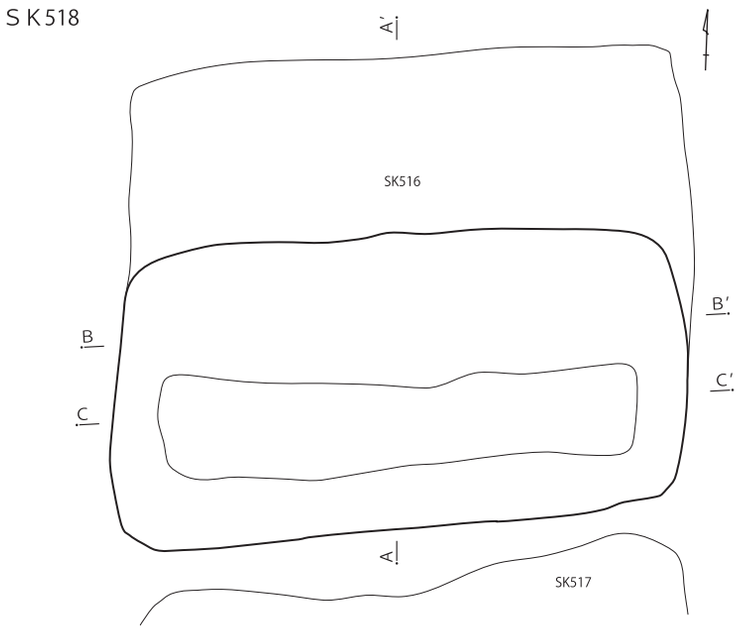
35は安山岩製の石臼で、上臼である。下面中央に軸受けの窪みが僅かに遺存する。上面は摩耗している。

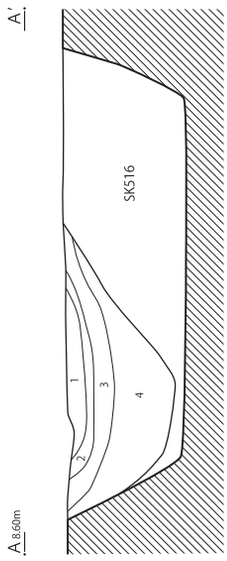
第518号土壙（第546～555図）

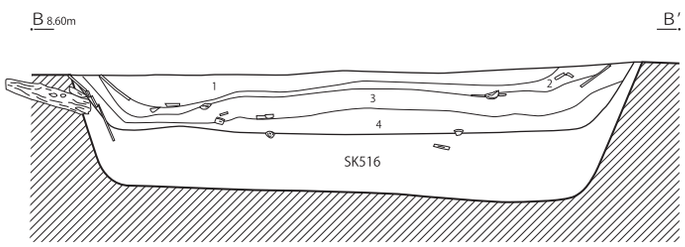
Ｂ５－Ｊ４・５グリッドに位置し、第516号土壙より新しい。平面形は隅丸長方形であった。

第516号土壙の南半部に収まるように掘り込まれ、本跡の覆土を意図的に掘り返したと思われる。

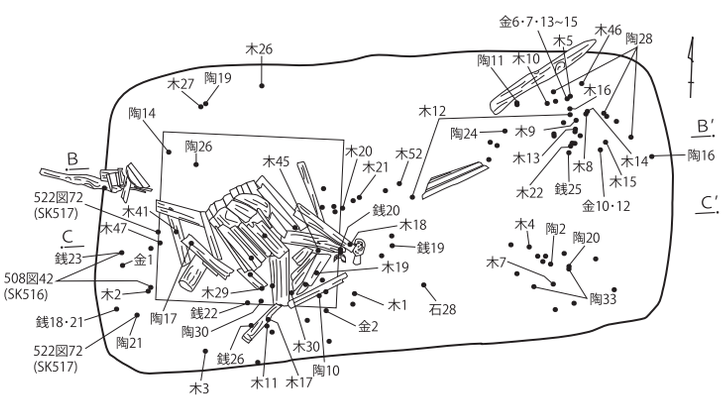
覆土の下層は、木片を主体とし、上層は粘質なシルトであった。木片主体層では、陶磁器や木製品等の遺物が多く出土した。

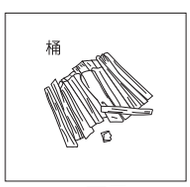




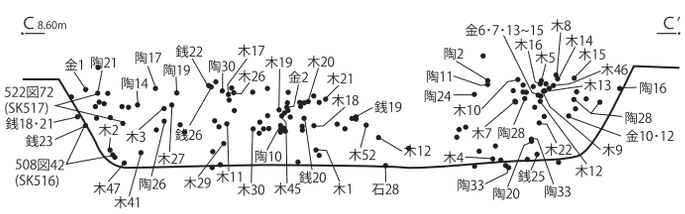


SK518
1　暗褐色土　粘性あり　炭化物少量
2　暗灰色土　粘性あり
3　黒褐色土　木片主体　砂混じる　陶磁器・木製品多量
4　暗灰色土　木片主体　シルト質土　陶磁器・木製品多量





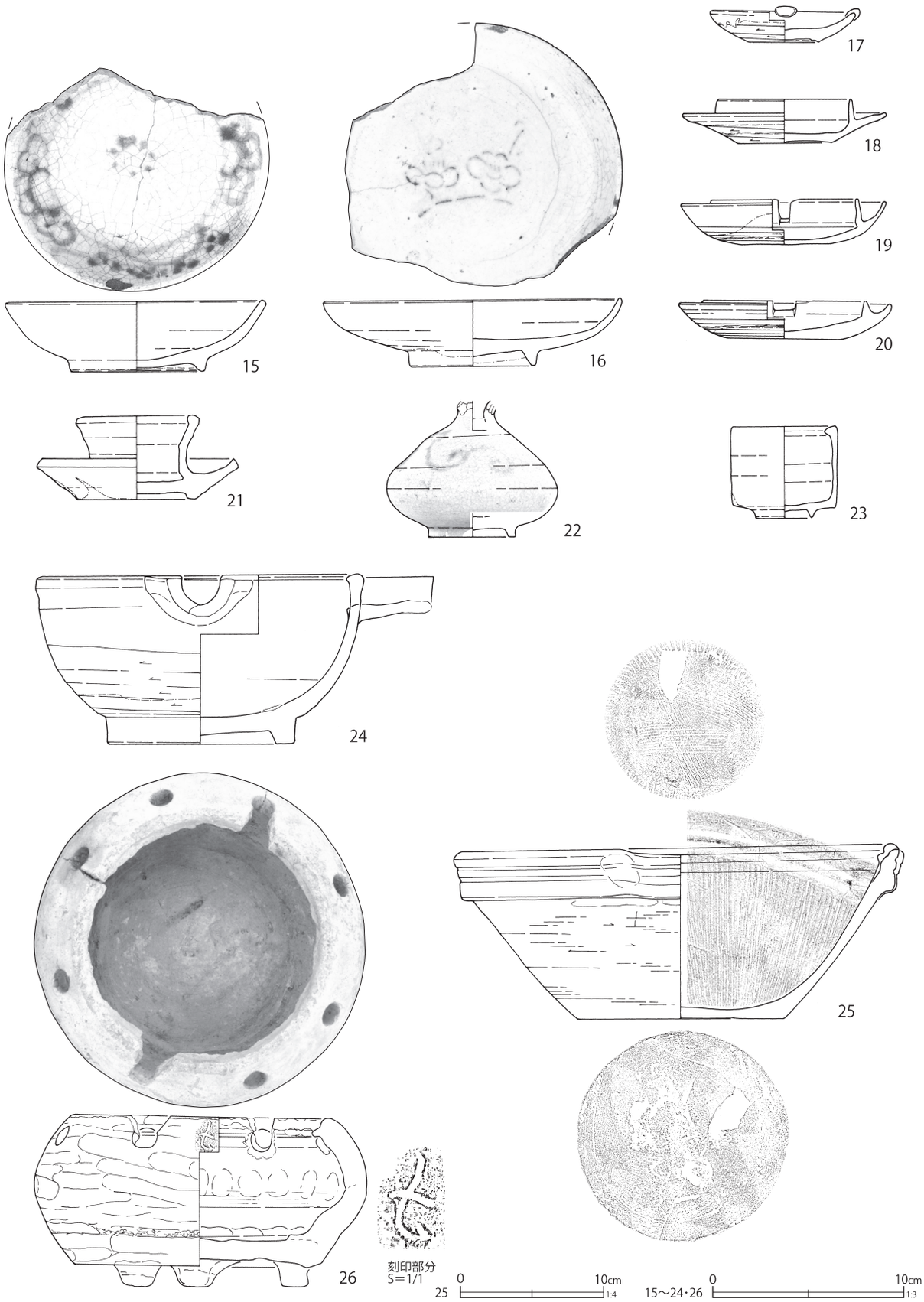
下層



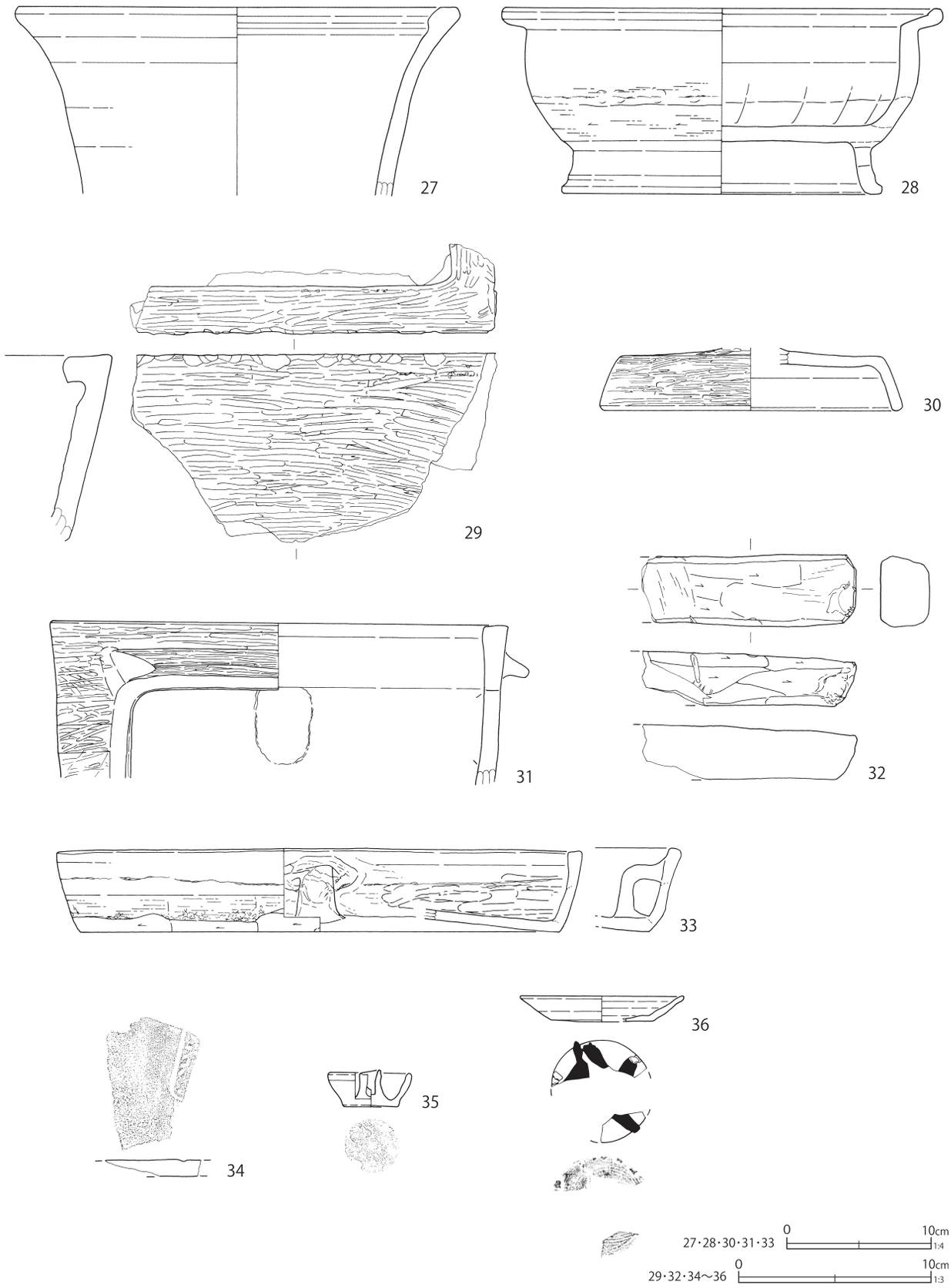
0　2m
1:60

第546図　第518号土壙

第 547 図　第 518 号土壙出土遺物（1）



第 548 図　第 518 号土壙出土遺物（2）



第 549 図　第 518 号土壙出土遺物（3）

第 183 表　第 518 号土壙出土遺物観察表（１）（第 547 ～ 549 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	磁器	碗	10.0	5.0	4.2	－	85	良好	白	肥前系 内外面施釉 外面染付	
2	磁器	碗	－	[2.3]	4.1	－	25	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付（筒形碗）	
3	磁器	碗	(7.8)	6.1	(4.0)	－	50	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付（筒形碗）	232-3
4	磁器	猪口	7.1	6.0	5.2	－	70	良好	白	肥前系 内外面施釉 外面染付	232-4
5	磁器	皿	12.6	3.7	7.4	－	80	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付	232-5
6	磁器	坏	(5.9)	2.3	(2.6)	－	45	良好	白	肥前系 内外面施釉 外面染付	232-6
7	磁器	徳利	－	[6.5]	(5.6)	－	45	良好	白	肥前系 外面施釉・染付 僅かに煤付着 SK513 と接合	
8	磁器	徳利	1.5	[11.3]	－	－	60	良好	白	肥前系 外面施釉・染付	
9	磁器	花生ヵ	(10.0)	[10.8]	－	－	30	良好	白	肥前系 内面上位～外面施釉 外面染付 少量煤付着 漆継痕	
10	陶器	碗	9.7	5.7	3.8	K	95	普通	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉 外面鉄釉掛け分け（腰錆碗）	232-7
11	陶器	碗	9.3	4.7	3.8	EK	95	良好	灰黄	瀬戸美濃系 内外面灰釉・鉄釉掛け分け	232-8
12	陶器	碗	9.4	5.1	3.7	DH	80	普通	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉（せんじ碗）	
13	陶器	碗	(7.9)	[5.4]	－	K	15	普通	灰	瀬戸美濃系 内外面鉄化粧 口縁部鉄釉（筒形碗）	
14	陶器	坏	(6.7)	4.6	3.2	IK	55	良好	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉	
15	陶器	皿	13.2	3.6	6.7	I	75	普通	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉 内面染付 被熱・一部黒化（太白手）	233-1
16	陶器	皿	(15.3)	3.4	6.3	DEHI	60	普通	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉 内面摺絵	
17	陶器	灯明皿	7.4	1.6	3.5	EI	95	良好	にぶい黄橙	瀬戸美濃系 内外面灰釉	233-2
18	陶器	灯明皿	6.8	2.2	4.8	IK	75	普通	灰	志戸呂系 内外面錆釉 外面重ね焼き痕 煤付着 最大径 (10.6)cm	233-3
19	陶器	灯明皿	7.4	2.3	4.6	IK	90	普通	灰	瀬戸美濃系 内外面柿釉 底部拭き取り 直重ね焼き痕 最大径 (10.6)cm	233-4
20	陶器	灯明皿	8.3	1.9	5.8	I	95	普通	灰白	瀬戸美濃系 内外面柿釉 外面下位・底部釉拭き取り 直重ね焼き痕 最大径 (11.1)cm	
21	陶器	灯火具	5.6	4.3	6.2	I	45	良好	にぶい黄橙	瀬戸美濃系 内外面灰釉 最大径 (9.9)cm	
22	陶器	油壺	－	[7.0]	4.4	HI	95	普通	灰白	瀬戸美濃系 外面灰釉・呉須絵	233-5
23	陶器	香炉	(5.4)	4.7	2.8	DI	40	良好	灰白	瀬戸美濃系 口縁部～外面灰釉	
24	陶器	片口鉢	16.3	8.7	9.4	IK	75	普通	淡黄	瀬戸美濃系 内外面灰釉 内面目跡３	233-6
25	陶器	擂鉢	30.0	12.1	14.4	DGI	75	普通	明赤褐	堺明石系 底部回転ケズリ 内面擂目	233-7
26	瓦質土器	火鉢	13.0	8.9	12.8	CEIK	90	普通	灰白	砂目底 外面ヘラミガキ・刻書「七」孔８うち２つの上部を意図的に欠く（灰落とし転用）口唇部二次敲打	233-8
27	土師質土器	火鉢	(30.4)	[13.0]	－	AIK	80	普通	明赤褐	江戸在地系 口縁部の一部煤付着	
28	瓦質土器	火鉢	(30.0)	12.8	(21.8)	CEK	50	普通	灰	砂目底 燻す	
29	瓦質土器	火鉢	－	[9.7]	－	EI	15	良好	灰白	外面ミガキ 燻す	
30	瓦質土器	蓋	－	[4.2]	(20.4)	IK	30	普通	灰白	外面ミガキ	
31	瓦質土器	竈	(31.2)	[11.1]	－	EHI	15	良好	灰白	外面ミガキ 燻す 内面煤付着	
32	瓦質土器	十能	長さ 11.1 幅 3.8 高さ [2.8]			CFHI	40	良好	にぶい黄橙	把手	
33	瓦質土器	焙烙	(36.0)	5.8	(33.0)	CEHIK	10	良好	にぶい橙	底部シワ状痕	
34	瓦質土器	焙烙	－	[0.9]	－	IK	5	普通	灰白	底部シワ状痕 内底面刻印「大極上」長さ [5.0]cm	234-1
35	土師質土器	秉燭	3.9	1.9	2.7	AHI	95	良好	にぶい橙	江戸在地系 底部糸切痕（左）胎土粉質 灯芯部煤付着	234-2
36	かわらけ	小皿	(8.3)	1.4	(5.3)	AI	40	普通	にぶい橙	江戸在地系 底部糸切痕・墨書 胎土粉質	

遺物は、建築材、桶、櫛、漆椀等の木製品を中心に、陶磁器が散在して出土した。陶磁器には、下層の第 516 号土壙との明確な時期差がみられず、短期に掘り直され連続的に廃棄が行われたと推測される。

陶磁器は、肥前系磁器の筒形碗、瀬戸美濃系陶器の筒形碗・太白手の皿が最新期にあたる。推定廃絶時期は 18 世紀第Ⅲ四半期である。

第 547 ～ 555 図に出土遺物を示した。

第 547 図１～９までは肥前系磁器である。１は粗製碗で、外面に雪輪草花文が染付される。２・３は筒形碗で、やや大振りのものである。３は内

面の口縁部に四方襷文、内底面に二重圏線と崩れた五弁花文の染付がみられる。

４は輪高台の猪口で、外面に草花文の染付が施される。５は粗製・厚手の皿である。内外面に染付が施されるが、絵付けは崩れている。

６は坏で、扁平な形態である。外面に染付で桐紋が描かれる。

７・８は徳利である。７は外面全体に牡丹の葉が唐草文状に描かれ、窓枠状に区画した中に宝文が染付される。類似した器形で牡丹唐草文が染付されるものが、第520号土壙から出土しているが、別個体である。８は細長い頸部を有すもので、外面に崩れた若松・梅樹文などが染付される。

９は筒形の容器で、花生と推測した。外面に山水文が染付されるものらしい。破断面に漆継痕がみられる。

10～13は瀬戸美濃系陶器の碗である。10は腰錆碗で、外面下位は焦げ茶色の鉄釉が施される。

11はせんじ形の掛け分け碗、12はせんじ碗である。13は鉄化粧地に、口縁部のみ漆黒の鉄釉が施された筒形碗である。

14は瀬戸美濃系陶器の坏である。灰釉が施釉され、体部下位にケズリが施されている。器壁は薄手で、付け高台である。高台はナデで仕上げでられる。

第548図15は瀬戸美濃系陶器で、太白手の皿である。底部が大きく窪んでいる。貫入が大きく入る灰釉が施釉され、内面は染付が施される。被熱し、一部が黒化している。

16は瀬戸美濃系陶器の摺絵皿で、灰釉は透明感が強く緑色味を帯びる。「御深井」に近い釉調である。内面体部下位は弱い段を廻らす。高台径はやや小さく、畳付部以外は施釉される。

17は瀬戸美濃系陶器の灯明皿で、口縁部に舌状の把手を１箇所有する。灰釉は黄色味が強く、僅かに青白く「うのふ」状に発色する部分が認められる。浅い削り込み高台である。

18は志戸呂系陶器の灯明皿（油受皿）である。外面の底部から口縁部直下まで回転ケズリで整形される。体部中位に径6.7㎝の重ね焼き痕が認められる。

19・20は瀬戸美濃系陶器の柿釉灯明皿（油受皿）である。19は器壁が薄手である。釉薬は薄く均等に掛けられ、光沢はあまりない。受部は上端径7.4㎝で、重ね焼き痕が認められる。切り込みは幅の狭い長方形である。外面は細かな回転ケズリ痕が認められ、中位に径7.3㎝の重ね焼き痕を有す。

20は器壁が厚手である。全体に光沢が強い柿釉がムラなく掛けられ、部分的に黒色の班が入る。受部は小さく、切り込みは幅の広い長方形である。上端径は8.3㎝で、重ね焼き痕が認められる。外面の底部から体部までは、回転ケズリで整形され、体部中位に径8.2㎝の重ね焼き痕を残す。

21は瀬戸美濃系陶器の灯火具で、受部が高い灯明皿である。光沢の強い灰釉が施される。底部は削り込み高台で、露胎とする。

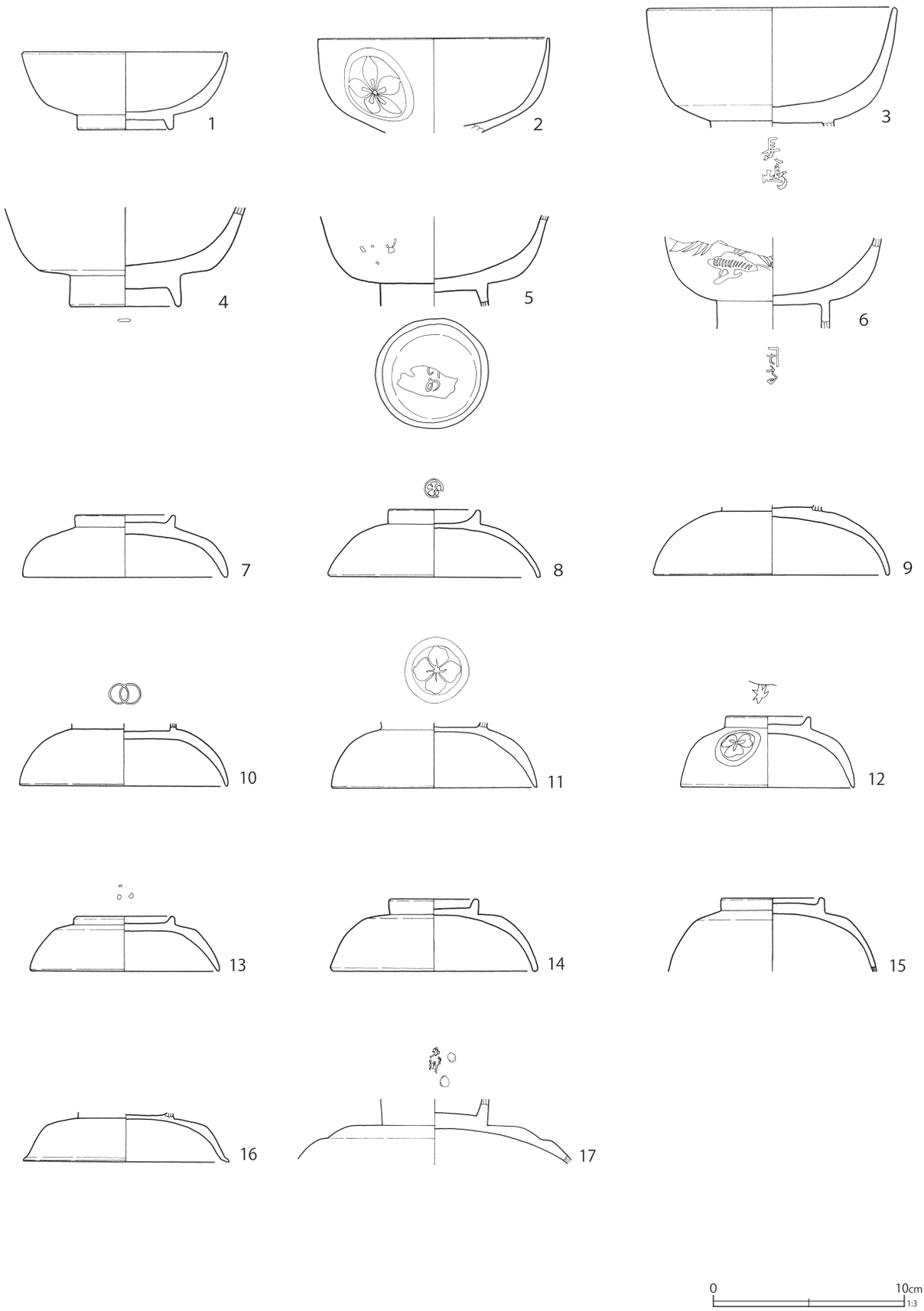
22は瀬戸美濃系陶器の油壺で、外面に呉須絵が施される。黄色味を帯びる灰釉には貫入が多い。高台の畳付部を除いて全面に施釉される。

23は瀬戸美濃系陶器で、灰釉を施す小形の香炉である。

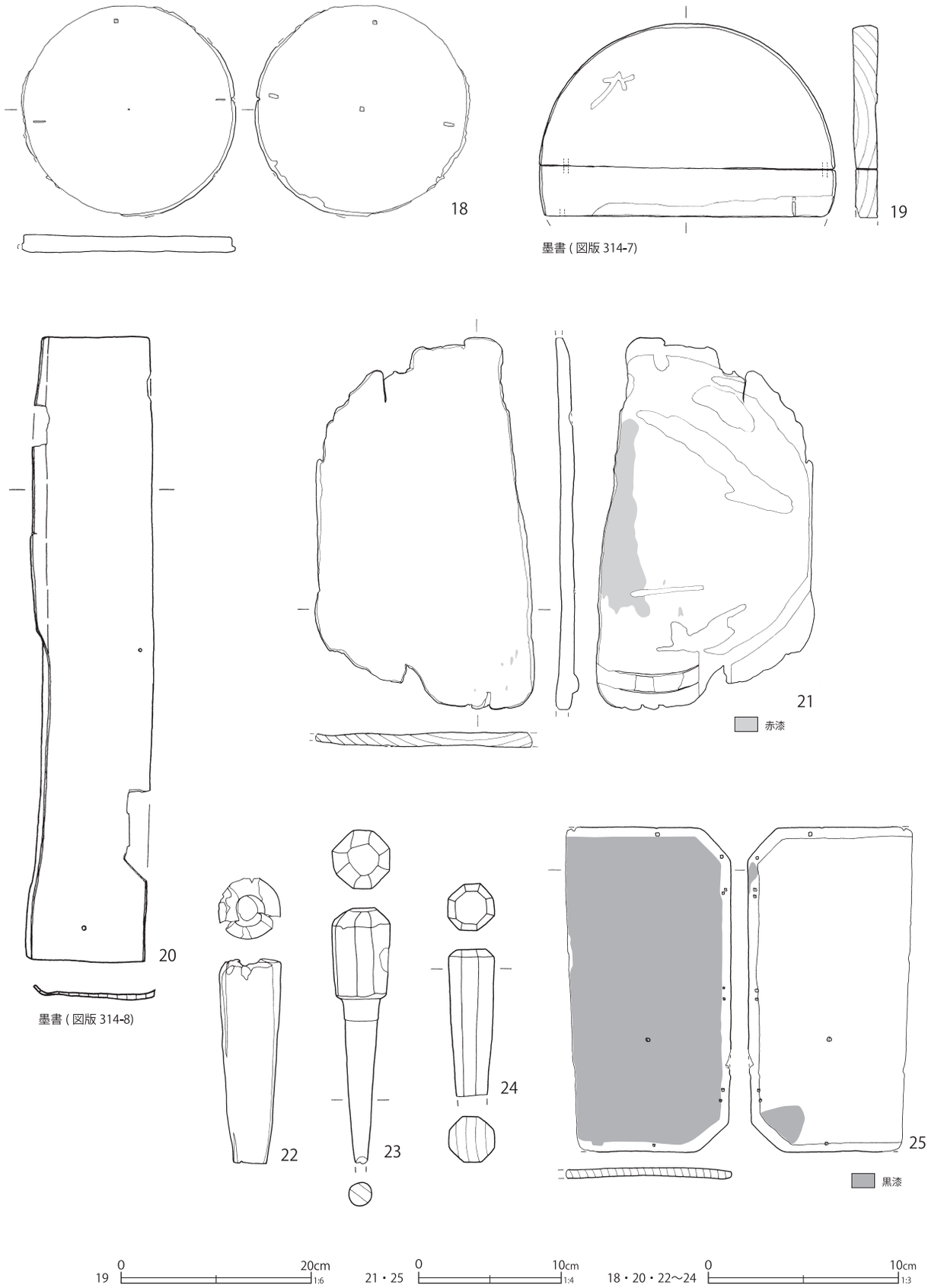
24は瀬戸美濃系陶器の片口鉢で、黄色味の強い灰釉が施される。片口部の突出が大きい。高台部は削り出し高台で、幅広くしっかりした作りである。内面に目跡が３箇所みられる。

25は堺明石系陶器の擂鉢である。内面には一単位９条の擂目を施す。体部外面はケズリ後に、全面が丁寧にヨコナデされる。底部は回転ヘラケズリで処理される。

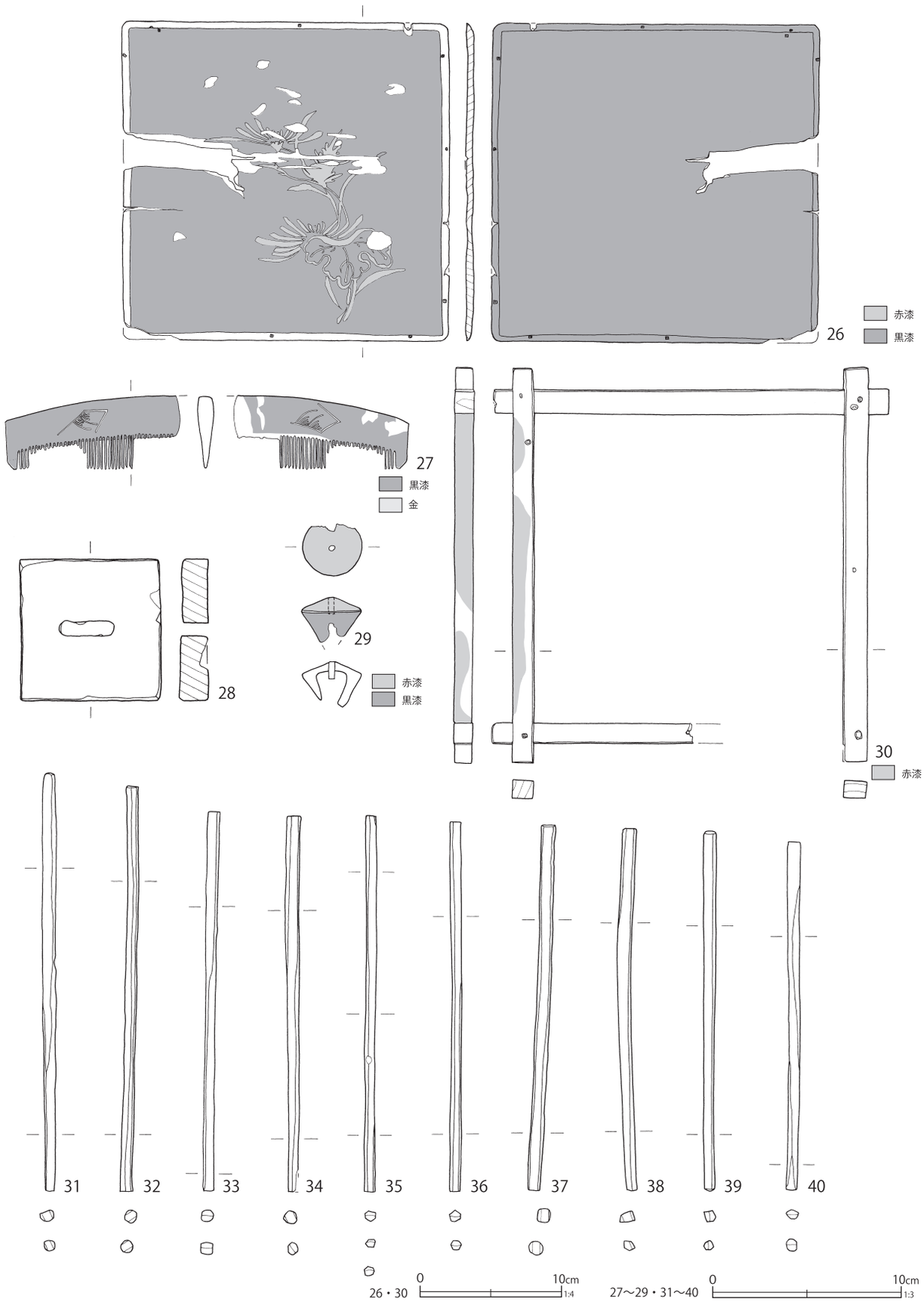
26は瓦質土器の火鉢である。口唇部に受け口が設けられ、口縁部付近に８箇所の焼成前穿孔が並ぶ。蓋が付くと考えられる。砂目底で、脚が３箇所に付く。外面の体部は粗いヘラミガキで、下



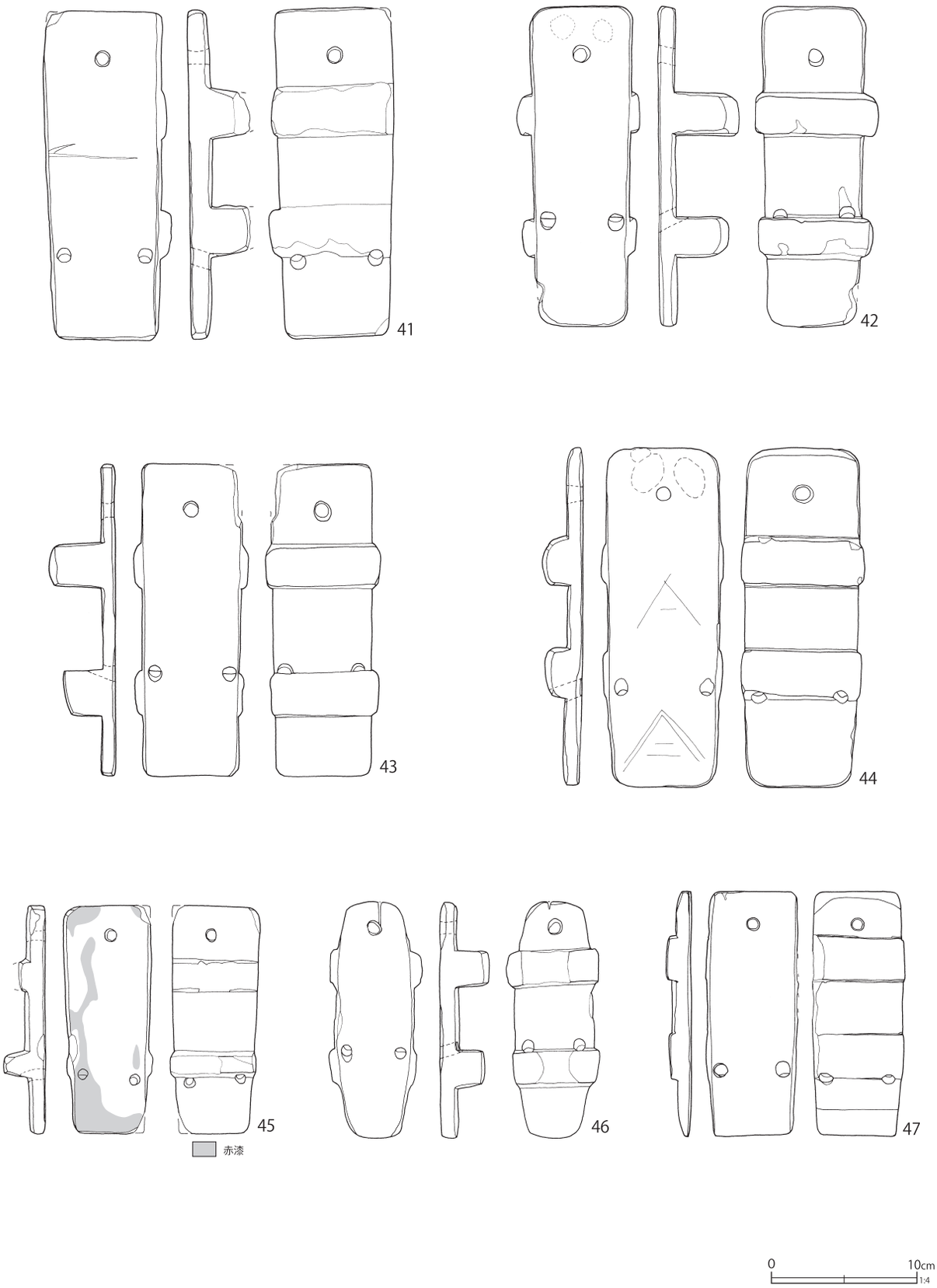
第 550 図　第 518 号土壙出土遺物（4）



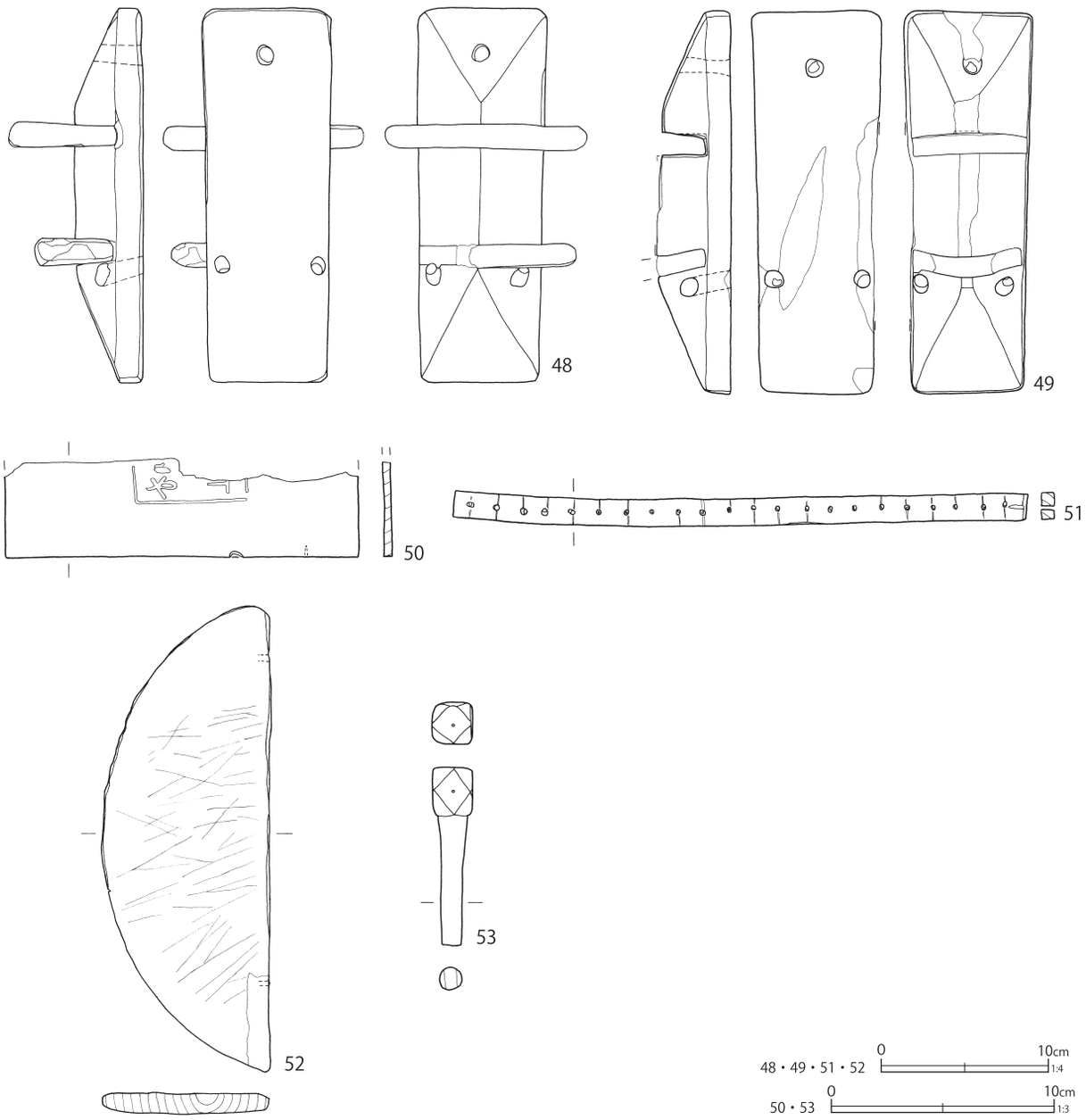
第 551 図　第 518 号土壙出土遺物（5）



第 552 図　第 518 号土壙出土遺物（6）



第 553 図　第 518 号土壙出土遺物（7）



第 554 図　第 518 号土壙出土遺物（８）

位の一部にシワ状痕が残される。外面の口縁部１箇所に刻書「七」がみえる。

第 549 図 27 は土師質土器の火鉢としたが、焜炉（七輪）の可能性もある。胎土に細粒の雲母が多量に含まれており、江戸在地系土器と考えられる。全面にヨコナデが施される。

28 は瓦質土器の火鉢で、輪高台状の脚を有する。燻されており、表面は灰色から黒色を帯びる。口縁部は、折れ鍔状に斜めに立ち上がり、口唇部はやや突出する。砂目底で、周囲は回転ナデが施される。外面の体部下位は、ケズリ後に丁寧になで消される。内底面の中央は一方向のナデで、周囲は回転ナデが施される。内面下位はヘラナデ、上位はヨコナデで処理される。胎土に角閃石が多く含まれる。

29 は瓦質土器の角火鉢である。燻されており、表面は黄灰から褐灰色である。外面はケズリ後に全面ミガキ、内面には強い筋状のナデが施される。

第 184 表　第 518 号土壙出土遺物観察表（２）（第 550 ～ 554 図）

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	口径 / 径	高さ	底径	木取り	備考	図版
1	木製品	漆椀	－	－	－	10.5	4.0	5.0	横木取り	内外面赤漆 口唇部・高台端部黒漆	
2	木製品	漆椀	－	－	－	(11.9)	[4.9]	－	横木取り	内外面赤漆 口唇部黒漆 外面紋（黒漆）ブナ属	274-8
3	木製品	漆椀	－	－	－	(12.7)	[6.1]	－	横木取り	内面赤漆 外面黒漆 高台内文字「長嶋」（赤漆）	274-9
4	木製品	漆椀	－	－	－	－	[5.1]	(5.8)	横木取り	内外面赤漆 高台端部黒漆 高台内文字（黒漆）	
5	木製品	漆椀	－	－	－	－	[4.8]	－	横木取り	内面赤漆 外面黒漆 外面文様ヵ（赤漆）高台内文字「[　]／[いヵ の]／[　]」（赤漆）歪みあり	274-10
6	木製品	漆椀	－	－	－	－	[4.7]	－	横木取り	内面赤漆 外面黒漆 外面文様（赤漆） 高台内文字「七高」（赤漆）	275-1
7	木製品	漆椀蓋	－	つまみ径 5.2		10.6	3.2	－	横木取り	内外面赤漆 口唇部黒漆	
8	木製品	漆椀蓋	－	つまみ径 (4.8)		10.8	3.5	－	横木取り	内外面赤漆 口唇部・つまみ端部黒漆 つまみ内紋（金）	275-2
9	木製品	漆椀蓋	－	つまみ径－		12.0	[3.5]	－	横木取り	内外面黒漆	
10	木製品	漆椀蓋	－	つまみ径－		(10.8)	[3.2]	－	横木取り	内外面赤漆 口唇部黒漆 つまみ内文様（黒漆）	275-3
11	木製品	漆椀蓋	－	つまみ径－		(10.5)	[3.4]	－	横木取り	内面赤漆 外面黒漆 つまみ内紋（赤漆）歪み大	
12	木製品	漆椀蓋	－	つまみ径 4.5		9.0	3.7	－	横木取り	内面赤漆 外面黒漆 外面 3 箇所紋（金）つまみ内文様（金）ブナ属	275-4
13	木製品	漆椀蓋	－	つまみ径 5.2		9.8	2.9	－	横木取り	内外面赤漆 つまみ内黒漆散る	275-5
14	木製品	漆椀蓋	－	つまみ径 4.5		(10.6)	3.8	－	横木取り	内外面赤漆	
15	木製品	漆椀蓋	－	つまみ径 5.2		－	[3.8]	－	横木取り	内外面赤漆 つまみ端部黒漆	
16	木製品	漆椀蓋	－	つまみ径－		10.6	[2.5]	－	横木取り	内外面赤漆	
17	木製品	漆椀蓋	－	つまみ径 4.5		－	[3.4]	－	横木取り	内外面赤漆 つまみ内黒漆散る・文字（金）歪み大	275-6
18	木製品	曲物	－	－	0.9	(11.2)	－	－	柾目	底板 樹皮紐 2 木釘 1	
19	木製品	樽	－	－	2.6	31.4	－	－	板目	蓋 焼印 墨書（文字資料 133）	
20	木製品	曲物	32.8	6.3	0.3	－	－	－	柾目	側板 孔 2 表面墨書（文字資料 134）	
21	木製品	蓋	[26.0]	[15.1]	1.0	－	－	－	板目	表裏面赤漆	
22	木製品	呑口	10.6	3.2	3.2	－	－	－	芯持材		275-7
23	木製品	栓	[13.3]	3.0	3.1	－	－	－	板目		
24	木製品	栓	[7.7]	2.4	2.5	－	－	－	板目	下部欠損	
25	木製品	膳	22.7	[11.6]	0.6	－	－	－	板目	底板 全面黒漆 木釘 7 孔 3	275-8
26	木製品	膳	23.1	22.9	0.6	－	－	－	板目	底板 全面黒漆 表面文様（赤漆）木釘 6 釘孔 6	275-9
27	木製品	櫛	[9.2]	3.7	0.8	－	－	－	不明	全面黒漆 文様（金）	276-1
28	木製品	鍔	7.4	7.4	1.5	－	－	－	板目	玩具刀	276-2
29	木製品	浮子	[2.4]	－	－	3.1	－	－	分割材	上部赤漆 下部黒漆 上面中央木軸残存 中空	276-3
30	木製品	不明	27.9	27.8	1.3	－	－	－	板目	赤漆 孔 8	276-4
31	木製品	箸	22.0	0.7	0.6	－	－	－	削出		276-5
32	木製品	箸	21.5	0.6	0.7	－	－	－	削出		276-5
33	木製品	箸	20.2	0.7	0.6	－	－	－	削出		276-5
34	木製品	箸	19.9	0.8	0.7	－	－	－	削出		276-5
35	木製品	箸	19.9	0.6	0.5	－	－	－	分割棒状		276-5
36	木製品	箸	19.5	0.6	0.6	－	－	－	分割棒状		276-6
37	木製品	箸	19.2	0.7	0.7	－	－	－	削出		276-6
38	木製品	箸	19.2	0.7	0.6	－	－	－	分割棒状		276-6
39	木製品	箸	19.0	0.7	0.6	－	－	－	分割棒状		276-6
40	木製品	箸	18.3	0.7	0.7	－	－	－	削出		276-6
41	木製品	下駄	22.5	8.4	－	－	[4.1]	－	板目	連歯下駄	
42	木製品	下駄	21.7	7.0	－	－	5.6	－	板目	連歯下駄	
43	木製品	下駄	21.4	6.9	－	－	4.5	－	板目	連歯下駄	
44	木製品	下駄	23.1	7.6	－	－	2.8	－	板目	連歯下駄	276-7
45	木製品	下駄	15.7	6.0	－	－	2.9	－	板目	連歯下駄 表面赤漆	276-8
46	木製品	下駄	16.1	5.3	－	－	3.4	－	板目	連歯下駄	
47	木製品	下駄	16.7	5.8	－	－	1.7	－	板目	連歯下駄 歯の前後に線状の切り込み	
48	木製品	下駄	22.3	7.7	－	－	8.0	－	板目	陰卯下駄	

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	口径 / 径	高さ	底径	木取り	備考	図版
49	木製品	下駄	22.8	7.5	―	―	[4.3]	―	板目	陰卯下駄 前歯に楔痕 ケヤキ	
50	木製品	木札	[4.3]	15.7	0.4	―	―	―	板目	木釘孔 1 焼印「[ ] や」	276-10
51	木製品	不明	34.0	1.6	0.8	―	―	―	板目	墨で線 孔 22	276-11
52	木製品	不明	[27.6]	[10.0]	―	―	1.3	―	板目	表面不規則な刃物傷多数 側面木釘 2	276-9
53	木製品	不明	7.9	1.8	1.8	―	―	―	板目	黒色塗料	276-12

30 は瓦質土器の蓋で、火消壺に伴うものである。外面は体部から上面にかけて、ケズリ後に細かいミガキが施される。内面は弱い回転ナデが施される。

31 は瓦質土器の竈である。内面に突起が付くが、欠失し、痕跡のみ残る。外面はケズリ後にミガキが施される。内面に煤が付着する。

32 は瓦質土器で、十能の把手である。上面はケズリ後にナデ、側面はケズリ、下面はナデが施される。胎土には角閃石が多く含まれている。

33 は瓦質土器の焙烙である。底部にシワ状痕がみられるが、一部砂目が残る。外面の体部下位にケズリ、その直上に雑なヨコナデが施されるが、部分的にシワ状痕が残る。内面の体部下位から内底面にかけて、粗雑にヘラミガキが施される。内外面の上位は、ヨコナデで処理される。胎土に角閃石が含まれている。

34 は瓦質土器で、焙烙の底部破片である。内面に刻印「大極上」がみられる。

35 は土師質土器の秉燭である。胎土が粉質で、細粒の雲母が多く含まれる江戸在地系土器である。底部は左回転の糸切痕が残り、灯芯部には煤が付着する。

36 はかわらけ小皿で、江戸在地系のものである。底部に糸切痕と墨書がみられる。細粒の雲母を含み、胎土は粉質である。内外面にヨコナデが施される。

第 550 ～ 554 図は木製品である。

第 550 図 1 ～ 3 までは腰丸椀である。 1 は腰が弱く張るもので、内外面に赤漆、口唇部と高台端部に黒漆が塗布される。

2 はやや薄手で、弱く腰が張るものである。内外面に赤漆、口唇部に黒漆が塗布される。外面には黒漆で紋が描かれる。木地には、ブナ属が利用されている（V　自然科学分析 10 参照）。

3 は厚手のものである。内面に赤漆、外面に黒漆が塗布され、高台内に赤漆で「長嶋」と書かれる。

4 は一文字腰椀で、腰部がやや丸みを持ちながら屈曲するものである。底部はかなり厚手である。内外面に赤漆、高台端部には黒漆が塗布される。高台内に黒漆で文字と思われるものが書かれる。

5 は 4 に類似するが、腰部の屈曲がみられず、丸みが強い。内面に赤漆、外面に黒漆が塗布される。外面には赤漆が散り、文様が描かれていたと思われる。高台内に赤漆で文字が書かれる。

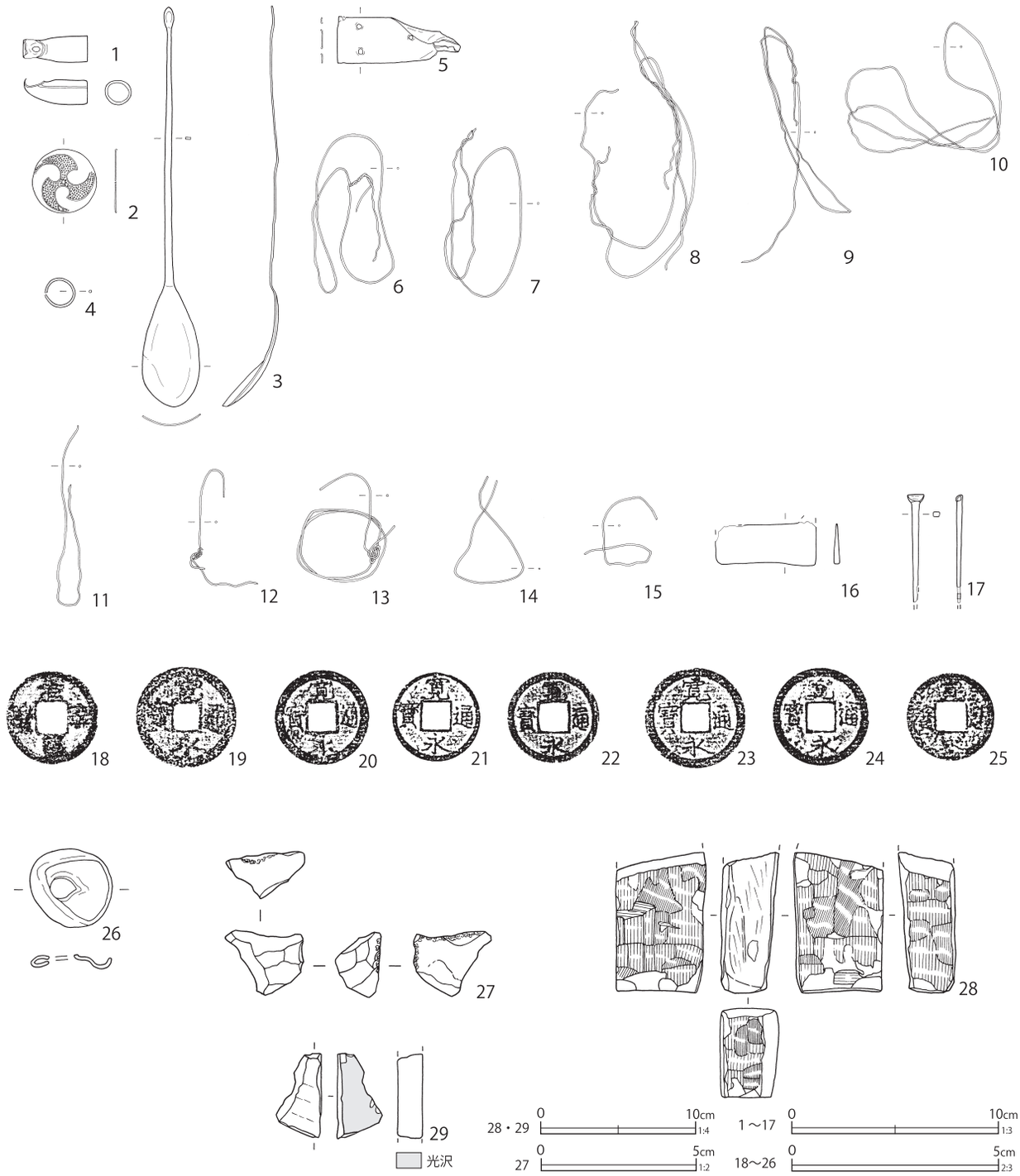
6 は腰丸椀で、体部が直立気味に立ち上がるものである。腰部が最も厚くなる。内面に赤漆、外面に黒漆が塗布される。外面には赤漆で文様が描かれ、高台内に「七高」の文字が赤漆で書かれる。

7 ～ 17 までは漆椀の蓋である。 7 は厚手のもので、肩部の丸みはやや強い。内外面に赤漆、口唇部に黒漆が塗布される。

8 は薄手のもので、つまみ内は窪むように削り込まれている。体部はやや直線的に開く。内外面に赤漆、口唇部とつまみ端部に黒漆が塗布される。つまみ内には金で、「（○に）梅鉢紋」が描かれる。

9 ～ 11 は類似する器形のものである。 9 はサイズが大きく、内外面に黒漆が塗布される。10 は内外面に赤漆、口唇部に黒漆が塗布される。つまみ内には黒漆で文様が描かれる。11 はつまみ内から体部にかけて、肥厚していくものである。内面に赤漆、外面に黒漆が塗布される。つまみ内には赤漆で紋が描かれる。大きく歪んでいる。

12 は口径が小さいが、深手で厚いものである。



第 555 図　第 518 号土壙出土遺物（9）

内面に赤漆、外面に黒漆が塗布される。外面の 3 箇所に金で紋、つまみ内にも同じく金で文様が描かれている。木地はブナ属が利用されている（V 自然科学分析 10 参照）。

13 ～ 15 までは一文字腰椀の蓋である。13 は肩部が角張るもので、内外面に赤漆が塗布され、つまみ内に黒漆が散る。14 は肩部の張りが弱く、やや丸みを帯びる。内外面に赤漆が塗布される。15 は見込みが深く、つまみ内は厚手である。肩部の張りが弱くやや丸みを帯びる。内外面に赤漆、つまみ端部に黒漆が塗布される。

16 は一文字腰椀の蓋に類似するが、口縁部が

第185表　第518号土壙出土遺物観察表（３）（第555図）

番号	種別	器種	法量	備考	図版
1	銅製品	煙管	長さ［3.1］小口径1.2 重さ6.3	吸口 鍍金あり 一部欠失	
2	銅製品	座金	径3.1 厚さ0.04 重さ3.6	三巴文	288-2
3	銅製品	匙	長さ19.4 幅2.8 厚さ0.06 重さ9.0	鍍金あり	287-3
4	銅製品	環金具	径1.5×1.4 厚さ0.1 重さ0.7		
5	銅製品	不明	縦2.2 横6.0 厚さ0.04 重さ6.0	穿孔あり	
6	銅製品	針金	縦7.7 横4.0 厚さ0.1 重さ1.7		
7	銅製品	針金	縦8.2 横3.8 厚さ0.1 重さ1.1		
8	銅製品	針金	縦12.4 横5.6 厚さ0.1 重さ2.7		
9	銅製品	針金	縦11.5 横5.3 厚さ0.07 重さ1.2		
10	銅製品	針金	縦6.3 横7.5 厚さ0.1 重さ1.5		
11	銅製品	針金	縦8.7 横1.2 厚さ0.1 重さ0.7		
12	銅製品	針金	縦5.7 横3.3 厚さ0.1 重さ0.4		
13	銅製品	針金	縦5.3 横4.8 厚さ0.1 重さ1.5		
14	銅製品	針金	縦5.2 横3.4 厚さ0.1 重さ0.3		
15	銅製品	針金	縦3.3 横3.5 厚さ0.1 重さ0.4		
16	鉄製品	火打金	長さ4.9 幅［2.1］厚さ0.3 重さ9.8	欠け	
17	鉄製品	釘	長さ［5.2］幅0.3 厚さ0.3 重さ1.6	欠け	
18	銅製品	銭貨	径23.0 厚さ1.2 重さ2.3	元豊通寶ヵ	
19	銅製品	銭貨	径24.8 厚さ1.6 重さ3.8	寛永通寶（古ヵ）	
20	銅製品	銭貨	径23.3 厚さ1.4 重さ2.6	寛永通寶（新）	
21	銅製品	銭貨	径21.5 厚さ1.1 重さ1.6	寛永通寶（新）	
22	銅製品	銭貨	径22.5 厚さ0.9 重さ1.9	寛永通寶（新）	
23	銅製品	銭貨	径24.8 厚さ1.1 重さ2.8	寛永通寶（新）	
24	銅製品	銭貨	径23.6 厚さ1.1 重さ1.7	寛永通寶（新）	
25	銅製品	銭貨	径21.7 厚さ1.1 重さ1.5	寛永通寶（新古不明）	
26	銅製品	雁首銭	径2.0×1.9 厚さ0.3 重さ2.6	鍍金あり	288-6
27	石製品	火打石	長さ2.1 幅2.5 厚さ1.5 重さ4.8	玉髄 使用痕あり	291-4
28	石製品	砥石	長さ［9.0］幅［3.7］厚さ5.7 重さ288.6	流紋岩（緑色）側・裏面櫛歯状工具痕 砥面1 煤付着	298-9
29	石製品	不明	長さ［5.4］幅［3.0］厚さ1.6 重さ37.5	石灰岩 光沢あり	

強く反る。肩部は角張るが、丸みを帯びる。内外面に赤漆が塗布される。

17はつまみが高く、体部に段が付くものである。内外面に赤漆が塗布される。つまみ内には黒漆が散り、金で文字が書かれる。歪みが大きい。

第551図18は曲物の底板である。側面には側板を受けるための段状の加工が施される。左右に樹皮紐が遺存しており、第517号土壙出土資料（第536図31）の例から、側板を固定するためのものと考えられる。

19は樽の蓋で、焼印と墨痕がみえる。２枚の板を木釘で接ぎ合わせている。

20は曲物の側板である。墨痕がみえる。21は蓋である。下面は受け口状に突出している。表裏面に赤漆が遺存する。

22は樽の呑口、23・24は栓である。

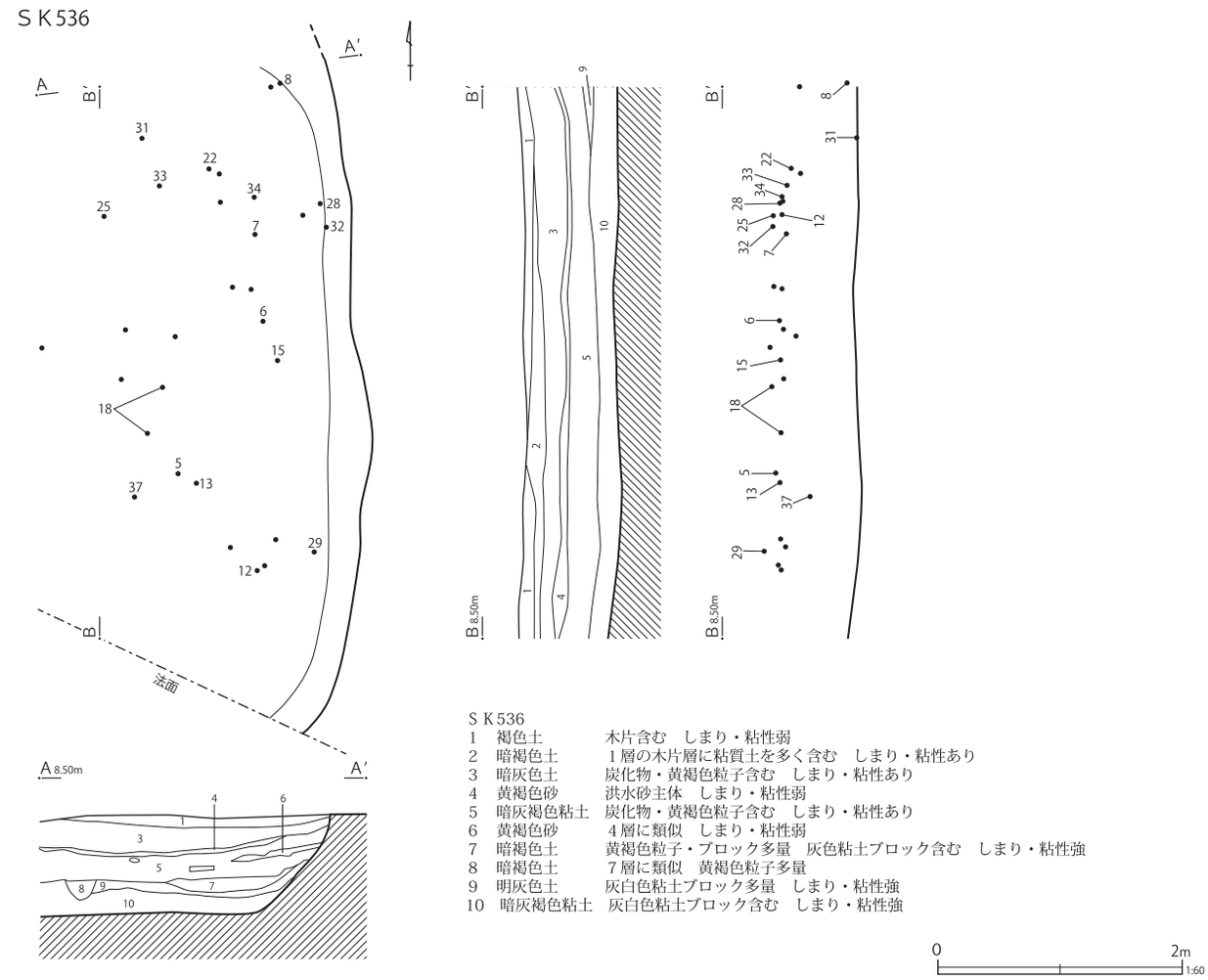
25、第552図26は膳である。25は底板で、角が面取られている。全面に黒漆が塗布されているが、裏面は大きく剥落している。

26も底板で、方形のものである。全面に黒漆が塗布され、上面には赤漆で文様が描かれる。

27は櫛である。全面に黒漆が塗布され、両面に金で文様が描かれる。歯は太く、やや間隔が広い。28は木刀の鍔である。玩具と思われる。

29は浮子である。中空で、中央の孔に木製の軸が遺存する。外面上位は赤漆、下位は黒漆が塗布される。

30は器種不詳の木製品である。一部に赤漆が



第 556 図　第 536 号土壙

残存している。

31 ～ 40 までは寸胴箸である。長さは 19cm 台のものが多い。

第 553 図 41 ～ 49 までは下駄である。このうち 41 ～ 47 は連歯下駄、第 554 図 48・49 は陰卯下駄である。49 の木地にはケヤキが使われていた（Ⅴ　自然科学分析 10 参照）。50 は木札で、焼印がみられる。

51 ～ 53 は器種不詳の木製品である。51 は角形で棒状のものに、一定間隔で 22 箇所の穿孔が施されている。穿孔部を通って長軸に直交するように、墨で線が引かれている。52 は桶ないし樽の底板もしくは蓋に類似する。表面に刃物による不規則な線状の傷が多くみられる。

第 555 図１～ 26 は金属製品である。

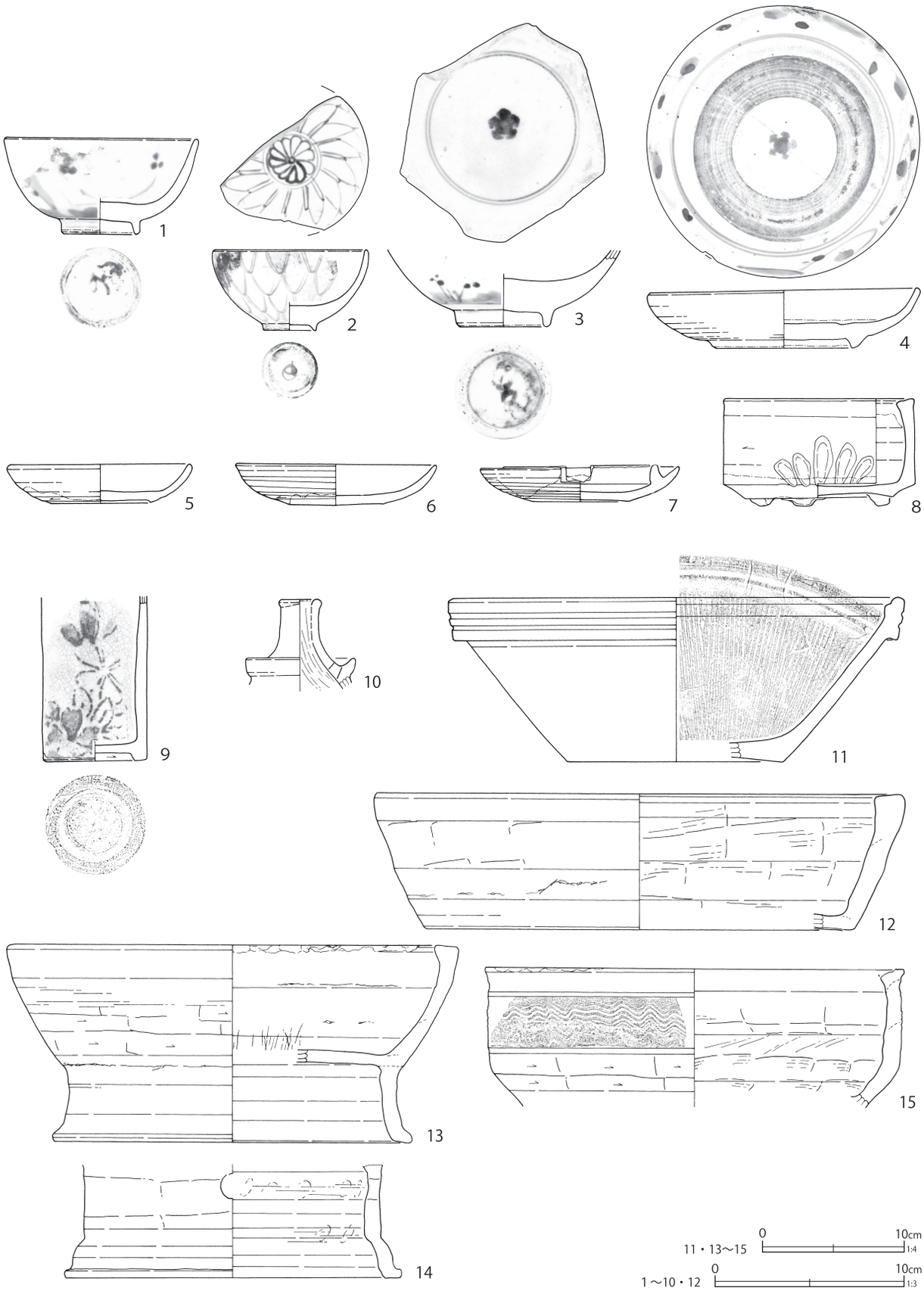
１～ 15 までは銅製品で、１は煙管の吸口である。２は三巴文の座金である。３は匙である。４は環金具である。５は器種不詳の銅製品である。６～ 15 は針金である。

16・17 は鉄製品で、16 は火打金の刃である。17 は釘である。

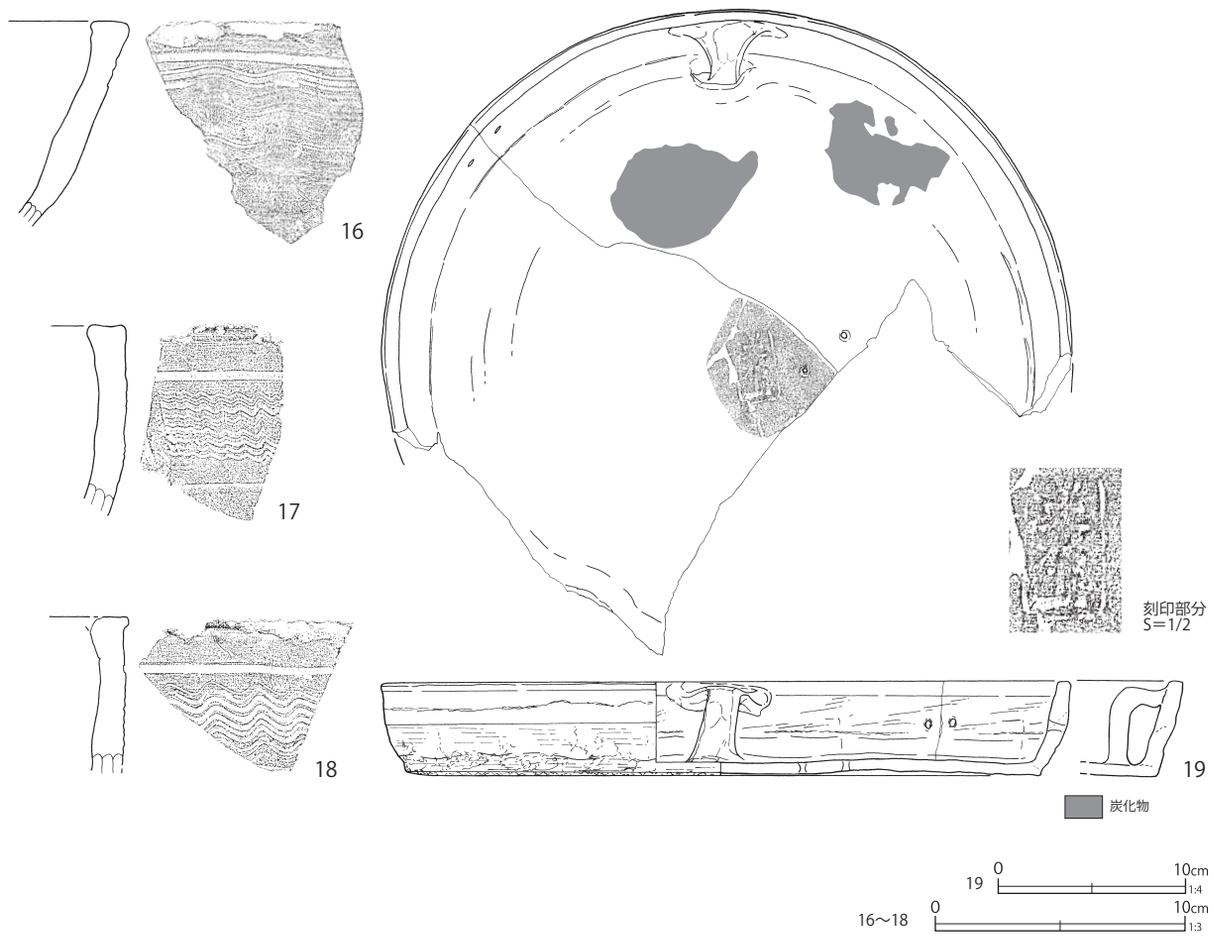
18 ～ 26 までは銭貨である。18 は元豊通寶であろうか。19 ～ 25 は寛永通寶である。26 は雁首銭である。

第 555 図 27 ～ 29 までは石製品である。27 は玉髄製の火打石で、あまり使い込まれていない。２稜を使用する。

28 は緑色味を帯びる流紋岩製の砥石である。



第 557 図　第 536 号土壙出土遺物（1）



第 558 図　第 536 号土壙出土遺物（２）

櫛歯状工具痕が４面にみられる。櫛歯の間隔で２種に分けられ、密なものは刃こぼれしたノミ状の工具によるものかもしれない。櫛歯が密なものについては、挿図では条線の間隔を狭くして表現した。酸化鉄分の付着が著しい。

29 は器種不詳の石製品である。石灰岩製で、片面は平滑である。平滑面は光沢を放つ。反対側の面は、削痕状の稜が認められる。

第 536 号土壙（第 556 ～ 561 図）

Ｂ５－Ｊ４、Ｃ５－Ａ４グリッドに位置し、南壁・西壁は調査区域外であった。

北端部はトレンチ調査時に壊されたため、検出できなかった。

覆土は水平堆積で、第４層に洪水砂層が薄く堆積していたことから、その段階には開口状態であったと考えられる。第５層の粘土層には、第４層と類似する砂が入り込んでいた。第１～３層は埋め戻し土で、木片が目立って含まれていた。

遺物の出土は、中層の洪水砂層直上を中心に認められ、洪水直後に廃棄されたと考えられる。出土遺物はやや多く、陶磁器、瓦、木製品、金属製品、石製品が出土した。

陶磁器は、18 世紀中葉までのもので占められており、瀬戸美濃系陶器の柿釉灯明皿が最新期である。推定廃絶時期は 18 世紀中葉である。

第 557 ～ 561 図に出土遺物を示した。第 557 図１～４までは肥前系磁器である。

１は粗製碗で、外面に雪輪草花文の染付が施される。２も粗製碗で、外面は二重網目文、内面は菊花文の染付が施される。外面に煤が付着するが、

第 186 表　第 536 号土壙出土遺物観察表（１）（第 557・558 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	磁器	碗	(10.0)	5.0	(3.8)	－	60	普通	白	肥前系 内外面施釉 外面染付	
2	磁器	碗	(8.0)	4.2	2.6	－	45	普通	白	肥前系 内外面施釉・染付 外面煤付着	
3	磁器	碗	－	[4.0]	(4.5)	－	60	普通	灰白	肥前系 内外面施釉・染付	
4	磁器	皿	14.0	3.1	7.2	－	100	普通	白	肥前系 内外面施釉 内面蛇の目状釉剥・染付 SK517 と接合	234-8
5	陶器	灯明皿	9.4	2.0	5.2	IK	100	普通	灰黄褐	瀬戸美濃系 内外面鉄釉	235-1
6	陶器	灯明皿	10.4	2.2	4.9	DIK	100	普通	黄灰	瀬戸美濃系 内外面柿釉 外面下位・底部釉拭き取り 内底面・体部中位直重ね焼き痕	
7	陶器	灯明皿	8.0	1.9	4.8	IK	95	普通	褐灰	瀬戸美濃系 内外面鉄釉 外面下位・底部釉拭き取り 受口端部・体部中位直重ね焼き痕 最大径 (10.4)cm	
8	陶器	香炉	9.9	5.6	7.6	HIK	95	普通	灰黄	瀬戸美濃系 外面施釉・鎬文	235-2
9	陶器	灰落し	－	[8.6]	5.4	HIK	40	普通	灰黄	瀬戸美濃系 内外面灰釉 外面摺絵（鉄絵） 高台畳付に糸切痕遺存	235-3
10	陶器	油徳利	1.8	[4.7]	－	IK	15	普通	灰白	瀬戸美濃系 外面柿釉	
11	陶器	擂鉢	(31.0)	11.5	(15.0)	EGHIKL	20	良好	明赤褐	堺明石系 内面擂目	
12	瓦質土器	火鉢	(27.6)	[7.1]	(22.4)	CHK	30	普通	にぶい橙	砂目底 やや酸化炎焼成	
13	瓦質土器	火鉢	(28.9)	13.9	(25.1)	CHIK	35	普通	にぶい橙	底部シワ状痕 やや酸化炎焼成 口唇部二次敲打痕	235-4
14	瓦質土器	火鉢	－	[7.9]	(23.6)	CFHIK	15	良好	浅黄橙	脚部穿孔１遺存 やや酸化炎焼成	
15	瓦質土器	火鉢	29.2	[9.7]	－	CEHIK	15	良好	にぶい黄橙	外面櫛歯波状文 やや酸化炎焼成 口唇部外面二次敲打痕	
16	瓦質土器	火鉢	－	[8.1]	－	CEHIK	5	普通	にぶい橙	外面櫛歯波状文 やや酸化炎焼成 口唇部二次敲打痕	
17	瓦質土器	火鉢	－	[7.5]	－	CHIK	5	普通	にぶい橙	外面櫛歯波状文 内面煤付着 やや酸化炎焼成	
18	瓦質土器	火鉢	－	[6.1]	－	CEHK	5	普通	灰黄 黄灰	外面櫛歯波状文 口唇部二次敲打痕	
19	瓦質土器	焙烙	36.6	5.0	33.7	CHIK	60	普通	浅黄橙	底部シワ状痕 内面刻印「大極上ヵ」補修孔 4(2 対）銅線遺存 外面煤付着 内面円形炭化物痕	235-5

被熱によるものかは不明である。

３は粗製の大碗である。外面に雪輪草花文、内面に二重圏線と崩れた五弁花文が染付される。

４は、内面に蛇の目状釉剥ぎが施された粗製の皿で、梅花繋ぎ文が染付される。第 517 号土壙から出土した破片と接合した。

５～ 10 までは、瀬戸美濃系陶器である。５は灯明皿で、刳り高台のものである。外面下位に回転ケズリがみられる。外面上位から内面にかけて、鉄釉が施釉される。

６・７は灯明皿である。６は油皿で、柿釉が施釉され、外面下位から底部にかけて釉が拭き取られる。内底面と外面の体部中位に重ね焼き痕が認められる。

７は油受皿で、受部に幅の広い角形の切り込みを有する。鉄釉が施釉され、外面下位から底部にかけて釉が拭き取られる。受部と外面の体部中位に重ね焼き痕が認められる。外面のものは径 7.9 ㎝である。

８は半菊状の鎬文が施された香炉である。黄色味が強い灰釉が施釉される。外面の体部から底部は回転ケズリで仕上げる。脚は３箇所につく。

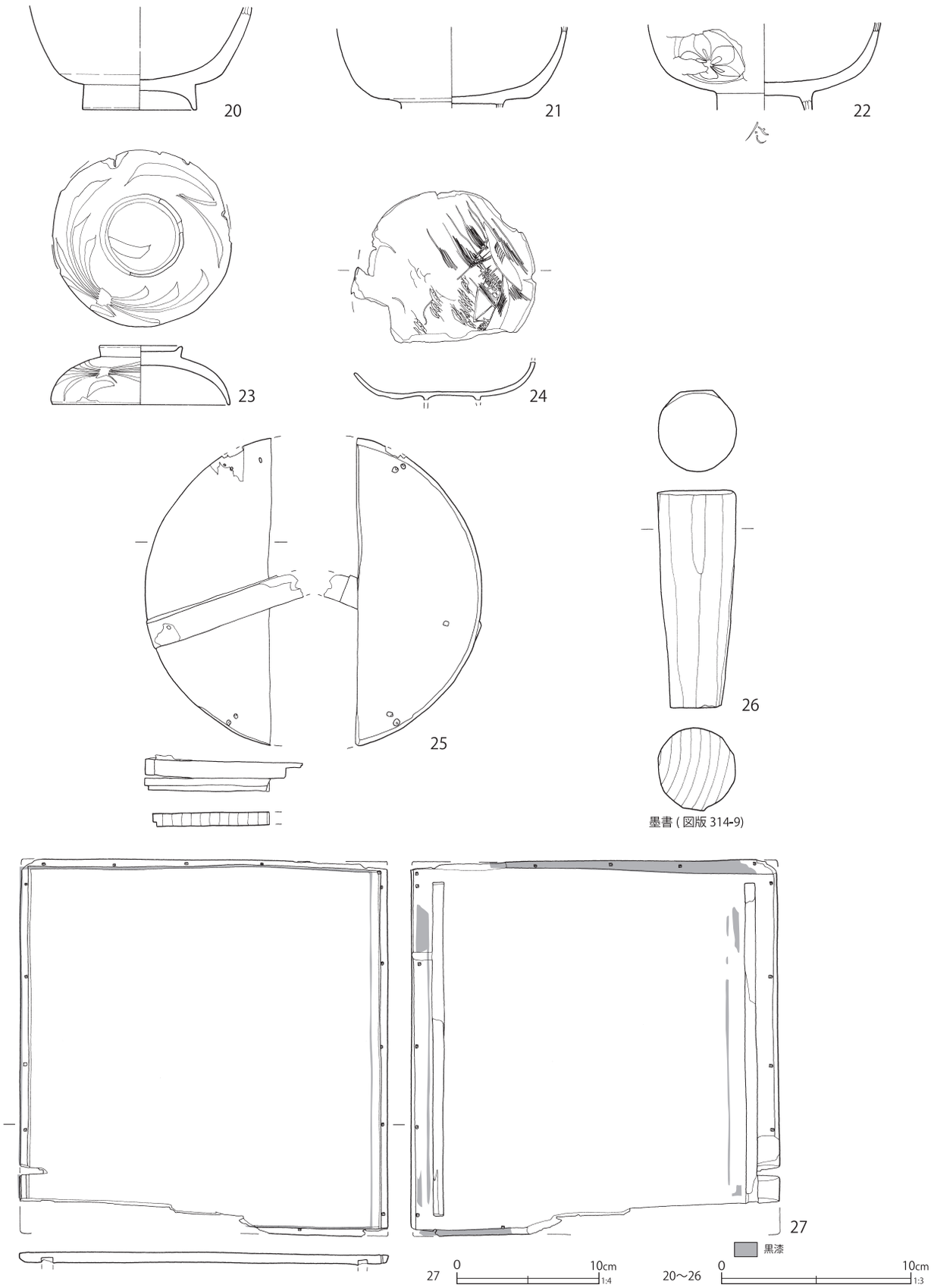
９は灰落しである。削り込み高台で、高台幅は広く、しっかりした作りである。高台部の畳付に、糸切痕が遺存する。内外面に灰釉が施釉され、外面に草花文の摺絵が施される。

10 は油徳利である。外面に柿釉が施釉される。

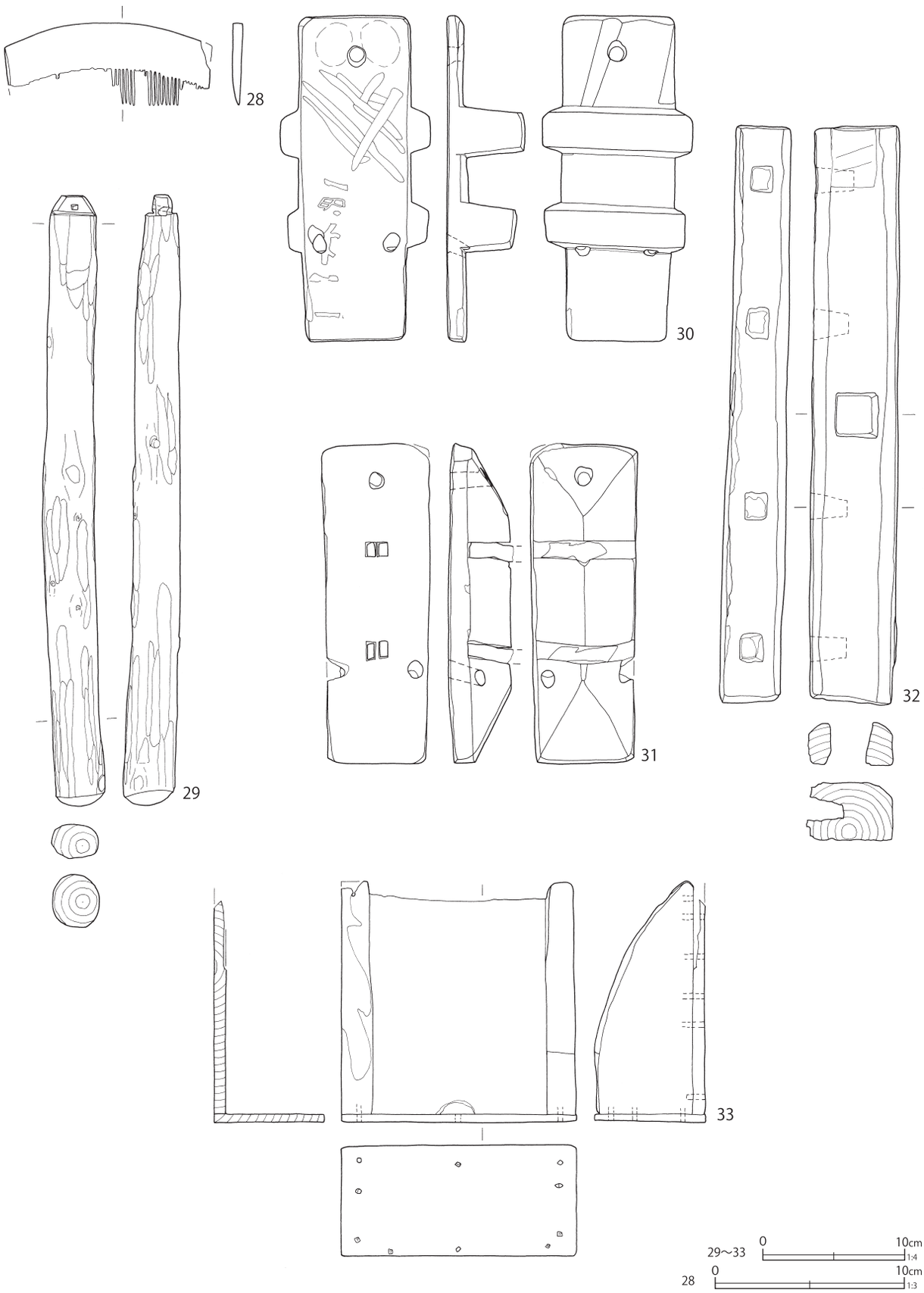
11 は堺明石系陶器の擂鉢である。内面の擂目は１単位が９条である。

12 は瓦質土器の火鉢である。器形は輪高台状の脚を有するものに類似するが、脚部の痕跡から、３脚の火鉢と考えられる。砂目底で、脚痕跡の周囲にケズリがみられる。外面の体部は筋状のヨコナデ、内面の体部には筋状のヘラナデが施される。やや酸化炎焼成で、胎土に角閃石が含まれる。

第 557・558 図 13 ～ 18 までは瓦質土器の火鉢



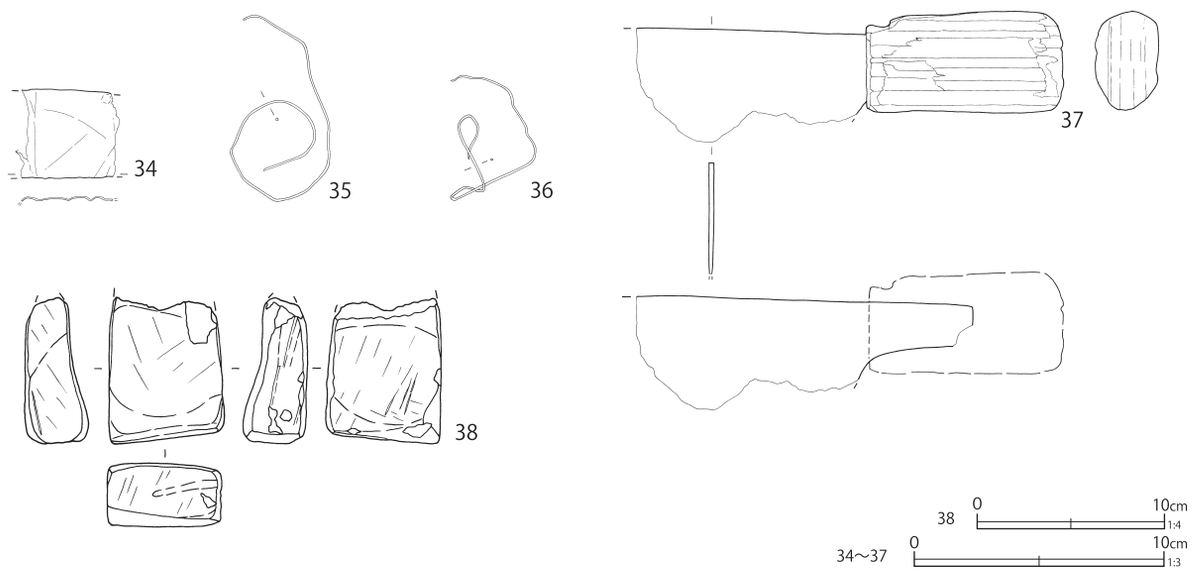
第 559 図　第 536 号土壙出土遺物（3）



第 560 図　第 536 号土壙出土遺物（4）

第 187 表　第 536 号土壙出土遺物観察表（２）（第 559・560 図）

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	口径 / 径	高さ	底径	木取り	備考	図版
20	木製品	漆椀	―	―	―	―	[5.4]	5.9	横木取り	内面赤漆 外面黒漆	
21	木製品	漆椀	―	―	―	―	[4.2]	―	横木取り	内外面赤漆	
22	木製品	漆椀	―	―	―	―	[4.5]	―	横木取り	内外面赤漆 外面 2 箇所紋（黒漆） 高台内文字（黒漆）	277-4
23	木製品	漆椀蓋	―	つまみ径 (4.3)		(9.3)	3.1	―	横木取り	内外面赤漆 つまみ端部・口唇部黒漆 外面文様（黒漆）	277-5
24	木製品	盃	―	―	0.3	(12.5)	―	―	横木取り	内外面赤漆 内面文様（金）	277-6
25	木製品	曲物	―	―	1.8	(17.5)	―	―	板目	蓋 木目に対し把手が斜めに付く 鉄釘 1 釘孔 9	277-7
26	木製品	栓	11.4	―	―	4.0	―	―	分割材	加工痕明瞭 上面墨書（文字資料 135）	
27	木製品	膳	(26.5)	25.9	0.7	―	―	―	板目	両面黒漆 木釘 15 釘孔 1	277-8
28	木製品	櫛	(10.8)	4.3	0.5	―	―	―	板目		277-10
29	木製品	すりこぎ	43.2	3.6	3.7	―	―	―	芯持材	下部摩耗 削痕 上部に加工・方形孔 1	277-9
30	木製品	下駄	23.0	7.6	―	―	5.5	―	板目	連歯下駄 指圧痕あり	278-1
31	木製品	下駄	22.5	7.6	―	―	[4.5]	―	板目	露卯下駄	
32	木製品	馬鍬	6.1	40.4	4.4	―	―	―	芯持材	下面の穴に錆付着	278-2
33	木製品	不明	17.0	16.7	―	―	―	―	板目	孔 22（内木釘残 6） 厚さ（底板 0.8cm 背板 0.6cm 左右側板 2.0 ～ 2.2cm）	277-11



第 561 図　第 536 号土壙出土遺物（５）

第 188 表　第 536 号土壙出土遺物観察表（３）（第 561 図）

番号	種別	器種	法量	備考	図版
34	銅製品	不明	縦 3.5 横 [4.2] 厚さ 0.05 重さ 2.6		
35	銅製品	針金	縦 7.4 横 4.0 厚さ 0.1 重さ 0.4		
36	銅製品	針金	縦 5.0 横 3.4 厚さ 0.1 重さ 0.3		
37	鉄製品	包丁	長さ [17.1] 刃長 [9.2] 刃幅 [4.5] 背幅 0.2 重さ 108.4	欠け	288-4
38	石製品	砥石	長さ [7.7] 幅 6.1 厚さ 3.4 重さ 230.4	流紋岩 側面削痕 砥面 4	295-1

で、輪高台状の脚を有すものである。

13 は底部にシワ状痕がみられ、シワの外周囲にナデを施す。外面の体部下位はヘラナデ、上位はヨコナデで処理される。内面はヨコナデが施され、下位に火箸による傷が認められる。酸化炎焼成ぎみで、胎土には角閃石がやや多く含まれる。

14 は脚部の破片で段をもつ。底部との接合部で欠損している。外面上位は丁寧な弱いヘラナデが施され、下位はヨコナデで処理される。内面は指圧痕を消すようにヨコナデが施される。やや酸化炎焼成で、胎土に角閃石が多く含まれる。

15 は口縁部から体部下位にかけての破片である。外面の２条の沈線の区画内には櫛歯波状文が施文される。沈線の直下には、幅の広い２段のケズリ、その下にはヨコナデが施される。内面の下位に筋状のヘラナデが明瞭に残る。酸化炎ぎみに焼成され、胎土に角閃石がやや多く含まれる。

16 ～ 18 は口縁部の破片で、文様が類似するものである。16 は斜めに開口するが、17・18 は直立する。

16 は沈線の直下に、緩やかに蛇行する細い櫛歯波状文が施文され、下位にはケズリが施される。ケズリの上位はなで消される。内面上位には、筋状のナデがみられる。酸化炎ぎみに焼成され、胎土に角閃石が多く含まれる。

17 は２条の沈線の区画内に、細く波が細かい櫛歯波状文が施文される。内面は筋状のナデで、口縁部付近はヨコナデで処理される。酸化炎ぎみに焼成される。胎土に角閃石が多く含まれる。

18 は沈線の直下に、太く波が細かい櫛歯波状文が施文される。胎土に角閃石がやや多く含まれる。

19 は瓦質土器の焙烙である。内底面に刻印がみられるが、不鮮明で判読できない。底部にシワ状痕がみられる。外面の体部下位はヘラナデにより、シワ状痕が消されるが、指圧痕の窪んだ部分を中心にシワが残る。内面の体部にはヘラナデが施され、内底面は平滑に処理される。胎土に角閃石が含まれる。内底面の２箇所に、炭化物が円形に付着している。

第 559・560 図は木製品である。

第 559 図 20 ～ 22 までは漆椀である。20 は一文字腰椀に類似するが、腰の角張りが弱く、丸みがある。高台内は凹状に削り込む。内面に赤漆、外面に黒漆が塗布される。

21 も一文字腰椀に類似するが、腰の角張りが弱く、丸みがある。薄手のもので、内外面に赤漆が塗布される。

22 は腰丸椀で、腰がやや張る。内外面に赤漆が塗布される。外面の２箇所に黒漆で紋が描かれ、高台内に黒漆で文字が書かれる。

23 は漆椀の蓋である。体部の丸みは強く、厚手である。内外面に赤漆、つまみ端部と口唇部に黒漆が塗布される。外面に黒漆で文様が描かれる。

24 は盃で、極めて薄手である。内外面に赤漆が塗布され、内面に金で風景の文様が描かれる。

25 は曲物の蓋である。角柱状の把手が、木目に対して斜交するように、鉄釘で接続されている。周囲には、２箇所に釘孔が２つずつ認められる。

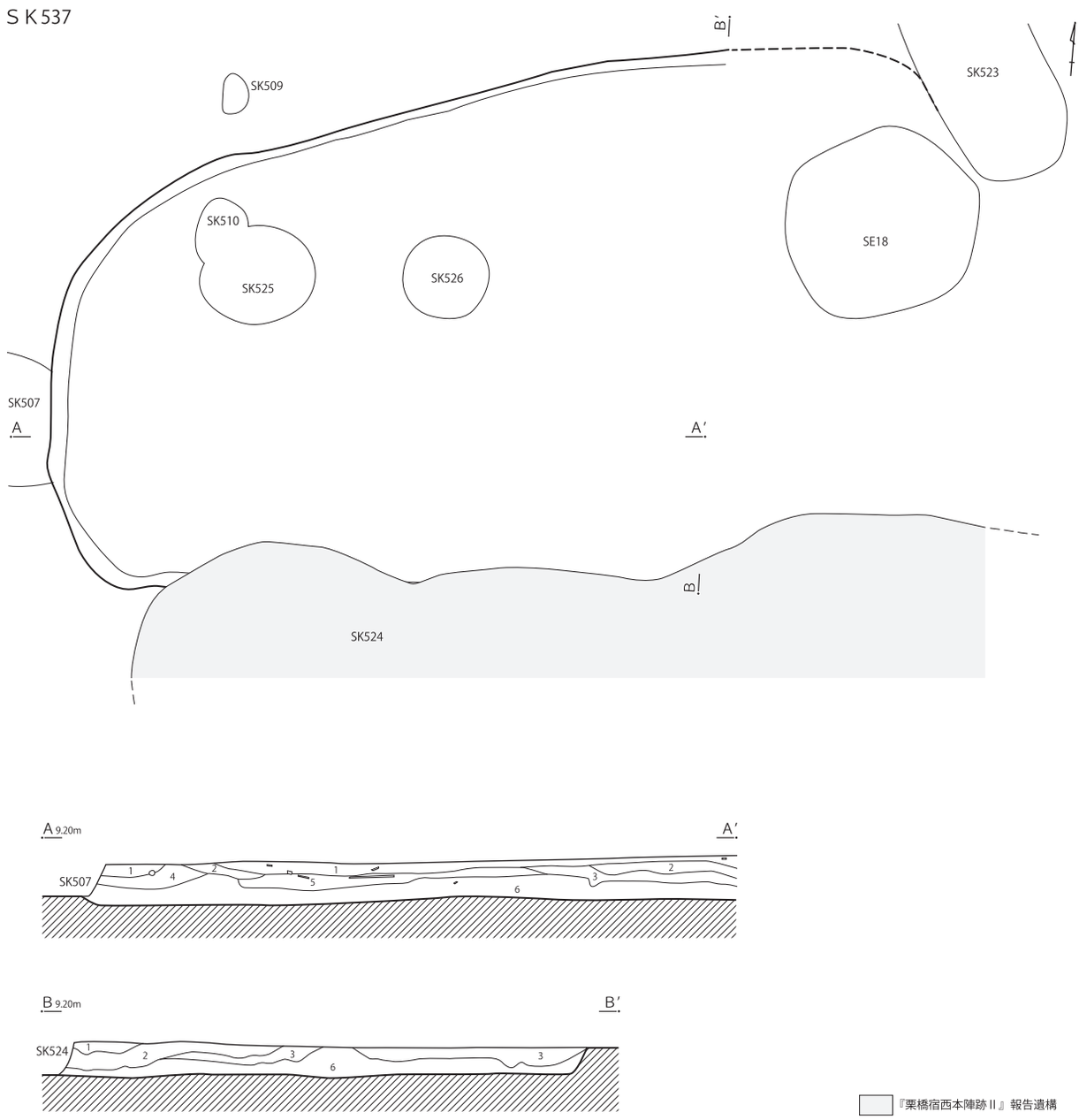
26 は樽の栓である。上面に墨書「个」がみえる。

27 は膳である。裏面に長方形の溝（脚の接続部）が左右２箇所にみられる。両面に黒漆が塗布されるが、部分的にしか残っていない。周囲には、側板を接続するための釘孔が 15 箇所みられる。脚の接続部には、釘孔がみられず、漆の付着がみられる。

第 560 図 28 は櫛である。歯は太い。

29 は下端部が摩耗しており、すりこぎと判断した。体部は削痕が明瞭である。上端部には、台形を呈するホゾ状の加工が施され、中央に方形の孔が穿たれている。何らかの製品の柄を、すりこぎに転用したことが示唆される。

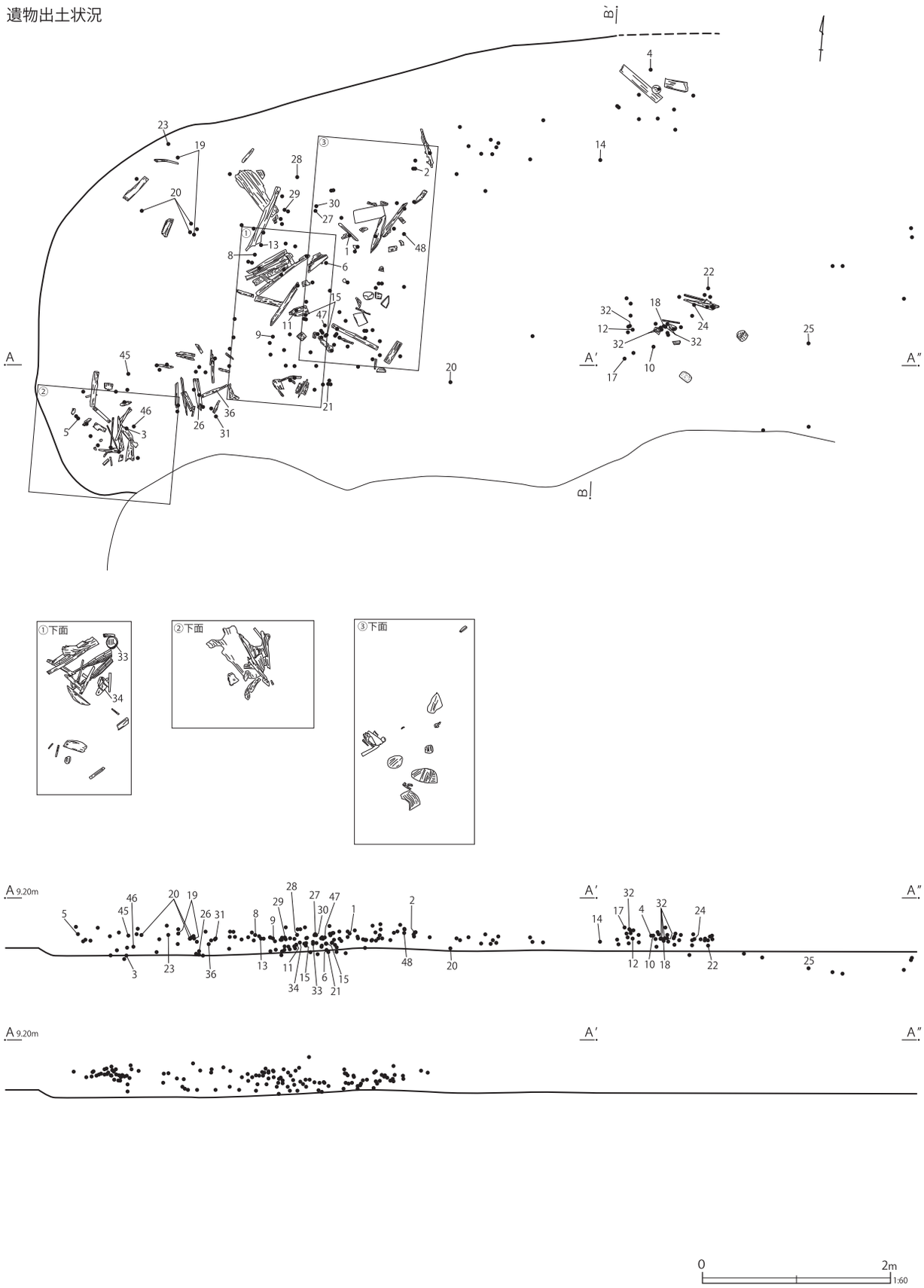
30・31 は下駄で、30 は連歯下駄、31 は露卯下駄である。



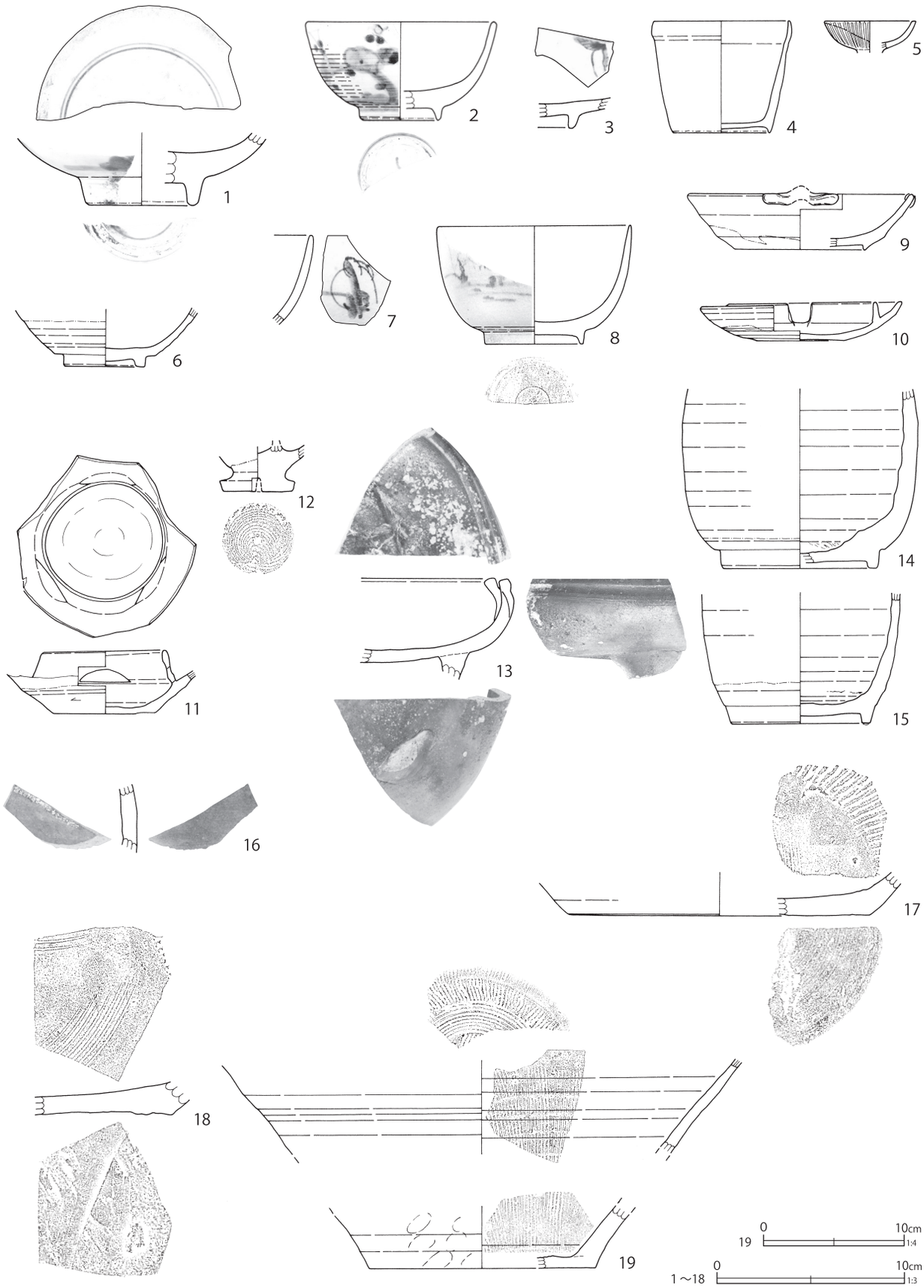
ＳＫ537
1　褐色粘土　　灰色シルトブロック・黄灰色シルトブロック多量　黄褐色砂多量　炭化物少量　しまり・粘性強
2　黒灰色粘土　炭化物多量　しまり・粘性強
3　黄褐色砂　　灰色シルトブロック・炭化物少量　しまり強　粘性弱
4　黄褐色砂　　炭化物まばらに含む　しまり・粘性弱
5　黒灰色粘土　炭化物・炭化物粒子多量　しまり・粘性強
6　黒褐色砂　　川砂多量　小礫含む　黒色・灰色シルトブロック少量　しまり・粘性弱

第 562 図　第 537 号土壙（1）

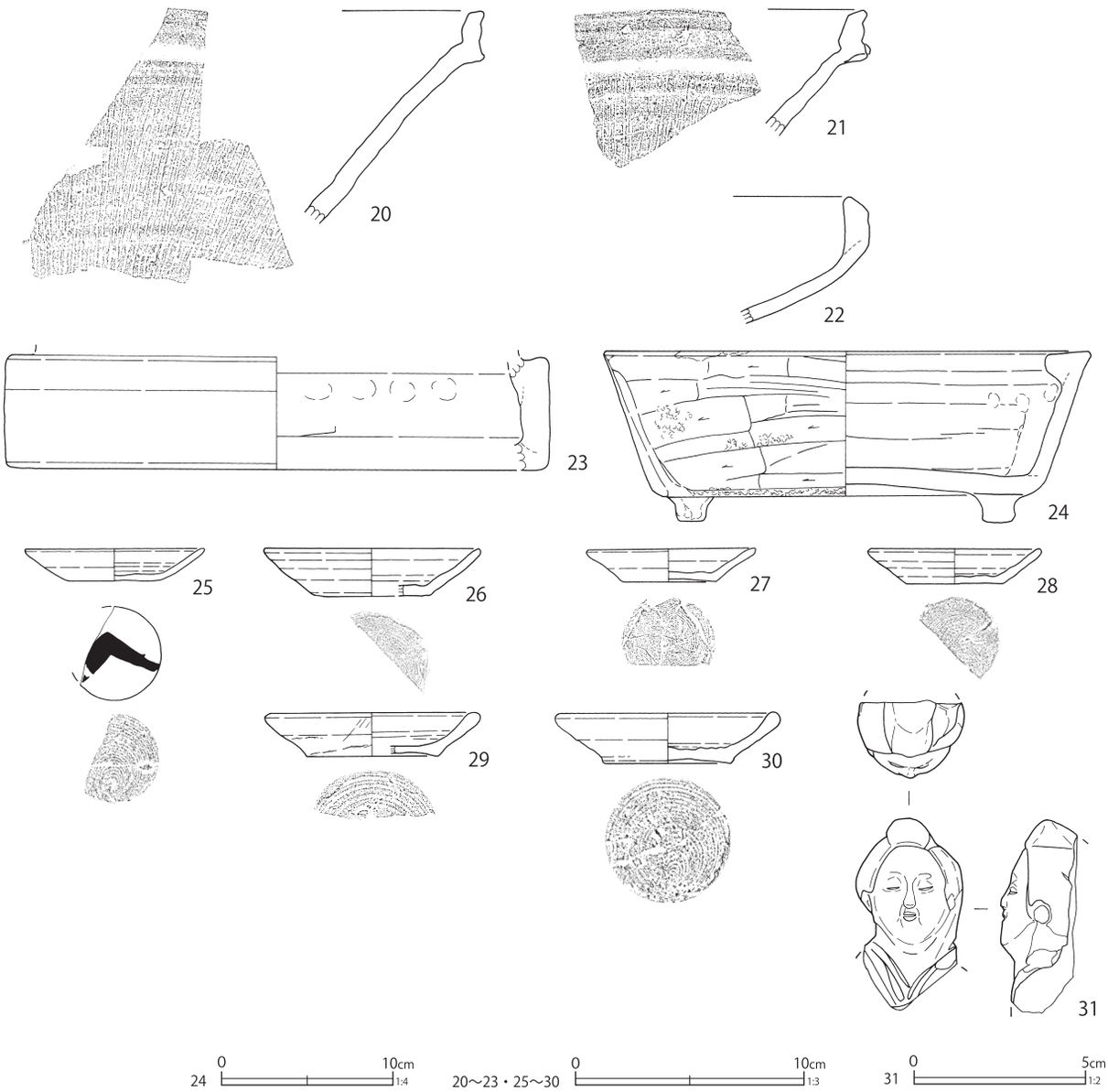
遺物出土状況



第 563 図　第 537 号土壙（2）



第 564 図　第 537 号土壙出土遺物（1）



第 565 図　第 537 号土壙出土遺物（２）

32 は馬鍬である。歯の差し込み口とみられる長方形で、断面が逆台形を呈する穴が４箇所にみられる。穴に対して垂直の面には、方形の貫通孔が認められる。33 は器種不詳の木製品である。

第 561 図 34 ～ 37 は金属製品である。34 は器種不詳の銅製品である。35・36 は銅製品の針金である。37 は鉄製品の包丁で、木柄が残る。

第 561 図 38 は白色の流紋岩製砥石で、側面に刃幅の広い工具と思われる削痕がみられる。砥面は４面残る。

第 537 号土壙（第 562 ～ 567 図）

Ｂ５－Ｊ７グリッドに位置し、東部は調査区域外である。第 18 号井戸跡、第 507・510・524 号土壙より古く、第 525・526 号土壙より新しい。なお、このうち第 524 号土壙は次冊報告とする。また、第 523 号土壙と重複していたが、新旧関係は不詳であった。

本跡は、第二面の第 168 号土壙を精査した際に、下層から検出されたものである。発掘調査段階では、第 168 号土壙の下層としたが、規模が大き

第 189 表　第 537 号土壙出土遺物観察表（１）（第 564・565 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	磁器	碗	－	[3.8]	(5.4)	－	15	普通	白	肥前系 内外面施釉・染付	
2	磁器	碗	(9.9)	5.2	(4.0)	－	45	普通	白	肥前系 内外面施釉 外面染付	
3	磁器	皿	－	[1.6]	－	－	5	良好	白	肥前系 内外面施釉 内面染付	235-6
4	磁器	猪口	(7.2)	5.9	5.2	－	60	良好	白	肥前系 内外面施釉 SK258 と接合	235-7
5	磁器	紅皿	(4.8)	[1.6]	－	－	40	普通	白	肥前系 型成形 外面施文 内外面施釉	236-1
6	陶器	碗	－	[2.9]	4.2	K	20	普通	灰白	瀬戸美濃系 内外面鉄釉（天目碗）	
7	陶器	碗	－	[4.7]	－	K	5	良好	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉 外面鉄絵	
8	陶器	碗	(10.2)	6.2	(5.2)	IK	30	良好	灰白	肥前系 内外面施釉 外面呉須絵 高台内刻印	236-2
9	陶器	灯明皿	(11.7)	[3.0]	(6.8)	EI	40	普通	黄灰	瀬戸美濃系 内外面灰釉 高台に釉付着 露胎部煤付着	
10	陶器	灯明皿	7.8	2.0	4.6	K	95	良好	浅黄橙	瀬戸美濃系 内外面柿釉 外面下位・底部釉拭き取り 体部中位環状重ね焼き痕 最大径 10.5cm	
11	陶器	灯明皿	6.3	3.4	5.4	IK	60	良好	褐	志戸呂系 内外面鉄釉 受口透孔 3 箇所 内外面付着物あり 口径は受口径	236-3
12	陶器	秉燭	－	[2.4]	3.7	EHI	40	普通	にぶい黄橙	底部糸切痕（右）内外面鉄釉	
13	陶器	鉢	－	[5.2]	－	EIK	10	良好	褐灰	備前系 内外面塗土 胎土極硬質 口縁歪ませる 被熱	236-4
14	陶器	徳利	－	[9.5]	(8.1)	EIK	15	普通	灰白	瀬戸美濃系 外面尾呂釉 外面下位・底部釉拭き取り	
15	陶器	徳利	－	[6.9]	7.4	IK	20	普通	灰黄	瀬戸美濃系 外面鉄釉 外面下位・底部釉拭き取り	
16	陶器	徳利	－	[3.6]	－	EK	5	普通	褐灰	備前系 胎土炻器質	
17	陶器	擂鉢	－	[2.3]	(16.0)	EIK	5	良好	明赤褐	堺明石系 内面擂目	
18	陶器	擂鉢	－	[1.7]	－	EIK	5	良好	赤褐	堺明石系 底部ヘラナデ 内面擂目	
19	陶器	擂鉢	器高 [6.7]	[4.3]	(16.0)	DEHIK	10	普通	黄灰	丹波系 外面下位指頭痕 内面擂目 接点のない 2 片から推定復元	
20	陶器	擂鉢	－	[9.2]	－	EIL（礫）	5	良好	赤灰	丹波系 内面擂目	
21	陶器	擂鉢	－	[5.4]	－	DEIK	5	普通	褐灰	丹波系 内面擂目	
22	土師質土器	焙烙	－	[5.5]	－	CEHI	5	普通	明褐灰	砂目底 外面煤付着	
23	土師質土器	瓦燈	－	[4.9]	(22.8)	AGHIK	15	普通	褐灰	江戸在地系 胎土粉質 弱く燻す	
24	瓦質土器	火鉢	28.2	10.0	21.4	CEIK	90	普通	灰黄	砂目底 燻す	236-5
25	かわらけ	小皿	(7.8)	1.4	4.0	AGHIK	50	普通	にぶい橙	底部糸切痕（左）・墨書	236-6 238-15
26	かわらけ	小皿	(9.1)	2.0	(4.9)	AHIK	30	良好	にぶい橙	江戸在地系 底部糸切痕 胎土粉質	236-7
27	かわらけ	小皿	7.1	1.4	4.0	AHK	55	普通	にぶい褐	江戸在地系 底部離糸切痕（左）胎土粉質	236-8
28	かわらけ	小皿	(7.4)	1.5	(4.2)	AHIK	35	良好	にぶい橙	江戸在地系 底部離糸切痕（左）胎土粉質	237-1
29	かわらけ	小皿	(8.4)	1.8	(5.8)	CHIK	45	普通	にぶい黄橙	底部糸切痕 胎土砂質	237-2
30	かわらけ	小皿	(9.4)	2.2	5.5	CGHI	40	普通	浅黄橙	底部糸切痕（左）胎土砂質	
31	土製品	人形	長さ 5.6 幅 3.0 厚さ 2.1 重さ 27.8				AEH	良好	橙	江戸在地系 姉様ヵ 前後合二枚型成形 中空 雲母付着	242-4

く異なるため、整理段階で第 537 号土壙に振り替えた。

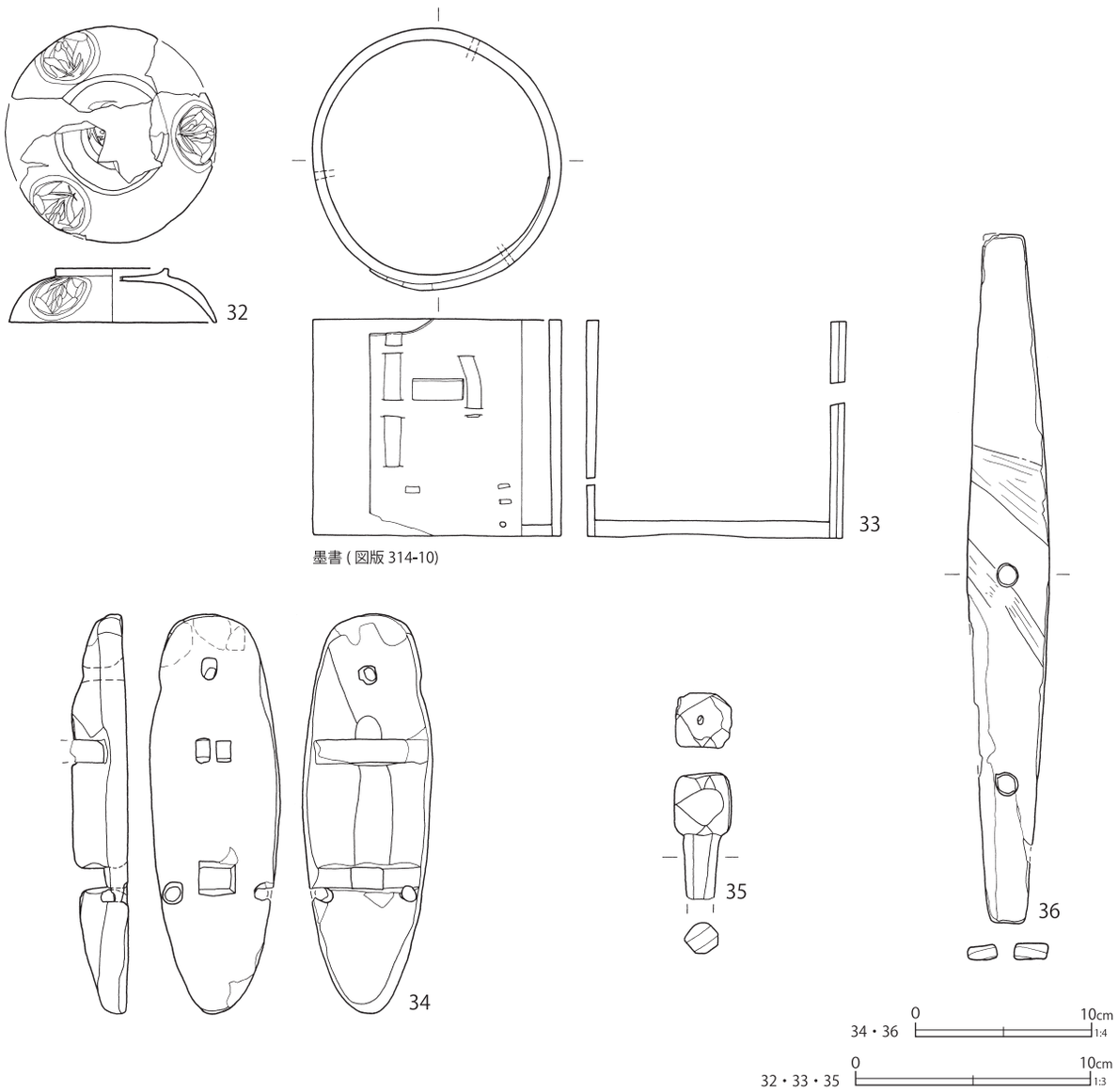
本跡の北東部は、遺構写真を精査した結果、第 523 号土壙まで続くと判断した。

覆土は最下層に、川砂が厚く堆積していた。その上層は、粘土層の間に砂層が入り込むように堆積していた。砂層、粘土層には炭化物が含まれており、特に粘土層には多量に含まれていた。第１～５層は埋め戻し土である。

遺物の出土は中～下層にかけて認められ、底面から、やや浮いた位置の第６層上位付近に集中していた。

出土した遺物は、ホゾ穴がみられる角材や板材、桶の底板、木札、漆椀、下駄等の木製品が主体である。そのほかに、陶磁器、土器、瓦、土製品の人形、金属製品、石製品が出土した。また、自然遺物では、モモの種子が４個体出土した。

陶磁器は多く、18 世紀中葉までのものが主体である。非掲載遺物にみられる肥前系磁器の筒形碗の破片１点、瀬戸美濃系陶器の柿釉灯明皿（第 564 図 10）が最新のものである。推定廃絶時期は 18 世紀中葉である。



第 566 図　第 537 号土壙出土遺物（３）

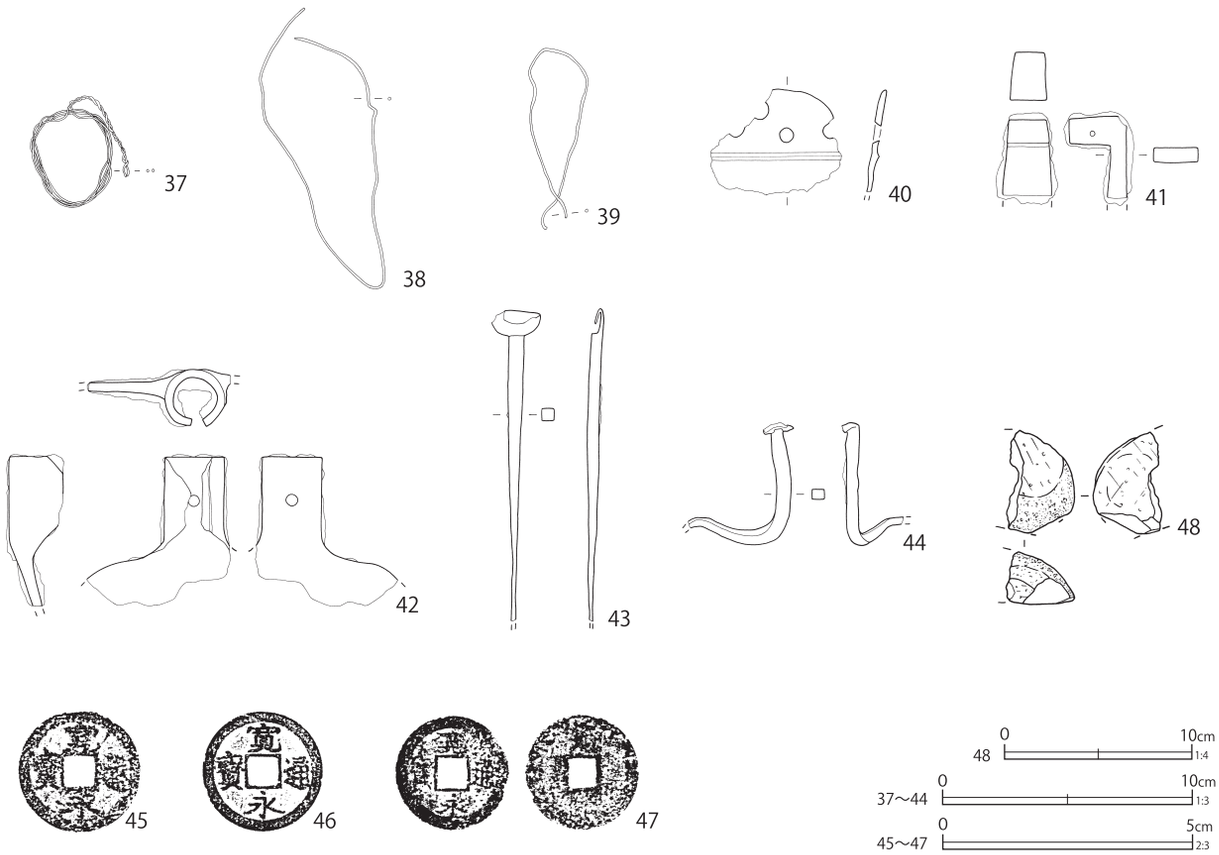
第 190 表　第 537 号土壙出土遺物観察表（２）（第 566 図）

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	口径 / 径	高さ	底径	木取り	備考	図版
32	木製品	漆椀蓋	―	つまみ径 (4.8)		(8.8)	2.3	―	横木取り	内外面黒漆 外面 4 箇所紋 (赤漆)	
33	木製品	柄杓	―	―	底板 0.7	10.9	9.1	10.9	柾目	樹皮紐残 長方形の孔 1 孔 1 木釘孔 3 側板 (厚さ 0.1 ～ 0.5cm) 墨書 (文字資料 136)	
34	木製品	下駄	22.6	7.3	―	―	[3.3]	―	板目	露卯下駄	278-4
35	木製品	不明	[5.4]	2.4	2.3	―	―	―	柾目	上面に木釘	278-5
36	木製品	不明	38.6	4.9	0.9	―	―	―	板目	孔 2	278-3

第 564 ～ 567 図に出土遺物を示した。

第 564 図１～５までは肥前系磁器である。１は粗製の大碗で、外面に雪輪草花文、内面に二重圏線の染付が施される。２は丸碗で、外面に雪輪草花文の染付が施される。

３は皿で、高台断面は「U」字状である。内面に染付が施される。４は輪高台の猪口で、有段口縁のものである。５は紅皿で、外面に鎬状の施文



第 567 図　第 537 号土壙出土遺物（４）

第 191 表　第 537 号土壙出土遺物観察表（３）（第 567 図）

番号	種別	器種	法量	備考	図版
37	銅製品	針金	縦 4.5 横 4.0 厚さ 0.1 重さ 1.7	製品か	
38	銅製品	針金	縦 11.2 横 5.1 厚さ 0.1 重さ 1.1		
39	銅製品	針金	縦 7.3 横 2.4 厚さ 0.1 重さ 1.0		
40	鉄製品	鍋	縦［4.1］横［5.3］厚さ 0.3 重さ 17.4	耳部（把手装着部）破片	
41	鉄製品	五徳ヵ	高さ［3.2］幅 2.0 厚さ 0.6 重さ 45.8		
42	鉄製品	十能	長さ［5.9］幅［5.2］厚さ 0.4 重さ 37.0	一部欠失	
43	鉄製品	釘	長さ［12.4］幅 0.5 厚さ 0.5 重さ 12.6	一部欠失	
44	鉄製品	釘	長さ［4.8］幅 0.5 厚さ 0.4 重さ 9.5	一部欠失	
45	銅製品	銭貨	径 25.3 厚さ 1.6 重さ 2.8	寛永通寳（古）	
46	銅製品	銭貨	径 24.6 厚さ 1.6 重さ 3.4	寛永通寳（古）	
47	銅製品	銭貨	径 23.2 厚さ 1.4 重さ 2.3	寛永通寳（新）背文字不明	
48	石製品	磨石	長さ 5.4 幅［3.6］厚さ 2.7 重さ 19.1	角閃石安山岩 多孔質 自然面遺存 使用面 3	295-4

が施される。型成形で、外面の口縁部から内面にかけて施釉される。

６は瀬戸美濃系陶器の天目碗である。内外面に鉄釉が施釉される。７は瀬戸美濃系陶器の丸碗の口縁部破片である。灰釉が施釉され、外面に鉄絵が施される。

８は肥前系陶器の京焼風碗である。内外面に施釉され、外面に呉須で山水文が描かれる。胎土は緻密で硬質である。高台内に刻印が認められる。

９は瀬戸美濃系陶器の灯明皿である。器高が高く、削り込み高台である。口縁部に１箇所の把手が付く。外面下位に回転ケズリが施され、内外面

に灰釉が施釉される。高台に釉が付着しており、直重ねで焼成されたと考えられる。

10 は瀬戸美濃系陶器の柿釉灯明皿（油受皿）である。受部には、角形の切り込みがみられる。内外面に柿釉が施釉され、外面下位から底部にかけて、釉が拭き取られる。外面の体部中位、受部の端部に重ね焼き痕が認められる。体部のものは径 7.7 ㎝である。

11 は志戸呂系陶器の灯明皿（油受皿）である。受部の下部に、半円形の透孔が３箇所に付く。底部から体部下位は回転ケズリで、内外面に錆釉が施釉される。

12 は陶器の秉燭で、瀬戸美濃系の可能性がある。底部に右回転の糸切痕が残り、中心に穴がみられる。内外面に鉄釉が施釉される。

13 は備前系陶器の鉢である。胎土は極めて硬質で、内外面に塗土が施される。口縁部は歪ませており、底部には貼り付けの脚が１箇所残る。

14・15 は瀬戸美濃系陶器の徳利である。14 は尾呂徳利で、外面に尾呂釉が施される。15 は鉄釉が施釉される。いずれも、外面の下位から底部にかけて、釉が拭き取られる。

16 は備前系徳利の体部破片である。胎土は炻器質である。

17・18 は堺明石系陶器の擂鉢で、底部破片である。18 は底部に一方向のヘラナデがみられる。

第 564・565 図 19 ～ 21 は丹波系陶器の擂鉢である。19 は接点の無い底部と体部の２片で、同一個体である。外面はヨコナデで、下位に右上がりの指圧痕が残る。20・21 は口縁部の破片で、外面にヨコナデが施される。20 は縁帯部の下端部が若干張り出すもので、21 は逆に窪ませている。

22 は土師質土器の焙烙である。胎土に角閃石を少量含む在地産のものである。砂目底で、体部外面にケズリが施される。内面は回転ナデがみられる。断面中心部は明褐灰色、周囲は淡橙色である。

23 は土師質土器の瓦燈で、身の破片である。受部の端部は欠失している。胎土が粉質で、細粒の雲母を含む江戸在地系土器である。弱く燻されている。小破片から復元図化したもので、径には若干の誤差が生じている可能性がある。

24 は瓦質土器の角火鉢である。燻されており、表面は黒色である。一部にシワがみられる砂目底で、円柱状の脚が４箇所につく。外面の体部はケズリが施され、シワが部分的に残る。胎土に角閃石が多く含まれる在地産のものである。

25 ～ 30 はかわらけ小皿である。25 はやや砂質気味のものだが、雲母が含まれる。底部には左回転の糸切痕が残り、墨書がみられる。内面はロクロナデで、底面を一方向になでて仕上げられる。

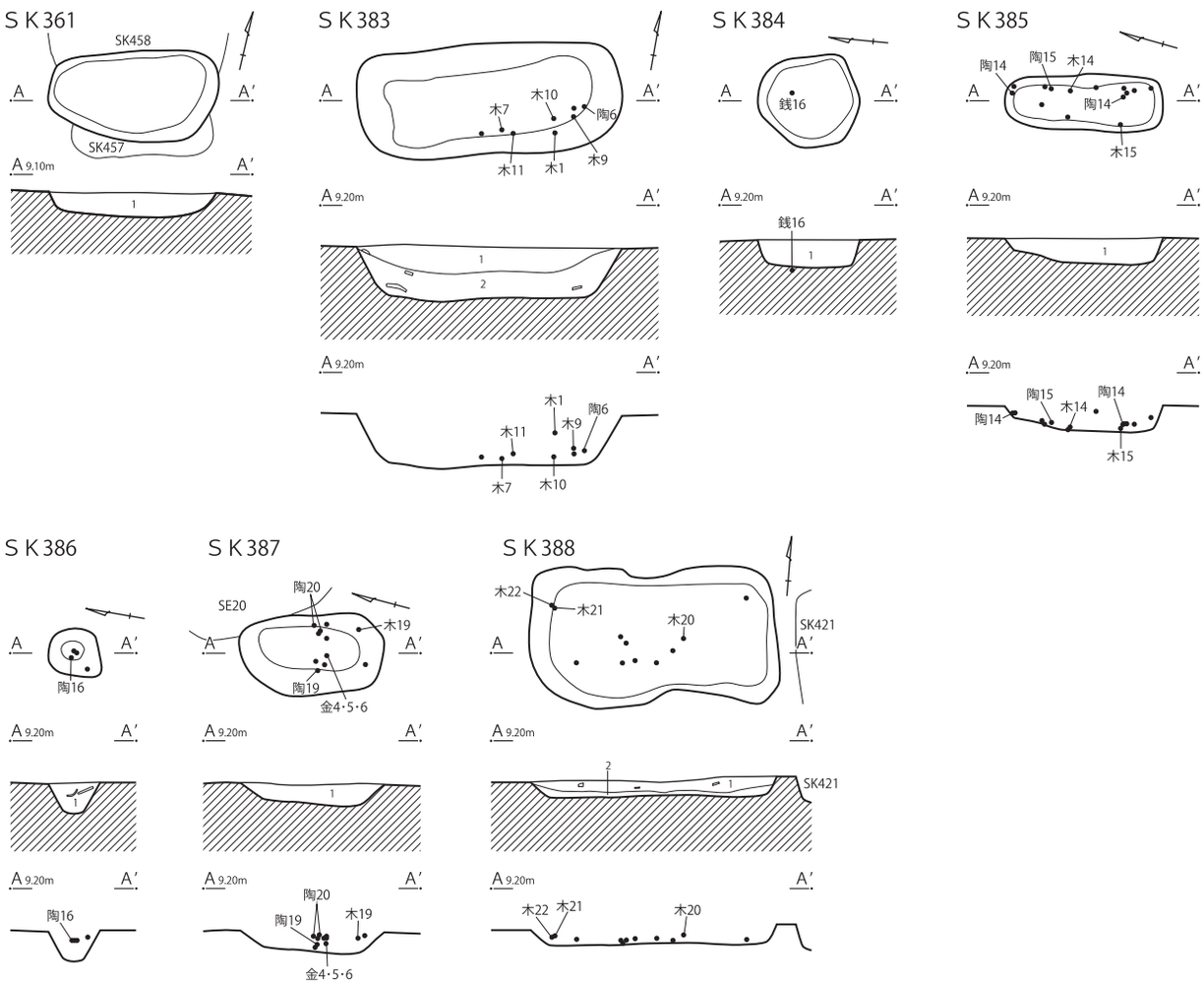
26 ～ 28 は粉っぽい胎土で、細粒の雲母を含む江戸在地系土器である。26 は底部に回転糸切痕が残る。27 は左回転の糸切痕が残る。内面は中心まで回転ナデが施される。28 も左回転の糸切痕が残り、内面は中心部まで回転ナデが施される。

29・30 は胎土が砂っぽく、角閃石を含むものである。底部に回転糸切痕が残り、30 は左回転である。29 は口縁部が肥厚する。外面の体部下位に粘土積みの痕跡が残る。30 も口縁部が肥厚し、外面の体部はヨコナデ、内底面は回転ナデが施される。

31 は土製品の人形である。モチーフは姉様と思われる。胎土に雲母が多く含まれる江戸在地系である。前後合わせの二枚型成形で、中空である。接合部に沿って欠損している。硬質で、頭部の断面中心部は還元し、灰色である。表面には雲母（キラ粉）が付着する。

第 566 図 32 ～ 36 までは木製品である。32 は漆椀の蓋で、薄手のものである。内外面に黒漆が塗布され、外面の４箇所に赤漆で紋が描かれる。

33 は柄杓である。正面上部には長方形の孔がみられ、柄を差し込む部分である。曲物と同様の



S K 361
1　黒褐色土　灰色粘土ブロック（φ30 ～ 50 ㎜）少量　炭化物・砂粒少量
　　土器・木片含む　粘性あり

S K 383
1　暗灰色砂　細粒砂・シルトブロック・炭化物（φ10 ～ 20 ㎜）含む
　　しまりなし　崩れやすい
2　暗褐色土　繊維状の木片・樹皮含む木質層　しまりなし　木製品・陶器片含む

S K 384
1　暗赤褐色土　腐植土主体　シルト・砂含む　炭化物多量　しまり弱
　　粘性あり

S K 385
1　暗赤褐色土　木片主体　しまり弱　粘性強　陶器片少量

S K 386
1　暗赤褐色土　木片主体　しまり弱　粘性強　木材・陶磁器片含む

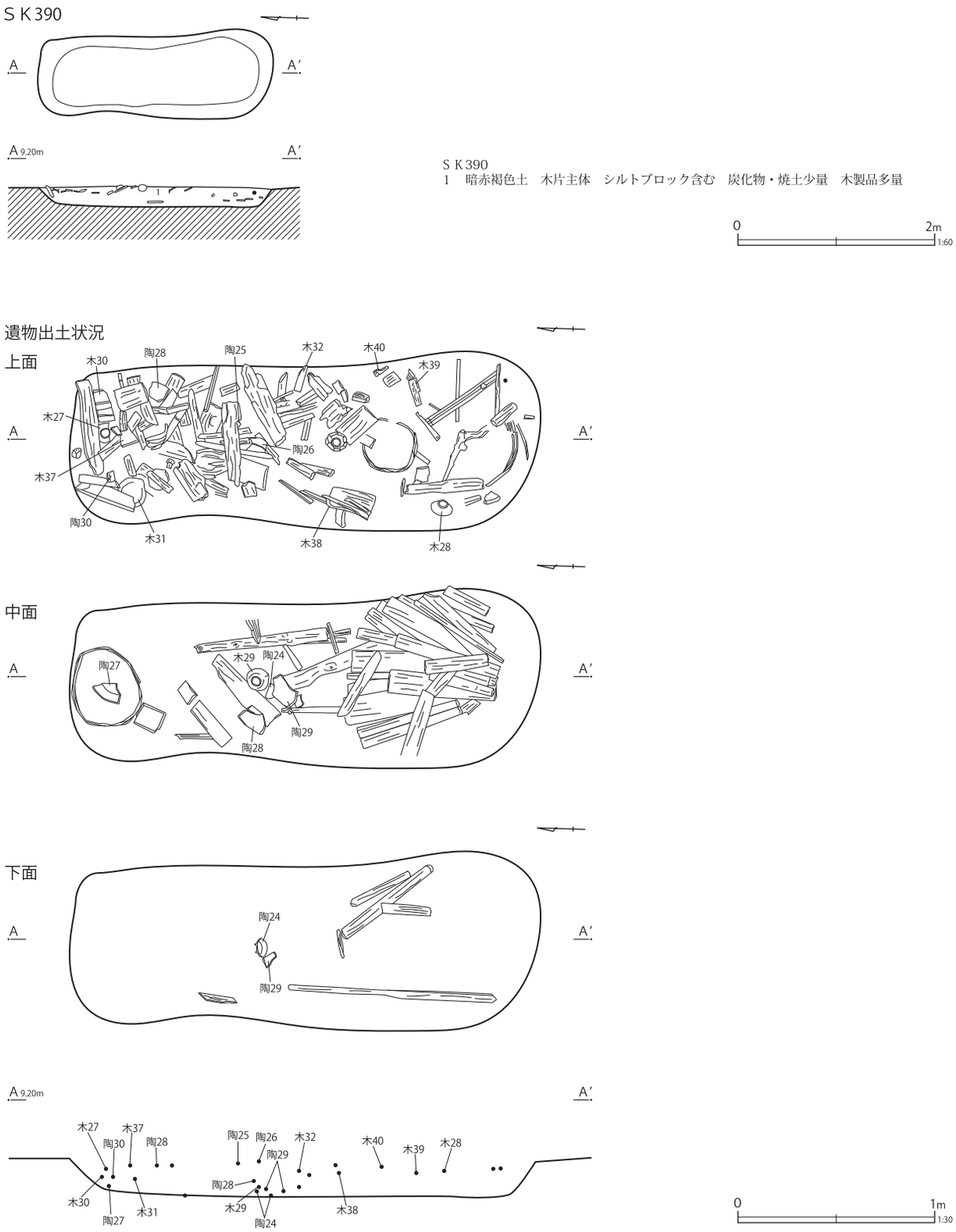
S K 387
1　暗赤褐色土　木片主体　しまり弱　粘性強
　　陶器片・木材（10 ～ 20 ㎝）含む

S K 388
1　暗赤褐色土　木片主体　炭化物少量　木製品の箸やや多い
2　暗灰色土　　シルト層　粘性あり　しまり弱

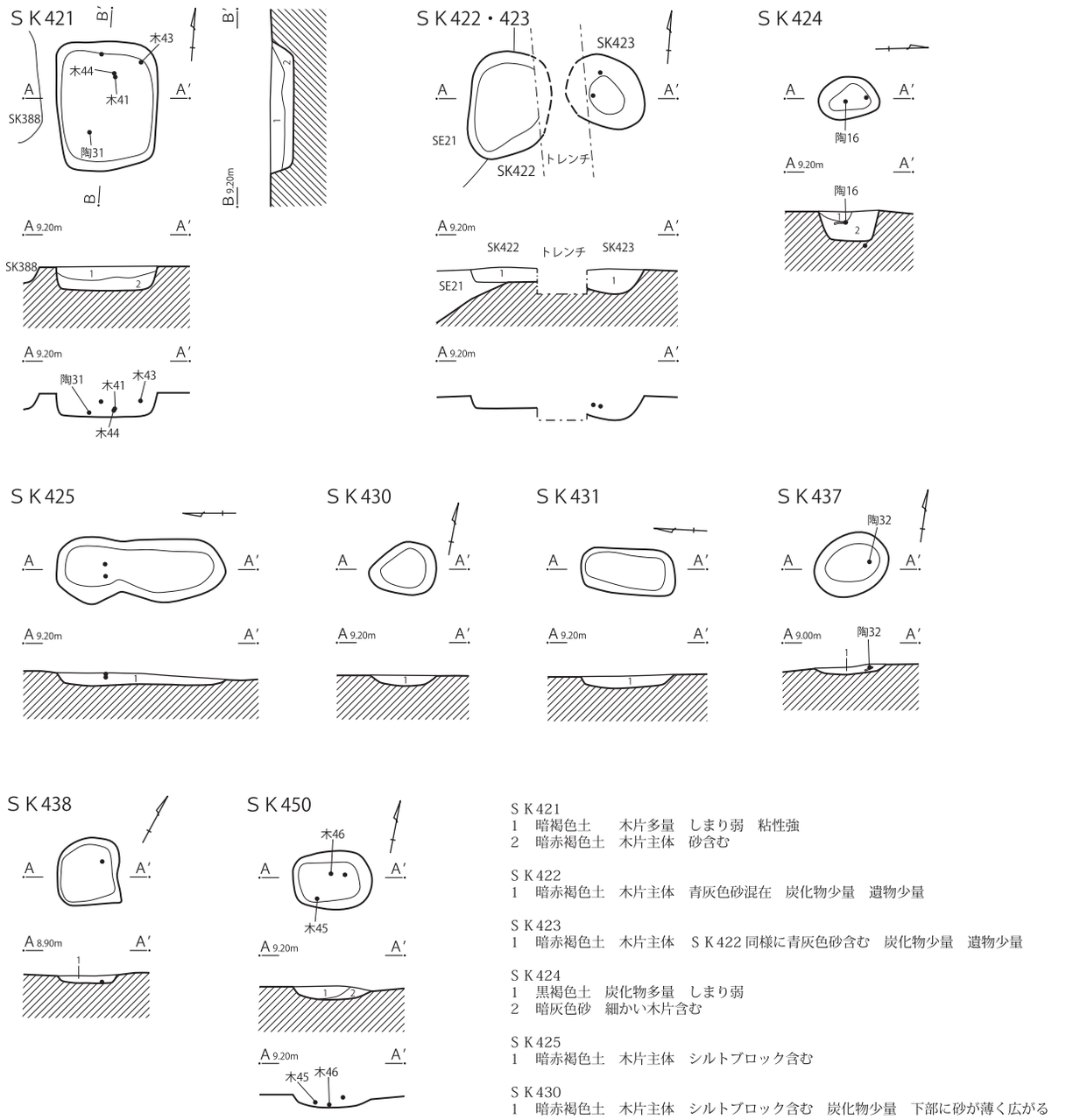
S K 389
1　暗赤褐色土　木片主体　シルトブロック含む　部分的に砂が広がる
2　暗灰色土　　シルトと砂の混合層　北側はシルト多量　南側は砂が詰まる
3　暗赤褐色土　木片主体　部分的にシルト含む

0　2m
1:60

第 568 図　土壙（1）


ＳＫ390
A
A′
A 9.20m
A′
1
ＳＫ390
1　暗赤褐色土　木片主体　シルトブロック含む　炭化物・焼土少量　木製品多量
0
2m
1:60
遺物出土状況
上面
木30
陶28
陶25
木32
木40
木39
木27
陶26
木37
陶30
木31
木38
木28
中面
陶27
木29
陶24
陶29
陶28
下面
陶24
陶29
木27
木37
陶30
陶28
陶25
陶26
木32
陶29
木40
木39
木28
陶28
木30
陶27
木31
木29
陶24
木38
0
1m
1:30

第 569 図　土壙（２）



S K 421
1　暗褐色土　　木片多量　しまり弱　粘性強
2　暗赤褐色土　木片主体　砂含む

S K 422
1　暗赤褐色土　木片主体　青灰色砂混在　炭化物少量　遺物少量

S K 423
1　暗赤褐色土　木片主体　S K 422 同様に青灰色砂含む　炭化物少量　遺物少量

S K 424
1　黒褐色土　炭化物多量　しまり弱
2　暗灰色砂　細かい木片含む

S K 425
1　暗赤褐色土　木片主体　シルトブロック含む

S K 430
1　暗赤褐色土　木片主体　シルトブロック含む　炭化物少量　下部に砂が薄く広がる

S K 431
1　暗赤褐色土　木片主体　層中に砂薄く広がる

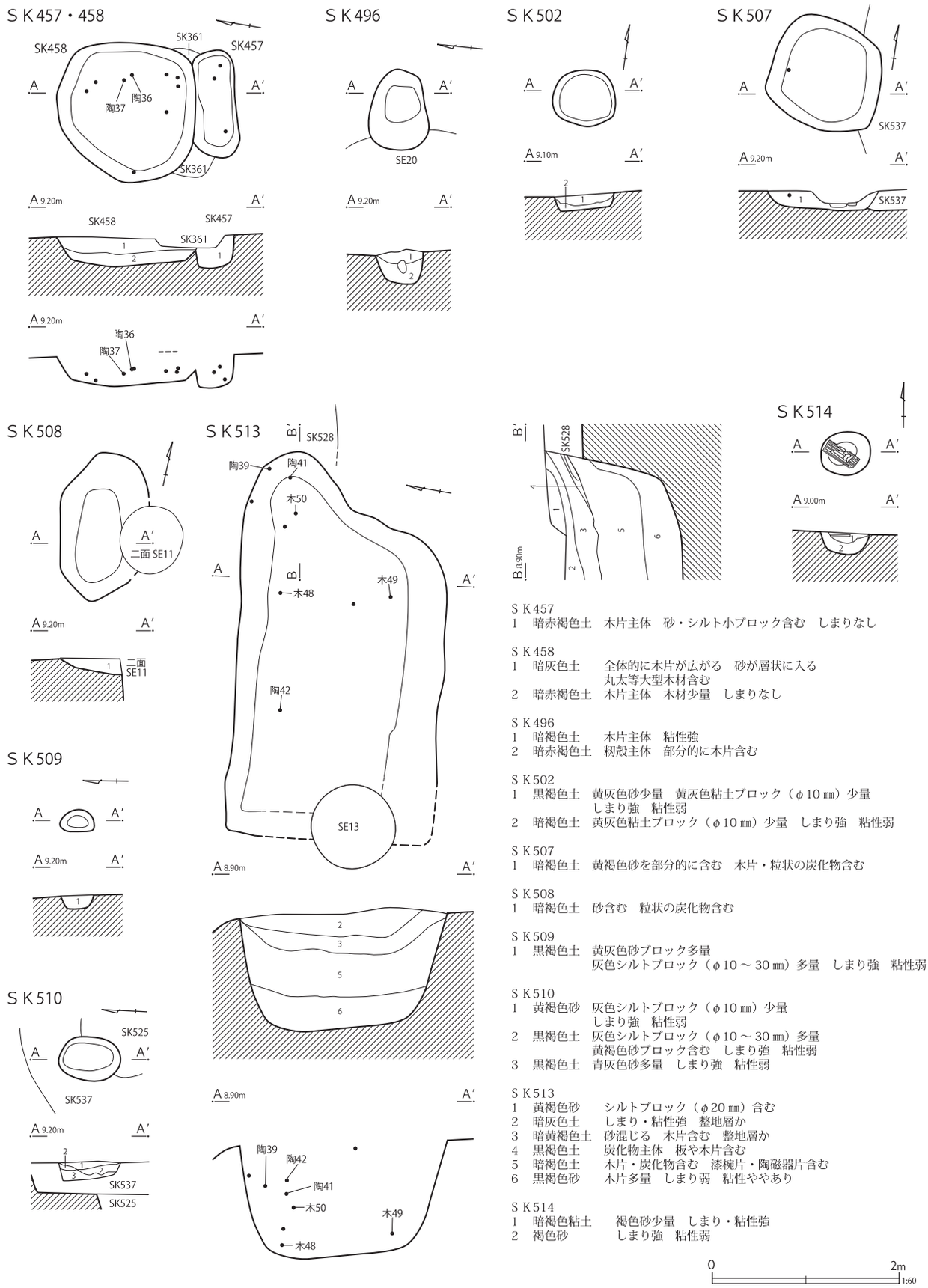
S K 437
1　暗赤褐色土　木片主体　しまりなし　陶器片含む

S K 438
1　暗褐色土　木片主体　しまりなし　陶磁器片少量

S K 450
1　暗赤褐色土　木片主体　砂が混じる
2　暗灰色土　　炭化物・木片少量　しまりあり

0　2m
1:60

第 570 図　土壙（3）



S K 457
1　暗赤褐色土　木片主体　砂・シルト小ブロック含む　しまりなし

S K 458
1　暗灰色土　　全体的に木片が広がる　砂が層状に入る
　　丸太等大型木材含む
2　暗赤褐色土　木片主体　木材少量　しまりなし

S K 496
1　暗褐色土　　木片主体　粘性強
2　暗赤褐色土　籾殻主体　部分的に木片含む

S K 502
1　黒褐色土　黄灰色砂少量　黄灰色粘土ブロック（φ10 ㎜）少量
　　しまり強　粘性弱
2　暗褐色土　黄灰色粘土ブロック（φ10 ㎜）少量　しまり強　粘性弱

S K 507
1　暗褐色土　黄褐色砂を部分的に含む　木片・粒状の炭化物含む

S K 508
1　暗褐色土　砂含む　粒状の炭化物含む

S K 509
1　黒褐色土　黄灰色砂ブロック多量
　　灰色シルトブロック（φ10 ～ 30 ㎜）多量　しまり強　粘性弱

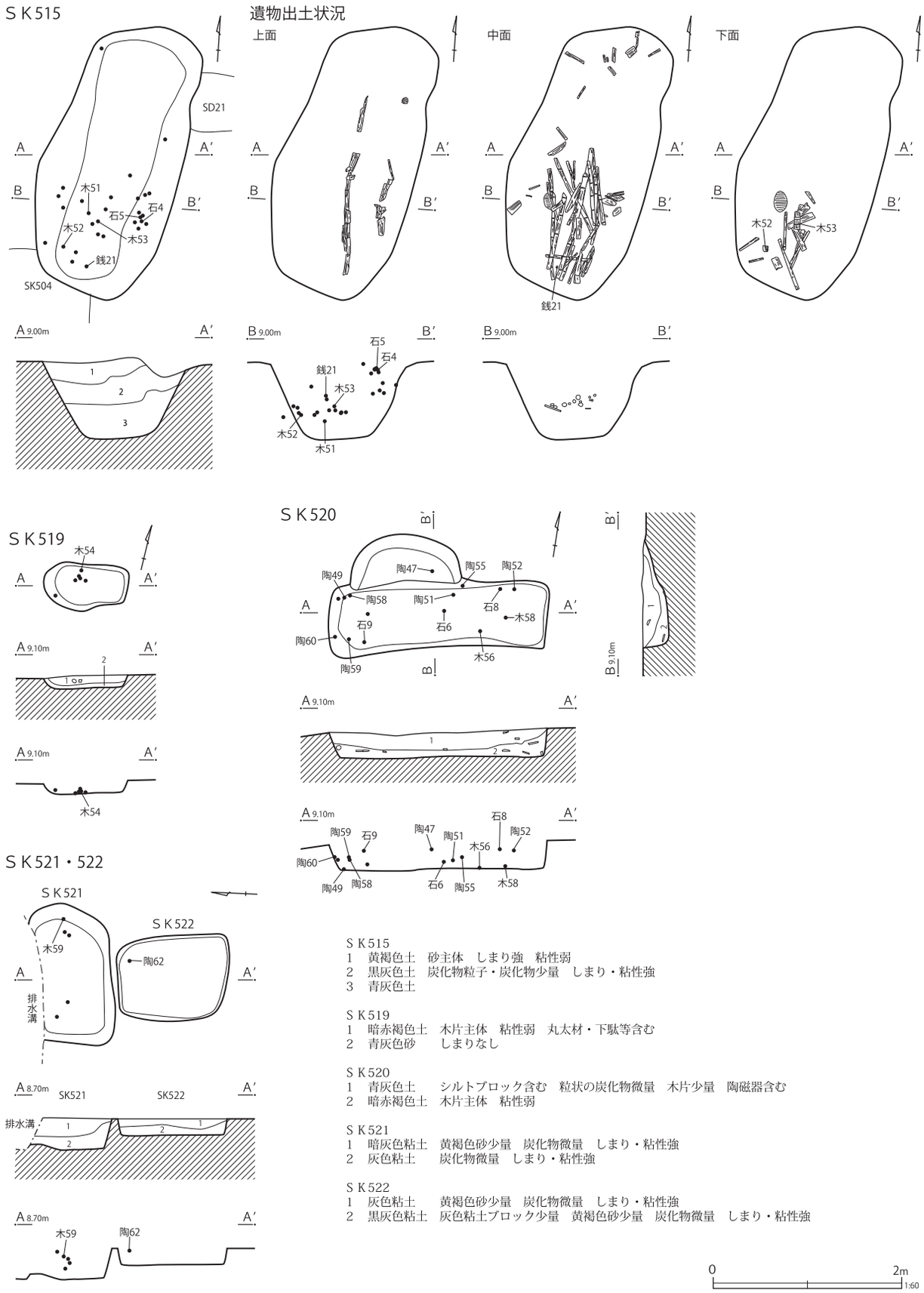
S K 510
1　黄褐色砂　灰色シルトブロック（φ10 ㎜）少量
　　しまり強　粘性弱
2　黒褐色土　灰色シルトブロック（φ10 ～ 30 ㎜）多量
　　黄褐色砂ブロック含む　しまり強　粘性弱
3　黒褐色土　青灰色砂多量　しまり強　粘性弱

S K 513
1　黄褐色砂　　シルトブロック（φ20 ㎜）含む
2　暗灰色土　　しまり・粘性強　整地層か
3　暗黄褐色土　砂混じる　木片含む　整地層か
4　黒褐色土　　炭化物主体　板や木片含む
5　暗褐色土　　木片・炭化物含む　漆椀片・陶磁器片含む
6　黒褐色砂　　木片多量　しまり弱　粘性ややあり

S K 514
1　暗褐色粘土　　褐色砂少量　しまり・粘性強
2　褐色砂　　しまり強　粘性弱

0　2m
1:60

第 571 図　土壙（4）



S K 515
1　黄褐色土　砂主体　しまり強　粘性弱
2　黒灰色土　炭化物粒子・炭化物少量　しまり・粘性強
3　青灰色土

S K 519
1　暗赤褐色土　木片主体　粘性弱　丸太材・下駄等含む
2　青灰色砂　　しまりなし

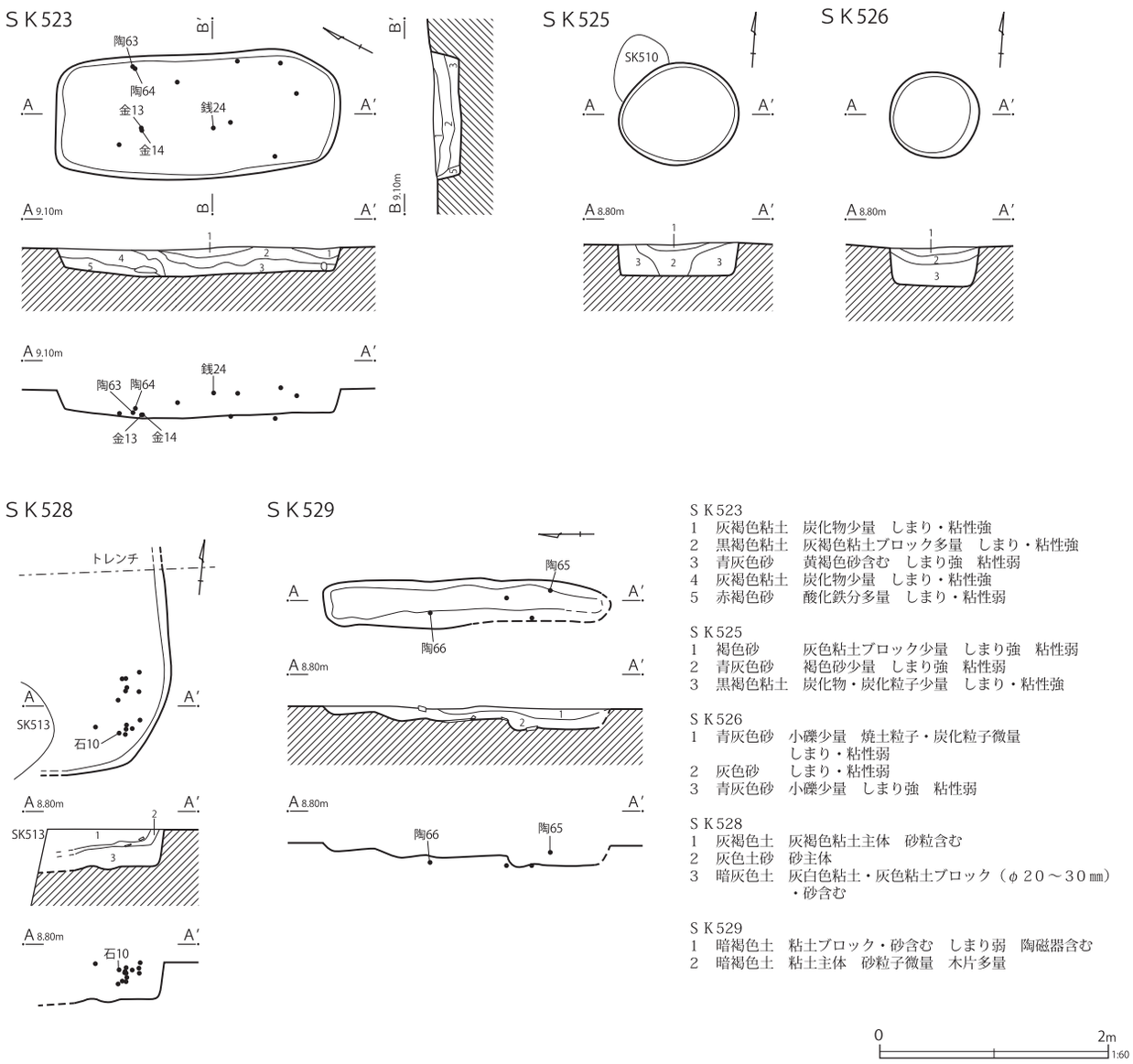
S K 520
1　青灰色土　　シルトブロック含む　粒状の炭化物微量　木片少量　陶磁器含む
2　暗赤褐色土　木片主体　粘性弱

S K 521
1　暗灰色粘土　黄褐色砂少量　炭化物微量　しまり・粘性強
2　灰色粘土　　炭化物微量　しまり・粘性強

S K 522
1　灰色粘土　　黄褐色砂少量　炭化物微量　しまり・粘性強
2　黒灰色粘土　灰色粘土ブロック少量　黄褐色砂少量　炭化物微量　しまり・粘性強

0　2m　1:60

第 572 図　土壙（5）



第 573 図　土壙（６）

作りである。薄い長方形の側板を横位に、一周回し、一部を重ねて４箇所を樹皮紐で留めている。背面には小さい孔が認められる。墨痕が残る。

34 は露卯下駄で、前歯が遺存する。

35・36 は器種不詳のもので、36 は中央と下部に孔がみられる。何らかの製品を構成する部品と思われる。

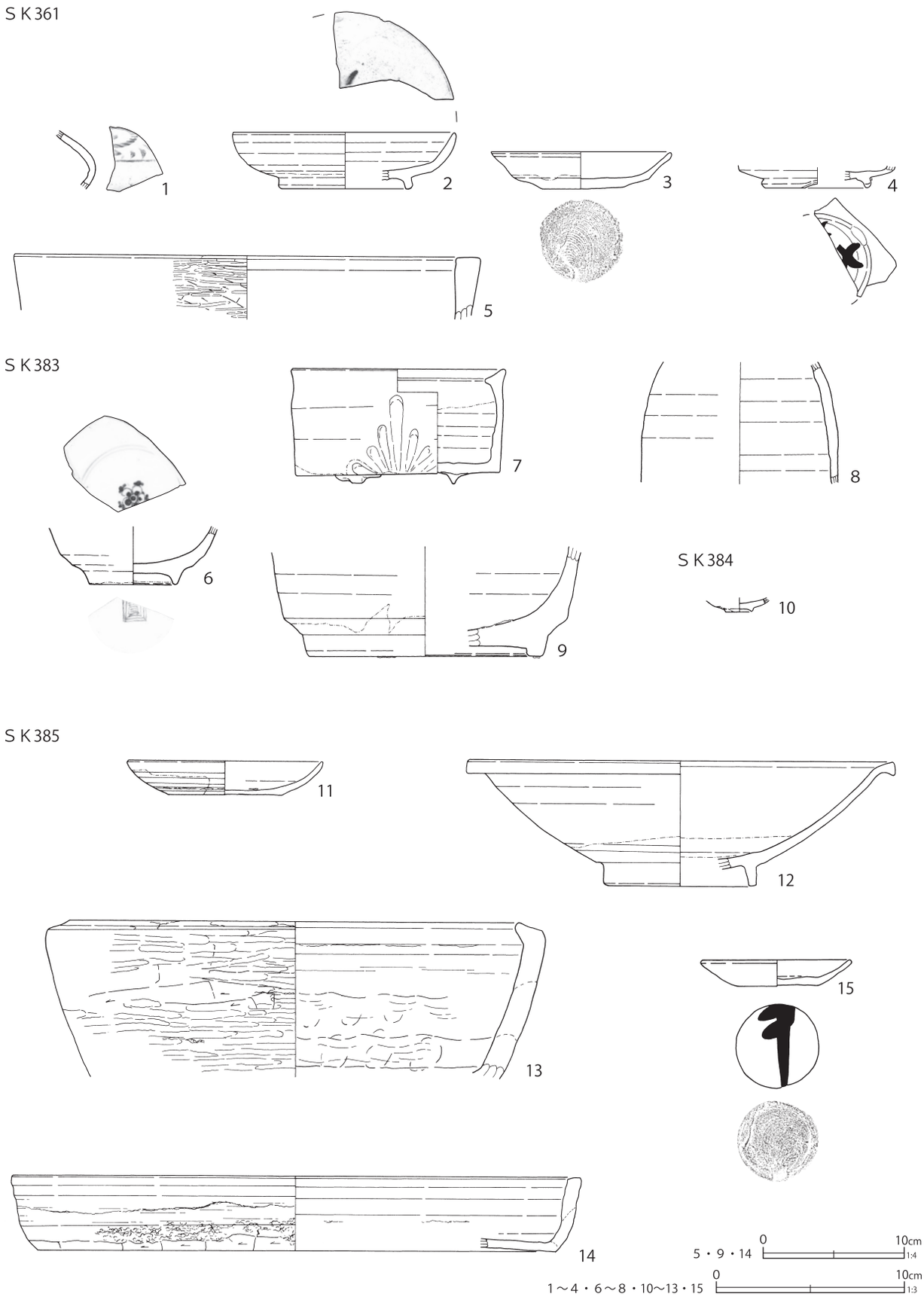
第 567 図 37 ～ 47 までは金属製品である。

37 ～ 39 は銅製品の針金である。37 は環状のもので、製品の可能性がある。

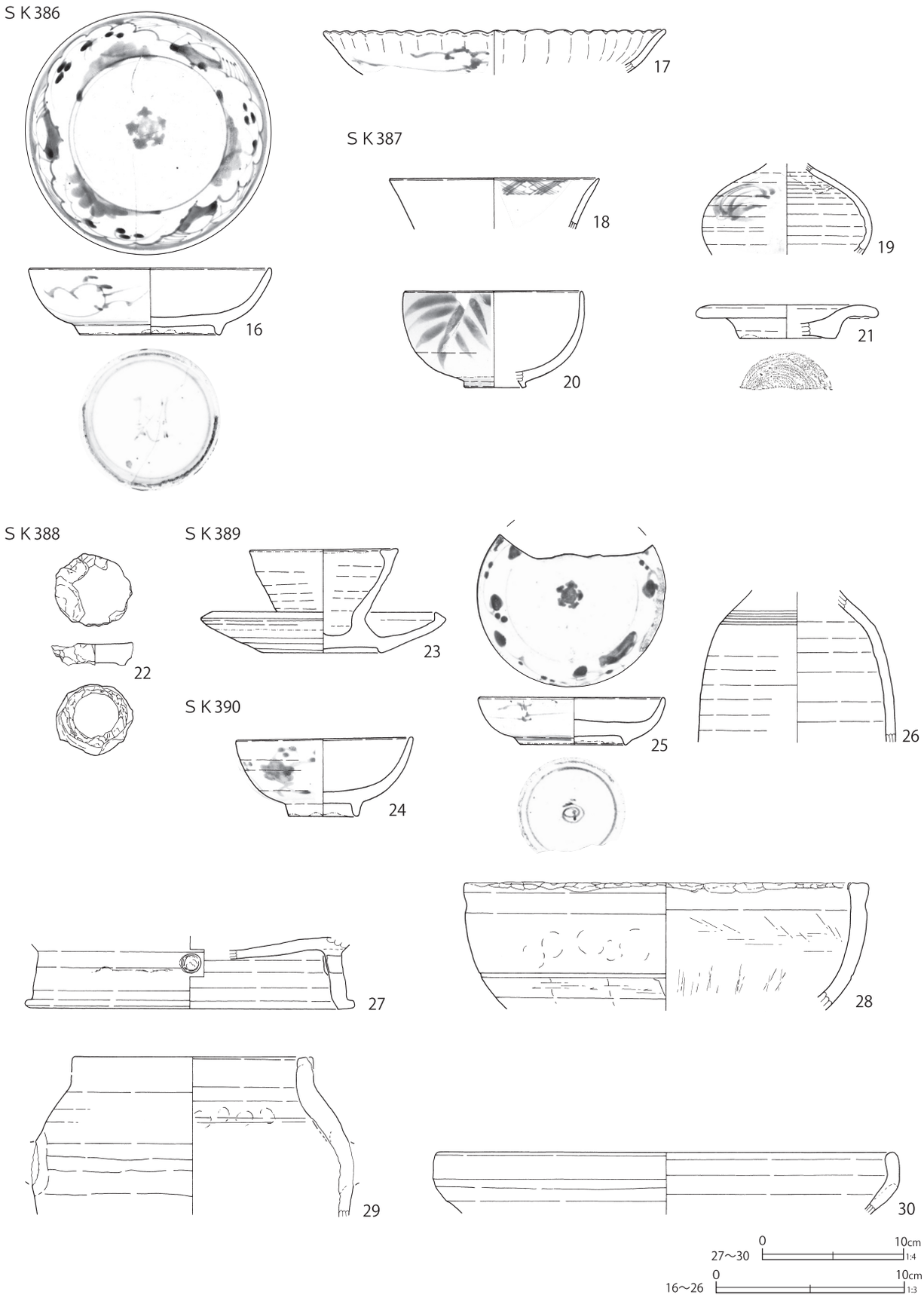
40 は鉄製品の鍋で、耳の破片である。41 は逆「L」字の鉄製品の破片で、五徳の可能性がある。42 は鉄製品の十能で、把手から体部にかけての破片ある。43・44 は鉄釘である。

45 ～ 47 は寛永通寶である。このうち、45・46 は古寛永である。

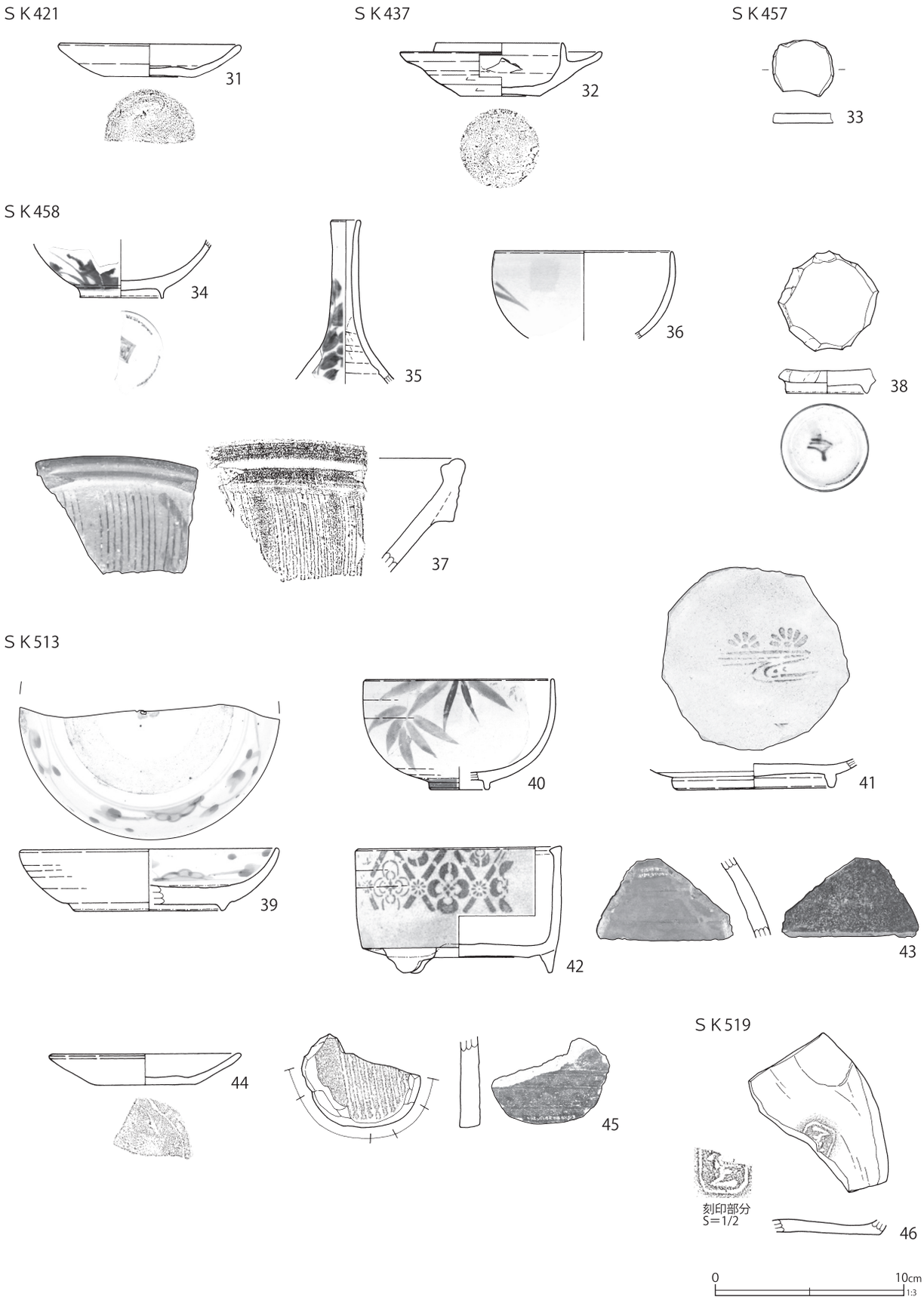
第 567 図 48 は石製品で、多孔質の角閃石安山岩転石を素材とした磨石である。３面を使用面と



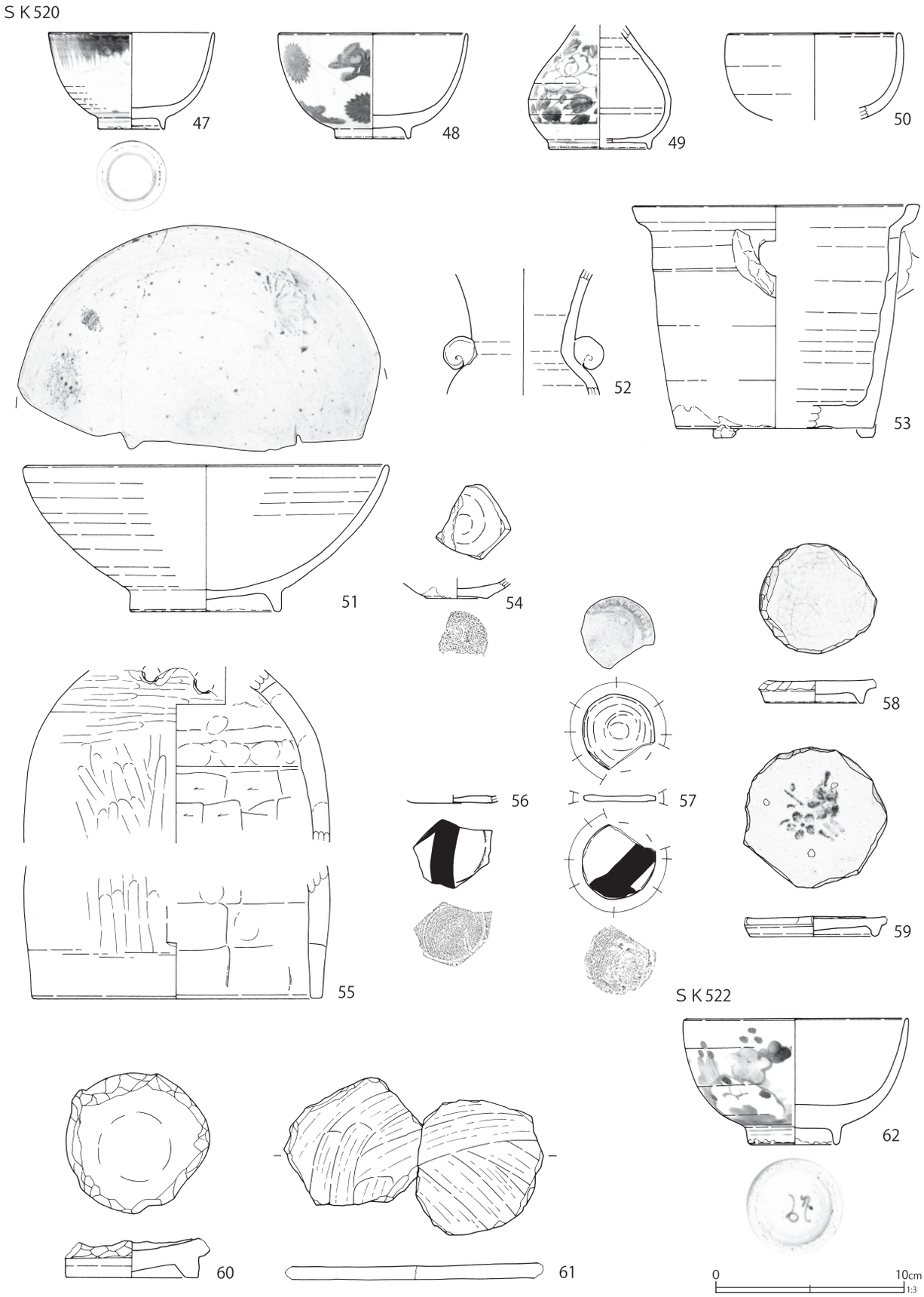
第 574 図　土壙出土遺物（1）



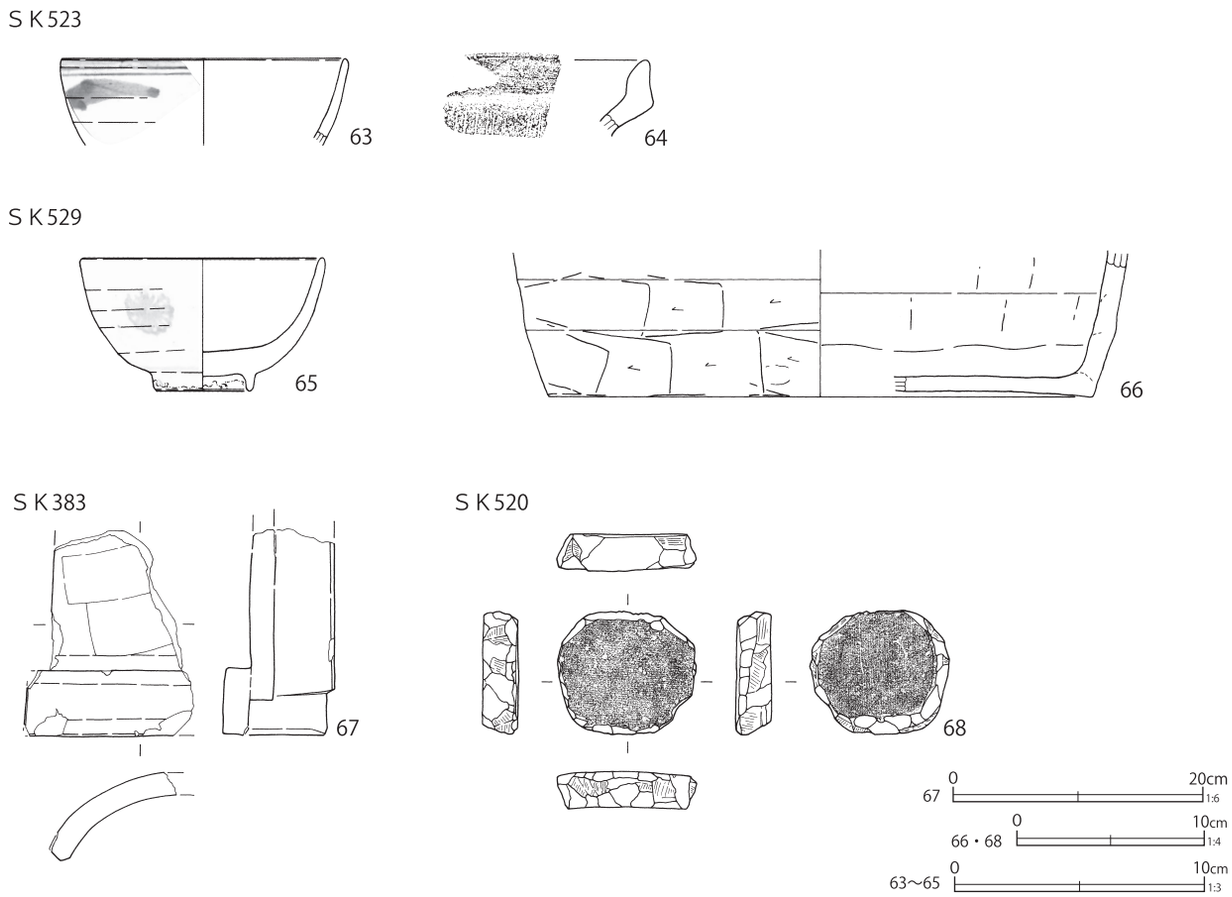
第 575 図　土壙出土遺物（2）



第 576 図　土壙出土遺物（3）



第 577 図　土壙出土遺物（4）



第 578 図　土壙出土遺物（５）

し、加えて自然面も残っている。

第三面のその他の土壙

以上に取り上げた土壙の他にも、特徴的なものが認められる。

第 568 ～ 573 図に遺構図、第 574 ～ 578 図に陶磁器・土器・瓦、第 579 ～ 583 図に木製品、第 584 図に金属製品、第 585 図に石製品を示した。

以下に、特徴的な土壙、遺物について記述する。

第 361 号土壙（第 568・574・584 図）

Ｂ５－Ｊ７グリッドに位置し、第 457・458 号土壙より新しい。平面形は楕円形である。

覆土は粘土ブロックや砂粒、炭化物を少量含むシルトであった。

出土遺物は少なく、陶磁器、土器、瓦、木製品、金属製品、石材が出土した。

陶磁器は掲載したものの他に、肥前系磁器の粗製碗、瀬戸美濃系陶器の掛け分け釉が施されたせんじ形碗がみられる。肥前系磁器の徳利が、第 520 号土壙から出土した破片と接合したが、遺構の重複関係はないため、より大きな破片が出土した第 520 号土壙に帰属させた（第 577 図 49）。推定廃絶時期は 18 世紀中葉である。

第 574 図に陶磁器・土器、第 584 図に金属製品を示した。

第 574 図１は肥前系磁器の油壺で、外面に色絵が施される。

２は瀬戸美濃系陶器の摺絵皿、３は志戸呂系陶器の灯明皿である。４は瀬戸美濃系陶器の香炉で、高台部を意図的に数箇所窪ませるものである。灰釉と摺絵が施されるタイプと思われる。底部に墨書の一部が残る。

５は瓦質土器の竈で、内外面ともに煤が多量に